

出雲・上塩冶地域を中心とする

埋蔵文化財調査報告

1980年3月

工事事務所

出雲県教育委員会

出雲・上塩冶地域を中心とする

埋蔵文化財調査報告



1980年3月

建設省出雲工事事務所
島根県教育委員会

序

建設省、島根県において斐伊川治水の計画がすすめられています。その主要な事業である放水路建設予定地一帯を中心とする地域は、島根県下でも有数の古代、中世の遺跡が密集する場所でもあります。

この地域の遺跡の様相については、これまで先学の努力によって数多くの研究、報告がなされてきましたし、古代の出雲を語るに不可欠な資料も次々と発見されています。

この度、島根県教育委員会では建設省出雲工事事務所から委託をうけて、上塩冶を中心とする地域一帯の遺跡について、その実態をより一層明らかにする目的で調査を実施しました。昭和53年度、昭和54年度の2ヶ年度にわたって、分布調査を主眼にしなから、一部の遺跡については部分的に発掘調査を行いました。もとより十分な調査とはいえませんが、斐伊川治水計画や新しい地域開発としての出雲都市圏構想においても、この埋蔵文化財の調査報告を参考にしていただき、今後の事業計画策定の一助にいただければ幸いに思います。

なお、本書の刊行にあたって、調査に御協力いただきました関係者の方々に対して深く感謝申し上げる次第であります。

昭和55年3月

島根県教育委員会教育長

水 津 卓 夫

例 言

1. 本書は、昭和53、54年度に島根県教育委員会が、建設省出雲工事事務所から委託を受けて実施した出雲市上塩冶地域を中心とする埋蔵文化財の調査報告書である。
2. 調査対象遺跡は出雲市上塩冶地域を中心とする出雲市全域と簸川郡大社町に所在するものとした。
3. 調査は以下の体制で実施した。

調査員 池田満雄、門脇俊彦、東森市良、黒谷達典、西尾良一、川上稔（以上島根県埋蔵文化財調査員）、藤岡大拙、今岡清、大國晴雄、石飛公士、磯村利和、鳥谷芳雄、橋野真司、島根県教育委員会文化課担当職員（勝部昭、西尾克己ほか）

調査補助員 赤木研二、赤沢秀則、飯国芳明、稲田信、井上寛光、岩井重道、浦田和彦、遠藤浩己、遠藤正人、奥村忠孝、尾崎一夫、黒崎一枝、佐々木敦浩、矢道年弘、手銭高志、中浜久喜、丹羽野裕、藤波佳子、前島徹、三谷卓、山口耕、山崎修、余村達也、渡辺幸俊

事務局 文化課長 遠藤豊、主査 藤間享、補佐 森山敏夫、文化振興係長 秋月延夫
4. 調査にあたって、地元各位をはじめ建設省出雲工事事務所、島根県企画部斐伊川神戸川対策室、出雲市教育委員会、大社町教育委員会、県立出雲高等学校、出雲考古学研究会、有限会社井上松影堂の協力があつた。記して謝意を表する。また、富山大学人文学部講師 和田晴吾氏には助言、指導をいただいた。
5. 本書の執筆は調査員が分担し、編集は文化課埋蔵文化財係長 勝部昭、同主事 西尾克己の両名があつた。
6. 掲載図面の作製、トレースおよび写真撮影は調査員、調査補助員、および小原明美、竹内信枝、村上紀美子が携つた。なお、城跡測量図は有限会社松江測地社の作成にかかるものである。

本文目次

序

上塩治地域を中心とする主要遺跡一覧表

上塩治地域を中心とする主要遺跡分布図

第1章 出雲平野の形成	1
縄文海進の頃	
弥生時代中期の頃	
『出雲国風土記』のかかれた頃	
第2章 出雲西部の古代、中世の歴史	5
縄文時代	
弥生時代	
古墳時代	
律令時代	
中世	
第3章 遺跡各説	29
縄文時代の遺跡	
弥生時代の遺跡	
古墳時代の遺跡（古墳、横穴）	
律令時代の遺跡	
中世の城館跡	
第4章 出雲平野周辺地域の考古学的研究の歴史	172
江戸時代以前	
明治以降	
第2次大戦後	
第5章 神西城と古志城の城主について	180
後塩治氏について	185
〔特別寄稿〕	
祝詞横穴出土人骨の所見	198
まとめにかえて	199

挿 図 目 次

第 1 図	出雲平野の地形変遷Ⅰ（縄文海進の頃）	1
第 2 図	出雲平野の地形変遷Ⅱ（弥生中期の頃）	3
第 3 図	出雲平野の地形変遷Ⅲ（『風土記』のかかれた頃，1200 B P）	4
第 4 図	命主神社出土銅戈実測図	7
第 5 図	猪目洞穴出土貝輪実測図	7
第 6 図	出雲平野における縄文時代，弥生時代の遺跡分布図	9
第 7 図	西谷3号墓実測図	10
第 8 図	西谷4号墓山土器実測図	11
第 9 図	神庭岩船古墳の石棺実測図	12
第 10 図	出雲平野における古墳分布図	13
第 11 図	妙蓮寺山古墳出土の馬具類	15
第 12 図	出西丸子古墳石室実測図	17
第 13 図	奈良時代の出雲西部	22
第 14 図	出雲国の主要な山城	25
第 15 図	菱根遺跡出土土器実測図	30
第 16 図	三反谷遺跡出土土器実測図	31
第 17 図	矢野遺跡出土遺物実測図（1.紡錘車，2.石鐘，3～7.管玉）	33
第 18 図	矢野遺跡出土土器実測図（1）	34
第 19 図	矢野遺跡出土土器実測図（2）	37
第 20 図	矢野遺跡出土土器実測図（3）	38
第 21 図	矢野遺跡出土土器実測図（4）	39
第 22 図	天神遺跡遺構実測図	40
第 23 図	天神遺跡（第1調査区）出土土器実測図	41
第 24 図	田畑遺跡出土土器実測図	43
第 25 図	多聞院遺跡出土土器実測図（1）	45
第 26 図	多聞院遺跡出土土器実測図（2）	46
第 27 図	多聞院遺跡出土土器実測図（3）	47
第 28 図	大寺古墳墳丘測量図	49
第 29 図	大念寺古墳墳丘測量図	50
第 30 図	大念寺古墳石室実測図	50・51
第 31 図	塚山古墳石室実測図	52
第 32 図	上塩冶築山古墳墳丘測量図	53
第 33 図	上塩冶築山古墳石室測量図	54・55
第 34 図	地藏山古墳石室実測図	56・57
第 35 図	半分古墳墳丘測量図	57

第 3 6 図	光明寺 2 号古墳石室実測図	58
第 3 7 図	小坂古墳石室実測図	59
第 3 8 図	大槻古墳石室実測図	61
第 3 9 図	放れ山古墳墳丘測量図	62
第 4 0 図	放れ山古墳石室実測図	63
第 4 1 図	放れ山古墳出土土器実測図	64
第 4 2 図	妙蓮寺山古墳石室測量図	66・67
第 4 3 図	妙蓮寺山古墳墳丘測量図	67
第 4 4 図	宝塚古墳石室実測図	68・69
第 4 5 図	天神原古墳出土遺物実測図	69
第 4 6 図	神戸川流域の遺物散布図	70
第 4 7 図	三反谷遺跡出土遺物実測図	71
第 4 8 図	古志地区の遺跡分布図	72
第 4 9 図	西谷墳墓群分布図	74
第 5 0 図	西谷 1 号墓墳丘実測図	76
第 5 1 図	西谷墳墓群番外 1 号墓実測図	79
第 5 2 図	西谷墳墓群番外 2 号墓実測図	80
第 5 3 図	元権現山横穴群第 1 支群 1 号横穴実測図	82
第 5 4 図	元権現山横穴群第 2 支群 1 号横穴実測図	84
第 5 5 図	元権現山横穴群第 2 支群 2 号横穴実測図	85
第 5 6 図	元権現山横穴群第 3 支群 1 号横穴実測図	86
第 5 7 図	元権現山横穴群第 3 支群 2 号横穴実測図	87
第 5 8 図	上塩冶横穴群分布図	90
第 5 9 図	上塩冶横穴群第 4 支群出土土器実測図	93
第 6 0 図	上塩冶横穴群第 6 支群 3 号横穴実測図	94
第 6 1 図	上塩冶横穴群第 6 支群 4 号横穴実測図	95
第 6 2 図	上塩冶横穴群第 6 支群出土土器実測図	97
第 6 3 図	上塩冶横穴群第 1 7 支群 1 号横穴実測図	99
第 6 4 図	上塩冶横穴群第 1 7 支群 5 号横穴実測図	100
第 6 5 図	上塩冶横穴群第 1 7 支群 6 号横穴実測図	101
第 6 6 図	上塩冶横穴群第 1 7 支群 1 0 号横穴実測図	102
第 6 7 図	上塩冶横穴群第 1 7 支群 1 1 号横穴実測図	103
第 6 8 図	上塩冶横穴群第 1 7 支群 1 0・1 1 号横穴出土須恵器実測図	105
第 6 9 図	上塩冶横穴群第 2 1 支群 3 号横穴実測図	106
第 7 0 図	上塩冶横穴群第 2 2 支群 1 号横穴実測図	108
第 7 1 図	上塩冶横穴群第 2 2 支群 8 号横穴実測図	109
第 7 2 図	上塩冶横穴群第 2 2 支群 1 0 号横穴実測図	110
第 7 3 図	上塩冶横穴群第 2 2 支群 1 号横穴出土土器実測図	111

第 7 4 図	上塩冶横穴群第 3 2 支群 1 号横穴実測図	114
第 7 5 図	上塩冶横穴群第 3 2 支群 6 号横穴実測図	115
第 7 6 図	上塩冶横穴群第 3 2 支群 8 号横穴実測図	116
第 7 7 図	鳥根奥内所在横穴墓の形式別分布図	121
第 7 8 図	刘山古墳群分布図	124
第 7 9 図	刘山 4 号墳墳丘実測図	126
第 8 0 図	刘山 4 号墳石室実測図	127
第 8 1 図	刘山 4 号墳出土遺物実測図	129
第 8 2 図	刘山 4 号墳出土遺物実測図	130
第 8 3 図	祝廻横穴実測図	133
第 8 4 図	祝廻横穴出土土器実測図	134
第 8 5 図	'71・'75 年調査柱穴位置図	138
第 8 6 図	天神遺跡出土遺物実測図 (1. 墨書土器, 2. 緑釉陶器)	139
第 8 7 図	瓦実測図 (1・2・3 長者原廃寺, 4・5 西西郷廃寺, 6 神門寺境内廃寺)	145
第 8 8 図	長者原廃寺遺構実測図	146
第 8 9 図	小取古墳出土わらび手刀実測図	147
第 9 0 図	菅沢古墓出土鉄骨器実測図	148
第 9 1 図	西谷古墓出土須恵質磁骨器実測図	148
第 9 2 図	出雲西部の中世城館位置図	150
第 9 3 図	平家丸城測量図	151
第 9 4 図	向山城略測図	152
第 9 5 図	大井谷城測量図	154
第 9 6 図	半分城実測図	156
第 9 7 図	半分城跡西 1 郭出土の土師質土器, 陶器実測図	157
第 9 8 図	半分城跡西 1 郭遺構実測図	157
第 9 9 図	唐墨城測量図	159
第 100 図	姉山城測量図	160
第 101 図	浄土寺山城, 栗栖城の位置図	162
第 102 図	栗栖城主郭付近実測図	163
第 103 図	神西城略測図	164
第 104 図	高城位置図	165
第 105 図	鶯ヶ巣城主郭付近測量図	166
第 106 図	上之郷城略測図	168
第 107 図	萩籽古墓出土青磁実測図	170
第 108 図	五輪塔実測図 (1. 佐塩冶利宮高貞五輪塔, 2. 佐吉祥郷五輪塔)	171
第 109 図	天神遺跡の発掘調査	179

表 目 次

表 1	神戸川下流域の古墳・横穴	15
表 2	『出雲国風土記』所載の草木禽獸(橋縫郡, 出雲郡, 神門郡)	20
表 3	出雲西部の郡司一覧	23
表 4	出雲中世小史	26
表 5	出雲平野における城跡一覧	28
表 6	放れ山古墳出土須恵器観察表	65
表 7	神戸川流域の遺物散布地一覧	70
表 8	上塩冶横穴群支群別一覧	91
表 9	上塩冶横穴群出土遺物一覧	118
表 10	出雲市内における横穴一覧	123
表 11	刈山古墳群一覧	125
表 12	祝廻横穴出土土器観察表	136・137
表 13	『出雲国風土記』記載の神社一覧(橋縫郡, 出雲郡, 神門郡)	141・142
表 14	新造院の建立者一覧(橋縫郡, 出雲郡, 神門郡)	143
表 15	出雲平野の館一覧	169
表 16	石器発見地名表	172

図 版 目 次

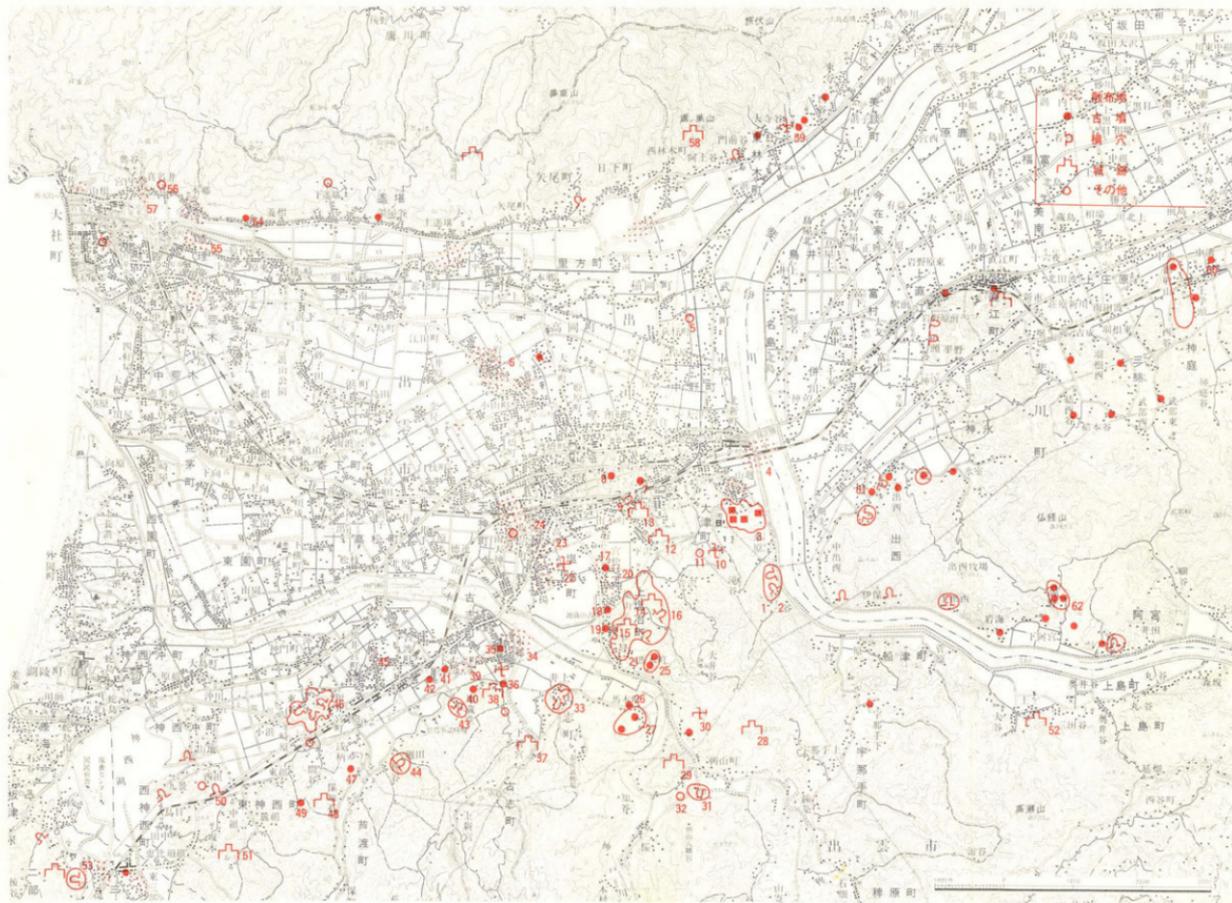
図版 1	(縄文時代)	菱根遺跡近景 三反谷遺跡近景 菱根遺跡出土土器
図版 2	(弥生時代)	1975年天神遺跡の遺構 天神遺跡出土の壺棺
図版 3	(弥生時代)	矢野遺跡遠景 土壕内出土の甕形土器 菅下と紡錘車
図版 4	(弥生時代)	命主神社境内出土の銅戈 原山遺跡出土の石剣 猪口祠堂出土の貝輪
図版 5	(弥生時代・古墳時代)	西谷1号墓 西谷番外1号墓
図版 6	(古墳時代)	大念寺古墳遠景 大念寺古墳石室内部

図版 7	(古墳時代)	大念寺古墳(玄室槨石付近) 大念寺古墳(石棺内部) 大念寺古墳(出土品:鏡板と斧)
図版 8	(古墳時代)	上塩冶築山古墳近景 上塩冶築山古墳石室内部(玄室)
図版 9	(古墳時代)	上塩冶築山古墳(家形石椁) 上塩冶築山古墳(玄室西壁の一部) 上塩冶築山古墳(羨道部)
図版 10	(古墳時代)	上塩冶築山古墳の出土の玉類・耳環・金銅冠・大刀
図版 11	(古墳時代)	上塩冶築山古墳出土の馬具
図版 12	(古墳時代)	地藏山古墳石室内部
図版 13	(古墳時代)	小坂古墳近景 小坂古墳石室内部
図版 14	(古墳時代)	塚山古墳石室内部 大槻古墳石室内部
図版 15	(古墳時代)	放れ山古墳近景 放れ山古墳石室内部
図版 16	(古墳時代)	放れ山古墳出土の大刀 放れ山古墳出土の馬具(鏡板) 放れ山古墳出土土器(須志器)
図版 17	(古墳時代)	妙蓮寺山古墳石室内部 妙蓮寺山古墳石室内部(玄門施設)
図版 18	(古墳時代)	宝塚古墳近景 宝塚古墳石室内部
図版 19	(古墳時代)	上塩冶横穴群遠景(出雲工業高校付近) 上塩冶横穴群遠景(大井谷付近) 上塩冶横穴群遠景(三反谷付近)
図版 20	(古墳時代)	上塩冶横穴群2 7支群全景 上塩冶横穴群2 7支群1号穴の閉塞状況 上塩冶横穴群2 2支群8号穴の閉塞石
図版 21	(古墳時代)	上塩冶横穴群2 2支群1号穴玄室内 上塩冶横穴群2 7支群1号穴玄室内 上塩冶横穴群2 7支群2号穴玄室内
図版 22	(古墳時代)	上塩冶横穴群出土遺物
図版 23	(古墳時代)	上塩冶横穴群出土遺物
図版 24	(律令時代)	天神遺跡調査状況 西西郡慶寺遠景

- 図版 25 (律令時代) 天神遺跡出土黒書土器(「早天」)
天神遺跡緑釉陶器
神門寺境内庵寺出土瓦
神門寺境内庵寺出土礎石
鰐淵寺藏千辰銘金銅仏
- 図版 26 (律令時代) 平田市大船山遠景
青沢古窯
長者原庵寺の現状
- 図版 27 (中世) 平家丸城跡
向山城跡
- 図版 28 (中世) 大井谷城跡
半分城跡
- 図版 29 (中世) 大井谷城跡西一郭の遺構
半分城跡西一郭の遺構
- 図版 30 (中世) 半分城跡西一郭出土の鉄器
半分城跡西一郭出土の土師質土器
- 図版 31 (中世) 唐墨城跡
唐墨城跡
- 図版 32 (中世) 姉山城跡
姉山城跡
- 図版 33 (中世) 浄土寺山城跡
粟栖城跡
- 図版 34 (中世) 神西城跡
高城跡
- 図版 35 (中世) 鷹ヶ巣城跡
鷹ヶ巣城跡
- 図版 36 (中世) 戸倉城跡
上之郷城跡
- 図版 37 (中世) 伝塩治判官館
伝三木氏館
- 図版 38 (中世) 大坊
伝塩治高貞五輪塔(神門寺)
伝吉祥姫五輪塔(大坊)
- 図版 39 (中世) 出雲萩村古墓の出土品(重要文化財)
青磁(皿)
青磁(碗)
青磁(碗)

上塩冶地域を中心とする主要遺跡一覧表

番号	種別	名称	所在	番号	種別	名称	所在
1	横穴	元権現山横穴群	出雲市大津町	32	古墓	朝山古墓	出雲市朝山町
2	散布地	長壠遺跡	〃 〃	33	横穴	井上横穴群	〃 古志町
3	墳墓	西谷墳墓群	〃 〃	34	散布地	古志本郷遺跡	〃 〃
4	散布地	斐伊川鉄橋遺跡	〃 〃	35	古墳	大槻古墳	〃 〃
5	古墓	荻籽古墓	〃 荻籽町	36	〃	放れ山古墳	〃 〃
6	散布地	矢野遺跡	〃 矢野町	37	城跡	栗栖城跡	〃 〃
7	古墳	大念寺古墳	〃 今市町	38	〃	浄土寺山城跡	〃 下古志町
8	〃	塚山古墳	〃 〃	39	散布地	田畑遺跡	〃 〃
9	横穴	久徳園横穴	〃 〃	40	古墳	妙趣寺山古墳	〃 〃
10	寺跡	長者原廃寺	〃 上塩冶町	41	〃	宝塚古墳	〃 〃
11	古墓	菅沢古墓	〃 〃	42	〃	大神原古墳	〃 〃
12	城跡	向山城跡	〃 〃	43	横穴	地藏堂横穴群	〃 〃
13	〃	平家丸城跡	〃 〃	44	〃	深田谷横穴群	〃 芦護町
14	〃	大井谷城跡	〃 〃	45	散布地	多聞院遺跡	〃 知井宮町
15	〃	半分城跡	〃 〃	46	横穴	福知寺横穴群	〃 〃
16	横穴	上塩冶横穴群	〃 〃	47	古墳	浅柄古墳	〃 〃
17	古墳	上塩冶築山古墳	〃 〃	48	城跡	高城跡	〃 〃
18	〃	地藏山古墳	〃 〃	49	古墳	北光寺古墳	〃 東神西町
19	〃	半分古墳	〃 〃	50	横穴	神待山横穴群	〃 西神西町
20	散布地	宮松遺跡	〃 〃	51	城跡	神西城跡	〃 〃
21	〃	三反谷遺跡	〃 〃	52	〃	上之郷城跡	〃 上島町
22	寺跡	神門寺境内廃寺	〃 塩冶町	53	横穴	八幡宮横穴群	簸川郡湖陵町
23	散布地	高西遺跡	〃 〃	54	散布地	菱根遺跡	〃 大社町
24	〃	天神遺跡	〃 天神町	55	〃	原山遺跡	〃 〃
25	古墳	光明寺古墳群	〃 馬木町	56	〃	真名井割戈出土地	〃 〃
26	〃	小坂古墳	〃 〃	57	〃	大社境内遺跡	〃 〃
27	〃	刈山古墳群	〃 〃	58	城跡	鶯ヶ果城跡	出雲市西林木町
28	城跡	唐墨城跡	〃 朝山町	59	古墳	大寺古墳群	〃 東林木町
29	〃	姉山城跡	〃 〃	60	〃	神庭岩舟古墳	簸川郡斐川町
30	古墓	大坊古墓	〃 〃	61	〃	出西丸子古墳	〃 〃
31	横穴	祝壠横穴群	〃 〃	62	〃	高野古墳群	〃 〃



上塩冶地域を中心とする主要道跡分布図

第1章 出雲平野の形成

大社湾から宍道湖にいたる20kmを東西に細長く横たわる出雲平野は、県内随一の穀倉地帯としてその名を馳せている。しかし、現在のような景観を呈するようになったのは、悠久な時代の流れからいえばわずかの期間でしかない。

寒冷なウルム氷期には、海面が現在よりも100m以上も低い位置にあった。温暖な後水期には、海水準が上昇して、出雲平野の地下に数10mにもおよぶ海成粘土層を堆積している。そして、斐伊川、神戸川の二大河川はその上部に沖積陸成層を生成している。

ここでは、出雲平野が人間の生活舞台となる後水期の海進極頂期から『出雲国風土記』の編纂された奈良時代にいたるまでの地理的環境の変遷を、考古学上の知見を加味しながら述べてみたい。

縄文海進の頃(6000年~5000年BP)

この時期を考古学の時代区分にあてはめると、縄文時代早期末~前期に該当する。この時代の

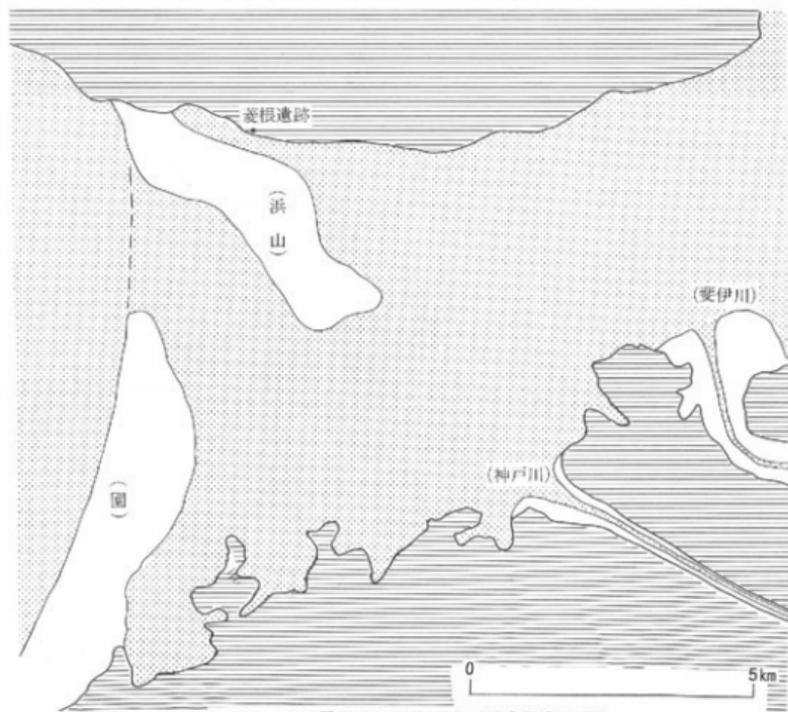


図1 出雲平野の地形変遷I (縄文海進の頃)

遺跡は、今のところ平野の西北部の山麓に菱根遺跡が存在するだけで他には見あたらない。

昭和29年の同志社大学出雲古文化調査団の調査によれば、その層序からみて遺跡の包含層が原堆積ではなく崩落層で往時の人たちはすぐ背後の山地の段丘上に生活していたと推定されているが、他の地域における同時期の遺跡の立地からみてもその可能性が高い。

菱根遺跡からマテバシイが多く出土していることからみて、現在よりも温暖な気候であったようである。全国的な事例から推しても、当時は現在の気温よりも年平均で2度高温である。したがって、海水準は現在よりも数m高位にあったといわれている。出雲地方においても、松江市内の海成層の高さや沖積面下には、海進期に埋没した谷中分水界などから考えて、当時の最高海面は、現在よりも+5m～+10mにあり、出雲平野においては大社町から南東に5km伸びる砂州（浜山砂丘の基盤）が同時期のものと推定されている。（小畑浩「中海・宍道湖付近の第4系と地形発達史」第四紀研究6-2〔1967〕）。この砂州上に生成された砂丘には、原山遺跡が営まれているが、この点を合わせて考えてみるとその蓋然性が一層強い。

さて、そこで出雲平野全体を見渡すと、その等高線からみて当時は穴遺湖と外海が結ばれていた可能性が高いが、積極的に肯定するまでには至らない。しかし、少なくとも斐伊川以西の出雲平野においては、浜山砂丘がのっている砂州と妙見砂丘の被覆する段丘を除く沖積平野のほとんどが海面下にあったとみて差支えないと思われる。

弥生時代中期の頃（2000年BP）

菱根遺跡が途絶えたのち、縄文後期になると近隣に原山遺跡と大社境内遺跡が現出する。菱根遺跡と同様に、背後の山が冬の季節風をやわらげ、海の幸、山の幸に恵まれたこの地は当時の人たちが生活をするうえで絶好の適地であったようである。

やがて弥生時代になると、出雲大社の周辺以外にも遺跡があらわれ、弥生中期には出雲大社の周辺には縄文後期に初現する原山遺跡と大社境内遺跡が継続して砂丘及び山麓の小扇状地に営まれているが、矢野遺跡（貝塚を含む）、天神遺跡、多聞院遺跡（貝塚を含む）、下志田畑遺跡は沖積平野における微高地である自然堤防に占地している。このように平野面には居住地域が相当拡大したが、未だ平野の中央部には遺跡が見当たらない。

奈良時代の天平3年（733）に編纂された『出雲国風土記』神門郡の条に、^{かすどのうずらうみ}「神門水海」の記載があることから、弥生中期においても『出雲国風土記』にかかれたようすと相似した地理的環境にあってであろうことは容易に想像ができる。しかし、出雲市知井宮町に所在する多聞院遺跡（貝塚を含む）の層序において、弥生後期の土器を包含する混貝土層の下部層に鹹水性貝類が顕著にみられる。混貝土層の上部層にいたると、古式土師器を少量含み淡水産ヤマトシジミを相当含んだ主淡層に移行することからわかるように、弥生時代には外海から湾入した入海の様相を呈している。したがって、矢野遺跡や知井宮町の多聞院遺跡の付近まで海水がおし寄せた状

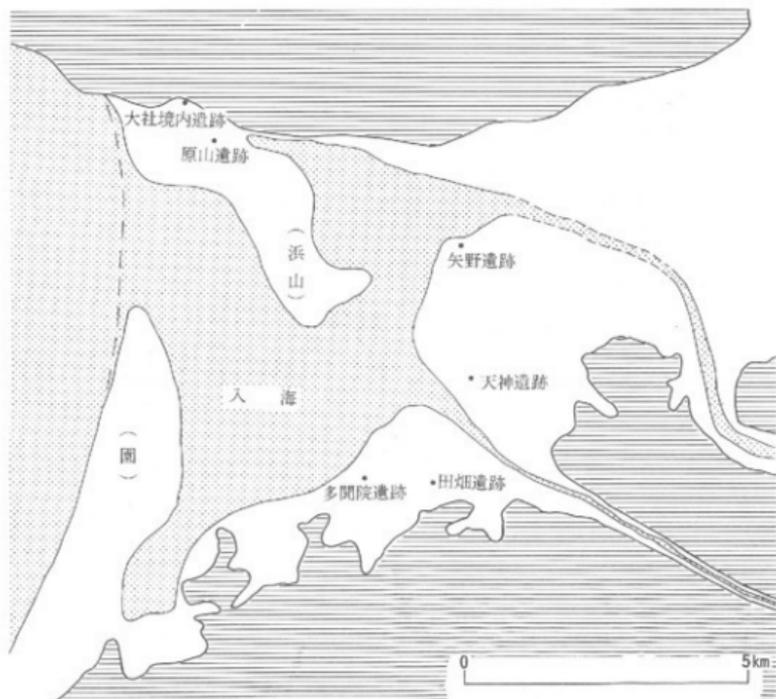


図2 出雲平野の地形変遷Ⅱ (弥生中期の頃)

態にあったことになる。

すでに、弥生時代には稲作が始まっているが、出雲平野においては矢野遺跡出土遺物からみるとむしろ縄文的要素が強く、海、川の魚貝類や山、野の獣類がその食生活の相当重要な部分を占めていたであろうことが窺われ、古墳時代になってもなお南原遺跡、鹿蔵山遺跡、古志木郷遺跡など一部分に小規模な貝塚が営まれている。

『出雲国風土記』のかかれた頃(1200年BP)

弥生時代に出雲平野に侵入した入海が弥生時代末期に砂嘴によって外海と遮断され潟湖に変貌したことは、多聞院遺跡の層序によって既に明らかである。古墳時代や奈良時代の遺跡の分布を地図上に記入してみても弥生時代以降、遺跡の平野中央部への進出は足踏み状態で、弥生時代から古代に至る1000年間は沖積地が拡大しないために居住地域に殆んど変化が認められていない。同じような事例は、佐賀平野や利根川沖積地において弥生時代から古代にかけての沖積平野の拡大形成が緩慢であったことが確認されており、その一因に海水準の上昇が考えられている。

出雲平野は、『出雲国風土記』に記載された「神門水海」が砂丘の内側に生成された潟湖であ

第2章 出雲西部の古代、中世の歴史

縄文時代

縄文時代は紀元前1万年ないし8000年頃から始まり、紀元前300ないし200年頃までの間といわれる。長期に亘るこの時代は土器型式の変遷により、早期・前期・中期・後期・晩期の五期に区分されている。当時の生活は狩猟・漁撈の採集経済に依存していたので、社会展開の度合も遅く、自然環境に大きく左右されていたのであろう。

さて、現在鳥根県下では70ヶ所を越える縄文遺跡が検出されている。特に、近年圃場整備事業にともなって縄文時代遺跡の発見例が増え、飯石郡三刀屋町宮田遺跡・八束郡東出雲町竹ノ花遺跡・松江市の石台遺跡・タテチヨウ遺跡など重要な遺跡が知られている。

一方、出雲平野の縄文遺跡については、数ヶ所確認されている。なかでも調査が行なわれた簸川郡大社町の菱根遺跡が著名である。この遺跡は同志社大学の酒結伸男氏によって発掘され、山陰では稀有な繊維を含む土器が出土し注目されたものである。また、代表的な弥生時代遺跡として知られる原山遺跡からは縄文時代後期の土器が、さらに付近の出雲大社境内遺跡からは九州の「御領式」と共通する無文磨研の土器や、口縁部の下に突帯をめぐらす山陽の「黒土BⅡ式」と共通する晩期の土器が出土している。また、今回の上塩冶を中心とする地域の調査によって、三反谷遺跡からも縄文土器片が検出され、平野の南方にも遺跡が存在することが明らかとなった。

これらの遺跡が営まれた時期については、北山山麓に出現した菱根遺跡が早期であるのに対して他はすべて後期・晩期に属する。中期の遺跡が見当たらないのは不自然であるが、自然現象の変化や他の地域への移住が考えられる。

このように出雲平野において、現段階では大規模な縄文遺跡は見出し得ないのである。

(東森 市良)

弥生時代

弥生時代の始まりについては、紀元前3世紀説と2世紀説とがあり、どちらとも決しかねるが、最近では2世紀説が有力になりつつある。その終末期については3世紀説が有力であるが、すぐには断定出来ない状況である。この時代も土器によって前・中・後の三期に区分されている。そして、弥生時代を特徴づけるものとして水稻耕作と、金属器の使用などをあげることが出来る。

鳥根県下での積極的な金属器の使用を裏づけるものは、出雲市知井宮町多聞院遺跡の鹿角装刀子を除いてはないが、後期に入って殆んど石器らしいものが姿を消し、それに代って砥石の出土が増加していることをみれば、金属器の使用が考えられてくる。また、水稻耕作についても隠岐

郡西郷町月無遺跡^{つきなし}の木製鍬・鋤以外これも事例にとほしいが、すでに靱痕のついた縄文晩期と思われる土器が松江市石台遺跡から出土している例もあり、そのような点からすると弥生土器ともにも早くは原山遺跡の付近で水稻耕作が行なわれていたと考えられなくはない。

ところで、島根県下でいち早く根をおろしたのが原山砂丘の地であった。これは最近の研究によって北九州の最古式の土器と共通する点が指摘されている。いずれにしても拠点的に日本海ルートをとってこの平野に弥生文化が伝播したことは注目に値する。

そしてそれよりさほどおくれることなく、斐伊川の旧自然堤防上の出雲市矢野に居住が開始される。矢野の地は農耕に適したところと考えられ、前期から後期そして古墳時代の初頭まで場所をかえながら居住が展開した。そして、中期に入ると出雲市の天神一带が生活空間となり、下古志町田畑においても集落が営まれるようになる。

また、先述の出雲市知井宮町多聞院遺跡(貝塚)もこの時期に居住がはじまり、これも古墳時代初頭まで継続されるのである。ここで注目したいことは、自然堤防というか周囲の水田よりもやや高い所、つまり水の氾濫などによる被害から守られるような位置に立地していることである。また、矢野遺跡が貝塚を構成している点も弥生時代としては興味をそそる問題である。弥生時代を農耕社会と規定する以上その枠からはずれるわけであるが、海、湖岸に面した遺跡においては半農半漁が生活の実態であったと考えられなくはない。これが社会的分掌というほどのことはないにしても、弥生時代の農業生産力を考える場合、そうしなければ生きられなかった実態があるといってもよからう。

次に、土器の編年からみた時代区分であるが、ここでは弥生土器を矢野遺跡出土の土器にあわせて七期区分とすることにしたい。つまり前期二期、中期三期、後期二期の区分である。矢野遺跡の一期に先行する土器は原山遺跡の一群であるが、天神は矢野IV式を中心とし、多聞院遺跡のそれは矢野IV式からVII式まで、田畑は矢野IV式を中心としている。このようにみると矢野IV式というのは中期中葉であり、この頃から遺跡が急激に増加しはじめるということがわかる。もっとも出雲平野は斐伊川の多量な土砂の流出で形成されていくのであり、先年鉄橋のつけかえ工事の際して地下十数メートルのところから弥生土器が出土しているのをみると、この沖積平野には多くの弥生遺跡が埋没していると考えられる。

さて、祭祀関係遺物であるが、出雲大社の木社命主神社の境内から江戸時代の寛文年間^{いのもめし}に数回、青銅器が多量に出土し、銅戈一口と勾玉一個が現在大社宝物館に収蔵されている。これは佐草自清の「命主社神器出現之記」にくだしいが、社殿背後の岩山をくずし取った際に出上したといわれる。この銅戈は九州で鑄造されたものに類似し、中広形銅戈といわれるものに属する。日本海ルートが前期ほどでもないにせよ、やはり文化伝播のうえで重要な意味をもっていたことがわかるのである。

このような青銅器は本来武器として使用されたものであるが、日本に入ってからにはほぼ同時期に鉄器が輸入されていることもあって専ら祭祀用品として用いられたと考えられる。命主神社の銅戈についても、同時に硬玉勾玉が出土していることが注目されよう。

また、平田市猪目^{いのめ}洞穴も見のがせない遺跡である。

この遺跡は平田市猪目町の湾に東面する高さ50～60mの急な崖の裾にある幅30m、奥行きが主要部分だけでも30m以上の洞穴である。昭和23年にこの洞穴に堆積した土壌を取り除いて、漁船置場として前面海中に小防波堤を築く工事が行なわれた。この際に入骨や土器が出土し、大社考古学会の注目するところとなり遺物採取、出土状態の調査が行なわれた。それによるとこの洞穴で人々が生活をはじめたのは縄文時代中期にさかのぼり、弥生時代前期、中期、後期と間隙をおきながら古墳時代後期まで居住している。そしてある時期は生活の場として、ある時期は埋葬の場として洞穴が使用されていたことがわかる。

出土したものは人骨十数体のほか、貝類、獣骨、鳥骨、魚骨、海藻、木の实、鉄器（楔釘）、縄文土器、弥生土器、土師器、須恵器や稲藪、麦、貝輪、木器（桶、下駄、箸、梶、弓、スコップなど）がある。

このうち弥生時代に属するものは前期の甕、貝輪着装人骨とはほぼ同じ層から出たという中期の甕、貝輪着装人骨に伴ったくり上げ口縁をなす後期の甕がある。貝輪着装人骨は調査時の第九層にあたり、仰臥屈葬されていた。貝輪は6個体あり、おのおの長さが10cm内外であるが、そのうち1個は壊れていたものを縄でつないで用いたと見え、端に小孔があげられている。

先述の土器は、口縁部が人骨の頸部に、下半部は腹部に置かれていたということである。この他に石包丁様の石器とスレート片がある。

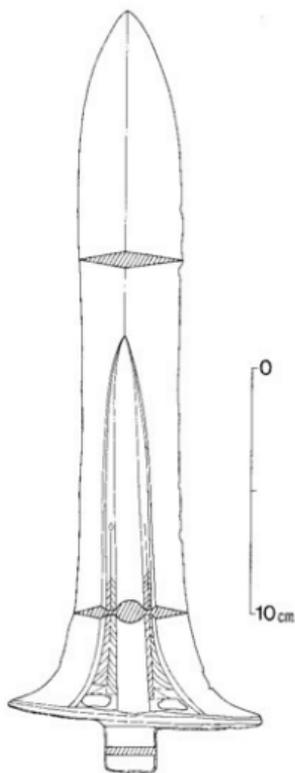


図4 命主神社出土銅戈実測図

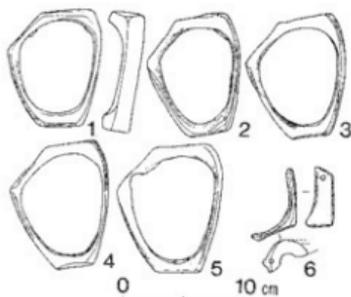


図5 猪目洞穴出土貝輪実測図

この遺跡は平野からへだてられた海岸遊地での生活と墓制を考える上で貴重なものであり、昭和39年に国の指定史跡となり、出土遺物は一括して大社町の収蔵庫に保管されている。

なお、『出雲国風土記』に記す「黄泉の穴」はこの洞穴にあたることは間違いないようであり、そのような点からもこの洞穴遺跡は注目に値するといえよう。

以上、出雲平野をめぐる弥生遺跡の概観を述べたが、これら遺跡の立地についてみると、前期には海、湖岸、低地または洞穴に、そして中期以降中央部の低地に位置することがわかる。その場合、少しでも高地をということで穴野や知井宮のような立地が選ばれていることは注目せねばなるまい。

このように遺跡の立地からすると低地に位置するものの、やや微高地ともいふべきところに位置していることがわかる。これは先述した出雲平野の形成と関連しているものであり、今後低地遺跡の調査でさらに数多くの遺跡が明らかになる可能性は大である。

(東森 市良)



天神遺跡の発掘風景 (1975年)

古墳時代

きて、すでにみてきたように、出雲平野における弥生時代の遺跡は、他地域と同様にほぼ順調な拡大と大規模化がその時期別分布から理解される。特に、中期後半以降の天神遺跡や知井宮多聞院遺跡等は、沖積平野によりやく展開しつつあった稲作の普及を示すかのようなのである。

平野内部の状況は墳墓においては十分に検証されているとはいいがたい天神遺跡の壘棺、土壊墓群（中期後半～）、矢野遺跡の土壊墓（後期前半）をのぞいては斐伊川が平野に出る位置に築かれた西谷墳墓群以外、ほとんど弥生社会の動向を知るべき資料がない。

その西谷墳墓群は10基余りの墳墓から構成され、その中には四隅突出型のもの（1～4, 6, 9号墓）、前方後方形のもの（5, 7号墓）、墳丘を有しないもの（番外1～3号墓）の3種があり、分布も隣接してかつ溝等を共有するもの（2・3号墓, 3・4号墓）とかなり独立性の強いもの（7・9号墓）などあって多様な構成をなしている。

規模も旧来から四隅突出型の墳墓の主流を占めてきた一辺10数mの小形のものに加え、一辺が30～50mにも及ぶ大形のものもあって、弥生時代後期における墳墓の多様性をうかがわせる。もちろん、墳墓のすべてが弥生時代のものであることを証するには、採集された遺物は不十分であるが、一応弥生時代を中心をおくものと理解してよいものと思われる。

内部主体には一部本棺が確認されており、伴出する遺物もいくぶん紹介されている。特に、遺物の中で特筆すべきものは図8に掲げる吉備型壺・器台であり、その分布の中心である岡山県内との密接な交渉（特に同県北部）が推察されるのである。



図6 出雲平野における縄文時代、弥生時代の遺跡分布図

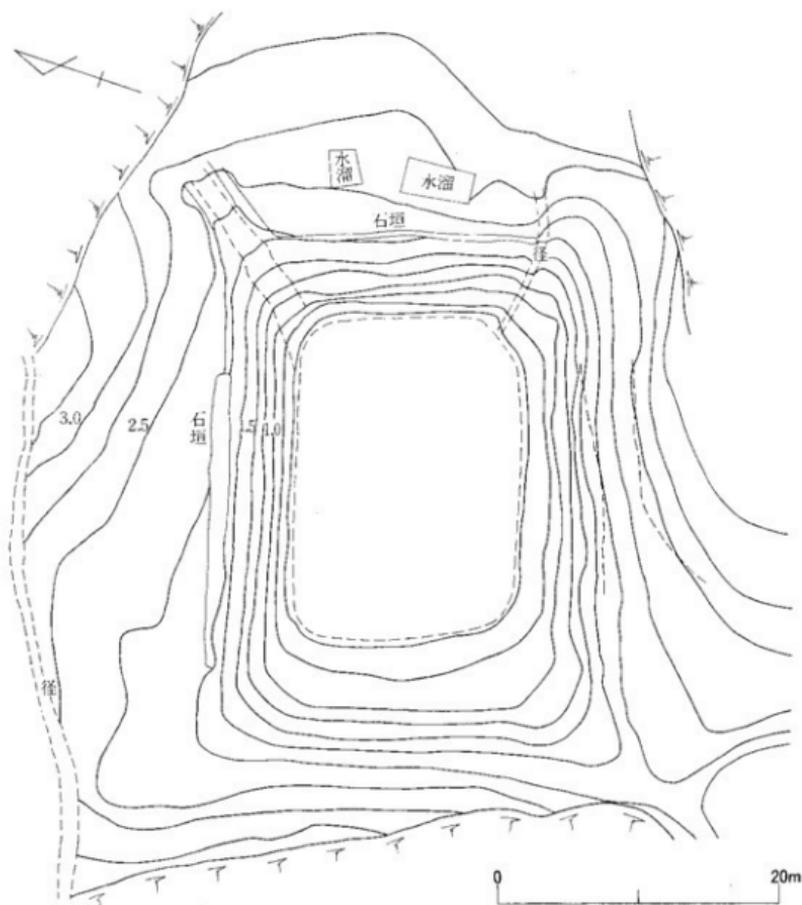


図7 西谷3号墓実測図（『古代の出雲を考える』2より転載）

この西谷墳墓群から少なくとも後期には他地域と同様に、墳丘をもつ墓を築き、しかも遠く吉備地方とも連絡をもつ集団が存在したことがわかる。

いっぽう、この西谷墳墓群を除く他地域では弥生時代後期～古墳時代初頭の様相がほとんど不明で、平野の縁辺部に土塚墓等（斐川町の狼山遺跡など）が知られるのみで、その他西谷墳墓群に近い石土手遺跡、斐伊川鉄橋遺跡から壺棺と考えられる土師器が採集されているのみである。

したがって、出雲平野における古墳の発生は、西谷墳墓群の中に古墳時代に下る墳墓があるとしても、典型的な前期前半の古墳が未だ発見されておらず、その直前の状況を知るべき墳墓や集落の実態が不明瞭な現段階においては究明しがたい段階である。

前期古墳としては、前方後円墳の大寺古墳を待つことになる。平野の北側にあつて斐伊川を北から望む丘陵先端に位置し、前述の西谷墳墓群とは平野をはさんで反対側に築造されている。墳丘は全長5.2m、後円部径2.7m、高6m、前方部長2.5m、幅1.2m、高3mで、南に突出した丘陵の方向に合せ、自然地形をうまく利用していて、水田面からは壮大にみえるが、その大半は地山の加工によるものである。前方部は明瞭でないが、いわゆる発達したものではなく、幅も狭く、高さも後円部に比べ低い。

内部には小形ではあるが竪穴式石室を築いている。石室は墳丘主軸に平行して南北方向に築かれ、その規模は長約4m、高約0.7m、幅約0.7mをはかるもので、床は断面V字状の粘土

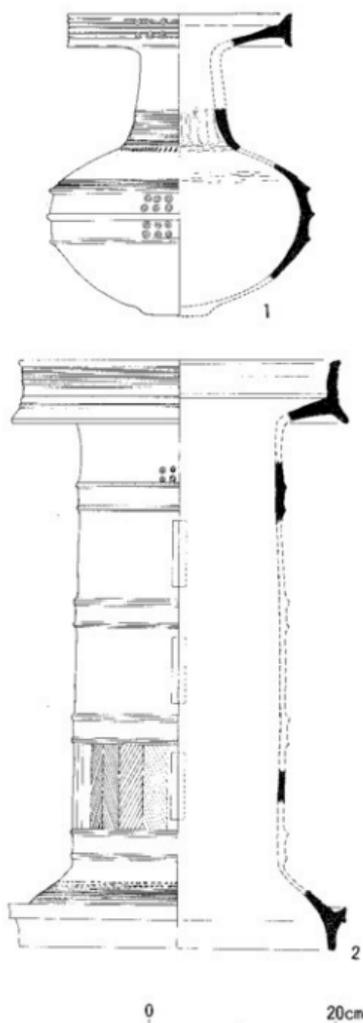


図8 西谷4号墓出土土器実測図
 (『古代の出雲を考える』2より転載)

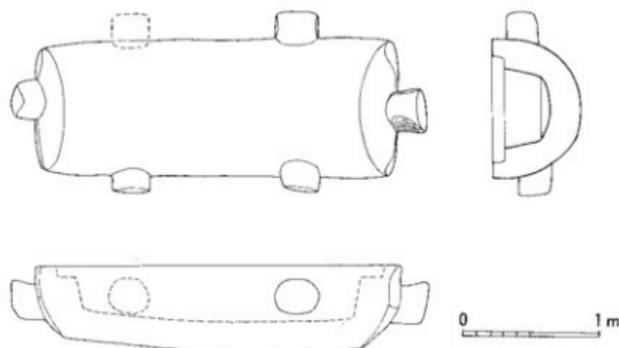


図9 神原岩船古墳の石棺実測図（『山陰古墳文化の研究』より転載）

床としている。遺物としては鉄斧、大形鐵先、鉈が知られている。

このように大寺古墳は前半期でもそう早くない時期に位置づけられ、他地域とは異なる、古墳時代への移行過程が推される。

ただ、前述の西谷墳墓群の中にはいわゆる古墳時代に属する墳墓の存在する可能性も残されているが、それは「在地型古墳」などではなく、古い弥生社会の諸関係（四隅突出型に体现されるような）を残した弥生墓との関係を考えるべきであろう。

ところで、この大寺古墳を含む前半期の古墳はその数の少なさもあって十分把握されていないが、この大寺古墳よりも若干下の時期の古墳は平野の縁辺部などでいくつか確認されている。

荊原いばしらのの軍原古墳、神庭岩船山かみひらふね古墳などが大形の古墳としてまずあげられる。軍原古墳には長持形石棺が内部主体で、武器、玉類等を副葬品としており、神庭岩船山古墳は復元全長5.7mなどの前方後円墳で、内部に舟形石棺を有していて、両者ともいわゆる中期古墳（前半期後半）の諸特徴を示している。

これらの大形古墳に加え、同じく平野の縁辺部や、その周囲には小規模の古墳からなる古墳群が見られている。これらの古墳群は規模が1.0数m前後で、内部主体には箱形石棺や木棺を有するものが多く認められる。これらの所属年代は、既には決しがたいが、前半期と後半期をつなぐ時期の古墳としてよからう。

その他、沖積平野の中には土塚墓、土塚墓群などの存在が推せられるが、十分に調査が進んでいないため、その様相は明らかでないところが多く、ましてや集落の実態などはほとんど不明といわざるをえない。しかし、前半期古墳の希少性や平野内における不連続的な面から、平野内においては前半期に強大な勢力が継続しなかったのではないかと考えられる。弥生時代後期の西谷墳墓群を創出した

首長的秩序のゆくえが興味深い。

また、後期古墳との関わりでいえば水系、もしくは河川がつくる平野に形成されてくる地域集団が、どのように展開してくるのか、斐伊川中流部の大原郡加茂町所在神原神社古墳、飯石郡三刀屋町所在松本1号墳やその周辺などとの関係において、今後注目されねばならないであろう。（大國晴雄）

さて、後期に入ると生産力の高い平野部に限らず、山間や海浜のへき地にも大小様々な古墳が造られ、当時人々が生活を営んでいた所にはくまなく分布している。

出雲平野に分布する後期古墳には横穴式石室を内部主体とする古墳と丘陵の斜面に穿たれた横穴とがある。数の上では古墳は100基に満たないが、横穴は数百穴は存在すると推定され、被葬者層の拡大を窺わせる。

まず、古墳についてみると、墳形では前方後円墳、円墳、方墳とが知られている。前方後円墳、方墳は僅かで、円墳が圧倒的に多く、前方後方（円）墳や方墳の多く分布する出雲東部とは対照的である。規模では大念寺古墳の全長84mの前方後円墳が最大で、最小は径10mに達しない円墳がある。大部分の古墳は径10～20mの墳丘を有する。

内部主体は現在知られている限りでは横穴式石室が殆んどを占め、他に箱形石棺が僅かに存在する。使用されている石材はノミ等の鉄器で加工された切石、自然石、および割石がある。また、石材の積み方、石室の計画等にも各種あり、出雲平野の石室は大きく次の三類型に分けることができる。

I類…自然石・割石造りの狭長な石室。

II類…切石造りの狭長な石室。

III類…玄室の壁に1枚から数枚の切石を用いる。玄室の平面形は正方形と長方形の2種類が認められる。



図10 出雲平野における古墳分布図

I類は平野全域に分布しており、代表的古墳に妙蓮寺山古墳がある。II類は神戸川下流域に集中し代表的古墳に上塩治茶山古墳がある。III類は出雲東部を中心に分布する石棺式石室の影響を受けた石室であり、神戸川下流域や斐伊川下流域の一部に限って分布するものである。地蔵山古墳に代表される。

これらの中で、神戸川下流域の古墳では石室内部に石棺や石床をもつものがある。大形の石室では割り付き石棺で、小形では組み合わせ式のものである。

副葬品としては装身具(耳環・玉類等)、武器(刀・槍・鏃)、馬具、土器があげられるが、古墳の規模によって副葬品の内容も異なってくる。小規模な古墳は少量の武器と土器のみを有し、一方、大形なものは多種多様な副葬品をもち、中でも装身具や馬具に金銅製品を使用している。

次に、数において後期古墳を代表するのが横穴である。谷間の斜面に数穴から数十穴の単位で開口し、中には丘陵全体に横穴がつくられていることもあり、現在、平野の南側一帯の丘陵を中心に数十群が発見されている。その分布には疎密があり、斐伊川下流域と神戸川下流域では一つの横穴群に数十の支群をもつものなどがあって密集しているが、平野の縁辺部とりわけ北山山麓では僅かな群が点在しているにすぎない。これは平野の開発が一様でなかったことの反映ともみられる。

さて、一見単純に見えるこれら横穴にも、玄室の形より整家形(平入・妻入)、カマボコ形、丸天井形の三形態が認められる。

整家形の横穴は天井を四柱式に加工し、玄室全体が家形を呈している。さらに、羨道を平側・妻側に付けることにより、平入・妻入構造に区別される。妻入のものは平野の全域に分布するが、とりわけ多く分布するのは神戸川出口に位置する上塩治横穴群と井ノ上横穴群である。平入のものはその分布の中心は出雲東部であり、出雲西部では元樺現山横穴群など斐伊川が平野部へ注ぎ込む付近に分布する地域に限られる。

カマボコ形の横穴は玄室を板カマボコ状に掘るものをいい、さらには、沈線も四柱式に入れたものも認められる。分布は出雲市知井宮町所在の福知寺横穴群以西で、神西湖周辺に集中している。

丸天井形の横穴は便宜上、玄室の各壁を区別する界線をもたないものをいう。この横穴は上記の二種類の横穴が多い地域にも点在し、平野全域に分布している。

神戸川下流域を中心とする地区には、一支群中に数穴の石棺や石床を内蔵する横穴がある。この石棺・石床は加工が容易な凝灰岩や砂岩質の石を使用し、運び入れやすくするために組み合わせ式になっている。

副葬品については須恵器が圧倒的に多く、他に、直刀、耳環、玉類、鉄器が出土するが極少量で、しかも大形古墳とは比較にならないほど貧弱である。この点でも石室と横穴の差は明瞭であり、被葬者の性格を知ることができる。

以下、出雲平野の後期古墳を地域的に紹介していく。

1. 神戸川下流域地区

出雲平野の南西部に位置する神戸川下流域は律令時代に神門郡家^{カノム}、狹結駅、神門軍団等が置かれ、出雲平野の要衝の地であり、その前代といえる古墳時代後期にも出雲地方の古墳文化の中心地としての役割を果たしたのである。代表的な古墳と横穴を地域別に列挙したものが表1である。

表1 神戸川下流域の古墳・横穴

	古 墳	横 穴
今 市 町	大念寺古墳、塚山古墳	久微園横穴
上 塩 治 町	築山古墳、地藏山古墳、半分古墳	上塩治横穴群
馬 木 町	光明寺古墳群、刈山古墳群、小坂古墳	
古 志 町	大瓶古墳、放れ山古墳、妙蓮寺山古墳	井ノ上横穴群、放れ山横穴群
下古志町	宝塚古墳、天神原古墳	地藏堂横穴群

上記の古墳で現在判明している最も古い時期の古墳は天神原古墳である。この古墳は径30mを超える円墳と考えられるが、内部構造は不明である。時期は山陰・須志器細年のⅡ期に属する^①。この古墳に続くものとしては妙蓮寺山古墳、半分古墳、大念寺古墳がある。墳形はともに前方後円墳で内部構造は自然石・割石造りの横穴式石室を有し、内に家形石棺を置く。3つの古墳は石材や石棺に類似点が多いが、妙蓮寺山古墳と大念寺古墳の側壁の石積には明瞭な差が認められ、妙蓮寺山古墳のそれは極めて雑な積み方である。大念寺古墳は築成段階ごとに水平面を合せ、整然と積まれている。時期はⅢ期に属する。

これに続く古墳には、上塩治築山古墳、塚山古墳、放れ山古墳、刈山4号墳があり、その多くが切石造りの石室をもつ。形態的には大念寺古墳の石室の系譜を受け継ぎ、石材が切石になったのが特徴

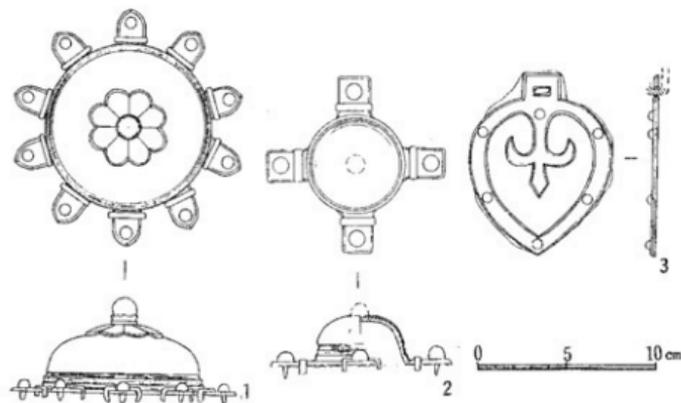


図11 妙蓮寺山古墳出土の馬具類（『妙蓮寺山古墳調査報告』より転載）

である。これらの古墳の石室は規模が小さく、上塩冶薬山古墳以外は組合せの石棺や石床を有する。墳丘は判明している限りでは円墳である。同様に切石造りの玄室をもち、プラン等も共通しているが、側壁の壁面を5～6個の大形の切石二段積みになっているなど、石積みの面で特異な手法をみせるのが家塚古墳である。技法的には石棺式石室の影響かと推定される。

前述の切石造りの石室と相前後して現われる古墳に大槻古墳・光明寺1号墳・地蔵山古墳・小坂古墳がある。この石室は石棺式石室の範疇に入り、天井・床・各壁とも原則として切石の一枚石を使用している。しかし、個々の石室をみると形態にはバリエーションがあり、光明寺1号墳を除いて、前述Ⅰ・Ⅱ類の石室の影響を随所に受けている。時期を明確にできる古墳は少ない。

一方、横穴群は大形の石室を有する古墳の周囲にある丘陵に集中している。大規模な横穴群としては、32支群からなる上塩冶横穴群や6支群からなる井ノ上横穴群が挙げられ、出雲地方の横穴密集地の一つとされる。各横穴の形態として最も多いのは妻入構造の四注式家形である。平入構造の分布する意宇平野と妻入の横穴が分布するこの地域は四注式家形横穴の分布する最も顕著な地域である。また、土に掘った横穴では組合せの家形石棺や石床を内蔵するものもある。時期はⅢ期終末からⅣ期初頭に限られ、古い段階の横穴は稀である。

次に、これらの古墳や横穴の被葬者を考えてみたい。

この地域を代表する古墳は大倉寺古墳と上塩冶薬山古墳である。ともに、巨石を使用した壮大な石室を築き、副葬品にも金銅製の豪華な品々を有した点などから、出雲平野の古墳群の中の双壁で被葬者は当時の出雲平野全域をも支配していた首長であったと思われる。当時、その勢力は意宇平野を中心に出雲東部に勢力をもっていた出雲臣らにも拮抗するものであろうか。彼らは6世紀から7世紀にかけて平野の開墾や治水等の事業が盛んになるなかで、九州をはじめ他地域と少なからず交渉をもちつづけながら台頭してきた新興首長と考えるとよいかもしれない。

また、出雲市馬木町から下志町にかけて分布する古墳なども、規模では前者に及ばないが、横穴や小規模な石室を有する古墳よりも石室・副葬品ははるかに卓越しており、この地域一帯に勢力をもっていた地域首長と考えられる。

これらの首長が如何なる氏を称していたかは知るよしもないが、古墳築造から100～200年後の733年に編纂された『出雲国風土記』に記載の神門郡の郡司およびその氏族と深い関係がある人々であろう。

横穴に葬られた人々は平野の氏族分布を記した「出雲国賑給歴名帳」(739年、「正倉院文書」)からすると有力農民とその家族であったと考えられ、前面に点在する古墳被葬者の傘下にいたのである。

2. 仏経山周辺地区

古代、神奈備山の一つとして神聖視した仏経山麓は律令時代には出雲郡に属し、河内・出雲・淡路・健部の各郷(現在の藤川郡斐川町一帯)が置かれていた。

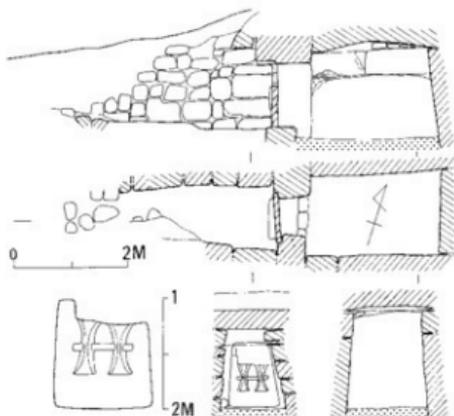


図 12 出西丸子古墳石室実測図（『斐川町史』より転載）

この仏経山の北麓は弥生時代以来、集落が営なまれ、平野の中では比較的安定した所であり、既に述べた様に軍原古墳や神庭岩舟山古墳もこの地域に存在する。後期に入ってから、仏経山から派生する尾根上に小規模な古墳が多く営なまれ、特に、阿宮、出西、神庭の三地区に集中している。現在、石室の様子が見えるものとしては高野古墳群、布子谷古墳、結古墳、貴船古墳、建部西古墳等が挙げられる。これらの石室は玄室のプランが狭長であり、各壁および天井等は1〜数枚の切石を使用しているところから、いわゆる石棺式石室の影響が強いものといえる。

さて、この地域を代表する古墳である出西丸子古墳の概略を述べると、この古墳は仏経山の西麓に位置する径10mほどの円墳である。

玄室の平面は出雲西部に多い奥行き長いものであるが、玄室の各壁は1〜数枚の切石で構成され加えて、玄門には閉塞石を嵌込むくり込みが設けられている。これは石棺式石室とまったく同手法である。羨道部は小さい切石をレンガ状に積み重ねており、神戸川流域の石室と類似している。この様に、この石室は技法・構造上から東西出雲の折衷的といえる。また、玄室の閉塞石には穴道湖周囲に幾つかみられる門状の陽刻が施されている。

この種の陽刻は来神石の産地周辺に集中しており、石材加工に携った集団を想定される好資料である。時期は出土した子持壺等からⅣ期に属するといわれる。

さて、仏経山山麓の古墳の被葬者はどのような人々であったろうか。いうまでもなく、この地帯は出雲郡の主要部で、出西一帯は郡家の置かれた出雲郡に比定でき、阿宮は河内郡に、神庭は健甕郡に当たる。とすれば、神門郡同様に郡司およびそれに匹敵する勢力を有した人々であったと考えてもよからう。

次に、横穴についてみると、この多くは仏経山山麓に分布しているが、中でも多いのは直江から出西にか

けての地域である。形態としては四注式家形が多いけれども調査例がほとんど無く、詳細は不明である。

北山南麓地区

北山西南麓一帯は、律令時代における出雲郡の杵築郷、伊努郷に属し、現在の蔵川郡大社町と出雲市高浜地区に当る。

この一帯では弥生時代以降、人々は古砂丘や小規模な扇状地に住み、周囲の水田で稲作を行っていたと考えられる。しかし、南側一面は神門水海と西流する斐伊川に阻れ、一方北側は断層山脈の北山が迫り、耕地も乏しく生産力は低かったと思われる。

古墳、横穴はごく僅かしか知られていないが、現在、確認されている古墳としては、内部主体が箱形石棺といわれる高天原古墳、西組古墳群、鎌代古墳があり、横穴としては矢尾横穴群などがある。

この地区は奈良時代に入っても生産力は大きくは変らなかつたと考えられる、「甌略歴名帳」に載る出雲郡杵築郷因佐里の戸主が臣・首の姓をもたなく総て部姓である点は、この地区の古墳の分布のあり方とよく符合する。

4. 神西湖周辺地区

律令時代の神門郡滑狭郷に属し、現在の出雲市知井宮町、東神西町、西神西町、神門町および蔵川郡湖陵町がこの地に当る。古代から中世にかけてこの地域の平地一帯は神門水海が占めていたため、耕地は山間の谷水田が中心であった。

横穴式石室を有する古墳は倉道古墳、産の岩古墳など数基しか存在せず、他はすべて横穴である。横穴は知井宮町から湖陵町の全域に分布するが、とりわけ知井宮町と神門町とにまたがる低丘陵には多く分布する。現在、福知寺横穴群をはじめ10数支群が知られている。穴の形態はほとんどがカマゴコ形に属し、壁には掘削工具の痕が明瞭に残っている。稀に四注式家形の横穴や内に組合せの家形石棺、石床を有する横穴がみうけられる。時期はⅢ期末からⅣ期初頭に限られている。

なお、横穴の分布上、この神西湖周辺は神戸川下流域の四注式家形と大田市周辺の平天井系の横穴に狭まれており、独特の形態を示す地域といえる。

以上みたように、出雲平野に存在する後期古墳は出雲東部の出雲臣らに匹敵する首長墓から遺物をほとんど有しない横穴まで多種にわたって認められ、かつ重層的に構成されている点がその特徴といえる。

また、河川や湖によって区分された単位地区においては自己完結の秩序が存在したことが窺われる。これらの古墳はおおよそ6世紀後半から7世紀初頭にかけての築造であり、奈良時代の文献とも符合することから、律令体制成立前夜の様相をよく示しているものといえよう。(西尾克己)

註① 山本清「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』、1971)

律令制時代

1. 地理的環境——風土記にみる出雲西部地方——

出雲国は北の鳥根半島と南の中国山地との間に発達しつつある沖積地とによって構成されている。しかし、今日とくらべてみると沖積は進まず、今の水田地帯が池や沼だったりして島状になっている所も少なくなかった。現在、宍道湖西岸地方は斐伊川による沖積が進み、豊かな水田地帯となっているが、奈良時代には今の斐川町平坦部から早田市平坦部にかけての広い部分が、「入海」すなわち宍道湖の一部であった。『出雲国風土記』^①は土負池・須々比池や、西門江・大方江のことを記し、低湿地の様相を紹介している。樞縫郡（今の早田市方面）の山間から流れ出る佐青川（今の鹿園寺川）・多久川・都字川（今の岡田川）・宇加川（今の宇賀川）は、この入海に注いでいた。入海（宍道湖）の生物としては、春にはナヨシ・スズキ・チニ・エビなど大小の魚類、秋にはグビ（白鳥）・カリケリ・カモなどの鳥類がみられた。

出雲平野のナイル川ともいえる斐伊川は出雲地方の発展に大きな役割をはたしたが、『風土記』ではこの川のことを出雲大川とよんでいる。中国山地の奥にある鳥上山から流れ出て、仁多郡・大原郡・出雲郡の山間部を通り、平野に出るあたりで北に向かい、さらに西にまがって神門水海に注いでいた。斐伊川の下流地帯は土地がよく肥え、穀類や桑・麻などの育ちもよく、農民にとって住みよい土地であった。川にはアユ・サケ・マス・イグイなどが、群れをなして泳いでいるのがみられた。「五つの郡の百姓、河に便りて研めり」といわれるほど、出雲地方のびとにゆかりのある川であった。初春から晩春までの間には、材木を調べる船が川を上り下りしていた。中国山地で切りとられた木は、雪だけ水を利用して筏に組んで流されたとみられる。

神門川は飯石郡の琴引山より北に向かって流れ、飯石郡・神門郡の諸郷を経て平原部に出て、西にまがり水海に注いでいた。川にはアユ・サケ・マス・イグイがみられる。神門水海は、周囲35里74歩（18.84 km）あり、海中にナヨシ・クロダイ・スズキ・フナ・カキがみられる。この入海と大海（日本海）との間には、八東水臣津野命の国引き伝承で引き綱にたとえられる「閻の長浜」があった。

神門水海から大海に通ずる水路の長さは、3里（1.6 km）、幅120歩（214 m）あり、この水路が出雲・神門二郡の境になっていた。

神門郡の南方、田俣山（今の王院山、553.9 m）・長柄山（今の弓掛山、291.2 m）・吉栗山（今の久利原山、340 m）には、榎・杉が生え、吉栗山は「所造天下大神の宮材造る山」とされている。宇比多伎山・樺積山・陸山・稲山・神山・冠山は、出雲市朝川周辺の山々であるが、大神と関係した伝承をもっていた。

出雲平野周辺の山野にみられる草木禽獣について、『風土記』所載のものを列記すると、つぎの通りである。

られる。

古代山陰の幹線である正西道は、意宇郡にあった出雲国庁・黒田駅から、宍道駅を経て出雲郡家
にいたり、郡の西端である出雲河（斐伊川）に向かった。出雲河は『風土記』に「渡五[一]步（8.9m）、
渡船一つあり」とみえるが、この川を渡って神門郡家・狹狹駅にいたる。さらに西方の神門川（神戸
川）は『風土記』に「渡二十五步（4.4.5m）、渡船一つあり」と記されているが、ここを渡って石
見国境へ向かうことになる。

2. 地域社会の構成

大化改新の詔では、国の下に郡がわかれたというが、当時の金石文には「郡」ではなくて「評」と
記されている。最近発掘された藤原宮跡出土の木簡からも、大宝律令施行の前は「○○国○○評」で
あったことがわかるが、出雲国関係では「出雲評支豆支里大賢煮魚須々支」といったものが注目され
る。^③ 出雲国庁跡出土の木簡にも「大原評^二部^一□□」と判読されるものがある。^④ 藤原宮跡出土
木簡の中には、「出雲国嶋根郡副良里伊加大賢廿斤」と記すものがあるが、大宝律令の成立・施行によ
って郡里制へ移行したとみられる。

律令体制確立のためには、新しい土地制度と税制の形成により、経済的基盤を堅固にすることが必
要であった。条里制の痕跡は山陰各地で検出されているが、僻遠の地にいたるまで班田制の実施がは
かられた様子もうかがわれる。出雲平野周辺では、斐川町の直江、神水地区、出雲市の川路（荻村）
地区、平州市の口字賀地区などに、条里制が実施されていたことを、検地帳や明治の地籍図によって
追跡することができる。^⑤ しかし、斐伊川・神戸川の氾らんや、新しい時代の開発によって、かつ
ての条里制遺構は消滅してしまっている。

郡里制の「里」を「郷」と改めたのは、霊龜元年（715）のことである。郷は50戸をもって構
成されており、郷の中には普通3つの里があった。また、郷の端下10戸以上を余戸としている。『出
雲国風土記』勘造とされる天平5年（733）当時、出雲国には9郡62郷（里179）、余戸4、
駅6、神戸7（里11）があった。このうち、出雲平野周辺の楯縫・出雲・神門の3郡について、
その構成をあげてみよう。また、天平11年（739）『出雲国大税賑給歴名帳』（正倉院文書）に
みられる里を照合し、『和名抄』にのせる平安時代の状況についてもふれておきたい。

〔楯縫郡〕 郷4（里12）、余戸1、神戸1。

佐香郷、楯縫郷（「郡家に属けり」）、秋澤郷、酒田郷、余戸里、神戸里。

『和名抄』には、上記4郷だけとなっているから、2つの里は他郷に含まれることになったとみ
られる。

〔出雲郡〕 郷8（里23）、神戸1（里2）。

健部郷、深治郷（深江里・工田里・犬上里）、河内郷（伊苺里、大麻里）、出雲郷（「郡家に属けり」）、朝
斐里、伊知里、杵築郷（因佐里）、伊努郷、美談郷、宇賀郷、神戸郷。

表3 出雲西部の郡司一覧

	大 領	少 領	主 政	主 帳
備 前 郡	出 雲 臣	高 善 史		物 部 臣
出 雲 郡	日 置 部 臣	大 臣	部 臣	若 俊 部 臣
神 門 郡	神 門 臣	(擬) 刑 部 臣	吉 備 部 臣	刑 部 臣

出雲平野周辺地域の社会構成については、天平11年の「出雲国大税賦給歴名帳」（以下「賦給帳」と略記する）によって、ある程度追跡することができる。戸籍のように1郷内の全戸主と全戸口名を知るというわけにはいかないが、大体の傾向はうかがえる。「賦給帳」記載のものを、郡単位で臣・部臣姓をまとめてみると、出雲郡では天平5年（733）のころ大領を出している日置部臣が圧倒的に多い。神門郡の方は、「風土記」に「古より今に至るまで、常に此処に居めり」と記され、朝山郷を本貫とするとみられる神門臣が、絶対多数を占め、ここから大領が選ばれている。

出雲郡出雲郷についてみると、「出雲」を称する氏が少なく、種々の氏が少しずつ混在する状態である。氾濫原である出雲平野の開墾にあたって、労働力を吸収していったため、氏の構成が複雑化したものととらわれている。^① 神門郡方面の郷についても同じことがいわれる。一方、出雲郡河内郷は斐伊川沿岸にある郷である「賦給帳」にのこる戸主だけ取りあげてみると38戸のうち28戸までが日置部関係で、他のものはきわめて少数である。これは単純な氏の構成であり、同族部落の性質をもっているかにみえるが、戸口を入れて統計をとると、種々異なる氏のもの混じっていることが知られる。^② 天平6年の「出雲国計会帳」（『正倉院文書』）によると、河内郷大麻里の日置牛が乙麻呂という奴をもっているが、このような人も含まれていることも注意しておきたい。

「賦給帳」において、出雲・神門2郡関係約300戸主のうち、部のつくものが130戸、部に姓を加えたものをあわせると、230戸におよぶ。そして、「部臣一部首一部」という身分構成（例えば建部臣一建部首一建部）がひろく認められる。「風土記」をみると、出雲・神門2郡をはじめ、意宇郡をのぞく郡司にも部臣姓のものが多い。このような「部臣一部首一部」という形は、大和政権が直接支配するにいたって作り出された体制とみてよからう。
(池田漢雄)

① 註① 加藤義成『校註出雲国風土記』参照（以下『出雲国風土記』の引用はこれによる）

② 奈良国立文化財研究所『藤原宮木簡』1

③ 松江市教育委員会『出雲国庁跡発掘調査概報』

④ 『斐伊川町史』、『平田市誌』。

⑤ 石母田正「天平十一年出雲国大税賦給歴名帳について」（『歴史学研究』8巻6、8、11号）

⑥ 藤間生大「吉備と出雲」（『私たちの考古学』4巻2号）

中 世

古代において出雲国内で相当有力な勢力のあった神戸川、斐伊川下流域である出雲西部一帯は、神門郡と出雲郡と呼ばれていた。そして、中世には所属する郷の移動がいくらかあったが、引き続き有力な豪族たちの居住地であった。

神門郡には、文永8年(1271)11月『千家文書』「出雲国杵築大社御三月会相撲舞役結番事」によれば、朝山郷83丁5反小、朝山左衛門尉跡、塩冶郷(旧日置郷など)101丁6反300歩信濃前司(佐々木泰清)吉志郷28丁6反半(同人)とある。この時、佐々木泰清は富田庄99丁4反60歩、美保郷34丁1反180歩、平浜別宮27丁2反半をも領地としている。出雲郡には杵築大社領12郷七浦などがあった。

出雲守護信濃前司佐々木泰清の子頼泰は、塩冶に住し、大廻城を築いて塩冶氏と称した。およそ13世紀の後半ごろである。

古代、出雲国の政治の中心は、国庁が置かれた現在の松江市大草町であったが、やがて中世には現在の能義郡広瀬町富田に移った。しかし、佐々木頼泰の時から、しばらく出雲平野の要衝塩冶に出雲国守護所が設置され、政治の中心としての地位を占めたようである。出雲国守護塩冶頼泰、同貞清、同高貞の三代がそれで、勢威をふるった。ことに、高貞は隠岐に配流された後醍醐天皇を輔けて京に上り、中央政治上に重きをなした。しかし、のち高師直と抗争して敗れ、自害した。

系図にみえる佐々木一族は塩冶氏のほか、野木、美談、富田、山佐、富士名、吉志、三木など22家で、出雲国内一門に大きな勢力を得ていた一族である。

高貞ののち、出雲守護職は山名時氏の手になるが、まもなく佐々木(京極)高氏に移る。しかし、高氏(道隆)は出雲に下向せず、在地土豪の吉田秀仲を守護代にして、領国支配をまかせた。秀仲は国人層を支配することが十分でなく、となりの伯耆国守護山名時氏に近づく国人層がかなりいたといわれる。

南北朝時代、出雲の守護職は京極、山名二氏によって日まぐるしく変わったが、明徳の乱後、道隆の孫京極高詮が、出雲・隠岐の守護に補任された。明徳3年(1392)のことである。この時、守護代として富田城に入ったのは隠岐五郎左衛門であったという(「明徳記」)。これ以後応仁の乱までの70年間は京極支配となる。そして、高詮は甥の尼子持久を守護代とした。持久は、彼の子清定とともに出雲の有力国人である神西三河守、三沢村馬守、牛尾神五郎などと被官関係をもった。

応仁元年(1467)、応仁の乱が起ると出雲の国人の中にも上洛して戦いに参加するものもあった。出雲国内は守護代尼子方と山名氏につく反尼子国人層との間で戦いが続いた。清定をついで経久は、守護支配に反抗した。このため経久は、文明16年(1484)守護代を追放される。追放令の下知に応じたのは、出雲の中・西部に勢力をもっていた朝山、塩冶、吉志氏らの国人たちであった。

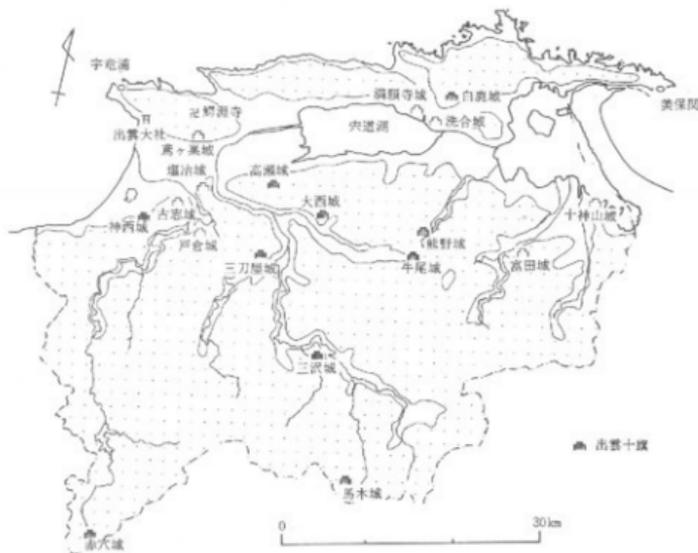


図14 出雲国の主要な山城

経久追放後、堀治掃部が富田に入った。しかし、まもなく文明18年(1486)正月、経久は富田城を奪還する。そして、仁多の三沢氏を討ち、出雲中・西部に拠点をもつ、朝山、堀治、古志、赤穴氏らを服属させ、出雲、隠岐、伯耆、備後、石見等を領有する戦国大名となった。

順調にみえた経久の領国経営も天文元年(1532)、経久の三男興久の乱や隠岐の内紛等によって、安芸、備後の尼子支配下の諸領主層が、尼子から離れていった。天文10年(1541)安芸郡山で尼子晴久軍が敗退したことによって尼子支配の衰退は決定的ともなった。晴久敗退によって、三沢、三刀屋、穴道、古志など出雲の国人たちの中には大内義隆に味方するものが出た。

勢いに乗じて、天文12年(1543)大内軍は広瀬の京羅木山に本陣を設け、富田城攻撃を試みたが成功せず退却した。退却途中、大内軍の将小早川正平は平田市美談で戦死した。この大内軍の富田遠征の失敗は、天文20年(1551)大内滅亡となり、中間地方は毛利と尼子の勢力争いとなる。天文23年(1554)新宮党事件、石見銀山争奪戦の敗戦(安西軍策によれば浅山氏ら参戦)、永禄3年(1560)晴久の急死などの事態によって、毛利は山陽から進出し石見をおさめた。さらに、永禄5年(1562)毛利元就は赤穴越えに大軍勢を送り、奥出雲の諸城を攻略した。そして毛利氏は、平田城、高瀬城攻撃の拠点として、出雲市林木に高ヶ鼻城を築城している。そのうえ、元就は尼子

表4 出雲中世小史

年 号	記 事
寿永3 (1184)	源平一谷合戦に出雲の塩冶大夫 多久七郎、朝山記次ら平家方として参戦。
弘安ごろ (1278)	佐々木義清の孫頼泰、塩冶に移城し塩冶氏と称す。以後貞清、高貞の3代が
(1286)	栄える。
建武1 (1334)	塩冶高貞ら後醍醐天皇を輔けて建武新政に加わる。
興国2 (1341)	高貞、高師直と対立し、宍道で自害。山名時氏、出雲守護職となる。
興国4 (1343)	佐々木高氏(道誉)、出雲隠岐の守護 秀仲を守護代とする。
正平7 (1351)	足利直冬の軍、出雲に攻め入り、諸城を降す。
明德2 (1391)	明徳の乱、出雲守護職山名満幸追放され、京極高経にかわる。
応永年間 (1394)	尼子持久、守護代。富田に入城。以後清定、経久とつぐ。
(1428)	
応仁1 (1467)	応仁の乱おこる。
文明16 (1484)	経久追放。塩冶掃部介、守護代として富田城に入る。
文明18 (1486)	経久、塩冶掃部介をたおし戦国大名として入城。以後政久、晴久、義久とつぐ。
天文1 (1532)	塩冶興久の乱
天文9 (1540)	晴久、安芸郡山城の毛利元就を攻撃。(古志、朝山氏ら参戦。)
天文11 (1542)	大内義隆石見に進出し、出雲国境で尼子と激戦して敗れる。
天文12 (1543)	大内義隆軍、富田城をせめるが晴久撃退。
永祿5 (1562)	毛利軍が出雲進攻。
永祿8 (1565)	毛利元就、富田城総攻撃。
永祿9 (1566)	富田開城、尼子義久ら毛利に降る。
永祿12 (1569)	山中鹿介、尼子勝久を奉じ富田奪回戦(神西元通、尼子に帰参)するも敗退。
元亀2 (1571)	斐川 高瀬城落城
天正6 (1578)	播磨 上月城落城、尼子滅ぶ。神西元通、切腹。 出雲国はしばらく毛利氏の支配となる。

氏を討つため、吉田郡山城を築ち、松江市の北岸に洗合城あらがわを築き、富田攻めの拠点とした。永祿6年(1563)白鹿城を落とし、永祿8年(1565)4月には星上山を本陣とし、富田城総攻撃を開始し兵糧攻めを行った。このため、兵糧つきた尼子義久は永祿9年(1566)11月富田城を開城し、毛利に降った。経久が富田に入城した文明18年(1486)からは81年目である。

やがて、尼子方は勝久を奉じて奪回戦を始める。永禄12年(1569)、隠岐から島根半島に上陸し東部の志山を占領し、さらに松江の新山城を落して、ここに本陣を布いた。これをみた出雲国内の諸将たちの中には尼子に降るものが相次いだ。神西元通や斐川の高瀬城に本拠を置いていた米原綱寛もそのなかに含まれていた。

この動きに対して、毛利は永禄13年(1570)富田城に居った天野隆重援助のため、出雲に毛利輝元を大将とする13000余の軍勢と兎玉就英を将とする200艘の水軍を向寄せた。元亀元年(1570)1月末三刀屋の多久和城を攻撃し、2月中旬広瀬の布部で大合戦を展開し、4、5月頃には瀬川の須佐がおちた。7、8月には斐川の高瀬城が毛利の大軍によって攻撃された。翌元亀2年(1571)3月高瀬城が陥落し、毛利が尼子を圧倒した。

このころ、出雲西部の神西城、古志城は毛利方に属し、毛利方の吉川元春が一時退城のときの居城としてもいた。

天正6年(1578)毛利軍に攻められ、播磨国上月城で勝久、神西元通らは自害し、護送途中にあった鹿介は備中甲部川阿井渡で殺害され尼子は完全に滅ぶ。

尼子滅亡後、毛利氏がしばらく出雲国を支配した。『出雲権古知今図説』の「毛利陸奥守元就尼子家御追伐以後御家人卅六城江宛行之節御知行併番人被付置書付」によると、富田城 三万三千石 吉川・佐賀、塩治城 六千石 長埜・南波、古志城 三千七百石 岩埜・多賀、林木城 五千石 若宮・左近上之郷城 三千石 重原・筑後、神西城 五千八百石 鞍智・衛之介などみえる。

やがて、関ヶ原の戦いで西軍に味方した毛利は敗れ、出雲から移封される。

中世において、出雲西部地域で無視できないのは、杵築大社(出雲大社)と勢溜寺である。歴代の守護、戦国大名たちが土地や修理料を寄進し、社寺領を安堵したため、大きな勢力を占めていた。(勝部昭)



半分城跡西1郭の発掘風景(1978年)

表5 出雲平野における城跡一覧

番号	名 所	住 所	概 要	文 献
1	大井谷城	出雲市上堀治町 菅沢	郭、堀切、石列、柱穴が残る。一部発掘調査。	『大井谷城跡・平谷城跡発掘調査報告書』
2	半 分 城	” ” 半分	郭、土塁、堀切、帯郭が残る。一部発掘調査。	”
3	向 山 城	” ” 向山	付近に「大剣」の地名があるところにより、堀治高貞の大剣城ではないかといわれる。郭、土塁、井が残る。	『季刊文化財』24
4	唐 壘 城	” 朝日町	土塁、堀切が認められる。南側に大坊寺がある。	『雲陽古城跡』 『雲陽誌』
5	姉 山 城	” ” 姉山	郭、土塙、土塁残る。	”
6	上之郷城	” 上島町上ヶ	上之郷兵庫介の居城といわれる。	『藤川郡史』
7	栗 栖 城	” 古志町新宮	古志三城の一つ。中腹に加奈子神社がある。『三刀屋文書』でいう古志高陣か。郭、堀切残る。	『出雲市誌』 『藤川郡史』
8	榎 森 城	” ”	古志三城の一つというが、栗栖城の別称か。	『出雲市誌』
9	浄土寺山城	” 下古志町妙蓮寺	古志三城の一つ。古志氏に属する平山城である。郭、井戸残る。	『出雲市の文化財』2 『藤川郡名勝地』
10	神 西 城	” 栗神西町	尼子氏が神西三郎左衛門を出雲十旗の将の1人としてこの城に配した。郭が残る。	『出雲市の文化財』2 『神西村史』
11	戸 倉 城	” 神崎町戸倉	尼子氏が明季をはかる戦いにおいて使用したといわれる。また城主は古志氏であったともいわれる。	『出雲市の文化財』2 『養原村史』
12	高ヶ巣城	” 西林木町高ヶ巣山	毛利元就によって尼子氏攻略の拠点として築城されたといわれる。	『出雲市の文化財』2 『出雲市誌』 『戦国郡土史談』
13	平家丸城	” 今市町雲ノ沢	三つの城が残る。	『出雲市誌』 『出雲今市誌』
14	高 城	” 知井宮町保知石	古志氏の支族保知石氏の居城という。山頂に郭、石碑が残る。	『地六村史』
15	狼 山 城	鏡川郡斐川町西江	毛利輝元が高瀬城を攻略するために築いた城という。	
16	城 平 山 城	” ” 阿宮	葛西肥前守の居城という。中腹に光明寺がある。郭が残る。	『戦国郡土史談』
17	立 栗 山 城	” ”	伊勢甲斐守の居城という。	
18	高 瀬 城	” ” 神庭	米原氏の居城であり、出雲十旗の一つ。郭、井戸が残る。	『戦史』、『藤川郡史』 『三刀屋城址』 『藤川郡名勝地』
19	蛇 山 城	” ” 上堀場	松井彌正の居城という。	『島根県伝説集』
20	高 丸 城	” 湖陵町東三部	小笠原左衛門長治の居城という。郭、古塚あり。	『湖陵町誌』
21	日 出 城	” ” 西三部	郭、古墓、井戸残る。	”
22	要害山城	” ” 三部	郭と石垣あり。	”

(ゴジックの城跡は本文に掲載されている。)

第3章 遺跡各説

菱根遺跡

菟川郡大社町大字菱根ヤノンバの鎌田順三氏所有畑地およびその周囲が遺跡地であり、出雲大社から1.3km北山山麓を東に行ったところにある。遺跡の比高は水田面より0.5～2m高い山裾の地である。

昭和28年、鎌田氏宅で井戸掘を行った際に大社考古学会の大谷從二、大國一雄氏等が着目し、昭和29年には同志社大学の出雲古文化調査団によって調査が行われ、酒詰伸男、森浩、石部正志氏等が発掘調査にたずさわった。

この際、調査された区域は井戸から西へ長さ8m、幅1.5mのAトレンチと更に西へ8m延長したBトレンチとが設けられたが地表下約3mまで掘り下げている。その結果、層位は第1層が表土で厚さ40～50cmをはかる。その下の第2層は90～110cmの厚さで耕作のため礫石を除き土入れをしたりしている。この層が二つに分れる。第3層も上部と下部に分かれるが、第3層aは青灰色の粘土と砂利層でしばしば大形の礫がある。厚さは20～40cmある。第3層bはやや黒味を帯びた砂層で厚さは12～36cmで倒木を含んでいる。第4層は泥炭と砂の混土層で遺物を含み、厚さは20～50cmあり、その下は青色粘土と薄い荒砂層を介して第5層となる。この層は純粹の砂利層でバラスの大きさは下部ほど大きくなる。

この調査によって出土した遺物は縄文式土器片（Aトレンチ106片、Bトレンチ135片）、石器（黒曜石製石鏃5、サヌカイト製石鏃1、黒曜石製刃器1、同石錐1、同石匙1、安山岩製石匙1）、骨角器（鹿角製銜、骨針）、鳥獣類骨片（イノシシ、シカ、クジラ、タヌキ、ハクチョウ、カモ）、魚類（イシカメ、タイ、フグ類）、昆虫類（ミズアブ）植物性遺物（マテバシイ、アラカシ、カヤ、ウメ類、メダケ、アシ）などである。

図15の縄文式土器は、現在大社考古館に所蔵されているもので、いずれも縄文を施しており、中には内外面にこれを施すものもあって、胎土中に植物繊維を含む点が注目される。このような土器は昭和29年の調査時には中国地方には類例がなかったのであるが、その後中国山地の広島県帝釈寺倉洞穴遺跡で検出されている。その編年の位置づけは早期末頃という位置づけがなされているが、一部前期初頃にかかるものもあると考えられる。（東森市良）

参考文献

1. 酒詰伸男他「菱根ヤノンバ遺跡発掘報告」（同志社大学出雲古文化調査団「出雲古文化調査団報告書」1959）
2. 穴道正年「菱根ヤノンバ遺跡」（『島根県の縄文式土器集成』1, 1974）

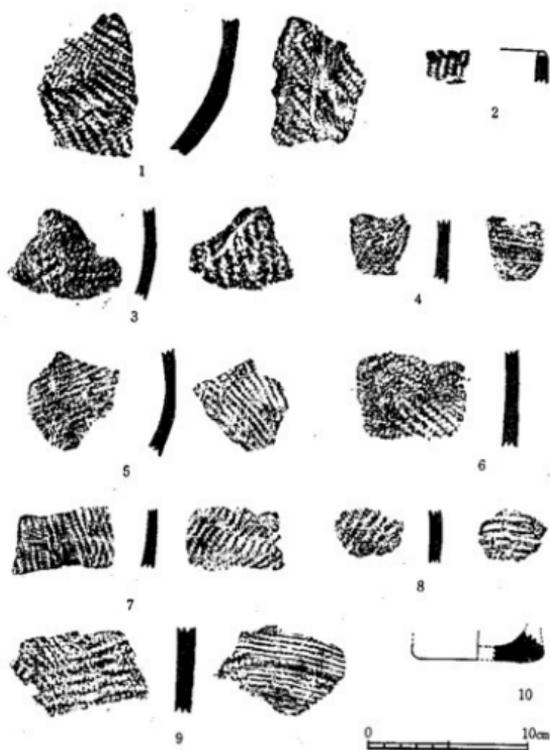


図15 菱根遺跡出土土器実測図

三反谷遺跡

山あいを通る神戸川が出雲平野へ注ぎ込む出雲市上塩冶町半分の三反谷入口部の標高15mの畑地に立地する。この遺跡は昭和54年12月に島根県教育委員会が実施した遺跡確認調査で判明したものであり、縄文時代から中世に及ぶ複合遺跡である。

出土品としては縄文式土器、土師器、須恵器、土師質土器等があり、縄文式土器はごく少量で破片が10数個認められるのみである。しかし、出雲平野においては縄文式土器の出土例は少なく、また南部では初見で貴重な資料といえる。

1は口縁部に縄文を施した肥厚部を有する破片で、いわゆる縁帯文土器である。時期は後期と推定される。2は甕の胴部であり、1と同一個体と考えられる。4～10は粗面無文土器であり、表面にはナデ調整による帯状の荒い凹凸が残る。後期以降の時期と思われる。これら土器の胎土には砂粒は少ない。また、焼成は良好であり、色調は黄褐色ないし茶褐色を呈する。(西尾克己)

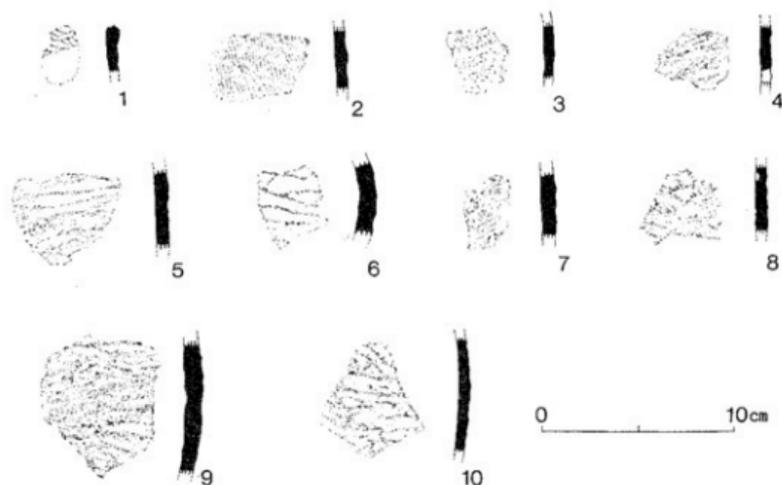


図16 三反谷遺跡出土土器実測図

矢野遺跡

出雲平野のほぼ中央部、出雲市矢野町に位置する弥生時代の貝塚を含む大規模な遺跡である。この地域は周囲の水田に比して1m内外高く、宅地に囲まれた畑地が多く、この遺跡もそのような畑地の一つで出雲市矢野町344番地一帯にあり、径20mばかりの範囲に貝類、土器片が散布している。

昭和22～23年頃山本清氏や大谷従二、大國一雄氏等が弥生式土器の散布を確認され、昭和28年8月上旬に山本清氏をはじめとする島根考古学会の人々によって将来相当規模の発掘に値するか否かを推定するための試掘調査が行われた。試掘は遺物散布が濃密で、かつ作物に支障のない場所を選び、幅1mのトレンチ3本を入れることを基幹として行われた。地表下30cmの表土を除くと貝層があり、その下に黄色を帯びた土層、更にその下が砂層となり、砂層の下部には礫が混じっている。この砂層は地表下約90cmから下にあり、多量の地下水が湧出する。また、貝層の厚さは均等ではないが、薄いところで15cm、厚いところで43cmに及ぶ。遺物は貝層、黄色土層上面に限られ、貝はしじみが主体で少量のはまぐり等の海水産のものも混じっている。第2トレンチは第1トレンチの南方約6.6mを隔てて平行に8mの長さで設けられた。表土の厚さ20～30cmでその下に遺物包含層があり、更にその下に砂礫層のあることは第1トレンチと同様であるが、包含層の状態がやや異なり、西半分は土が多く混じった貝層で、東にはほとんど貝はなく、黄色土中に土器その他の遺物を含んでいる。第3トレンチは、第1トレンチの東端から第2トレンチの西端にかけて設けられ、この間で土層がどのように変化するかを見ることを目標とした。表土は第1、第2と同様であるが西南にいくに

従って貝がまばらになる。

このように試験された地域は、およそ30cmの表土の下に20～40cmのあまり乱されていない遺物包含層のあることが明らかになった。出土遺物は層位の上で新旧の区別は認められず、自然遺物では貝類でやまとしじみが9割と主体を占め、その他に、イシガイ、オイタニシ、カワニナ、サルボウ、サトウガイ、マガキ、キハマグリ、ヒナガイ、イタヤガイ、チリメンボラ、サザエ、テングニシ、クロアワビ、イズモマイマイがあり、鹿骨の他に注目すべきものとしては人骨小片が3個、第2トレンチ東部から検出されている。人工遺物では石器（鉄斧形石斧、石鏃、黒曜石小片少量）、竹角器（尖頭器、牙製の半製品）のほか大量の土器がある。

土器はいずれも小片であるが、前期初頭から古式土師器におよび、量的には後期から古式土師器が多く、器種及び部分では中期後半からの変形土器の口縁部が多い。これらは石器類のわずかであることとも関連しているといっても良からう。

以上、昭和28年の試験の結果を報告書から抄出したが、遺物は出雲高校に保管され、昭和30年東森の手で島根大学に移されて現在にいたっている。東森は昭和33年このように前期、中期、後期、古式土師器にわたる遺跡の特徴をもとにこれらの土器をも山陰弥生式土器の1つの手がかりを得ることを目的とし、前期2期、中期2期、後期2期の6区分とした経緯もある。

その後、大谷從二氏等の手によって採集された土器を主とする遺物は多く、そのうちのかなりのものが、大社考古館に収蔵されている。これらの中には中期の典型的な高環土器の大形破片も含まれている。

昭和47年春には遺跡の東側隣接地が養豚用の糞尿処理場となり、かなりの面積が掘り起され、現場には大形の土器片や石器が散在していた。

このような状況下で、西尾ら地元有志が同年8月から翌年3月末で3回にわたって処理場予定地を発掘し、併せて以前に出土した遺物の採集を行った。このうち昭和48年1月に発掘した東北部分では数m四方のトレンチ内で弥生時代後期前半の土壌1基を検出した。この土壌は地表下約1mの深さに存在する黄褐色砂質土層に掘り込まれた方形のもので、深さは50cmを測る。しかし、発掘場所が限られたので、土壌の規模を知ることはできなかった。

この土壌内からは多量の弥生式土器と土器片を再利用した紡錘車1個、打製の石鏃1個および細身の碧玉製管玉2個が出土している。このうち副葬品と推定されるものには変形土器数個と管玉2個があり、土器は口縁部に凹縁を数条もち、ややくり上げが認めるものであり、肩部には刺突文や凹縁が施された後期前半の通例の甕である。管玉は同様のものが西側隣接した処理穴からも2個出土している。

島根県下において弥生時代後期前半の墳墓はほとんど知られていないので、この土壌はこの時期の墓制を知るうえで貴重な資料である。

なお、土壌付近からは貝はまったく採集されていない。貝塚はこの遺跡の南側から西側にかけての限られた場所に存在するものと推定され、今後の本格的な遺構確認調査が望まれる。

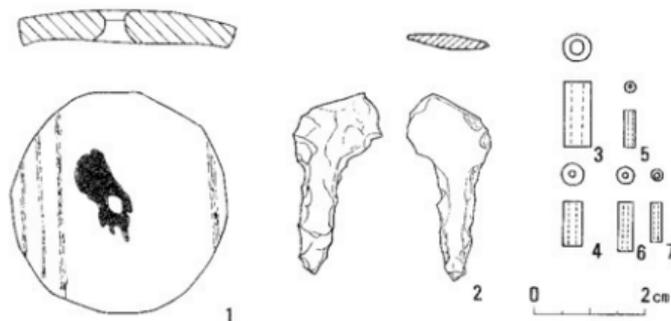


図17 矢野遺跡出土遺物実測図 (1 紡種車, 2 石槌, 3~7 管玉)

図18は昭和23年島根考古学会の山本清氏等によって調査された際に検出されたものの一部を一括図示したものである。遺物は前期前半から古式土師器に及び、中でも中期後葉から後期前半の壺が多い。前期の壺は口縁に段をもつもので(図18: 1, 2)古式の部類に属し壺もそれに対応するもの(図18: 3)がある。壺(図18: 4)は前半か後半かは連断しかねるが形態からすると前期後半にもってくるべきかもしれない。この時期の壺是一片あるがこれは松江市春日、仁摩町坂瀬などのものに似て口縁がゆるく外反し頸部に沈線をめぐらすものである。なお、前期前半の壺形土師器の口縁から肩部にかけての薄片はかなりあり、ヘラ描きによる羽状文、弧文、櫛描きによる羽状文、肩部に段を有するものなどが特徴的である。中期初葉の土師器は壺形土師器片一箇、しかも胴部のそれであるが、5単位2回以上の櫛描で文様をつけている。中期中葉になると土器片の量も多くなるが、壺形土師器は、口縁端をひろげ朝顔形にひろがる口縁をもつもので、その部分に櫛描きによる波状文、斜格子文、弧文、ヘラによるきざみ、円形浮文、中には小孔をうがったものもあり派手にかざっている。図18はその一例であるが、これはそのうちでも後葉に近いものである。壺形土師器は大きく分けて二種あり、そのうちの一つは図18: 9の如く前葉のものが胴のふくれを増すものと、口唇をやや幅広く作りここに沈線をほどこすもの、更には頸部に指頭圧痕文帯をめぐらすものなど(図18: 10, 11)である。なお、この時期に無頸の壺形土師器が存在する。これは多少の変化はあるものの口縁端が水平かつ内傾して幅広く作られ、外面に突帯を有し、この部分にキザミ目や指頭圧痕文帯を入れるものである(図18: 5, 6, 7)。なお小形の壺形土師器(図18: 12)は中葉のそれをうけつぎつつも口縁端が幅広くなり、全体にハケ目をめぐらして丁寧な作りであるが、後葉に移行する要素を多分にもっている。

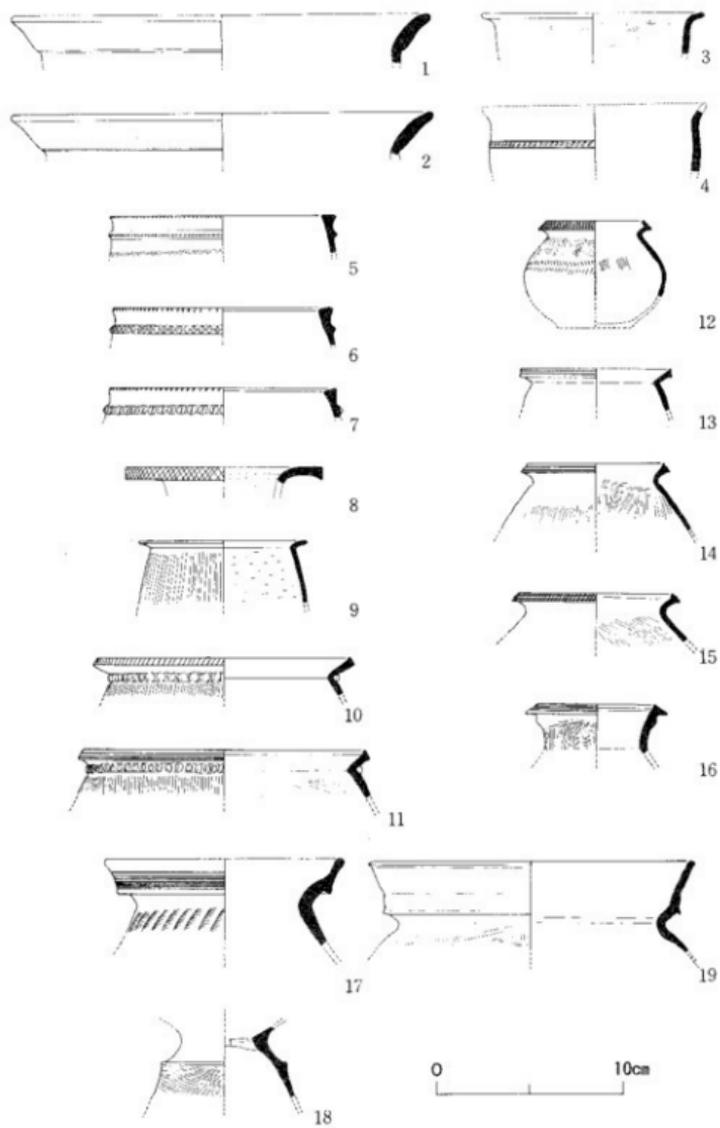


图18 矢野遺跡出土土器実測圖(1)

中期後葉の壺形土器は好例がないが、朝顔形に開く口縁をもつものの裝飾性がうすれ櫛描文がわずかに残る。甕形土器は例外なく口唇がひろがり(図18 13, 14, 15, 16)、胴の張りが大きくなるものが多い。この時期の甕形土器片の口縁部が量的には最も多い。なお、この時期の高環脚片もみられ、櫛による沈線をめぐらしている。

後期前半も量的には多くないが口縁がやや広がる壺形土器片があり、幅広くなった口唇に櫛による擬凹線様の施文をめぐらし、内面頸部以下はヘラによる削り放しである(図18 16)。甕形土器は口縁端の立ち上りが大きくなり直立するもの、内傾するものなどさまざまであるが、中期後葉のように単なるつまみ上げ程度でなくなる。内面頸部以下はいずれも削り放しである。後期後半の土器片はいずれも小片であるが壺形土器では直口壺の口縁がみられ、甕形土器では口唇が発達し複合口縁となる。

古式土師器の壺形土器片はみられないが、甕形土器(図18 8)では複合口縁が一般化しこの部分に櫛描沈線を入れ、肩部に櫛によるひっかき文を入れる。全体にしっかりしたつくりである。内面は頸部以下は削り放しである。器台は後期後半から現われるが、この時期には筒部が短くなる。外面、上台と脚台には櫛による沈線が入る。上台内面はヘラなどで丁寧につくられるが脚台内面はヘラによる削り放しである(図18 18)。この時期につづくものが甕と壺形土器を一つにしたような器形の(図18 19)で、文様はなく外面にはハケ目、内面は頸部以下ヘラによる削り放しである。

以上の結果から、弥生前期を矢野Ⅰ、Ⅱ式、中期を矢野Ⅲ、Ⅳ、Ⅴ式、後期を矢野Ⅵ、Ⅶ式、古式土師器を矢野Ⅷ、Ⅷ式とすることができる。

図19以下は矢野遺跡出土品のうち調査によって採取され、現在大社考古館に所蔵されているものを図示したものである。図19が中期、図20が後期、図21は古式土師器を含んでいる。

先ず図19をみると1、2は中期中葉の特徴をよくもっている壺形土器で、1は朝顔形に口縁が開き、櫛による施文と凹形浮文など典型的な矢野Ⅳ式である。ところが2は一見分銅型土製品を思わせるものがあり、文様も刺突文で突き抜けた穴を持つなどの特徴もあるが、断面よりするとやはり壺形土器の口縁と考えざるを得ない。また甕形土器は三種あり、その(1)は口縁端を水平につくってその下に突帯をもつものである。これは先述の発掘調査時におけるものと同じく矢野Ⅳ式であり、このような器形は本州西部ないし九州地方に求めることも可能であろう(3)。その(2)は前期乃至中期の土器の口縁がやや幅広く、胴が張るものである(4, 5, 6, 7)。この種の器形においては口唇に沈線を入れる場合が多い。その(3)は口唇に沈線を入れ頸部に指頭瓦痕文帯をめぐらすものもあり、しっかりした厚手のつくりである(9~13)。(14)は高環になるか低脚環になるか不明であるが、田畑遺跡の土器などからみれば高環の一つの形態とみるべきであろう。口唇は平らに作り外面にきざみ目を入れ内外面ともヘラなのである。高環のその(2)は類別を余りみないが、幅広くひさし状に縁がつく環部をもつものである。これは内外面ハラみがきで縁端のきざみ目はヘラによる。その(3)は矢野Ⅴ式に典型的なもので、他の遺跡でみると多聞院、瀬原都仁摩町坂灘、仁多郡横田町代山などにも数多くみられるもので

ある。低いがやや直立した口縁部とすなりとのびた脚部をもつ。これはヘラ描き沈線がかかれており回転しながら一条をなすものもある。環部は内外面ヘラなどで、脚部内面は削り放しである(16~22)。中には20の如く弧文と斜行文をめぐらすものもあるが、これはきわめてめづらしい例といえる。23~28は土器底部であるが、しっかりとした平底をもち、外に広がる28のごときは壺形土器の、ややすぼみ気味の27のごときは甕形土器の底部であろう。

図20は後期の土器をまとめたものである。壺形土器は三種に別けられ、その1は中期の伝統を引くもので内面頸部まではヘラなどで以下は削り放しである。文様も平行沈線文以外に顕著なものはない(29, 30)。その2は頸部が強く屈折して外反するもので手法は(1)と同様である。その3は口縁部が複合口縁をなし、余り発達せず長い頸部をもつもので、内面頸部以下は削り放しである。文様は口縁と肩部に特徴のある波状櫛描文がつく(32)。この期の壺形土器はつまみ上げが顕著でその部分に平行沈線文がつき、内面頸部以下はヘラ削りである(38~41)。後期後半の壺形土器は二種あり、その1は前半の様相をつづぐもの(32, 34)と、それに加えて口唇部がさらに拡大するもの(33)とがある。後者は大形品に多い。甕形土器(42~44)は口縁部が大きくなることと削る強弱が前者と比しての特徴である。次に高環の脚部であるが、これは文様がなくなり(45)、器台の脚台と思われる(46, 47)と同様の台部を持つものであろう。46と47とでは手法は同じであるが47の方が外面の作りにおいては丁寧で外面に沈線をめぐらしている。次に48であるが、これは出雲地方にはめづらしい台付の甕の底部であると思われる。内面ヘラ削りである。49は注口土器の注口部、50はミニチュア土器である。なお、土器ではないが51は磁石で、四面使用されており、鉄器との関係で注目される。

図21は古式土師器をまとめたものである。ここでは壺形土器はなく、両者を合わせたような甕形土器が出現する。52~58がそれで傾斜はやや異なるが、いずれも複合口縁で、外面口縁部に櫛描による沈線をめぐらしている。頸部内面以下はヘラによる削り放しである。それに続くものが、59の壺形土器でこれは器形の上では後期のそれをついでいるが、施文(櫛による羽状文)手法の点で土師器と考えざるを得ない。同時期の甕形土器は60で、これは前代の手法を受けつぎつつ無文化している点に着目したい。61, 62は更に新しく、すでに設けた矢野匠式をこえて完全に土師器となり、61は複合口縁を残しつつも小形丸底化しており、62は古墳時代後期の土器である。

(東森市良, 西尾克己)

参考文献

1. 池田満雄「矢野貝塚」, 「矢野貝塚出土品」(『出雲市の文化財』第1集, 1956)
2. 東森市良「破壊に瀕している低地性遺跡」(『季刊文化財』第20号, 1973)

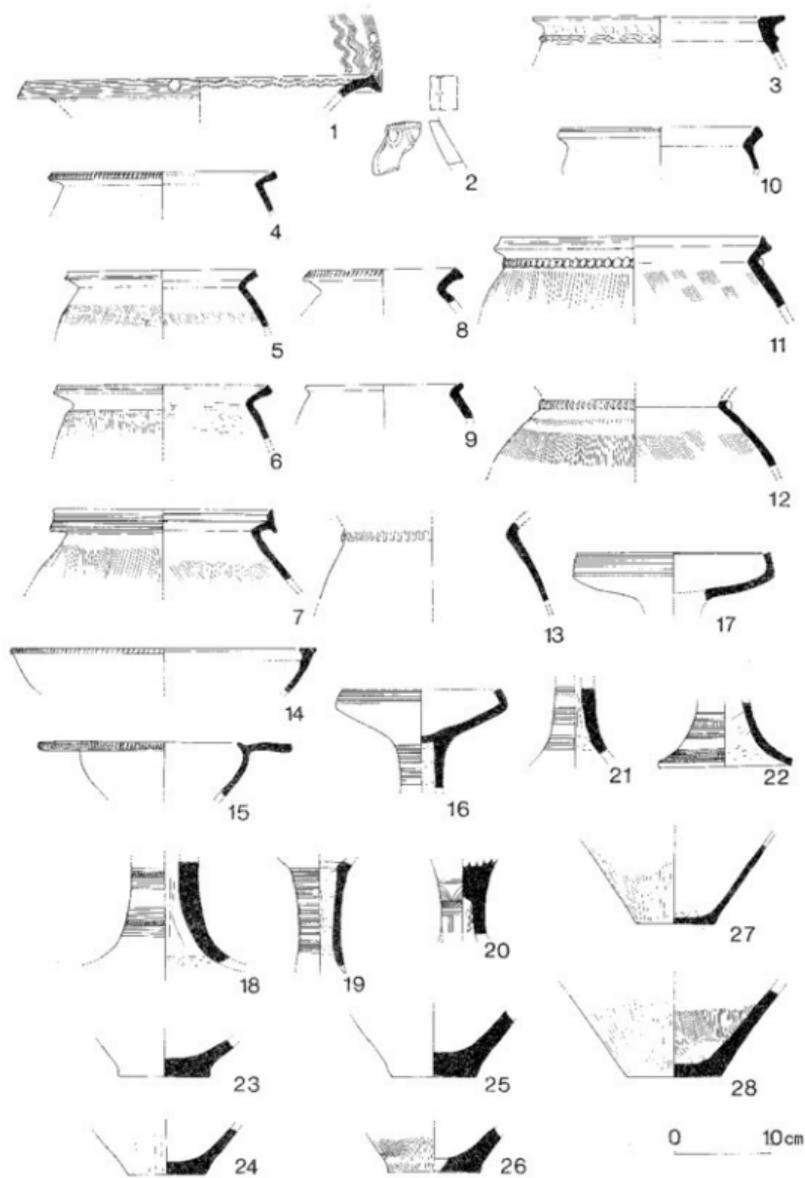


图19 矢野遺跡出土土器実測図(2)

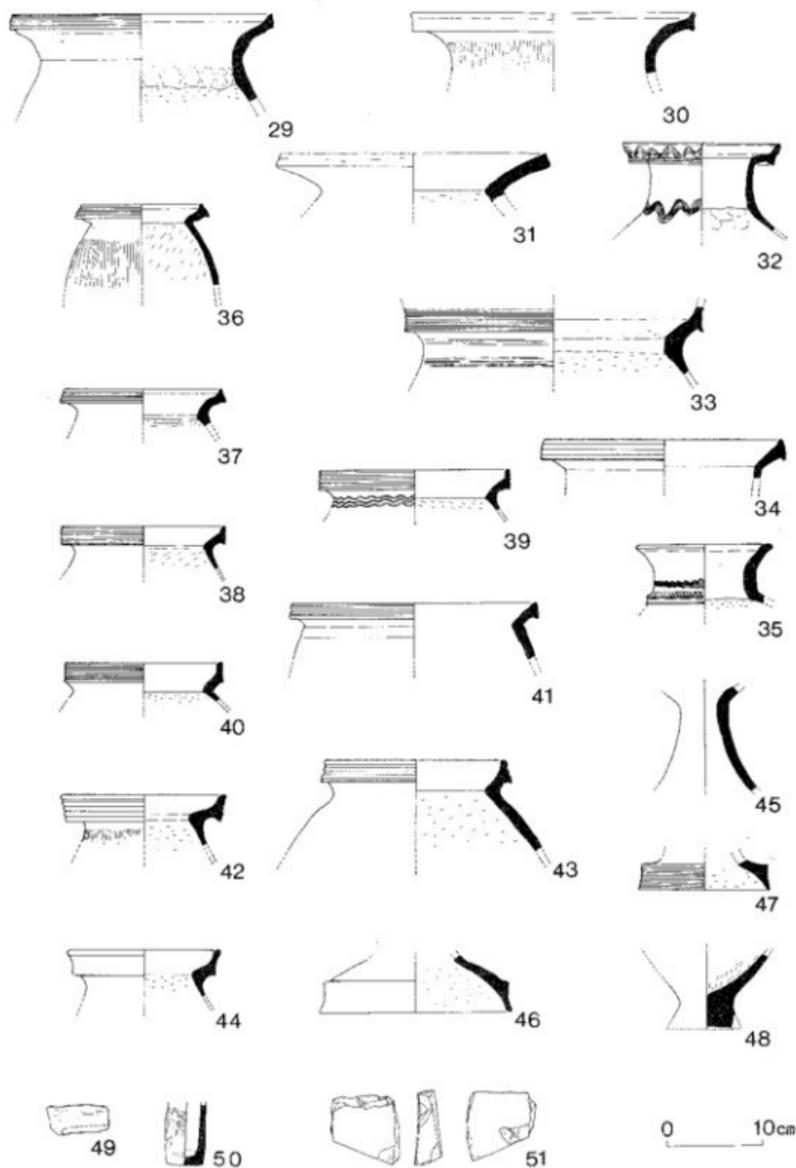


图20 矢野遺跡出土土器実測図(3)

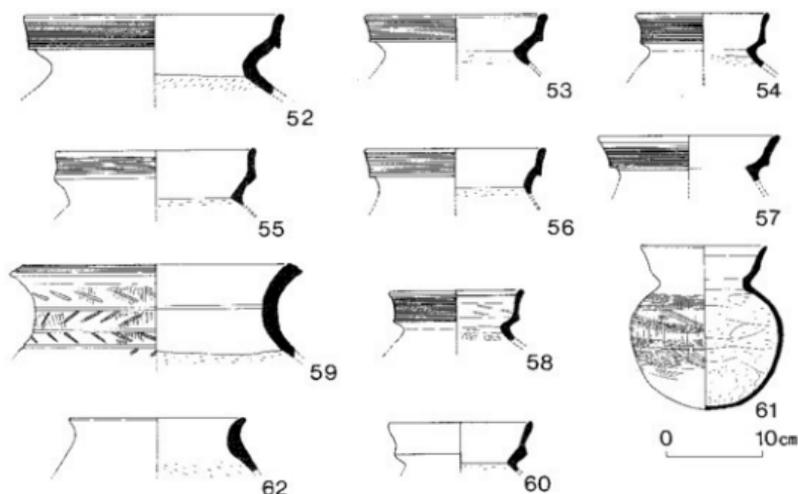


図21 矢野遺跡出土土器実測図(4)

天神遺跡

天神遺跡は出雲市天神町、堀治町に所在する。出雲平野の中央南西部に位置し、遺跡は広大な範囲で存在するが調査はわずかに鳥根医科大学官舎内および道路敷に限られた。かつて、その調査の必要性をのべた筆者が遺跡の広がり指摘したわずか数分の1にすぎない。この遺跡の調査の結果、弥生時代の土壌墓、溝状遺構から近世の建物遺構まで存在する。第1調査区では弥生時代の土壌14、溝4、古墳時代の土壌3、溝1をはじめとして古墳時代までの遺構が明らかとなった。

土壌はいずれも多寡の差はあるが弥生式土器の出土をみている。土壌は大きく分けて二群となる。一つは発掘区の中央北寄りには8基が複雑に重複し、他は東半分には6基の土壌が分散的に存在している。重複した墓塚は複雑に入り組んで前後関係を明らかにすることは困難である。

土壌は素掘りのものが主体を占めるが中には二段掘りのものも認められ、平面形は楕円形7点、隅丸長方形7例の2種に大別される。規模は長径1m、短径0.7mあまりのものから3×1.8mのものまで深さ10cm、深いもので34cmをはかる。一部には標名とみられる円礫をとまうものも認められた。

これら土壌はその状況から埋葬施設と判断され、かつ大半の土器が弥生中期中葉つまり矢野第Ⅳ式の時期に当たることから短期間にいとなまれたものと思われる。

次に、溝状遺溝についてであるが、弥生時代中期中葉と考えられるものである。

出土した遺物はいずれも中期中葉＝矢野第Ⅳ式に当たるものである。壺形土器には口縁部が朝顔型

に開く蓋は幅広くつくられた口唇の外表面及び内面に櫛掻きの斜格子文、波状文、刺突文等を入れたきわめて装飾性の強いものである。口縁部がゆるく外反して開く蓋及び無頸蓋は、口唇を肥厚させて上面を平坦につくり、その内外面に刻み目、頸部に指頭瓦痕文帯をめぐらしている。これら壺形土器は刷毛目文痕をわずかに残すものもみられるが、大半はヘラ磨きあるいはなでによって仕上げられている。甕形土器は口頸部がくの字状に屈折するものと逆L字状に屈折するものとがあり、肩部以下はいずれも胴部が口径と同じくらいまでふくらみ、次第に細くすばまって平底におわる形態をもっている。器面は口縁内外面共にヨコなで、外面肩部から胴部にかけて縦方向の刷毛目、胴下半分から底部はヘラ磨きを行うものが多い。高環形土器は口唇を平坦につくった内寄する環部をもち脚部を欠損しているが、短くひろく天神例のごときものと思われる。内外面ともに丁寧にヘラ磨きを行い作りは立派である。

(東森市良)

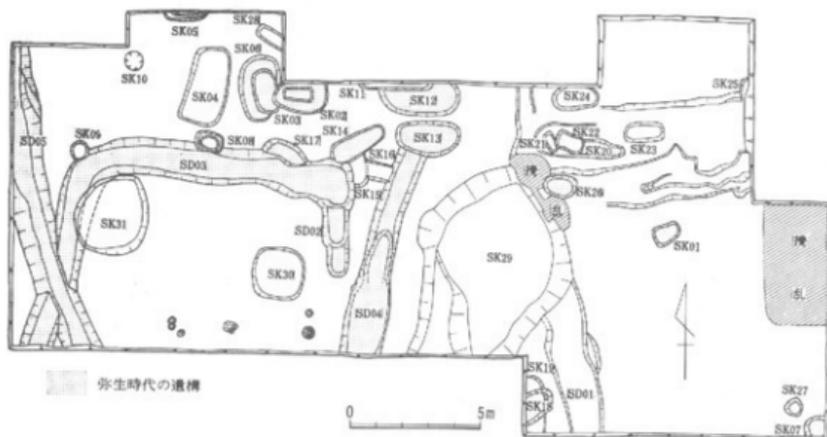


図22 天神遺跡遺構実測図（「天神遺跡」より転載）

参考文献

1. 『出雲市天神遺跡』（出雲市、1972）
2. 東森市良「破壊に傾いている低地性遺跡」（『季刊文化財』第20号、1973）
3. 『天神遺跡』（出雲市教育委員会、1977）
4. 『古代の出雲を考える』1—天神遺跡の諸問題—（出雲考古学研究会、1979）

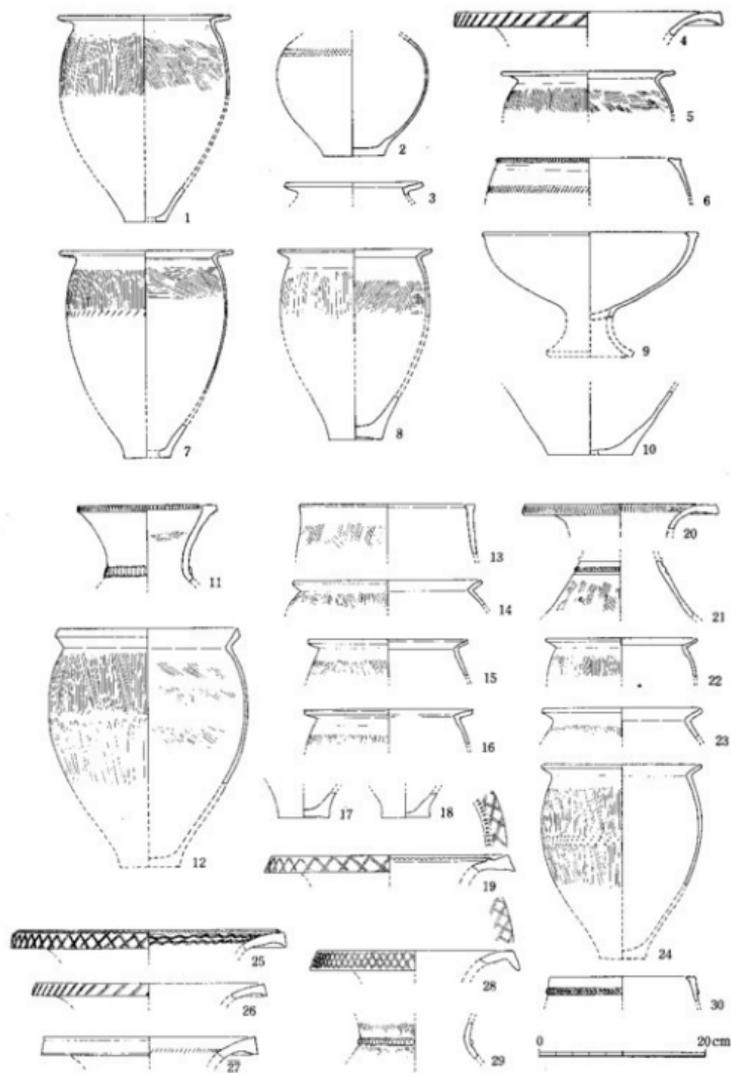


図23 天神遺跡(第1調査区)出土土器実測図 (『天神遺跡』より転載)

田畑遺跡

本遺跡は神戸川西岸の出雲市下古志町田畑に所在する弥生時代の遺物散布地であり、昭和47年10月の神西・神門地区田圃整理工事に伴って発見された。

遺跡は周辺の水田より1~2m高所い畑地に立地し、その範囲は東西100m、南北50mである。遺構としては南北方向で掘られた幅2mの水路の断面に大小5、6個の落ち込みが認められ、地表下5.0mに存在する灰褐色砂礫層に掘り込まれたものである。遺物の多くはこの落ち込みを中心に、表土下の黒色砂質土層より土出しているが、その落ち込みの性格については不明である。

本遺跡以外に、古志町から知井宮町にかけて分布する弥生時代の遺跡としては古志本郷遺跡、知井宮多聞院遺跡(貝塚を含む)が挙げられる。これらの遺跡は田畑遺跡同様、旧神戸川の自然堤防上に立地している。また、南方500mの放れ山からは蛤刃の石斧が出土している。

図24に示したものは田畑遺跡出土土器である。壺形土器(1~3、4)は口縁が朝顔形に開く土器で、特に、1は外反した内面にも波状文、格子文を施し、頸部は4の如き突帯を有するものである。内外面ともヘラでみがき、底部は7の如くゆるやかに外反するものである。6は5と同じく壺形土器の口縁部及び胴以下の破片であるが、口唇が幅広くなり、胴に櫛による刺突文をめぐらし外面刷毛目、内面ヘラなどで手法による。底部は9、10の如くそり上ったものであった。高杯は11、12の如く口縁は平らに作られずぐりとした脚、底部へと続く。そして口縁端外側にヘラによる刻み目をほどこしている。13は石器であるがこれは打製の石庖丁のごとく刃部はすどくとがり、稲をかることにおいて格好の道具であったと思われる。これらの田畑遺跡の土器、石器は弥生時代中期中葉つまり矢野Ⅳ式の時期に当たるのであり、神戸川西岸における集落の出現時期を知る上で貴重な遺跡である。

(東森市良、西尾克己)

参考文献 東森市良「破壊に瀕している低地性遺跡」、『季刊文化財』第20号、1973)

知井宮多聞院遺跡

出雲平野の西部の標高6m、水田面より約2mの微高地に位置し、中心は真言宗多聞院の境内地に当たる。昭和24年以来数次にわたる試掘が行われているが、貝塚以外の遺構は明らかではない。

明治大学の太塚初重氏による昭和33年のS33-I地点における層位は表土30cm、混土貝層50cm、黒色土層40cm、砂礫50cm以上となっており、その結果、遺物は混土貝層(知井宮Ⅳ~Ⅱ式)、黒褐色土層(知井宮Ⅰ式)から検出されている。この遺跡の形成されたのは中期中葉以降である。遺物は弥生式土器(中期中葉~後期)、古式土器器、石罨(磨製石斧、砥石)、骨角器(骨鏃、刺突具、針、円頭状角器)、貝輪片、紡錘車(土製、鯨骨製)、鹿角炭刀子、土錘などがある。太塚氏によって弥生時代中期中葉以降に関する知井宮Ⅰ~Ⅳ式の編年が試みられている。

なお、本遺跡の調査に関しては調査の折に木罨式、知井宮式等の混乱がみられるが『島根県遺跡目録』登載の多聞院の名称を用いるのが至当だと考える。

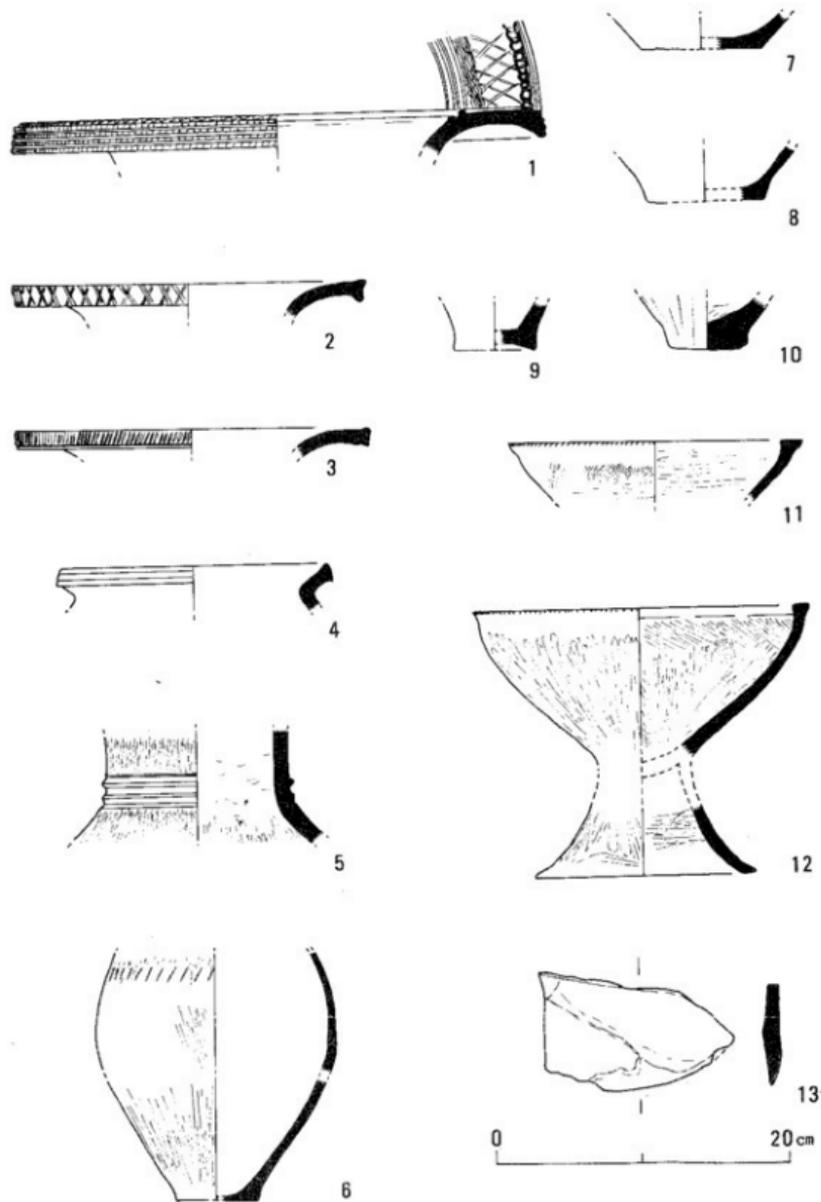


图24 田畑遺跡出土土器実測図

図25は中期の土器を図示したものである。壺形土器は2種に分けられる。いずれも朝顔形に外反する口縁をもつが、その(1)は外面に粘土紐をはりつけた施文帯をもつもので、1の如く口唇外面に波状文を施すものもある。その(2)はごく普通の中期型の壺で口縁内面外反部に波状文、平行沈線文をめぐらす(3, 4, 5)。これは矢野Ⅳ式に当たるが、5の如きは次の後葉の矢野Ⅴ式につながる要素をもっている。甕形土器は2種に分かれる。これは中期中葉の典型的な口縁がくの字に曲がるものと、その発展形態としての口唇の拡大したものと、その(2)はその上に頸部に指頭瓦文帯をもつものとである。(9~17)と(7, 8)。しかしこの中において17の如きは次の後期との接点に入る可能性もある。中期中葉の典型例がここにはない。次に環形土器(19)であるがこれは現在の“すりばち”形をなし、口唇が平たくなる。高環形土器は2種あり平たい底部をもつ18と、典型的な例えば矢野Ⅴ式の如き22とがある。23もその底部であろう。20, 21は環形土器の一種と思われるが、特に21は丁寧に施文しており中期中葉の特徴がうかがえる。また、23は一部の断面で連断は出来ないが、鋸歯文と斜交文をもっており高環の脚部また文様の上で注目される場所である。

図26は後期の土器をまとめたものである。壺形土器は大きく分けて三種になる。(1)は複合口縁の中には長くのびるものもあるが、あまり外反せず外面は口縁部の沈線と脚部の刷毛目でかざる(26, 27, 28)。その(2)は直口口縁で肩がすなりと胴にいたるものである。内面肩部以下はヘラ削りであるが、外面はなでと刷毛目でととのえている(29)。その(3)は(30, 31)で直口口縁が外反し口唇が平面をなすものである。31は内外面に一糸ずつの沈線をめぐらしている。次に、甕形土器は複合口縁となりその幅が前半より広くなり直立、やや内傾、外傾など様々であるが肩部に櫛による刺突文をもつものなどがある。内面肩部以下はヘラ削りであるが外面はヘラなでの刷毛目よくなでている(32~38)。高環形土器は(40, 41)にみる如くヘラなどがあるもの他に裝飾はなく椀形の環部とすそ広りの脚部によって構成されている。42は器形が想定しにくい、場合によっては器台となるのかもしれない。

図27は古式土器を集めたものである。壺と甕との器形が類似してくるのはこの時期であるが、43はその典型である。大形品で八束郡古浦遺跡、松江市平所遺跡に類品があるが、この時期を代表するものといえよう。外面はよくヘラなどで調整され、内面頸部以上もその通りである。外面複合口縁の立上り部分に櫛描き沈線をめぐらすことも共通している。甕形土器は立上りが高くなり櫛描き沈線をめぐらすことにおいては変りはない(44~50)。その中において51と52は器台の土台と脚を示すものであり矢野Ⅳ式に当たるものといえよう。これは安来平野では九重第3号土壇墓出土の土器に当たり、広く九重式の名称で呼ばれるものに当たるが、やや変形している。53, 54は高環の環部に当たるものであるが、段を有する53とそうでない54の間には微妙なちがいがあがるが、松江市の場土壇墓出土の高環に類似する。

次の時期に当たるのが完成品の56と口縁のみの55, 57, 58, 59で、これは甕形土器の発展形

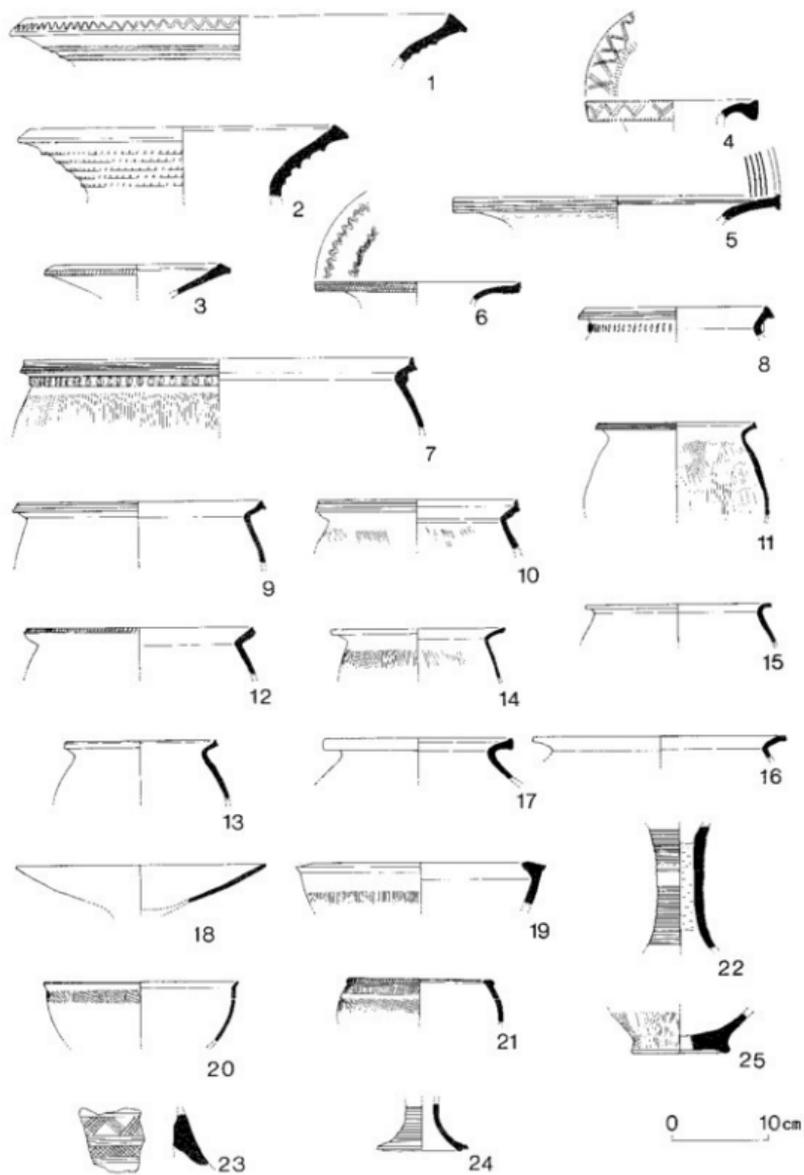


圖25 多聞院遺跡出土土器実測圖(1)

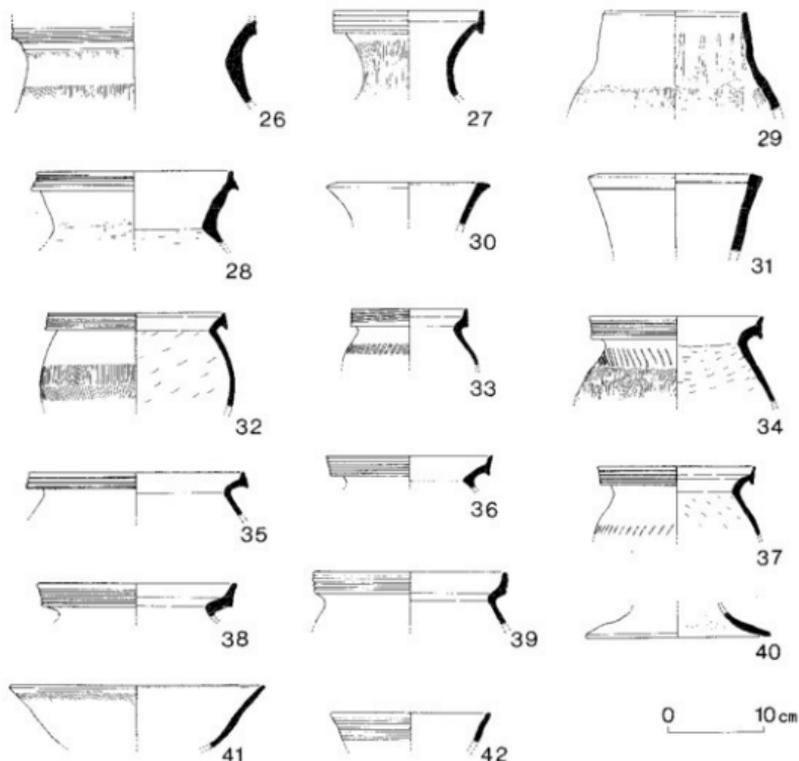


図26 多聞院遺跡出土土器実測図(2)

態である。複合口縁が発達しその部分が無文で肩部にノ字文、全体に刷毛目のはいる。こうなると完全な土師器である。内面は頸部以下削り放しである。60はやや器形の異なった甍形土器である。くの字形の複合口縁と頸部の櫛描ノ字文が特徴的である。これは山陰の壺棺に一般的にみられる文様で、ここからこの土器の年代を考えることも可能である。6jはやや新しく複合口縁の稜が退化している。これは須恵器の出現とほぼ時期を同じくすると考えられる。6gはこの時期の土器の底部である。丸底化して平底の意識が残るところである。高杯は62併行のもので大東高校校庭遺跡に典型的にみられるものと思われる。外面刷毛目、内面割部しぼりの様相がよくわかる。63から65は器台である。上台は丁寧につくり脚台内面はへら削りのままであるが、胴部が短くなっているのは矢野Ⅱ式に当たり、安米平野では鎌尾Ⅱ式というものと同一である。66は底部であるが低脚杯のそれであり、67はミニチュア土器のものであると思われる。

(東森市良)

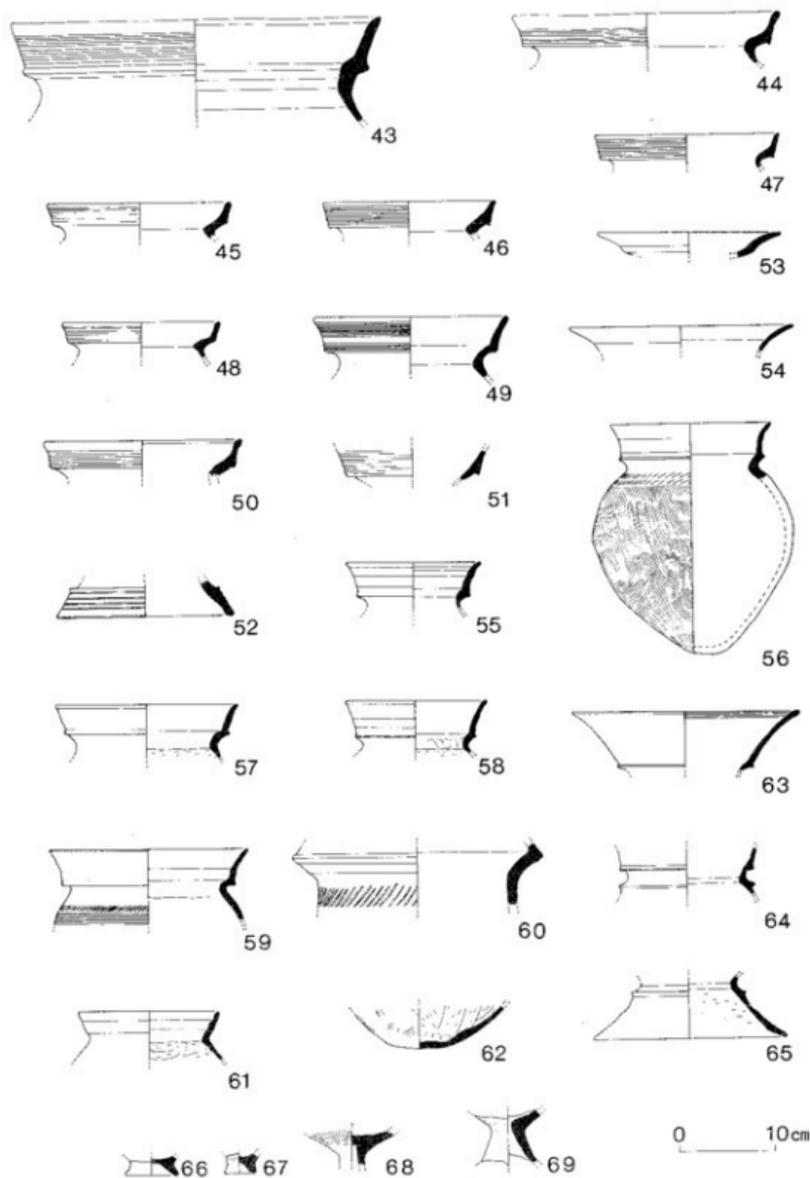


圖27 多聞院遺跡出土土器実測圖(3)

大寺古墳群

出雲平野の北方に横たわる北山の一角、出雲市東林木町に所在する。この標高40mの墳丘上からは遠く斐川町の仏経山をはじめ出雲平野一帯を望むことができ、山麓には重要文化財の木造薬師如来像を蔵する古刹大寺が存在する。

1号墳

主軸をほぼ南北にとる全長約50mの前方後円墳であり、後円部径約28m、高さ4m、前方部の長さ22m、後円部先端の幅12.5mを測る。前方部は後円部と比較して約3m余り低く、その幅もくびれ部からの開きが少ない。いわゆる柄鏡形を呈しており、古式の前方後円墳の特徴を備えている。

後円部は自然丘陵の紋部を利用し、北側には幅3mの浅い溝を掘り、さらにその外側を水平に削っている。また後円部は全面に拳大から人頭大の葺石が存在するが、前方部には僅かしかない。前方部は南へ緩やかに下る尾根を利用したものであり、前方部先端の僅かなテラスを除いては加工状態は不明瞭である。

内部主体は小形の竪穴式石室であり、後円部中央に構築されている。その規模は全長4m、幅0.7～0.8m、高さ約0.6mを測る。石室の各壁面は厚さ10cm前後の割石を小口積みにし、天井には大形の石が置かれている。床面は粘土床であり、中央部は木棺の痕跡と思われるU字状のくぼみが認められる。また西側壁面の中途には長さ1.1m、幅0.5mの張り出し部があるが性格は不明である。

副葬品には1952年の調査で出土した鉄製の斧・鍬先・鉈・鎌がある。なかでも鍬先は巾18cm、長さ13cmの大形品である。

2号墳

1号墳の東側に接する小規模な横穴式石室を有する古墳である。

墳丘は東へのびる尾根の一部をし字状に掘り、簡単な溝としている。封土の多くは破壊や流土により失われ、墳形は不明である。溝は1号墳と切り合わず、1号墳の墳形を意識して古墳を構築したと考えられる。

石室は全長2.6m、玄室幅1.0mを測るが、壁の上部と天井石はなく、基底部を除いてはほとんど壊されている。石材は自然石と割石を用いている。副葬品は不明である。 (植野真司)

参考文献

山本 清「古墳」(『出雲市誌』出雲市、1951)

史跡 大念寺古墳

出雲平野の中央部に突出する神積台地の先端、出雲市今山町の藁ノ沢に位置し、墳丘上からは出雲平野全域を望むことができる。

墳丘は全長84mの前方後円墳である。墳丘の北側の大部分は寺域拡張のため破壊され、南側も墓地によりかなり削られているが、前方後円墳の形態はほぼ保たれている。規模は全長84m、後円部



图28 大寺古墳填丘測量図

の高6m、前方部の高6~7mを測り、前方後円墳では累下最大規模を有する。外部施設としての墓石、周堤は存在しないが、墳丘の斜面には埴輪円筒の破片が認められる。

内部主体は主軸に対し南西に開口する全長12.8m、壮大な横穴式石室であり、内に大小の家形石棺2個を置く。石室石棺の規模は以下のとおりである。

奥室 長 5.8m	前室 長 3.1m	羨道 長 2.5m以上	石棺(大棺) 長 3.3m
幅 2.9m	幅 2.4m	幅 1.6m	幅 1.7m
高 3.3m	高 2.0m	高 1.8m	高 1.7m

石室は巨大な自然石や割石を横積みになっている。平面形は門柱に張り出した立石を二ヶ所に置き、奥室、前室、羨道の三つの部分に仕切っている。奥室は幅に比し奥行が2倍と細長く、一方、前室は正方形を呈する。

奥室は長方形の石を5~6段に横積みし、各石の間隙には小さい割石を充填している。両側壁とも床面から約2mの高さで石の上面を一線にし、さらに二段積みにして天井石を置く。側壁は内傾し、天井付近ではかなりせり出している。奥壁は一枚の巨石を置き、周囲には小さい石を補っている。天井は巨大な自然石4個で覆い、前室との境に存在する楣石とはかなりのレベル差があって、小さい石をその上に積み重ねている。

前室と羨道は奥室同様に細長い自然石や割石を使用しているが、奥室に比較すると粗雑に積んでいる。また、前室と羨道を区画する門柱状の立石は小さい石を用い、上方では2、3個積み重ねる。

石棺は奥室と前室とに各1個づつ置かれていたが、前室の石棺は現存しない。奥室の石棺は凝灰岩



図29 大念寺古墳墳丘測量図

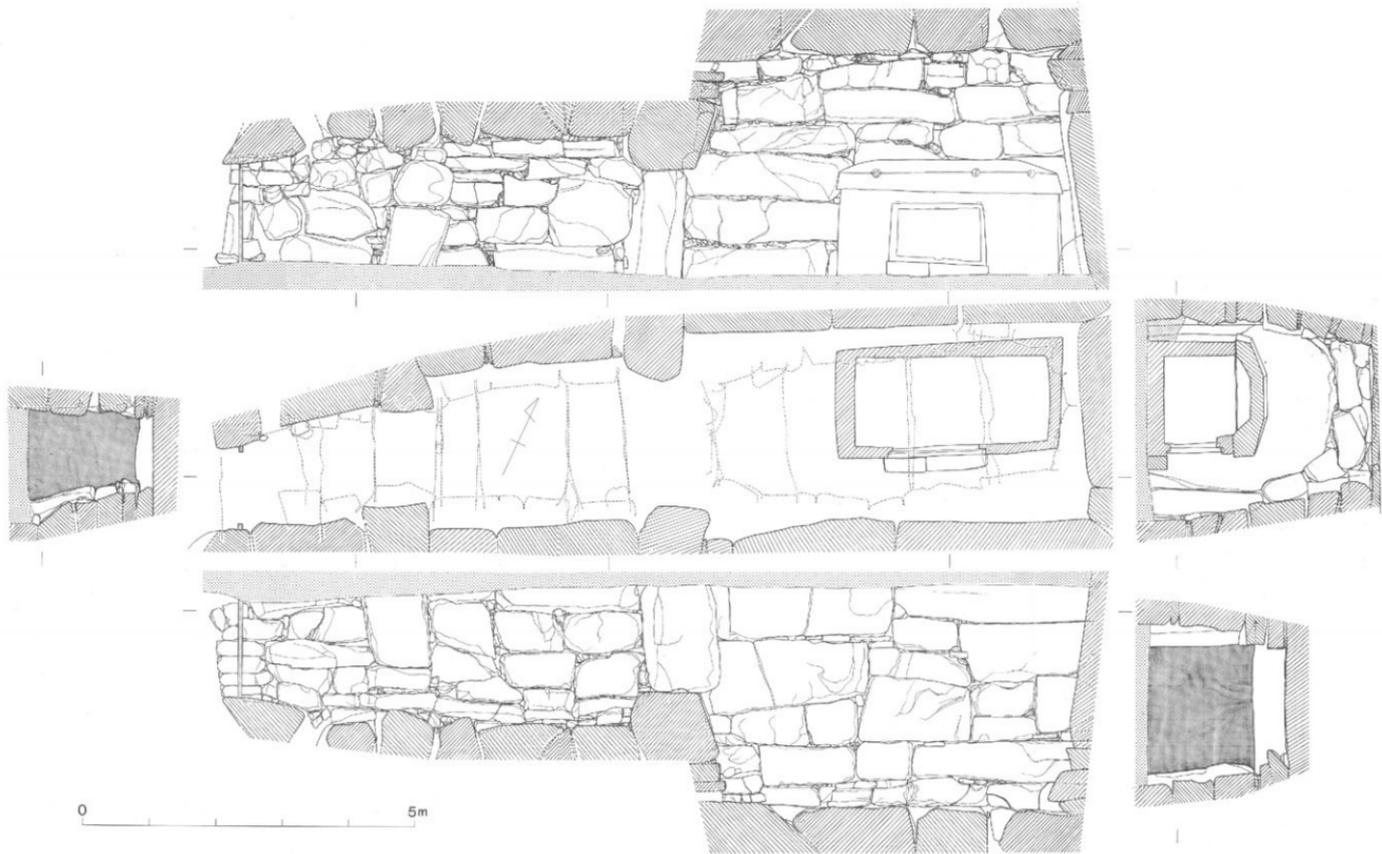


图30 大念寺古墳石室実測図

質の横口をもつ家形石棺である。蓋石は内外面とも四注式家形に加工している。身は剥り抜き式であり、東側に長方形の横口をもつ。横口には閉塞石を受ける剥り込みがあり、また横口の前には方柱状の細長い切石が接して置かれ、閉塞石を支えるようになっている。同様の構造を有する石棺は下古志町の妙蓮寺山古墳にも存在する。縄掛突起は蓋に6個付随している。

前電の石棺は現存しないが、ガウランドの報文によってその概要・規模の概略をうかがうことができる。それによればかなり小形の組合せ式の石棺であり、内法は長さ1.55m、幅0.74m、深さ0.57mの規模という(文献4)。蓋石の形態は不明である。

この石室が閉じたのは1826年(文政9)といわれ、記録によると金銅製履、金環、丸玉、大刀、槍身、斧頭、馬鐙、轡、鈴、雲珠、須恵器等が出土したとあるが、現在その多くが散逸している。大念寺に現存するものには鉄斧、鏡板、直刀残欠、須恵器蓋坏等がある。須恵器は山陰の須恵器編年のⅢ期の特徴を有している。

参考文献

1. William Gowland 「The Burial Mounds and Dolmens of the Early Emperors of Japan」
(The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, Vol 37, 1907)
2. 山本 清「古墳」(『出雲市誌』出雲市, 1951)
3. 『高根の文化財』第3集(島根県教育委員会, 1963)
4. 渡辺貞幸「ガウランド氏と山陰の古墳(中)」(『八雲立つ風土記の丘』39号, 八雲立つ風土記の丘資料館, 1979)

塚山古墳

出雲市今市町の標高8mの平地に築かれた古墳である。市街地に立地するため、盛土の多くは失なわれている。墳丘の残り具合からかなり大形の古墳であったと推定されるが、墳形は不明である。

内部主体は南に開口する切石造りの狭長な横穴式石室で、内部に家形石棺を置く。羨道部は道路工事のために破壊され現存しない。規模は下記の通りである。

支室 長 4.5m以上	石棺 長 2.7m
幅 1.7m	幅 1.2m
高 2.3m	高 1.3m

石室は、凝灰岩質切石による奥壁1個、同質切石20数個による側壁、および自然石の天井石2個で構築されている。側壁は長方形の切石を積み上げたものであり、両壁とも基本的には4段積みになっている。断面は上段に上るにつれて内傾し、天井石との間隙には扁平な自然石をかませている。また、切石積が中心であり、L字状に切られた切石が東壁に3個、西壁に4個認められる。

石棺は凝灰岩質の組合せ式家形石棺である。底石は高さ約10cmの縁を有するもので、その両端に

内側を削り込んだ切石を立てて側壁とし、その上に天井部を家形四注式に加工した蓋石を置く。側石の加工状態や床石の形態より、この石棺は既製のもを再利用したと考えられる。また、石棺の蓋が接する東壁の部分はコの字状に削りとられている。開口は古く、副葬品については不明である。

参考文献

山本 清「古墳」(『出雲市誌』出雲市、1951)

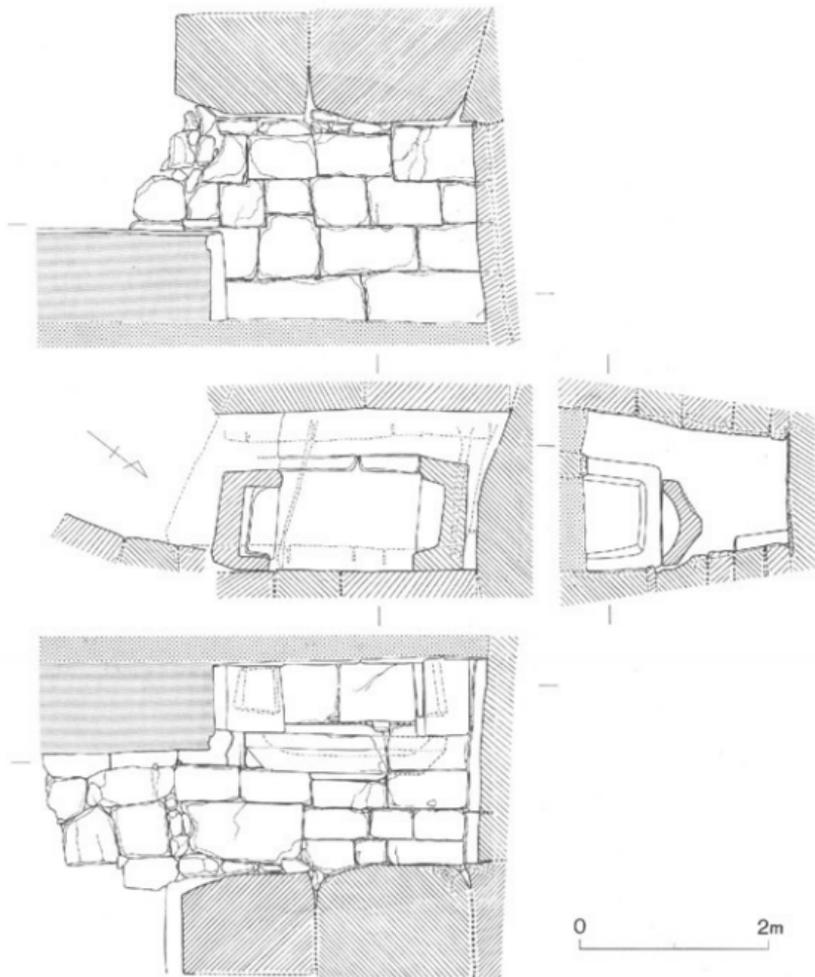


図31 塚山古墳石室実測図

史跡 みいさつやま 上塩冶築山古墳

神戸川左岸，出雲市上塩冶町築山の標高10mの微高地に位置する。付近には神門寺廃寺，地藏山古墳，上塩冶横穴群などの主要な遺跡が集中している。

墳丘は宅地や畑地耕作のためかなり削り取られ，現状では東西3.6m，南北2.8mの方形状を呈し原形を留めない。本来は墳裾の直径が4.0数mの円墳と推定され，地形から墳丘の多くは盛り土と考えられる。墳丘の表面には葦石は認められないが，周囲の畑地からは輪軸円筒や子持須恵器の破片がかなり発見されている。

内部主体は凝灰岩質による切石造りの整齊な横穴式石室であり，全長14.6mを測る。玄室には家形石棺を2個置く。石室，石棺の規模は以下のとおりである。

玄室 長 6.6m	羨道 長 5.6m	石棺(大棺) 長 2.8m	(小棺) 長 2.1m
幅 2.8m	幅 1.8m	幅 1.4m	幅 1.4m
高 2.9m	高 2.2m	高 1.7m	高 1.4m

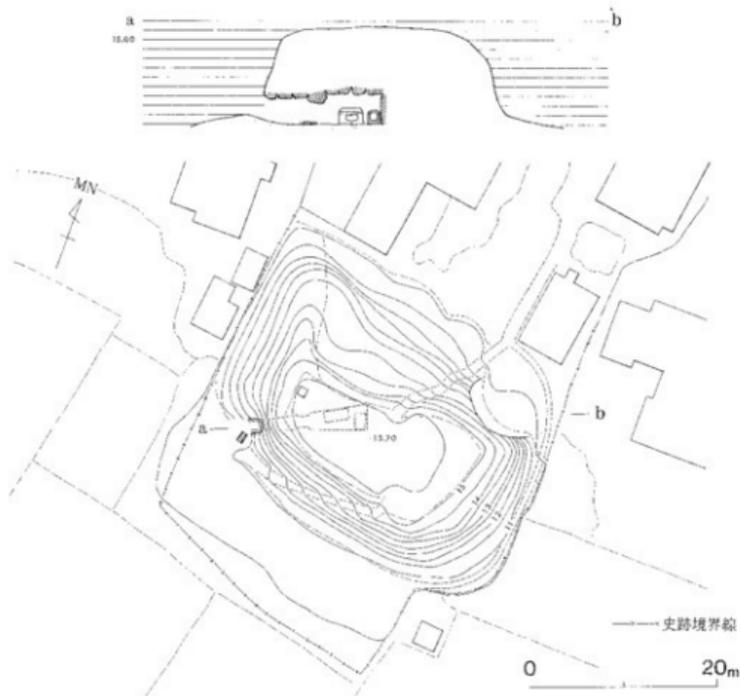


図32 上塩冶築山古墳墳丘測量図

石室は墳丘の南西方向に開口し、玄室、羨道とも幅に比べて奥行きが長いものである。玄門部は長方形の切石を両壁に立てて境とする両袖式で、その上に自然石の巨大な楕円石をのせる。床には長方形の切石を置き、発見時には玄門は方形の切石をブロック積状に重ねて閉塞されていたと伝えられる。奥壁は一枚の切石を用い、側壁は長方形の切石を四段積にしている。壁面は幾分内傾し、多くの石がし字状に一角を切り取り、上方の石を支える切組積にしている。一方、天井は巨大な4個の自然石で覆い、床面には拳大の玉石を数10cmの厚さで敷いている。

羨道部も玄室同様に切石を用い、三段積にしている。床面には礫は認められない。

石棺は大小二個あり、共に玄室に置かれている。大棺は西壁に接して置かれ、横口を東側の平部に設けている。平、妻の長さの比は2:1と細長い。蓋は内外両面とも四注式家形に加工し、身は割り抜きである。横口の下方はUの字状を呈し、中央部には排水用と考えられる狭い溝が切られている。円形の縄掛突起は蓋の長辺に2、短辺各1、身の短辺各1の計6個が存在する。

小棺は奥壁に接し、横口を羨道の方に向かって開いている。蓋は内外とも四注式家形に加工し、身は割り抜きである。横口の下方は大棺同様Uの字状を呈し、さらに周囲には浅い割り込みを施している。同様の横口は、地蔵山古墳や宝塚古墳のそれにも認められる。縄掛突起は存在しないが、排水用の溝は存在する。しかし、この溝は石室開口以降加工されたとも考えられている。(文献4)

石室が開口したのは1987年(明治20)である。遺物の出土状況は『旧島根県史』によると、奥室の棺外に土器・鈴・槍・鐵・銀環が、小棺内に玉類、長刀1、短刀2、冠が、土器、小棺の屋根に馬具類が、また大棺には円頭大刀、劍類が置かれていたという。

現在、出雲市教育委員会から県立博物館へ寄託されている遺物には金剛製冠、銀環、玉類(メノウ製勾玉、水晶製勾玉、メノウ製なつめ玉、ガラス製管玉、ガラス製丸玉、ガラス製小玉)、円頭大刀、槍身、鉄鐵、鉄鉾、馬具類(轡・鞍金具・雲珠・辻金具・銅鈴)、須恵器等がある。

(西尾克己)

参考文献

1. William Gowland 「The Burial Mounds and Dolmens of the Early Emperors of Japan」
(The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, vol.37, 1907)
2. 山本 清「古墳」(『出雲市誌』出雲市, 1951)
3. 『島根の文化財』第3集(島根県教育委員会, 1963)
4. 渡辺貞幸「ガウランド氏と山陰の古墳(中)」(『八雲立つ風土記の丘』40号, 八雲立つ風土記の丘資料館, 1980)

史跡 地蔵山古墳

整美な切石造、複室構造の石室をもち、さらに家形石棺と有縁石床をその中に納めた古墳であり、現況では径15m、高さ5mの円形を呈する。

県立出雲工業高校の北側、築山古墳のある低台地の基部にあたる部分の出雲市上塩町池田に位置し、周囲では多くの土器片が表面採集できる。墳丘は大部分盛上によるものと考えられ、石室の位置からも地山を大きく掘り下げたのではないようである。外部には埴輪、葺石等は認められない。

内部には大形の石棺式石室を置く。石室は複室構造で、羨道部はいくぶん削られたものようであるが、ほぼ全形を残すものといえ、南東方向、つまり神戸川とは逆方向に開口している。石室の石棺・石床の規模は以下の通りである。

奥室 長 2.60m	前室 長 2.35m	羨道 長 2.90m	石棺 長 2.40m	石床 長 2.40m
幅 2.40m	幅 2.25m	幅 1.90m	幅 0.80m	幅 1.30m
高 2.25m	高 2.15m	高 1.75m	高 1.40m	高 0.50m

奥室は各壁天井がそれぞれ一枚の巨大な切石により構成され、幅に対し奥行が多少長く、各壁の内傾度はさほどでない。いわば直方体の形態を呈する。奥室と前室とは2枚の大形の板石を組み合わせ、その中央を割り込んで通路としている。床にあたる部分には排水溝が造られている。

この奥室には奥側に家形石棺、手前には有縁石床が置かれているが、平面図にみるように両者の平面形や加工技法はほぼ同一である。有縁石床は家形石棺を水平に切断したように見え、両者は同一の規格に基づいて造られたものと考えられる。また奥室各壁との密着度からして、石棺、石床を置いた後、横を築いたものと推定される。

家形石棺は平部に2段のU字形をなす横口を設け、横口部の角には部分的に面取りを施している。石棺内部は丁寧に加工し、天井部（蓋石内側）は棟の線を4本とも中途まで割り込んでいるが、縦断面は楕円形を呈する。蓋石外面はきちんと家形に加工し、縄掛突起はない。

石床は縁というよりも圍いのような形状であり、石棺と同様のU字形の割り込みが両側に設けられ、内部は平面長方形にきちんと加工している。

前室は平面・立面共にほぼ同一の規模で、立方体の形状を呈している。奥室同様に天井、各壁共に巨大な切石を用いているが、両側壁は3枚（北東）、4枚（南西）からなり、石材がやや小形化していることがわかる。南西壁では石材の隅をくり込んで各石をうまく組み合わせている。天井石は奥室の天井石が前室まで続き、それに接してほぼ同大の石が置かれている。前室と羨道との間には角柱状の石を両壁に組み込んで置き、その上、天井との間にやや大形の角柱状石を架構して、門を形づくっている。

羨道部は北東側壁がやや中心に寄っているが、本来は南西側と同様に主軸に平行であったと推定される。北東側壁は大形の石を2枚組み合わせ、南西側壁はやや大形の石を底部において、その上に小型の短い角柱状の石を2～3段階積みあげている。また天井石もやや小形化し、現状では2枚を架構し

ている。

遺物は古く開口したこともあって不明である。現在、石棺内に地蔵が安置されている。

参考文献

山本 清「古墳」(『出雲市誌。出雲市、1951)

はな ぶん 古 墳

明治期に横穴式石室が発見され、墳形は諸説あったが、実測図にみるように前方後円墳である。復元全長40mをはかる。

古墳は西に神戸川を望む低丘陵の斜面中腹、現出雲工業高校の下方に位置し、前方部を南西に向け主軸は丘陵斜面にほぼ直交している。墳丘主軸は北東—南西方向で、復元規模は全長約40m、後円部径2.0m、前方部長2.0m、前方部幅2.0m、くびれ部幅7mであり、後円部の高さは東側で2.5m、西側で4.5mを測る。葺石、埴輪等は認められない。墳丘のかんりの部分は盛土によるものであることが前方部端の断面観察から知られる。

内部主体は自然石もしくは割石による横穴式石室とされるが、発見後しばらくして埋め戻されたため現在は発見できず詳細は不明である。しかし、ガウランドの報文(文献1)によりその概要・規模をうかがうことができる。

それによれば石室には切石による組合せの石棺を2基(石室主軸に平行に)内蔵しており、一方のものは小口しか残っていない、としている。規模は以下の通りである(換算値)。

玄室 長 3.9m	羨道 長 5.5m	石室(内法) 長 1.5m
幅 0.9m	幅 0.9m	幅 0.7m
高 2.4m	高 1.1m	

石棺は発見者からの聞き取りでは共に冢形石棺としているが、葺石の厚さが薄いことから箱形石棺ではないかともされる。(文献3)

遺物は東京国立博物館に収蔵されたとのことで、詳細は不明であるが、緑青の付着したのもあったと伝えられている。時期は明確でない。(大国晴雄)

参考文献

1. William Gowland 「The Burial Mounds and Dolmens of the Early Emperors of Japan」
(The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland, vol 37,
1907)
2. 山本 清「古墳」(『出雲市誌。出雲市、1951)
3. 渡辺貞幸「ガウランド氏と山陰の古墳(上)」(『八雲立つ風土記の丘』37号、八雲立つ風土
記の丘資料館、1979)

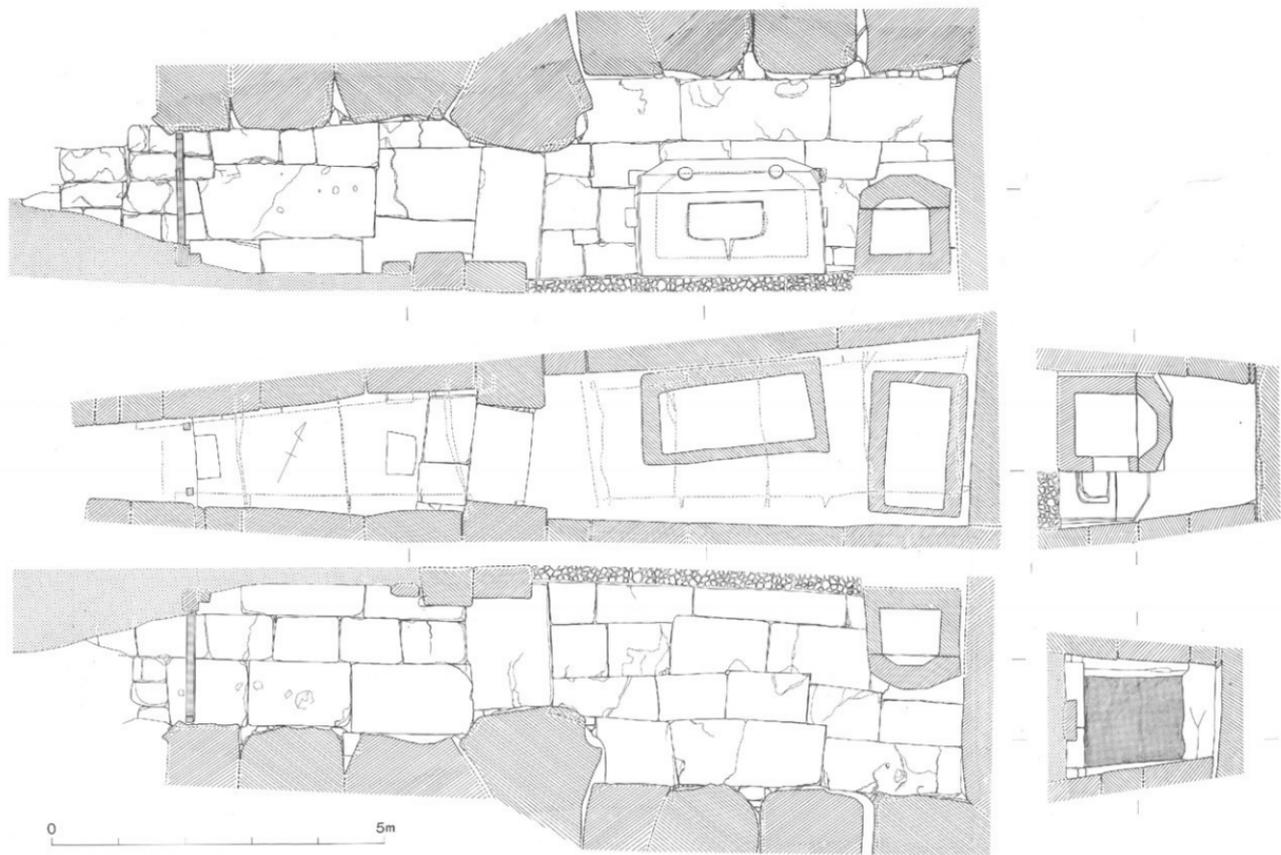


图33 上镇冶鞍山古墳石室実測図

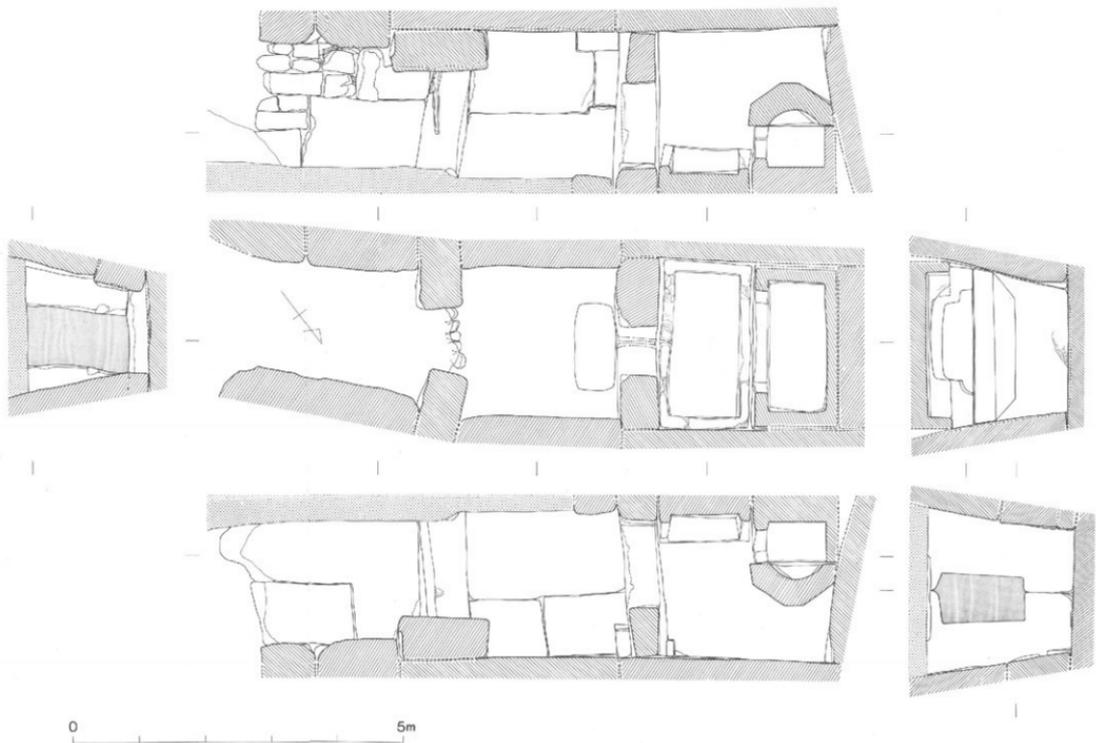


图34 地藏山古墳石室実測図（出雲考古学研究会原図）



図35 半分古墳墳丘測量図（『古代の出雲を考える』2より転載）

光明寺古墳群

光明寺（通称馬木不動尊）の裏山、出雲市馬木町の標高40～60mの山腹に散在する古墳群であり、現在3基が確認されている。

1号墳

近年の土地造成により発見された横穴式石室をもつ古墳である。盛上の多くは耕土や流土で失っており、墳形は不明である。石室は自然石をもって築かれているが、未調査であるため規模等の詳細は不明である。

遺物としては須恵器の坏、甕が出土している。

2号墳

1号墳より10m程の高所に位置する古墳で、以前よりよく知られていたものである。盛り土はほとんど現存しない。内部はいわゆる石棺式石室であり、石棺の天井・壁面は各一枚の切石で構成されている。床石は数個の切石が敷かれ、玄室の入口は組み合わせ式の構造をとる。規模は次の通りである。玄室長2.0m、幅1.6m、高1.7m。

出土品については開口が古く所伝がない。

3号墳

2号墳の10m程上方に位置し、自然地形を利用した10mの小円墳である。内部構造・遺物等は未発掘のため不明である。

(西尾克巳)

参考文献

池田満雄「光明寺古墳」(『出雲市文化財調査報告』第一集 出雲市教育委員会、1956)

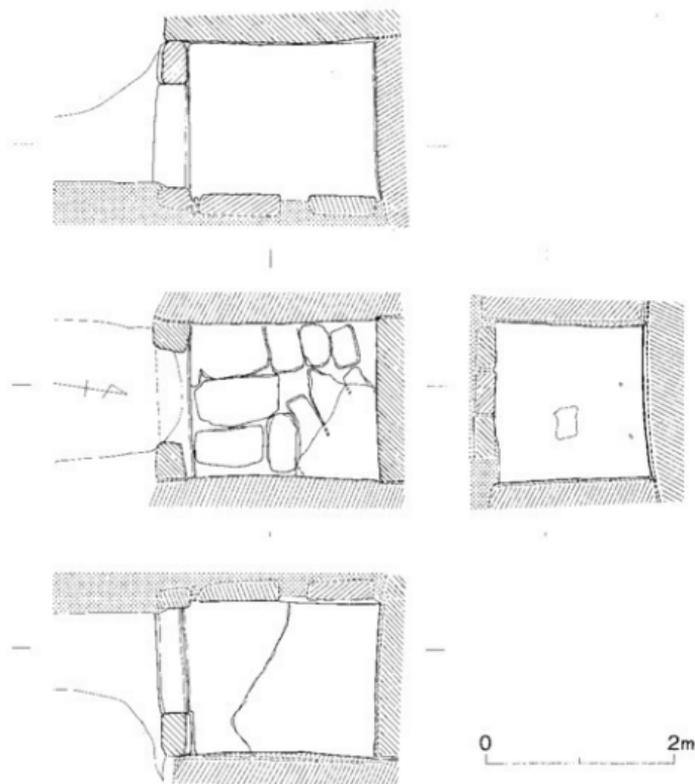


図36 光明寺2号墳石室実測図

こ 坂 古 墳

神戸川の左岸、出雲市馬木町に所在し、付近には刈山古墳群が分布する。本古墳は古墳の造営が終わり、その後石櫃が置かれた石棺式石室を有する円墳である。

墳丘は比較的緩やかな丘腹の尾根側を削って築成しており、山寄せの形態をとる。規模は径1.5m、谷側からの高3.5mで、いくぶん地山を掘り込んだ後に石室を構築し、その上に石室を覆う程度の盛土を施したものと推定される。外部に葺石、埴輪等は認められない。

内部には北東方向に開口する全長5.30mの横穴式石室を置き、羨道部の天井を失っているが、ま

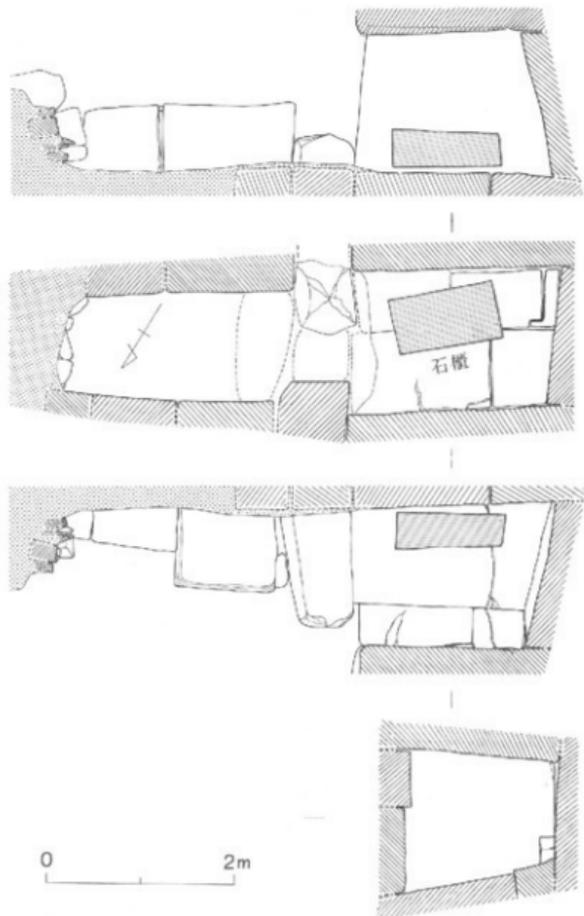


図37 小坂古墳石室実測図 (出雲考古学研究会原図)

たそれゆえ羨道閉塞の状況もうかがわれる。石室は1962年に内部の調査が行われ、遺物の一部などが判明している。規模は以下の通りである。

玄室 長 2.10m	羨道 長 2.30m
幅 1.47m	幅 1.16m
高 1.45m	高 0.90m以上

玄室は奥行が幅に対し長い出雲西部に共通の石棺式石室の形態をとるが、南東壁を除いて他の壁・天井石は大小の笠はあるがいずれも複数の切石からなっている。特に北西壁は2枚の切石を基底石のうえに横に置いて側壁の高さを揃えている。南東壁と玄門部の石はほぼ直立し、他はかなり内傾する。各壁相互の組み合わせは認められない。

床には5枚の板石をほぼすき間なく敷きつめて敷石としており、主軸を境に7~8cmの段差がある。或は屍床を意識しているのかもしれない。

玄門部はやや不整形の角柱状の石をたて、羨道部は玄室各壁の石よりもいくぶん小形の板石を2~3枚ならべている。天井部は不明。

羨道部入口付近には人頭大の栗石がかなり詰められていて、この石で閉塞していたことがわかる。

出土遺物のうち、須恵器はこの古墳に本木伴うものと推定され、その時期は須恵器第Ⅲ期にあたるようである。

大 槻 古 墳

切石で築かれた横穴式石室で、いわゆる石棺式石室である。石室の下半は露出している。古くから墳丘を削られたものとみえ、現在は原 秀吉氏宅の庭の一部となっており、外形は不明である。

1953年に山本清氏らによって発掘調査が行われている。

古墳は神積平野の中でも周囲の水田から若干高い位置にあつて、現在の集落も発達した位置にあるところから、おそらく神戸川の旧自然堤防に位置すると推される。埴輪門筒が墳丘斜面に有したことが判明している。

内部には凝灰岩の切石を用いた石棺式石室が存在するが天井部をすべて欠失している。主軸はほぼ南北におき南に開口する。規模は以下の通りである。

玄室 長 2.45m	羨道 長 2.20m以上
幅 1.75m	幅 1.45m
高 0.80m以上	高 0.90m以上

その他、玄室の敷石幅は1.10mほどでおそらく現状のように東半分のみ存在したもののようである。また玄室・羨道の各壁はいずれも厚さ50cm、外面不整形の板石を用いている。

玄室の各壁はいずれも1枚からなり、玄門は門柱状の板石を縦においている。南西側隅では羨道側の石を削り込んで玄室の平面形を一つの規格に合わせようとしている。また各壁はいずれも組み合わ

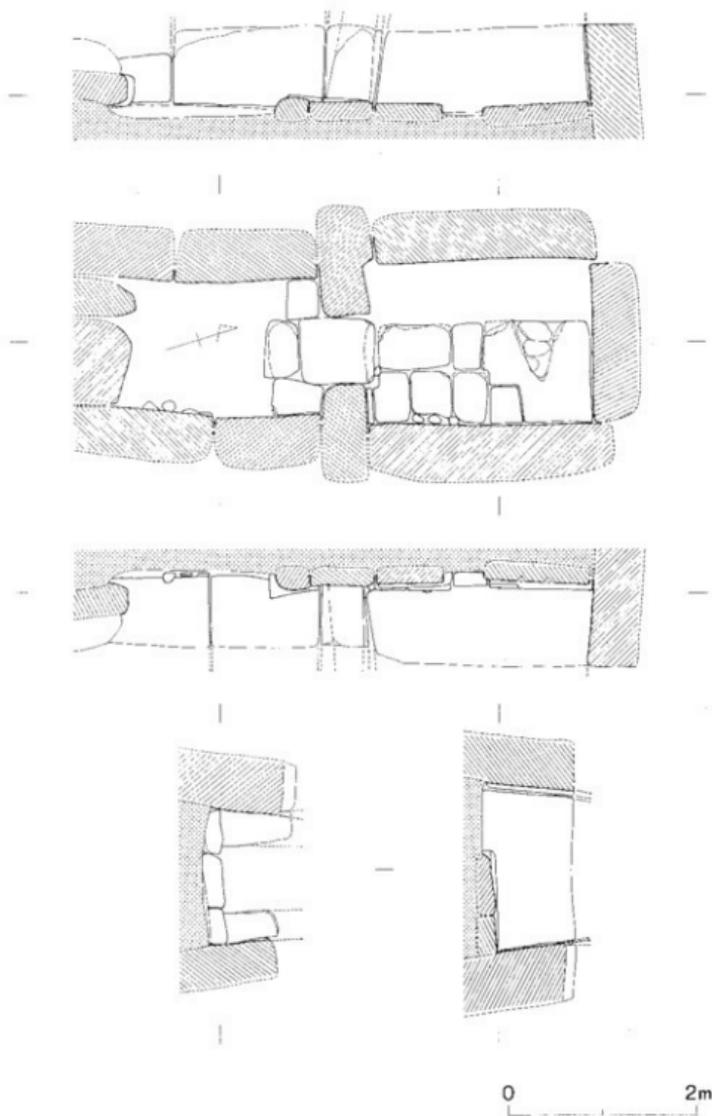


图38 大槐古墳石室実測図

せられておらず、もたせかけたものである。いっぽう、敷石はていねいに組み合わせられており、屍床として整ったものとなっている。玄室各壁の内傾度はそう大きくない。

羨道は両壁とも2個の板石を並べており、入口部分は人頭大もしくはやや大形の栗石を積んだものようである。

遺物はこの古墳に本米伴うものは主として前述の埴輪門筒片と耳環2個である。埴輪門筒は一個体分でタガを有し、内外面共に丁寧なハケナデ、口径3.0cm、丹彩とし、いっぽう耳環は共に金銅製で環断面は楕円形、直径3.3cm、環径0.85cm、直径3.25cm、環形0.85cmをはかり、出土位置は玄室中央の敷石の欠けた位置とするが、報告者は原位置かどうか疑問視している。他に土製支脚・鉄製品も出土している。

参考文献

山本 清『大塚古墳調査報告』（1955）

放れ山古墳

大正期に発掘されたこの古墳は切石造りの横穴式石室を主体とする。

東方にのびる低支丘陵の突端近くの比較的平坦な尾根上に築かれた後、後世の墓地造成のための削平などによってかなり変形した墳丘は外形が判然としない。円墳とも方墳ともとれるような現況である。

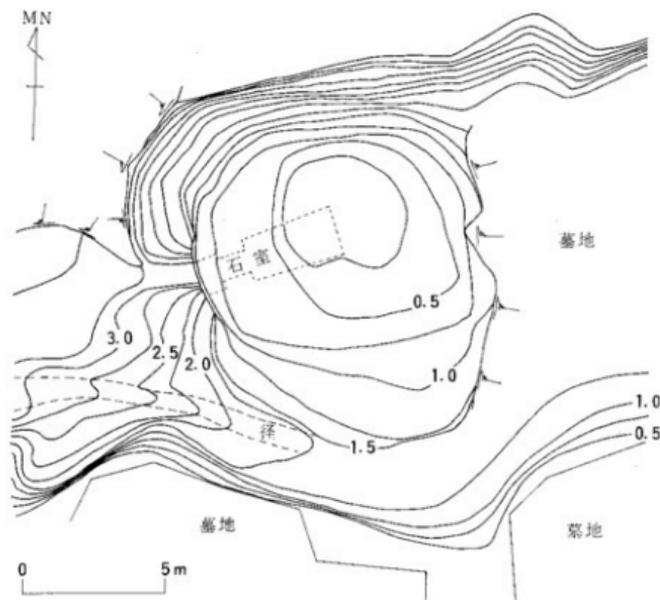
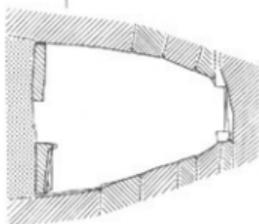
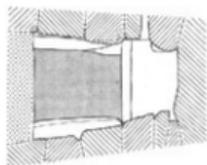
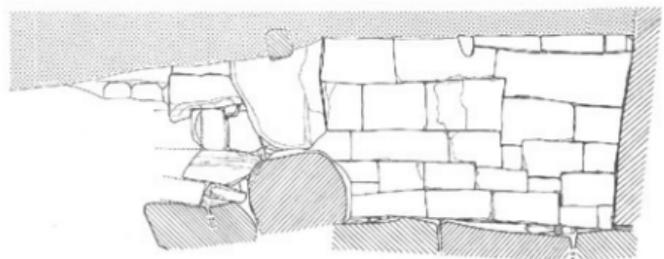
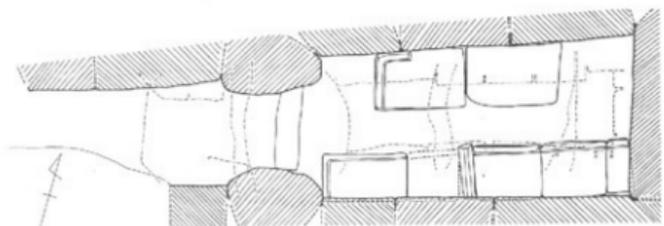
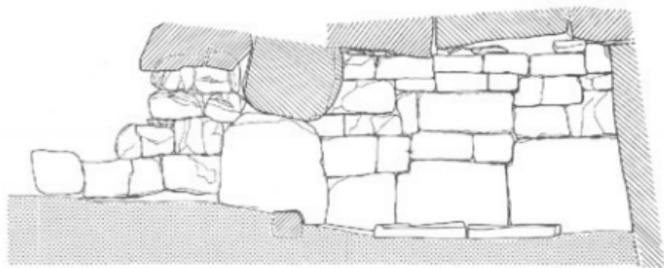


図39 放れ山古墳墳丘測量図



0 2m

圖40 放れ山古墳石室実測図

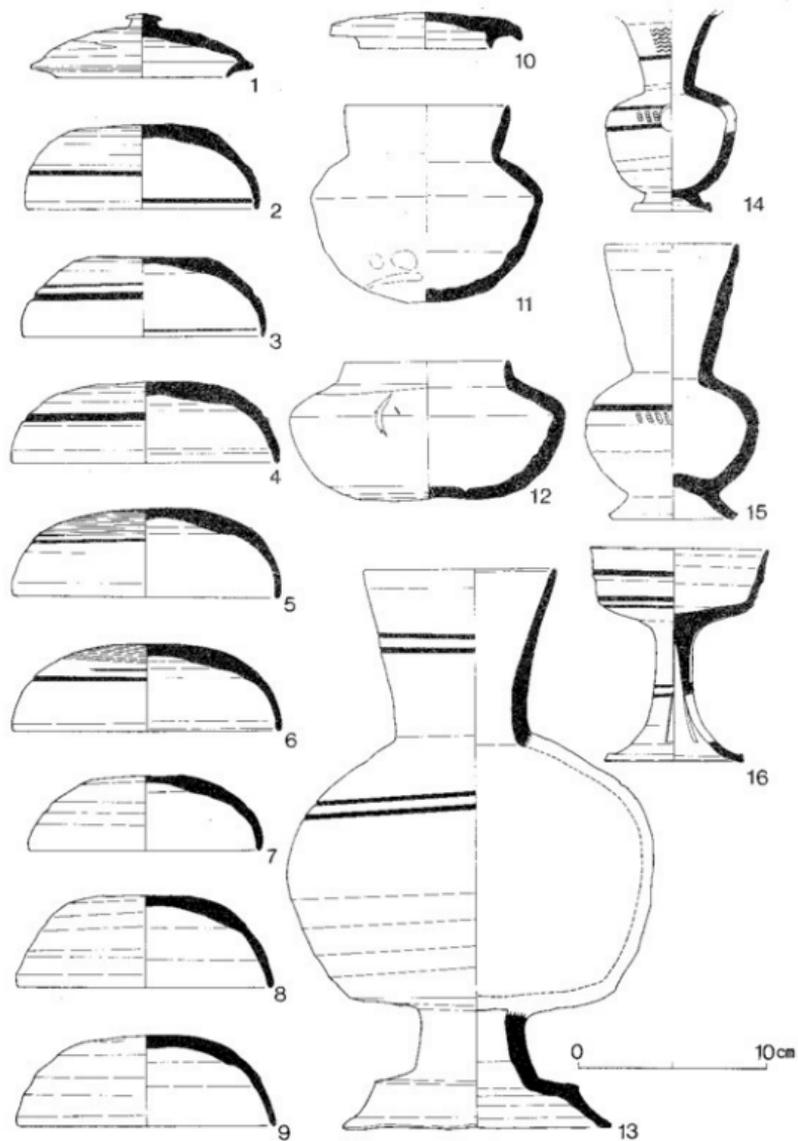


图41 放礼山古堆出土土器实测图 (实测 中浜久高)

表6 放れ山古墳出土須恵器観察表

図版 番号	種 類	法 量 口径	(cm) 高	焼 成	色 調	胎 土	ロクロ 方 向	手 法 ・ 形 態 の 特 徴 など
1	蓋(壺)	9.1	3.4	良好	黒灰色	密	時 計 方 向	つまみはやや高立する。 天井部の大半はヘラ削り。 自然釉が外面にかかる。
2	蓋(蓋環)	12.2	4.5	同上	同上	やや粗	同上	天井部のみヘラ削り。 口縁内面に凹線。 焼ひずみあり。
3	同上	13.2	4.3	普通	灰色	粗	同上	2にほぼ同じ。 細砂粒を多く含む。
4	同上	14.0	4.3	良好	青灰色	密	反時計 方 向	自然釉がかかる。 2にほぼ同じ。 肩部の凹線に特徴。
5	同上	14.0	4.6	やや 不良	灰白色	同上	時 計 方 向	肩部外面の凹線が浅くなる。 天井部外面にカキ目調整。
6	同上	14.0	4.6	同上	同上	同上	同上	5にほぼ同じ。 天井部外面にカキ目調整。
7	同上	12.1	4.0	良好	青灰色	同上	同上	2～6に比べやや小形。 外面の大半は回転ナデ調整。 天井部の切離しは粗雑。
8	同上	13.4	4.9	普通	灰色	粗	同上	7よりもやや大形。 内外面ともに回転ナデ調整。 口縁は外方にのびる。粗砂粒多。
9	同上	13.6	4.8	良好	青灰色	やや粗	反時計 方 向	8にほぼ同じ。 外面の凹凸著し。
10	蓋(壺)	7.0	2.9	同上	同上	粗	同上	厚手 口縁内面のかえりは貼りつけ による。 天井部外面は不整方向ナデ。
11	小形壺	8.7	7.4	普通	灰色	密	時 計 方 向	口縁端部はやや内傾。 胴部外面はカキ目調整。(図示せず) 脚部下半に指頭痕あり。
12	小形壺	8.6	10.5	同上	同上	同上	同上	底部はヘラ削り。やや内湾。 口縁端部はほぼ直立。
13	台付壺	10.0	29.7	同上	同上	同上	同上	胴部外面はカキ目調整。 下半はヘラ削り。 脚はしっかり立つ。ややひずみ有り。
14	壺 (7.0)	(12.0)	良好	黒灰色	同上	同上	同上	胴部下半はヘラ削り。 口縁は大きく広く。
15	台付壺	7.0	14.7	同上	同上	同上	同上	口縁端部は直立。
16	高 環	9.5	11.3	同上	同上	同上	同上	口縁端部は外反。 透しは下段のみ貫通。 3方向。

東西1.3m、南北1.3m、高3mをはかる。埴輪、葺石等は認められず、墳丘はかなりの盛土を有するものと推定され、地山もいくぶん掘込んであるようである。

内部には3体分の有縁石床をもつ横穴式石室が築かれ、南西方向に開口している。規模は以下の通りである。

玄室 長	3.27m	羨道 長	2.05m	石床 (北)	(東)	(西)	
幅	1.70m	幅	1.10m	長	2.65m	1.65m	1.45m
高	2.05m	高	1.70m	幅	0.65m	0.60m	0.55m

玄室の長さとは幅はおおよそ2:1の割合で、やや細長く、幅は入口に向けていくぶん狭くなっている。玄室部は丸みを帯びたやや大形の石を両側に立て、その上にもほぼ同大の石を架構している。いずれも十分な加工は施されていない。床には板石を置く。薄い板石状切石により閉塞されていたという。

玄室の各壁は基底部にやや大形の長方形の切石を置き、各石の大半をそれに接する石と割り込みを設けて積みあげている。ほとんど横積みである。天井は大形の割石を三枚架構しているが内面はほとんど加工されていない。各側壁は上部1/3ほどが、かなりの持送りをみせ、奥壁も若干内傾する。上方隅は共に割り込みが設けられ、側壁から柱状の石を架して相方の石材がもたせあわせている。奥壁に近い羨道部もほぼ同様の構築法を用いているが、石材がいずれも小形で、各石間の割り込みは認められない。持送りはかなり認められる。玄門には発掘時、大形栗石様の石と粘土がつまっていたといわれている。

玄室の両側壁に沿って掘えられた3体分の石床のうち北側中央部の石床は羨道側に縁を有し、南側の石床は同様の縁を2方に設け、中央に棒状の石を横に置いて、2体分に区画をしている。

大正期の発掘に際し各種遺物が出土している。その中で金銅袋大刀は北側石床の壁近くから、同石床と玄門の間から土器類が、また同石床と奥壁との間に馬具類が発見されたという。また南側石床の壁近くからは直刀、仕切石付近からは金環の出土を伝えている。(大岡晴雄)

参考文献

1. 山本 清「古墳」(『出雲市誌』出雲市、1951)
2. 『島根の文化財』第3集(島根県教育委員会、1963)

あまうらみ じやま 妙蓮寺山古墳

神戸川左岸、出雲市下古志町の低丘陵上に築かれた前方後円墳である。

墳丘の全長は4.9mで、後円部径約2.5m、高さ4.5m、前方部先端幅2.2m、高さ7.5m、くびれ部幅1.3mを測る。墳丘は丘陵を削って大部分を成形し、その上に1~2.5mの盛土で覆っており、前方部が後円部より幾分高い。外部施設としての葺石や周溝は存在しないが、1963年の調査時に埴輪筒が墳丘より検出されており、元は前方部、後円部の上面に立て廻らせていたものと考えられている。

内部主体は自然石を積んだ横穴式石室であり、後円部の西南方向に開口する。玄室内部には割り抜

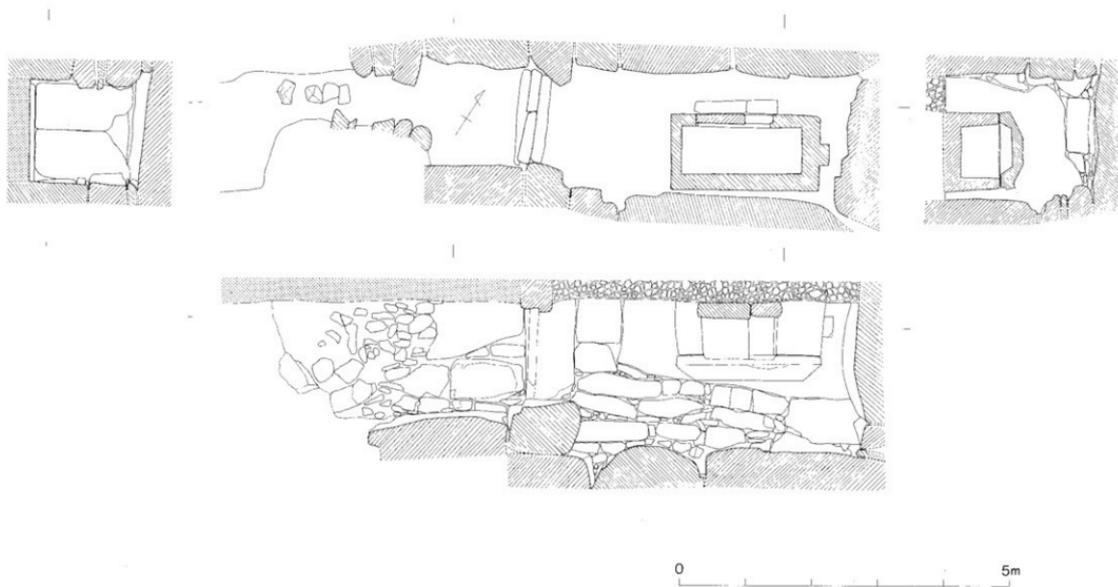


図42 妙蓮寺山古墳石室測量図（『妙蓮寺山古墳調査報告書』より転載）

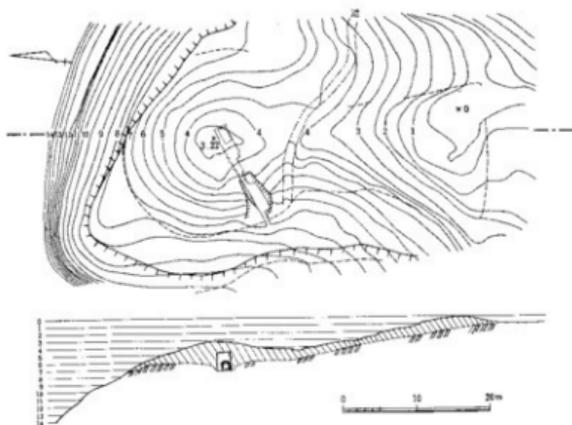


図43 妙蓮寺山古墳墳丘測量図（「妙蓮寺山古墳調査報告」より転載）

き、凝灰岩質の家形石棺一基を置く。石室・石棺の規模は以下のとおりである。

玄室 長4.40m	羨道 長2.00m以上	石棺 長2.20m
幅2.10m	幅0.84m	幅1.20m
高2.40m	高1.50m	高1.10m

玄室は奥行が幅の2倍強と細長いものであり、玄室と羨道の境には柱状の側石をせり出させて両袖としている。玄室の側壁は下方に大形の自然石を用い、上方には小さい割石を横積みにする。奥壁は自然石の巨石を置き、上方の隙間には小さい石を補っている。天井は大形の自然石二枚で覆い、床は拳大の河石を敷く。玄門は板状の二枚の切石で観音聞き状に閉塞し、さらに直径30cm、長さ150cmの門柱状の石で押える。石材はともに凝灰岩質である。

羨道は玄室と同様な積み方で構築しており、天井部は一枚の自然石である。

玄室の両壁には凝灰岩質の家形石棺が置かれている。身は剃り抜きで、蓋は内外とも家形四注式に加工されている。身の平側には長方形の横口が設けられ、二枚の閉塞石（一石は現存）で塞ぐようになっており、大念寺古墳と同様の構造である。縄溝突起は蓋に3個、身に1個存在する。

遺物は石室内よりガラス丸玉1、金銅鈴頭1、円頭大刀（柄頭）1、刀子残欠1、鉄斧3、鉄鏃残欠多数、彎残欠、鞍の鐵金具一背分、木心鉄張壺鏃一対分、鉄地金銅張雲珠2、鉄地金銅張辻金具4、鉄地金銅張杏葉4、鉄製鉸具、金銅方形金具1、須恵器提瓶1、甕1、壺1が検出され、須恵器は第Ⅲ期の特徴をもつ。

参考文献

『妙蓮寺山古墳調査報告』（島根県教育委員会、1964）

史跡 宝塚古墳

神戸川の西岸、出雲市下古志町に所在する出雲西高校の東方100mに位置し、標高8mの平地に築かれた古墳である。

周囲は水田地帯で、墳丘は現在天井石の一部が露出するまでに削平され、規模、形状とも不明である。葺石は認められないが、円筒埴輪片は墳丘の周囲や石室内で検出されている。

石室は内面を整装に加工する巨大な凝灰石で構築する片袖式の横穴式石室で南に開口し、内に割り抜きの横口式家形石棺が置かれている。規模は以下の通りである。

玄室 長 3.6m	石棺 長 2.3m
幅 2.0m	幅 1.2m
高 2.5m	高 1.5m

玄室は奥壁が1個で、西壁・東壁とは5・7個の切石で構成されている。基本的には下段に巨石を用いた二段積みで、上段がやや内傾している。東側2石、西側3石には上方の石材をうけるためにL字状に切られている。天井は巨大な2個の自然石で覆い、床には内礫が敷かれている。

玄室と羨道との境には東壁にのみ方柱状の自然石を立てて門形とし、上に横石を置いているが、羨道部には土砂が流入して詳細は不明である。

石棺は玄室の東壁に接して置かれている。蓋と身とも割り抜きであるが、身の南壁は別の切石で補っている。平部には2段のU字形をした横門を設け、その一部には雨取りを施している。蓋は内外とも家形四注式に加工しているが、縄掛突起は有しない。石棺の形態としては上塩治築山古墳の小棺や地蔵山古墳のそれと類似している。

副葬品については開口が古く不明である。

参考文献

1. 池田尚雄「宝塚古墳」(『出雲市の文化財』第2集、1960)
2. 『島根の文化財』第3集(島根県教育委員会、1963)

天神原古墳

1972年に実施された神西・神門地区圃場整備事業によって、発見された古墳である。場所は出雲市下古志町で、宝塚古墳の西方200mの水田に位置し、標高8mの旧自然堤防上に築かれている。

この古墳は盛土の大部分を削ぎで失い、僅かに基底部を水田下に留めていたものである。墳丘の詳細は定かではないが、径3mの円墳と考えられる。墳丘の周囲には多数の埴輪円筒の破片や人頭大の石を出す幅2~3mの溝状の凹地が認められた。

内部主体は既に破壊されていた。遺物としては埴輪以外に子持須恵器の破片がある。これは丁寧なつくりで、内面のタタキを消すなどの幾分古い手法を残している。

出雲平野にはこの古墳以外に後世の水田開発等により消滅した古墳が、かなりあったと推定される。

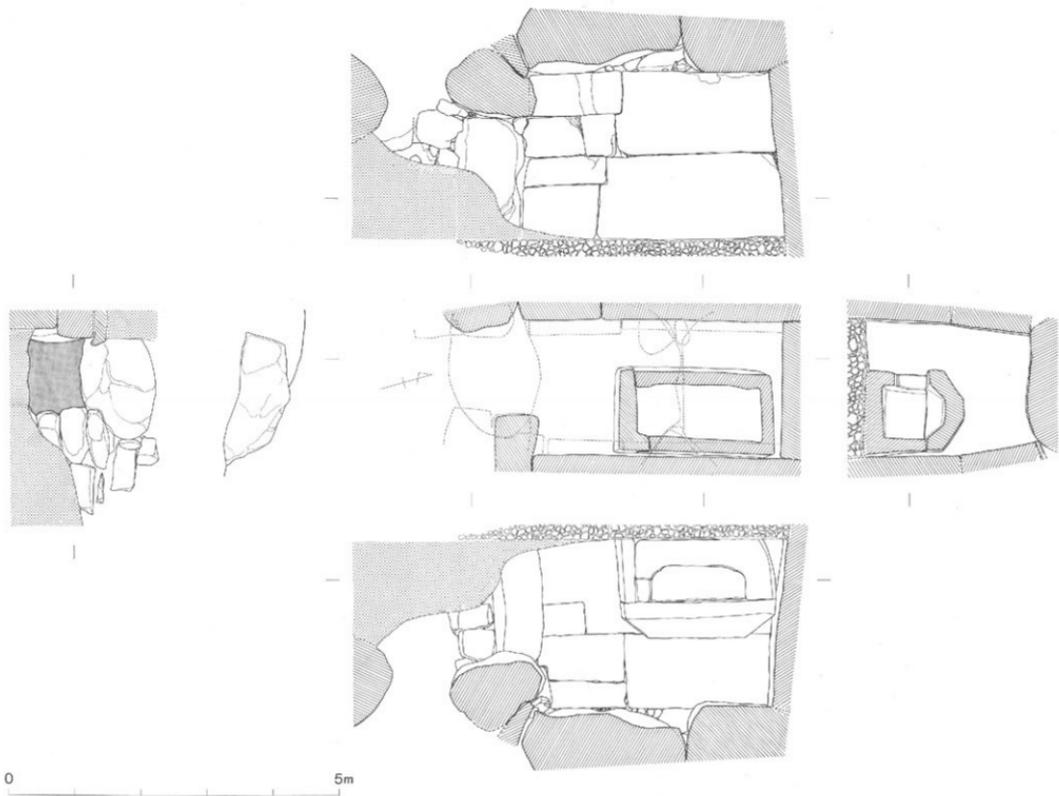


图44 宝塚古墳石室实测图

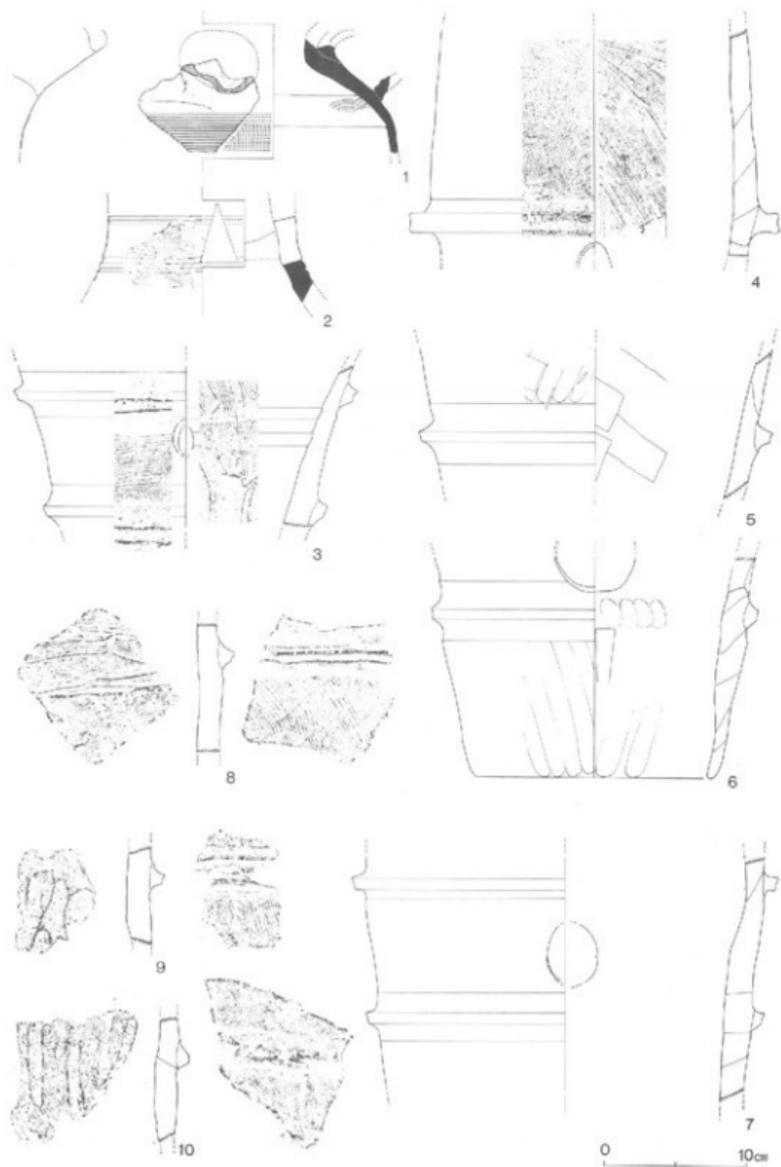


图45 天神原古墳出土遺物実測図 (実測 井上寛光)

神戸川流域の遺物散布地

神戸川下流域における遺物散布地は縄文時代から中・近世までの総ての時代にわたって存在している。特に、古墳時代以降は近世、近代の集落と重複し、旧自然堤防や微高地に多く分布する。遺構等の内容については一部調査が実施された天神遺跡以外は、ほとんど不明である。

以下、散布地一覧表と分布地図および三反谷遺跡出土の遺物実測図を掲載する。

表7 神戸川流域の遺物散布地一覧

遺跡名	所在	時期	文献
三反谷遺跡	出雲市上塩治町半分	縄文～中世	本書掲載
寺藤寺遺跡	〃 〃 池田	古墳	
築山遺跡	〃 〃 築山	古墳～中世	
宮松遺跡	〃 〃 宮松	古墳～平安	
塩治小学校付近遺跡	〃 塩治町揚	古墳	『出雲市の文化財』第1集
高西遺跡	〃 〃 高西	弥生～中世	
天神遺跡	〃 天神町	弥生～中世	本書掲載
古志本郷遺跡	〃 古志町本郷	弥生～中生	
田畑遺跡	〃 下古志町上組	弥生	本書掲載
上組遺跡	〃 〃 〃	古墳～中世	

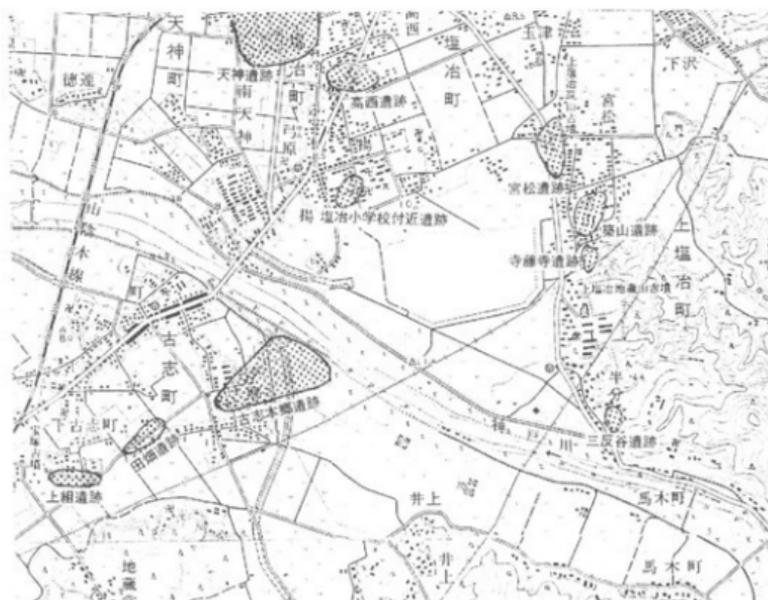


図46 神戸川流域の遺物散布地

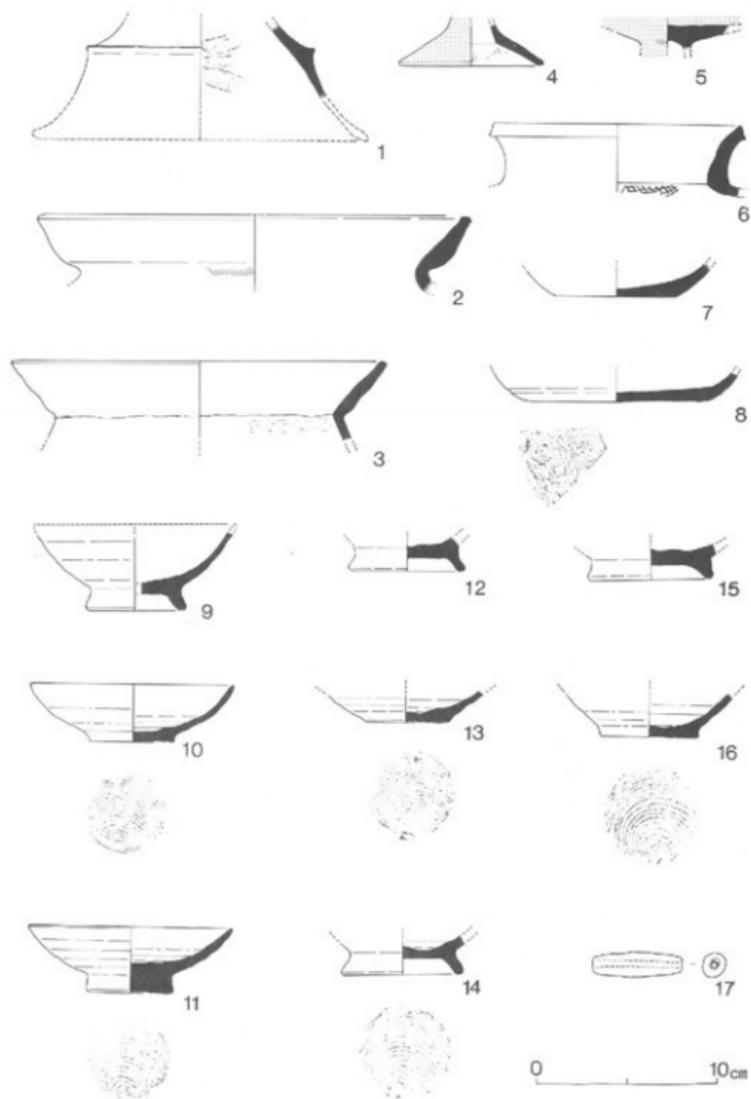


图47 三反谷遺跡出土遺物実測図

古志地区に分布する横穴群

神戸川左岸の出雲市古志町、下古志町一帯の低丘陵には井ノ上横穴群や地藏堂横穴群をはじめ多くの横穴群が分布している。

現在までに、9支群が発見されており、20数穴が開口している。それらの横穴は土に掘られていたため保存状態は悪く、半壊しているものが多い。穴の形態としては井ノ上横穴群が四注式整正家形の妻入構造をとり、放れ山横穴群と地藏堂横穴群が九天井系のものである。各支群とも凝灰岩質の組合せ式家形や石床をもつものが1～2穴存在する。

家形石棺……井ノ上横穴C支群・妙蓮寺横穴

石床……井ノ上横穴A, B, C支群・地藏堂横穴群

出上品には須恵器と直刀が知られているが、大部分は須恵器である。その土器の時期は、おおよそⅢ期末からⅣ期初めである。

なお、この横穴群が存在する丘陵周辺には横穴と相前後して築かれた大甕古墳・放れ山古墳・宝塚古墳・妙蓮寺山古墳などの大形古墳が分布している。

(西尾克己)

参考文献

池田義雄 「古志町井ノ上地区の横穴」 (『出雲市の文化財』第1集 出雲市教育委員会, 1956)



1. 天神原古墳
2. 宝塚古墳
3. 大甕古墳
4. 妙蓮寺山古墳
5. 放れ山古墳
6. 地藏堂横穴群
7. 妙蓮寺山横穴
8. 放れ山横穴群
9. 井ノ上横穴A群
10. ◇ B群
11. ◇ C群
12. ◇ D群
13. ◇ E群
14. ◇ F群
- A. 上組遺跡
- B. 田畑遺跡
- C. 本郷遺跡
- D. 古志廃寺
- E. 宇賀池跡

図48 古志地区の遺跡分布図

西 谷 墳 墓 群

1. はじめに

西谷墳墓群発見の端緒は、実は昭和28年にまで遡る。この年、今日4号墓と呼んでいる墳墓上を開掘中に土器類が出土し、当時島根大学学生であった池田満雄氏がこれを採集したことがその始まりである。その土器類の中には、今日古銅型の特徴壺とか特殊器台とかと呼んでいるものが含まれていて、当時においては意味のわからない特殊な土器として一部の人々の関心を引いたものであった。昭和31年に至り、池田氏は『出雲市文化財調査報告』第1集に「下米原西谷丘陵出土土器」と題してこの土器を紹介し、弥生式系に属するものとして位置付け、「下米原西谷式」と仮称して周辺の他の出土土器との違いを強調した。

その後十余年の間はこの丘陵への学問的な関心はみられなかったが、昭和45年10月に地元研究者数名がこの地を踏査して昭和39年豪雨禍による地崩れ面によって露呈していた土壌墓とその中に埋納されている土器類を発見し、この丘陵への関心は再び高まることとなったのである。折も折、この丘陵の西に接する地点に県立出雲商業高等学校が移転することとなったため、島根県教育委員会に事前の遺跡分布調査の依頼があり、昭和46年4月、当時同教委に勤務していた筆者が現地踏査して1号墓を発見し、さらに4号墓が墳墓であることを確認するとともに、5号墓が前方後方形を呈する墳墓であることを明らかにした。次いで翌昭和47年3月には、自然崩壊の恐れが強かった1号墓を発掘調査して（調査主体者は出雲市教育委員会、調査担当者は筆者）、これが四隅突出型方形墓であることを確認し、さらに昭和45年発見の土器類を伴う土壌墓および箱形石棺を土壌内に安置した番外2号墓をも調査して、その結果の概要を『季刊文化財』17号に報告した。

その後においても、この西谷丘陵における遺跡分布調査は島根県教育委員会や出雲考古学研究会員諸氏の手によって積分的に進められた。昭和50年8月には、建設省の依頼を受けた島根県教育委員会が斐伊川放水路建設予定地内およびその周辺の遺跡分布調査を実施することになり、同教委の委託によって筆者がこれに当たったが、その際にも西谷丘陵において7号墓および12～14号墓を発見した。一方、出雲考古学研究会員諸氏の分布調査も進んで、昭和47年12月の6号墓および8号墓の発見、昭和54年12月の10・11号墓の発見、翌昭和55年3月の2・9号墓の発見と新しい発見が相次ぎ、また同氏等の手によって昭和50年以降今日に至る間に2～7号墓および9号墓の実測も行われ、その成果をまとめて『西谷墳墓群』を出雲考古学研究会から公刊されることとなったのである。

これらの諸調査によって西谷丘陵に多数の墳墓が存在する事実が次第に明らかとなったのであるが、これらの墳墓は、四隅突出型方形墓と思われるもの7墓、前方後方形を呈するもの2墓、小形墳丘墓5墓、墳丘をもたない小規模な墳墓3墓の4タイプに分類でき、小形墳丘墓を除く他の墳墓がいずれも古墳時代創早期の様相を呈するものであることもあって、これは島根県下における極めて重要な墳

墓群であるといえるのである。特に四隅突出型方形墓は、昭和44年3月の邑智郡瑞穂町順庵原1号墓の調査以来中国地方を中心として次第にその調査例を増し、今日では20数例が明らかとなってきたのであるが、その性格等については未だ不明な点が多い。高根県下におけるこの式の墳墓については、これまで安米市仲仙寺8～10号墓、同市安養寺山1・3号墓、同市宮山4号墓がまとめて存在する荒島地方を中心として出雲東部に集中的に分布するとされてきた。しかし、この西谷墳墓群が明らかになったことによって四隅突出型方形墓は出雲西部にも多数群在していることが確認され、この式の墳墓の研究に新しい視角が要求されることとなったのである。



図49 西谷墳墓群分布図(1/7500)

2. 位置と環境

斐伊川が出雲平野に流入する地点の西岸には標高40～50mを測る発達した高位段丘と比高5～10mを測る中位段丘とから成る丘陵地が広がっているが、ここにいう西谷丘陵とはその高位段丘上の東半地域を指し、墳墓群はここに集中して分布している。この丘陵の山肌は崩れ易い土質であってあちこちに崩壊の禍痕を留めているし、またこの丘陵が良質の陶土を含んでいることから窯業用の採土がさかに行われ、これらによって多くの墳墓が破壊されてきた。ここに紹介する各墳墓の殆んども、これらの事情によって多く原形を損じているし、また既に消滅した墳墓もかなりあったろうと想

像されるのである。

周辺には、出雲市天神町天神遺跡・同市大津町石土手遺跡・同市大津町中山丘陵遺跡・同市大津町長者原遺跡・同市大津町斐伊川鉄橋遺跡等弥生時代から古墳時代にかけての諸遺跡の分布がみられるし、また出雲市今市町大念寺古墳・同市今市町塚山古墳・同市上塩治町築山古墳・同市上塩治町地蔵山古墳・同市上塩治町半分古墳・同市上塩治横穴群・同市今市町久微園横穴・同市大津町元柳現山横穴群等々の大小の後期古墳も数多く知られている。しかし、出雲市南部においては西谷丘陵以外に前半期の古墳及至は墳墓は知られておらず、ここでは古墳時代後期に至って突如として大念寺古墳や上塩治築山古墳等の大形古墳の出現がみられ、西谷墳墓群と大念寺古墳との間に古墳の空白期間が存在するのであって、西谷墳墓群のこの地方における特異な在り方に注目しなければならない。

3. 各墳墓の概要

(1) 1号墓

1号墓は、墳丘を有するものとしては最西北に位置し、昭和47年3月の発掘調査によって四隅突出型であることが確認された方形墓である。この墳墓は、土砂崩れや人為的採土によって半分以上が破損しており、墳麓に廻らされた石列も東南麓の一部を残すのみである。すなわち、墳丘の西南側は土砂崩れのために赤肌が露出し、西北側は採土のために削り取られ、東北側も一部を残して採土の跡を留めている。したがって墳墓の原規模は知る由もないが、現状では東北～西南約8m、東南～西北約5mの墳丘部を留め、西南部に残る石列は東側から約6mの地点までを残して、その西側はすでに失われている。また、墳丘の東側隅には長さ約1.5m、幅約1.3mの低い突出部が認められ、突出部の南側には約1mの長さに石列の残存がみられる。

石列は、墳丘斜面部の貼石列と、墳丘を囲む棒状列石、およびこの両者の間にある幅約30cmの溝状の空間部にほぼ平坦に敷き並べられたものとの三者からなっているが、外側の棒状列石は不整形な自然石を高さ約15cmになるように1列に立て並べ、溝状部分には偏平な小石を2～3列に並べている。墳丘斜面を覆う貼石は、その大部分が剥れてはいるが、一部に原状を保つものも存在している。次に墳丘の構造についてみると、現存する墳丘部の大部分は地山加工型であり、その高さは約1.4mで、その上に約30cmの盛土が認められる。

内部主体については墳丘の破損がひどいためにその詳細を把握することはできないが、4個の主体部の一部がそれぞれ残存していて、この墳墓の被葬者が4名以上にのぼることを物語っている。これらの主体部はいずれも上檜中に木棺を直接安置したもので、各墓壁は表層の封土中のみ掘り込まれていて地山面にまでは達していない。墓壁の規模等については、破損がひどいためにその詳細を知ることができない。

破損の少ない東南側には周溝の底部が残存しているが、表面の採土があるために、もとの周溝の深さは不明である。周溝の幅は約3.6mで、墳丘の規模に比してかなり幅広い。また、墳丘の東隅に残存

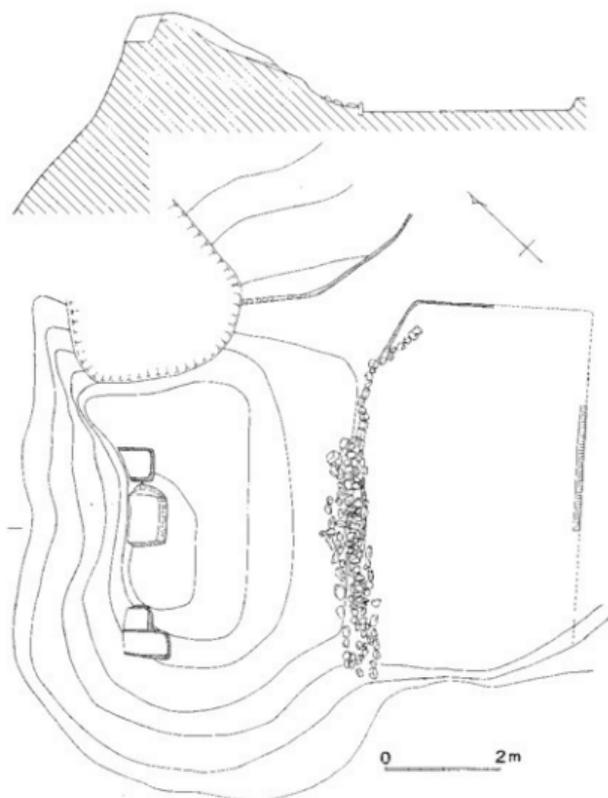


図50 西谷1号墓墳丘実測図

する突突部が周溝外縁と直結しており、この事実は四隅突出の意味を考える上で特筆すべきことである。

最後に出土遺物についてであるが、この墳塚に関係するものとしては周溝底で検出された小数の土器片のみが掲げられる。その中に口縁部片が含まれており、小片であるために詳細は把握し難いものの、そのタイプは二重口縁に沈線を残す式のもので、弥生終末期に属するものであろうと思われる。

(2) 2号墓

2号墓は、西北～東南に主軸を置く四隅突出型方形墓であるが、墳丘は西北側において戦後間もない頃の採土のために半分以上を欠損している。その規模は、主軸方向については明らかではないが、西南～東北で約1.5mを測り、南側と東側の隅の突出部は残存していて、この部分をも含めると約2.5mの長さを有する。未調査ではあるが、墳丘の断面から判断すると約1.5mの高さをもつ地山加工壇

の上に、さらに約50cmの厚さに盛土したものであり、墳頂平坦部の西寄りの地点では2個の土壌が確認されている。また、南側突出部付近では石列の一部も確認されており、若干の土器片も採集されている。これらの土器片には複合口縁の甗形土器・低脚付壺・鼓形器台・吉備型器台等の破片が含まれているが、その時期は弥生末から古墳時代初頭にかけてのものである。なお、墳丘および土器片の実測図は『西谷墳墓群』(出雲考古学研究会、1980)に掲載されている。

(3) 3号墓

3号墓は、一部に後世の加工痕を遺してはいるものの、西谷墳墓群中では最も保存状況の良好な四隅突出型方形墓である。主軸を西南西～東北東に置き、その規模は墳丘部のみで主軸方向約3.7m、西北北～東南南約2.7m、墳丘高約3.5mを測る。四隅の突出部もほぼ原形を留めているものと思われ、その長さは約8mで、これをも含めた墳墓の規模は主軸方向約4.7m、西北北～東南南約3.9mとなり、四隅突出型方形墓としてはかなり大形のものである。内部主体は不明であり、遺物も発見されていない。なお、墳丘の実測図は『西谷墳墓群』一前出―を参照されたい。

(4) 4号墓

且て池田彌雄氏が吉備型の器台と壺のセットを含む多数の土器片を採集して西谷墳墓群発見の端緒となった墳墓で、開墾によって若干変形はしているものの、ほぼ原形を留めた四隅突出型方形墓である。墳丘は主軸を東北東～西南西に置き、その規模は約3.2×2.6m、東側での高さ約3mを測る。墳丘の大半は地山を整然と加工したもので、盛土はさほど多くなく、四隅の突出部もその殆んどが残存している、この部分をも含めた規模は3.2×3.5mである。墳頂平坦面からは前述のように多数の土器片が出土しているが、これらは弥生末から古墳時代初頭にかけてのものであり、中に吉備型のものを含む点が特に注意される。なお、墳丘の実測図と出土土器については第2章「出雲西部の古代、中世の歴史」を参照されたい。

(5) 5号墓

封土の流失がひどいために墳形はかなり変形してはいるが、前方後方形を呈し、その規模は推定で全長約3.6m、後方部長約2.0m、内幅約2.0m、同高約2m、前方部長約1.6m、同幅約1.0m、同高約1mを測り、主軸を西北北～東南南に置いている。前方部のほぼ中央では土壌が1墓確認されているし、後方部の南東側裾付近では箱形石棺(番外3号墓)の存在が知られている。遺物や外部施設については何も知られてはいない。墳丘の実測図は『西谷墳墓群』一前出―参照。

(6) 6号墓

採土のために墳丘の南半は完全に消失し、北側も西側の多くを失っていて、変形がいちぢるしいが、四隅突出型方形墓であろうと推測される。その規模は東西約1.7m、高さ約1mを測り、盛土は約30cm程度で大部分は地山の加工によって形成されている。南側の崖面には4個の主体部断面が認められるが、いずれも土壌で、1号土壌と2号土壌との上面近くには土器の供献がみられる。器形は高坏と

器台であるが、小谷式併行と思われる古式土師器に属する。また、墳頂の北側と東側の斜面では貼石列も確認されている。墳丘と土層の実測図は、『西谷墳墓群』一前出を参照されたい。

(7) 7号墓

封土の流出がひどいためにかなり変形してはいるものの、前方後方形を呈する墳墓で、その規模は全長約3.2m、後方部長約2.1m、同幅約1.9m、同高約1.5m、前方部幅約1.3m、同高約0.5mを測り、主軸を西北～東南に置いている。前方部の南隅で若干の上器片が採集されているが、細片であるためにその形態等の様相を把握することはできない。実測図は『西谷墳墓群』一前出を参照されたいが、外部施設等については明らかにされていない。

(8) 8号墓

宅地造成工事によって墳丘が削平されて殆んど旧状を留めてはいるが、丘陵を大きく切断して築いたものようで、3.1×3.1m、高さ約2mを測る比較的大形の四隅突出型方形墓であったろうと推測される。周辺には多数の石材（自然石）の散乱をみ、若干の土器細片が採集されている。

(9) 9号墓

西谷墳墓群中の最東北端に位置する四隅突出型方形墓で、墳頂には三谷神社が鎮座し、神社造営の際に墳丘の一部を破損してはいるものの、比較的良く原形を保っている。主軸を東西に置き、その規模は東西約2.8m、南北約2.3m、高さ約4mを測る。西北隅と西南隅との突出部は表面からでもその規模が伺える程はっきりとしているが、東北隅は削り取られて原形を損じている。突出部を含めた規模は、推定で東西約4.8m、南北約3.8mを測り、西谷墳墓群を構成する四隅突出型方形墓の中では最も大形の墳墓である。この墳墓の西側には幅約4m、長さ約3.2mの切り通しが丘陵を切断して設けられており、また北側には8×3.0m以上、南側には1.2×4.0m以上、東側には8×2.0m以上の平坦面があって、丘陵を整然と加工して築造されたものであることを示している。精査されていないために内部主体や墳丘の諸施設等については判然とはしないし、また遺物についても殆んど知られてはいるが、竹管文を有する吉備型甕の突帯部を含む若干の土器片が採集されている。なお墳丘の図面については『西谷墳墓群』一前出に実測図が掲載されているのでこれを参照されたい。

(10) 10号墓・11号墓・12号墓

この3墓の墳墓はいずれも小規模な方形墳で、10号墓が7×1.1m、高さ約1m、11号墓が1.0×1.0m、高さ約2.5m、12号墓が1.0×1.0m、高さ約1.5mを測る。内部主体等一切不明であるが、四隅突出型方形墓や前方後方形墳墓よりも時期の降る一群で、中期的様相を備えたものではないかと推測される。

(11) 13号墓・14号墓

この2墓の墳墓はいずれも小規模な円形墓で、13号墓が径約1.4m、高さ約1.8m、14号墓が径約1.2m、高さ約1.5mを測る。内部構造等一切不明であるが、小形方形墓と同様に時期の降る

一群であろうと思われる。

(12) 番外1号墓

1号墓の北側に位置し、土壌内に木棺を安置した無墳丘墓で、昭和47年3月に発掘調査したものである。土壌の規模は、現状で上面長約2.2m、同幅70~90cm、底面長約2.1m、同幅54~60cm、深さ30cmを測り、西側欠損部を復原した推定長は約2.5mで、東北東~西南西に主軸を置く。土壌の西端部からは器台や壺等の土器類が検出されたが、これらはいずれも鎌尾Ⅱ式の特徴を備えた古式土師器である。なお、これらの土器中には吉備型に属するものは含まれていない。

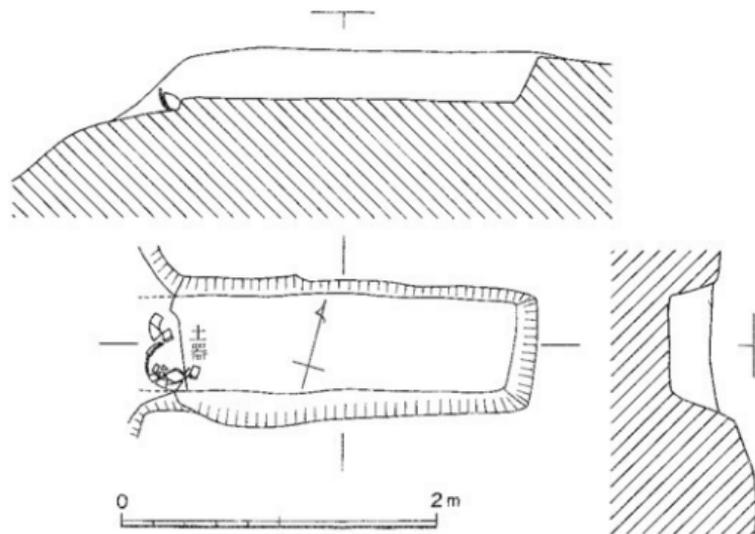


図51 西谷墳墓群番外1号墓実測図

(13) 番外2号墓

西谷墳墓群中最西北端に位置し、土壌内に箱形石棺を安置した無墳丘墓で、昭和47年3月に発掘調査したものである。土壌の西側半分は流失しているが、現状での土壌規模は底部長2.5m、同幅0.9~1.02m、深さ0.7mで、ほぼ南北に主軸を置いている。石棺の保存状態は良好で、その規模は内法長1.7m、同幅2.4~3.0cm、同高2.6cmを測り、床には粘土敷の上面に土砂利を敷き詰め、頭部に2個の石を重ねた枕を置いている。石材の大部分は自然の川石で、前後壁各1枚、左右壁各4枚を組み合わせ、7枚の蓋石を覆ったものである。遺物はまったく検出されていないので、その時期は判然とはしない。

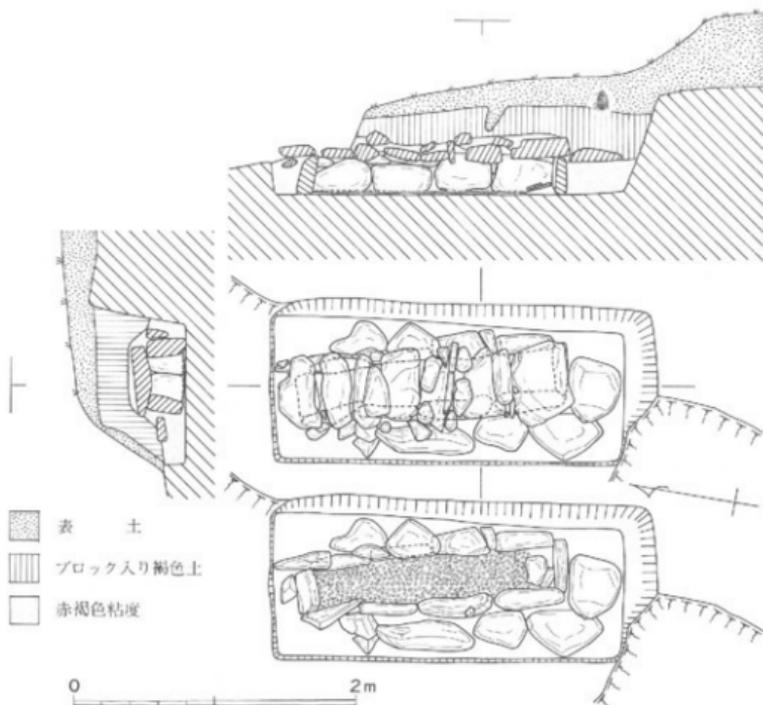


図52 西谷墳墓群番外2号墓実測図

⑭ 番外3号墓

5号墓の掘に位置し、主軸を東北東～西南西に置く無墳丘墓で、楕円形の土壌内に内法で長約1.6m、幅3.5mを測る箱形石棺を安置したものである。

4. 小 結

緒言においても述べたように、この西谷墳墓群は当地方の古墳の発生を考えるうえで極めて重要な遺跡であるし、また古備型土器と在地型土器との関係についての問題も投げかけている。なお、本稿で墳墓の語を用いたのは「西谷墳墓群」に依ったもので他意があるわけではない。(門脇俊彦)

〔参 考 文 献〕

1. 池田満雄「下来原西谷丘陵出土土器」(『出雲市文化財調査報告』第1集, 1956)
2. 門脇俊彦「また出た発生期の古墳」(『季刊文化財』17号, 1972)
3. 川原和人「島根県における発生期古墳」(『古文化談叢』4集, 1978)
4. 「古代の出雲を考える」2-西谷墳墓群-(出雲考古学研究会, 1980)

元権現山横穴群

1. 位置の環境

出雲市大津町上米原の斐伊川に面した元権現山と呼ばれる丘陵頂付近には3支群から成る元権現山横穴群があり、第1支群3穴、第2支群4穴、第3支群5穴がそれぞれ開口している。

この元権現山の周辺は、斐伊川の下流域とはいっても未だ出雲平野にまでは至っていない場所であって、あまり平地には恵まれてはならず、この丘陵をはさんで三谷と上米原の二つの谷合にわずかにまとまった水田がみられるに過ぎない。それだけに遺跡数も多くなく、周辺の遺跡としては元権現山古墳・長廻遺跡・長廻横穴の3遺跡が知られているのみである。

元権現山古墳は、元権現山横穴群が所在する地点から東北に向かって延びる尾根上に築かれた直径約1.7m・高さ約2mの規模をもつ未発掘の円墳で、墳丘の一部が崩壊しているが、墳丘上のあちこちには墓石と思われる礫が散在している。未調査の古墳であるために内部主体や遺物についてはまったく不明であり、その時期も明らかではない。しかし、墳形が円墳であることや周辺の遺跡の様相から考えて、おそらく元権現山横穴群とそう時期の違いはないものであろうと思われる。

長廻遺跡は、元権現山古墳の北方、斐伊川西岸にある岸橋の付近から入る長廻の小谷の東側丘陵麓に広がる遺物散布地で、土師器や須恵器の小片が散布している。未調査の遺跡であるために遺構等については一切不明であるが、その立地や散布している土器片からみて、おそらく古墳時代後半の集落跡であろうと思われる。遺跡規模はあまり大きいものではなく、6世紀後半以降に新しく形成された小集落の跡であろうと考えることができる。

長廻遺跡の北側に位置する丘陵の南向き斜面の中腹に、岩に掘った横穴が1穴開口しており、これを長廻横穴と呼んでいる。玄室の平面は正方形を呈し、四壁と天井部との界線が明瞭に認められる整美な作りで、天井は棟線の明瞭な四注式であり、妻の方に羨道が設けられた四注式妻入整正型の横穴である。古くから開口していたものようで、内部の土砂は認められないが、遺物についてはまったく不明である。周辺にはなお数穴の未開口の横穴が存在するように思われ、1単位群を構成していると考えられる。

元権現山周辺の上米原地区には、以上述べてきたような諸遺跡があって、古墳時代後半期の遺跡群を形成していることが知られる。

2. 横穴群の概要

(1) 第1支群

第1支群は、丘陵頂に近い西北に面した斜面に3穴開口していて、ほぼ同一のレベルに並んでいる。

1号横穴 玄室の平面は正方形を呈し、四壁と天井部との界線も明瞭に認められる。玄室長約2m、同幅約2m、同高約1.5m、羨道長約0.8m、同幅約0.9m、同高約1mの規模を備え、天井部

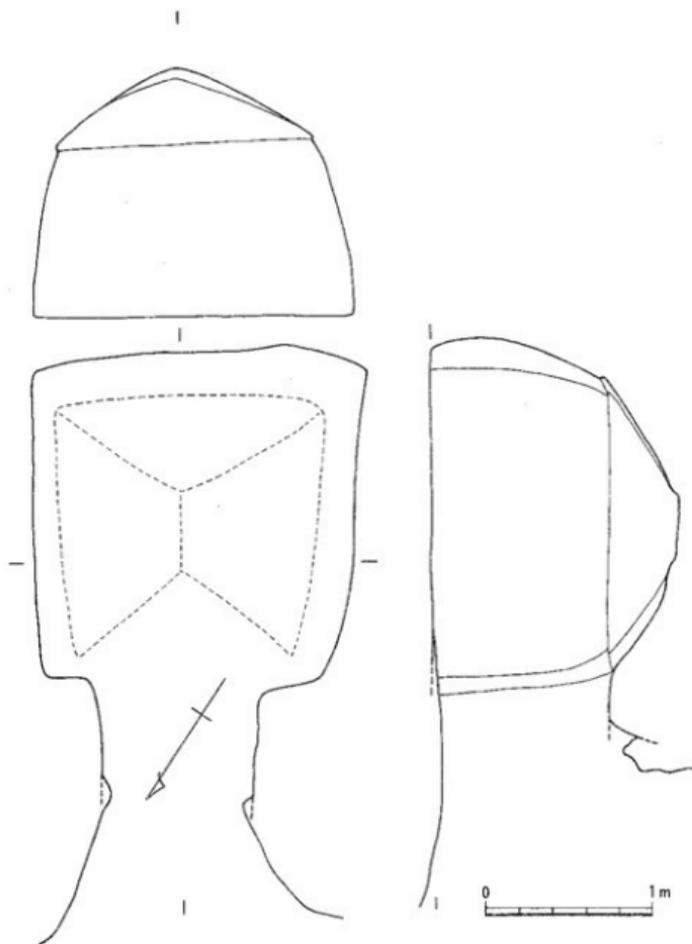


図53 元権現山横穴群第1支群1号横穴実測図

は四注式に加工され、棟線は主軸と平行に明瞭に描かれている。羨道は妻の方に取り付けられているが、羨道部の天井は中高になっていて、ややくずれたタイプである。また、玄室部の四壁も内傾がかなりいちぢるしく、全体的に丸味を呈し、整美ではあるがややくずれた様相をもつ四注式系妻入整正形横穴である。遺物についてはまったくわからない。なお天井の奥部には陰刻による雲状の画が描かれているが、2次的なものである可能性が高い。

2号横穴 玄室長約2.2m、同幅約2m、同高約1.7m、羨道長約0.6m、同幅1.1~1.2m、同

高約1.2mの規模を備えた平入型の横穴だが、棟は線状ではなく、主軸に直交する0.3×0.8mの細長い長方形の陰刻によって描かれている。整美な作りで、四壁と天井部との界線も明瞭に描かれた整正形の横穴であるが、四壁の内傾がかなりいちぢるしく、全体的に丸味の強い形状を呈している。玄室平面の四隅の丸味も強く、やや縦長の隅丸形状のものである。この2号横穴には壁に「王神」「四天王」の文字がみられるが、これらはいずれも2次的なものと思われる。遺物についてはまったく不明である。

3号横穴 基本的には前記1、2号の各横穴と同様の四注式整正形に属するが平面形はかなりくずれた形態で、全体的に整美さをやや失った横穴である。

(2) 第2支群

第2支群は、丘陵頂近くの南に面した斜面に4穴開口していて、約3mの高差をもって2段に築造されている。すなわち、1号横穴と2号横穴がほぼ同一レベルに位置しているのに対して、3号横穴と4号横穴とはそれよりも約3m高い位置に並んでいる。これら両段の列ともにさらに幾つかの横穴が横に並ぶ可能性は強く、また下段の下にもなお別の列が構成されているとも推測される。開口している4穴ともに、第1支群の各横穴と同様遺物はまったく知られておらず、したがってこの支群の構成時期を具体的に把握することはできない。また、3号横穴は土砂の流入がひどく、そのために規模や形態等についても明らかではない。

1号横穴 1号横穴は、元権現山横穴群の中では最も整美な形態を留めるもので、その規模は玄室長約1.9m、同幅約1.9m、羨道長約0.9m、同幅0.8~1.0mを測る。底部には多量の土砂が堆積しているので、高さや床の構造については明らかではない。玄室は四壁が直線的に作られていて均整のとれた正方形を呈し、中心線を軸として左右が対称になるように羨道部を設け、四壁の傾斜もほぼ同一の角度を示すように作られている。また、四壁と天井との界線は明瞭に認められ、主軸に直交する棟線をもつ天井部を備えた四注式平入りのものである。羨道部は横断面が方形を呈するように作られており、全般的に作りの丁寧な横穴で、ほぼ正南方向に開口している。

2号横穴 2号横穴は、1号横穴とはいちぢるしくその様相を異にしていて、極めて粗雑な作りの横穴である。この横穴は、玄室と羨道との区別がなく、前庭部からほぼ同一幅のまま奥壁近くまで達する式のもので、全長2.4m、幅1.0~1.1mを測るが、奥部では右壁が十分に削り込まれていないために左右が対称形にならず、奥壁は左に寄っていて、その幅は約0.7mしかない。左右壁はほぼ同角度で内傾しているが、奥壁はむしろ外反りになっている。床上には多量の土砂が堆積しているので、床の構造や高さについては明らかではない。天井部の作りも不整形であるし、壁面の調整も十分ではなく、金画的に作られた横穴ではないようである。このような細長のタイプの横穴は、出雲地方の平原部では殆んどみられず、斐伊川中流域以南の山間部において一般的に分布するものであり、また、その作りの粗雑なことや、3壁のみによる構造であることも例外的な様相だといわなければな

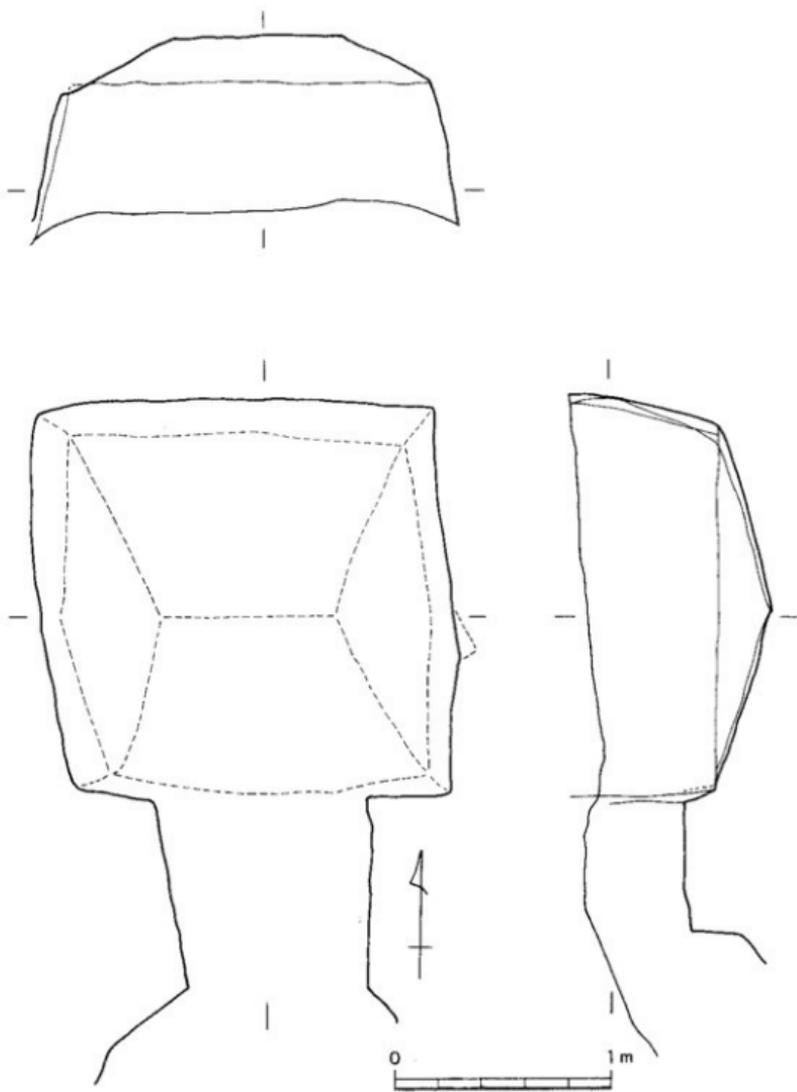


図54 元権現山横穴群第2支群1号横穴実測図

らない。

4号横穴 第2支群中の最奥部に位置する4号横穴は、玄室長約2.1m、間推定高1.4m、同幅

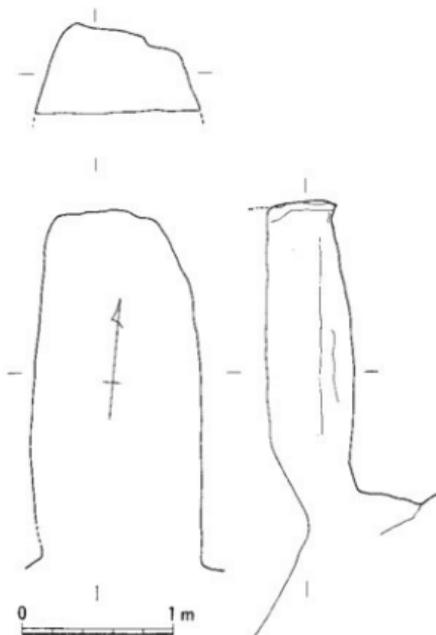


図55 元権現山横穴群第2支群2号横穴実測図

1.8~2.2m, 羨道長約0.4m, 同幅1.1~1.2mを測り、四壁と天井との界線や棟線が明瞭に認められる四注式整正平入形式のものである。その調整は比較的丁寧だが、成形はやや粗雑で、左右の均整は乱れ、玄室のプランは正方形を意図しながらも前すばみに作られており、四隅の削り込みも不十分な隅丸形状の様相を呈している。羨道部は長さが短い割に幅広く、その形態も不均整であって、粗雑な作りであるということができよう。床面には多量の土砂が堆積しているため、床の構造や羨道部の高さを確認することはできない。四壁はほぼ同一の角度によって内側に傾斜しているが、壁面の

縦は直線的であって殆んど湾曲してはいない。このような壁面の作りは第2支群の3穴には共通しており、それは後述する第3支群の各横穴にも同様にみられる傾向である。この点、第1支群の各横穴のそれがかなり極端な湾曲を呈しているのと対照的で、両者の間に工人の癖の違いが現れているようにも思われるのである。

(3) 第3支群

第3支群は、第2支群が所在している丘陵斜面と同一面の奥約20mの位置に5穴開口している横穴群であるが、そのうちの3穴は流入土が多いため内部の様子を把握することができないので、ここでは1号横穴と2号横穴との2穴のみについてその様相を述べることにする。また、この支群は約2mの高差をもって2列に並んでおり、各列にはさらに数穴が埋没しているものと思われる。なお、2穴ともに出土遺物についてはまったく知られていないので、その築造時期を明確に把握することは困難である。

1号横穴 1号横穴は、東南東に向いて開口する四注式整正妻入形式の横穴で、その規模は玄室長約2.1m, 同幅約2.1m, 同高約1.4m, 羨道長約1.1m, 同幅1.0~1.3m, 同高約1mを測る。

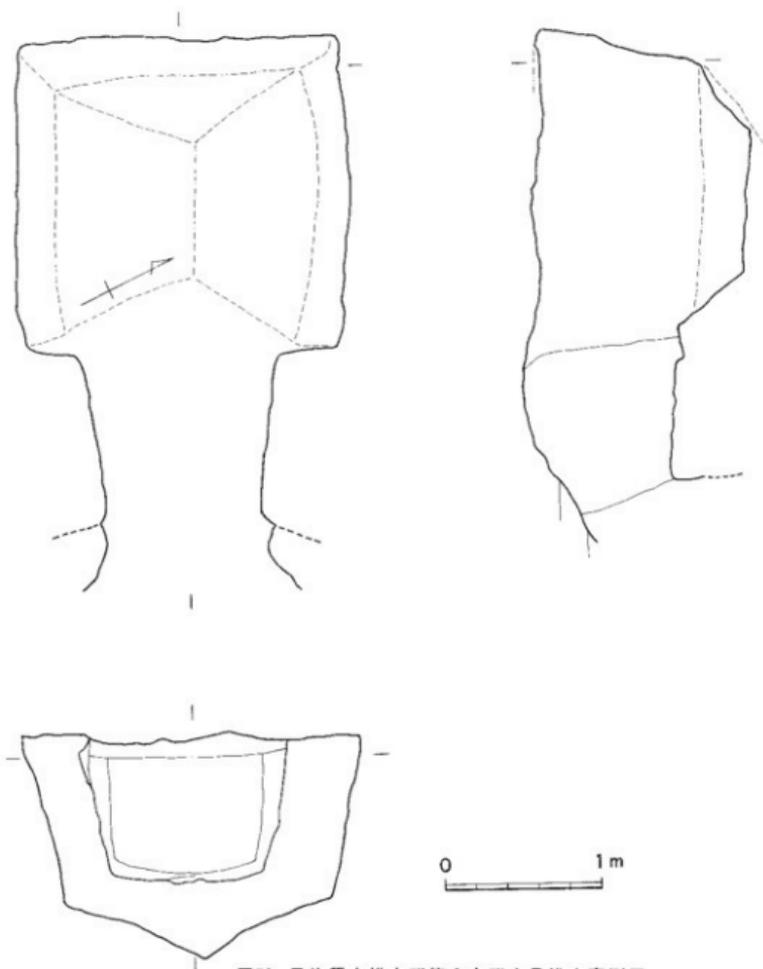


図56 元権現山横穴群第3支群1号横穴実測図

整美な横穴で、左右の均衡がよくとれており、玄室は四隅の削り込みのいきとどいた正方形状を呈し、羨道も横断面が均整のとれた方形を呈するように作られている。四壁と天井との界線や棟線も明瞭に認められ、また四壁の傾斜もやや内傾して同一角度に仕上げられている。床面には若干の土砂が堆積しているので、床の構造を知ることはできない。

2号横穴 2号横穴は、1号横穴の約4.5m奥で約2m下方に位置し、東南東に向かって開口している。その規模は、玄室長約2.2m、同幅約2.6m、同高約1.3m、羨道長約1.1m、同幅1.2～1.5

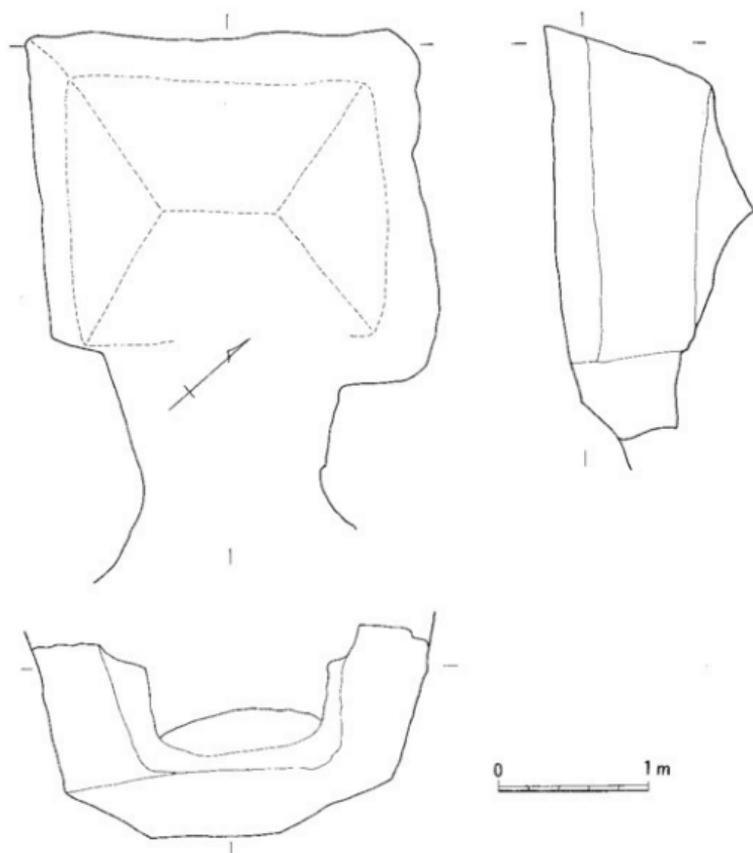


図57 元権現山横穴群第3支群2号横穴実測図

m, 同高約0.8mを測り、1号横穴に比較するとかなり広い空間を有するが、高さはやや低い。作りはあまり整美ではなく、玄室は正方形を意図しながらも幅広で全体的にねじれており、羨道も左右の均衡を失し、壁面の調整も十分ではない。四壁と天井との界線や棟線は明瞭で、羨道も横断面が方形を呈するように作られているが、やや均整を失っている。床面には土砂が堆積していて、床の形態等については知ることができない。壁面の縦はいずれも直線状になるように作られていて、この点は第2支群の各横穴や第3支群1号横穴に共通であるが、内傾する角度には壁ごとに違いがあり、そのために床面と四壁との接線を結んだ四角形と四壁と奥壁との界線を結んだ四角形の間には位置的なずれが生じている。天井部の各面は内側に反り出すように作られており、この傾向は第2支群第3支群の各横穴に共通な様相で、第1支群のそれとは反り方が逆になっていることが注意され、ここに

も工人群の一端が現われているように思われるのである。

3. ま と め

出雲国は全国的にみても田舎の横穴分布地帯であるが、その様相は必ずしも一律ではなく、基本的には丸天井式と四注式との両式の横穴が交錯して分布している。このうちの四注式系のは断面三角形と整正形との両者に分類でき、それらはさらに妻人形式と平入形式とに分けられる。これら四注式系横穴の各形式のものはそれぞれに独特の分布圏を形成していて、出雲国における後期古墳の在り方の複雑さの一端を示している。出雲市の東南部も横穴が濃密に分布する地域の一つに掲げられるが、ここに分布する横穴は整正妻人形式のものを主流とし、この形式の横穴の分布の中心地域となっている。元権現山横穴群を構成する各横穴も、第2支群2号横穴を除けばいずれも四注式整正形に属しているが、ここでは妻人と平入との両形式のものが混在していて、出雲市東南部における横穴分布の在り方の中では例外的な群の構成を成しているのである。四注式整正平入形式の横穴は、出雲地方独特の石棺式石室と密接な関連を有しているのであるが、斐伊川をはさんで元権現山に隣接する斐川町にも石棺式石室の存在が知られていて、元権現山横穴群中の平入形式のものとの関連を思わせるものがある。しかし、その詳細については未だ判然とはしておらず、同一群中に両形式のものが混在することの意味とともに今後の検討を待って明らかにされなければならない。

元権現山横穴群はこの外にも様々な注目すべき問題点を含んでいるが、その一つに第1支群と第2支群との技法的違いを掲げることができる。このことについては前にも触れたところであるが、四壁面の縦の線や天井面のふくらみの具合等に両者の違いが歴然と示されていて、今後の横穴墓研究に欠かすことのできない工人集団の問題についての示唆を与えてくれているようにも思われるのである。なお、第2支群と第3支群とはわずかに約20mの間隔を置いて同一斜面に所在しているのであり、その技法的特徴も共通しているところから、両者の間にはなお多くの横穴が存在していて同一の支群となっている可能性も考えられる。

最後に、この横穴群の築造時期について触れておこう。このことについては、解決の手掛かりとなる遺物がまったく知られていないので、今日の段階では不明という外はない。しかし、周辺の横穴の時期等から考えるとおそらく7世紀頃の築造によるものとみて誤りはないと思われるが、他の諸々の問題点とともに今後の具体的な検討が待たれるところである。 (門脇俊彦)

〔参考文献〕

1. 池田満雄「大津町上米原の横穴」(『出雲市文化財調査報告』第1集, 1956)
2. 門脇俊彦「山陰地方横穴墓序説」(九州古文化研究会『古文化談叢』, 1980)

かみ うん な 上 塩 治 横 穴 群

1. はじめに

飯石郡三刀原町給下から斐伊川と神戸川とはさまれた地域を北に延びる山塊が出雲平野に突き出した部分の先端部は、縦横に織りなす谷合を含んだ丘陵地帯となっている。その西南端に位置する出雲市上塩治町南部には多数の横穴墓が群在している。この横穴群が世に知られるようになったのは、昭和31年に筆者が「出雲国大井谷横穴群の研究」と題して『私たちの考古学』(8号)にこれを紹介し、さらに池田満雄氏が『出雲市の文化財』(第1集)にその概要を載せられたことに始まる。ところが、その当時確認されていた横穴は、大井谷と呼ばれる谷合の両側の丘陵斜面に築造されている8群21穴のみであったので、これを大井谷横穴群と呼ぶことにしたのである。

その後、県立出雲高等学校社会部の諸君や当時島根大学の学生であった西尾克己君らの踏査によってさらに多数の支群が確認された。また、昭和47年頃からこの地域で発生してきた各種開発計画に対処するために島根県教育委員会が数度にわたって実施した分布調査(数ヶ所の試掘調査を含む)の結果、今日においては第1表に示す32群107穴が知られるところとなった。しかもこれらの横穴墓は、当初考えられていたように大井谷の両側斜面を分布の中心とするものではなく、この谷の西側斜面をなす丘陵全域を中心として大井谷・三反谷・半分にわたる広範囲の地域に群集する横穴群であることが判明した。したがって、大井谷横穴群と呼ぶのは不適当となったため、この横穴群の名称を改めて上塩治横穴群と呼ぶことにしたのである。

また、この横穴群中のいくつかの支群は、これまでに数度にわたる発掘調査も行われてきた。即ち、昭和30年には美多実氏によって第6支群(エーグ支群)4穴が調査されたし、昭和37年には近藤正氏によって第32支群(工業高校裏支群)の一部が調査された。さらに建設省の依頼を受けた島根県教育委員会は、昭和53年に第17支群(岸宅裏支群)を、また昭和54年に第22支群と第27支群とをそれぞれ発掘調査したのである。これらの踏査の結果、謎の多かったこの上塩治横穴群の内容も次第に明らかになってきたのであるが、これらの結果についての詳細については後日改めて報告書を公刊する予定であるので、その概要を記すにとどめることにする。

2. 遺跡の概要

前述したように、上塩治横穴群においてはその構成支群32群107穴が確認されており、島根県下でも最大規模の横穴群であることが明らかになった。しかも、この横穴群の築造されている丘陵は、その先端部を除くと凝灰岩から成る岩山である。横穴墓はその大部分が凝灰岩に掘られたものであるので、保存状態も良好なものが多い。それだけに各横穴墓の構造も比較的良好に保たれ、掘削工程の一端を示すノミ痕や削り痕もその形跡をよく留めている。これらの横穴を支群ごとに表示したのが表8である。以下、表8にしたがって各支群の概要を述べることにする。

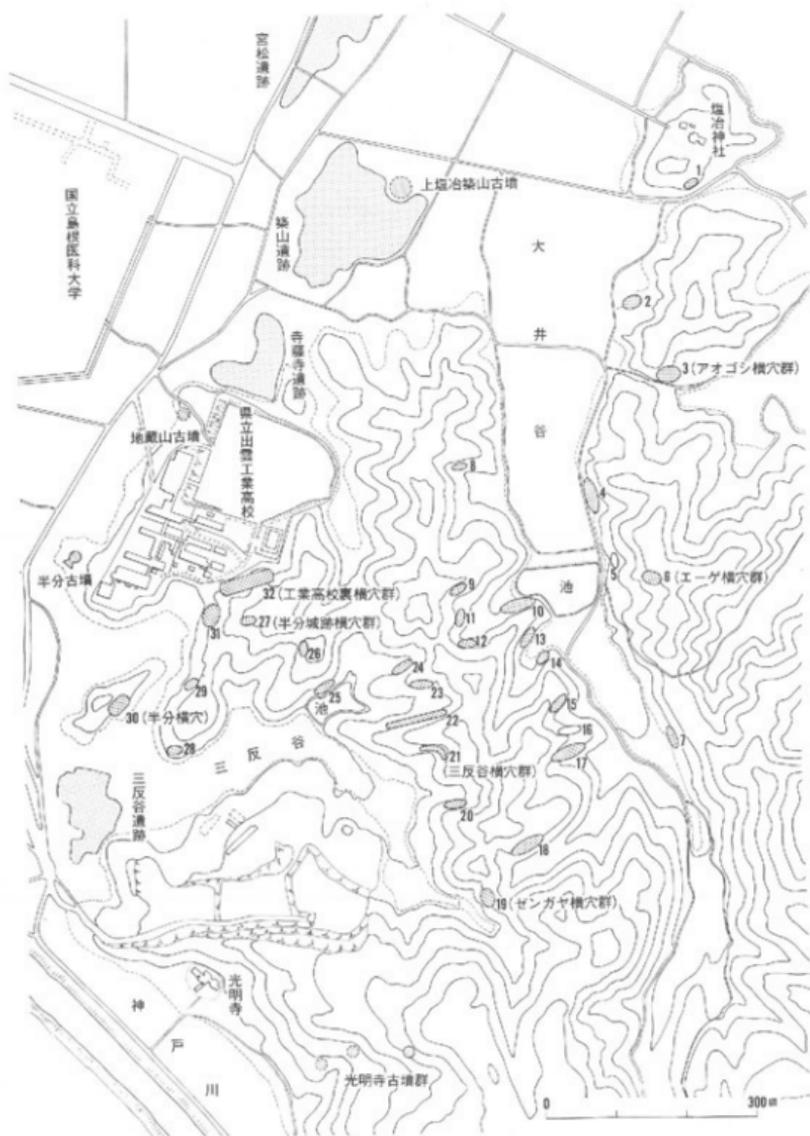


図58 上塩冶横穴群分布図

表8 上塩冶横穴群支群別一覽

支群番号	確認穴数	形 式	遺 物	備 考
1	1	四注式妻入整正形	不 明	
2	1	不 明	不 明	消 滅
3	2	不 明	須恵器類	アオブシ支群
4	2	不 明	須恵器類・耳環	
5	2	不 明	不 明	
6	5	四注式妻入整正形	須恵器類・鉄器類・鉄釘	宛あり・エーグ支群
7	1	四注式妻入形式	不 明	
8	5	四注式妻入形式	不 明	横穴群前面の畑に須恵器片散布
9	1	四注式妻入整正形	不 明	
10	5	丸天井式	不 明	
11	2	不 明	不 明	
12	2	四注式妻入整正形	不 明	
13	4	不 明	不 明	
14	1	四注式妻入形式	不 明	
15	2	四注式妻入整正形	不 明	
16	1	四注式妻入整正形	不 明	
17	11	四注式妻入整正形が多い	須恵器類・土師器類・鉄器類	屍床を兼ねたものあり・原宅裏支群
18	2	四注式妻入整正形	不 明	1穴は複室構造
19	4	四注式妻入整正形	不 明	
20	5	四注式妻入整正形	不 明	
21	5	四注式妻入整正形	不 明	
22	17	四注式妻入整正形	須恵器類・土師器類・鉄器類	
23	1	四注式妻入整正形	不 明	
24	1	四注式妻入整正形	不 明	
25	1	四注式妻入整正形	不 明	
26	1	四注式妻入整正形	不 明	
27	4	丸天井形式が中心	須恵器類・耳環	
28	1	不 明	不 明	
29	2	四注式妻入整正形	不 明	
30	1	不 明	不 明	
31	2	四注式妻入整正形	不 明	1穴には組合せ式家形石棺
32	12	四注式妻入形と丸天井式が共存	須恵器類・鉄器類・耳環	組合せ式家形石棺・大部分消滅
計	107			

(1) 第 1 支群

塩冶神社が鎮座する丘陵の東南端に1穴開口している。土に掘った横穴墓で、羨道部は崩壊しているが、玄室部の大部分は現存している。内部には大量の土砂が流れ込んでいるためにその詳細については判然としないが、天井部と四壁とが明瞭に区切られた整った形式の四注式妻入形横穴墓である。なお、周辺には複数の横穴墓が群在していて横穴群を構成しているものと考えられるが、どの程度の規模から成る支群であるのかは現状では不明というほかない。出土遺物も明らかではなく、したがってその築造時期についても判然とはしない。

(2) 第 2 支群

昭和18年当時には土に掘った横穴墓が1穴開口していたが、その後の採土工事によって消滅した。周辺にはなおいくつかの横穴墓が埋没している可能性が高い。遺物についてはまったく不明である。また消滅した1穴についても、存在していた頃には流入土が多く、その形式を把握することができなかった。

(3) 第 3 支群

土に掘った横穴群で、昭和30年頃には約10穴が開口していたが、その後大部分が消滅して、現在ではわずかに2穴が半壊の状態が残存しているに過ぎない。横穴墓の形式については、破損がひどいためにその詳細を把握することができない。またこの支群はアオゴン横穴群とも呼ばれ、昭和20年代の末頃に須恵器類が出土している。

(4) 第 4 支群

凝灰岩に掘った横穴墓であるが、以前に道路を拡幅した際大部分が失われ、今日ではわずかに2穴が半壊の状態が残存している。道路工事の際に多数の須恵器類が出土したというが、今日では第2図に示す12点の須恵器と耳環3個が残っているに過ぎない。この須恵器の詳細については次項で述べることにするが、山本清氏の編年にかかる山陰の須恵器Ⅱ期に属する新しい形式のものである。しかし、上塩冶横穴群出土として知られている須恵器の中では、最も古い形式を備えたものである。横穴墓の形式については、破損がひどいためにその詳細を知ることができない。

(5) 第 5 支群

凝灰岩に掘った横穴墓で、ほとんどが崩壊し、今日ではわずかに2穴が残り、それらの奥壁を留めるのみである。したがって横穴墓の形式を把握することはできないし、また遺物についても明らかでない。

(6) 第 6 支群

ユ-ゲ支群とも呼ばれ、凝灰岩に掘った横穴墓5穴が確認されている。このうちの5号横穴の現状は前面に土砂を被って横穴の存在がかるうじて知られる程度であり、したがって内部の状態はまったくわからない。1～4号の4穴は昭和30年に美多実氏によって発掘調査されたもので、いずれも四壁と天井部との区別の明瞭な整った形を備えた四注式妻入形式の横穴墓である。1～2号穴はやや

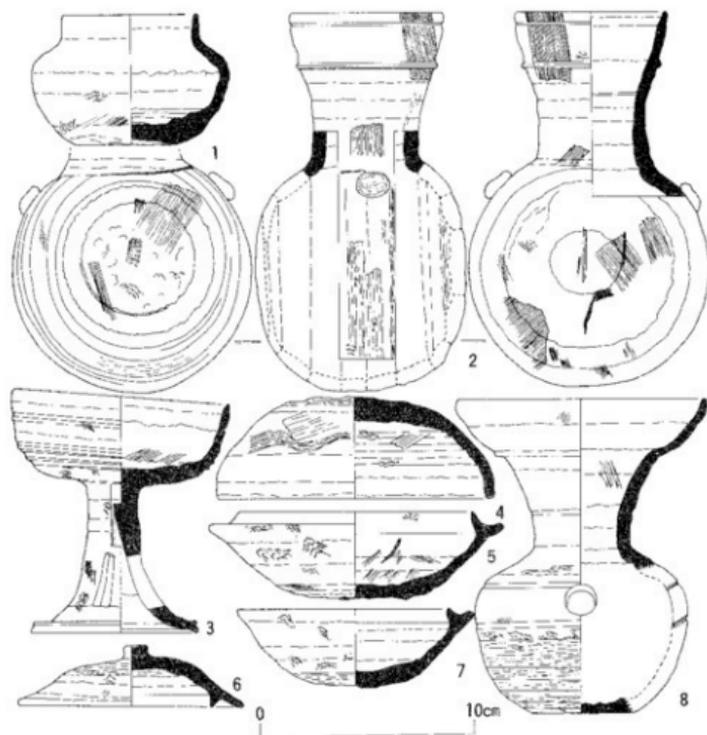


図59 上塩冶横穴群第4支群出土土器実測図

風化していると認められるが、3～4号穴はノミ痕や削り痕もよく残っており、保存状況はきわめて良好である。

第3図に示す3号穴は、奥行き2.1m、幅2.2mの正方形を呈する平面形で高さ約1.7mの玄室を備え、左右に無縁の屍床を設けたきわめて丁寧な作りの横穴墓である。羨道部は奥行き1.4m、幅1.0～1.2mを測る比較的長いもので、玄室、羨道ともにやや前開きの形状を呈する。前庭部はあまり規則的には作られていないが、玄室と羨道とは左右の均整のとれた整美な作りである。天井部と四壁との間には明瞭な縁が引かれており、四壁には顕著な傾きはみられず、天井部は明瞭な四注式妻入の形に作られている。床面は前にやや傾斜しており、羨道部の前面の床には段が設けられている。また、前庭部には閉塞石に使われたと思われる栗石が散乱している。

第4図に示す4号穴も、3号穴と同様に左右の均整のとれた整美な横穴墓である。玄室の奥行き約

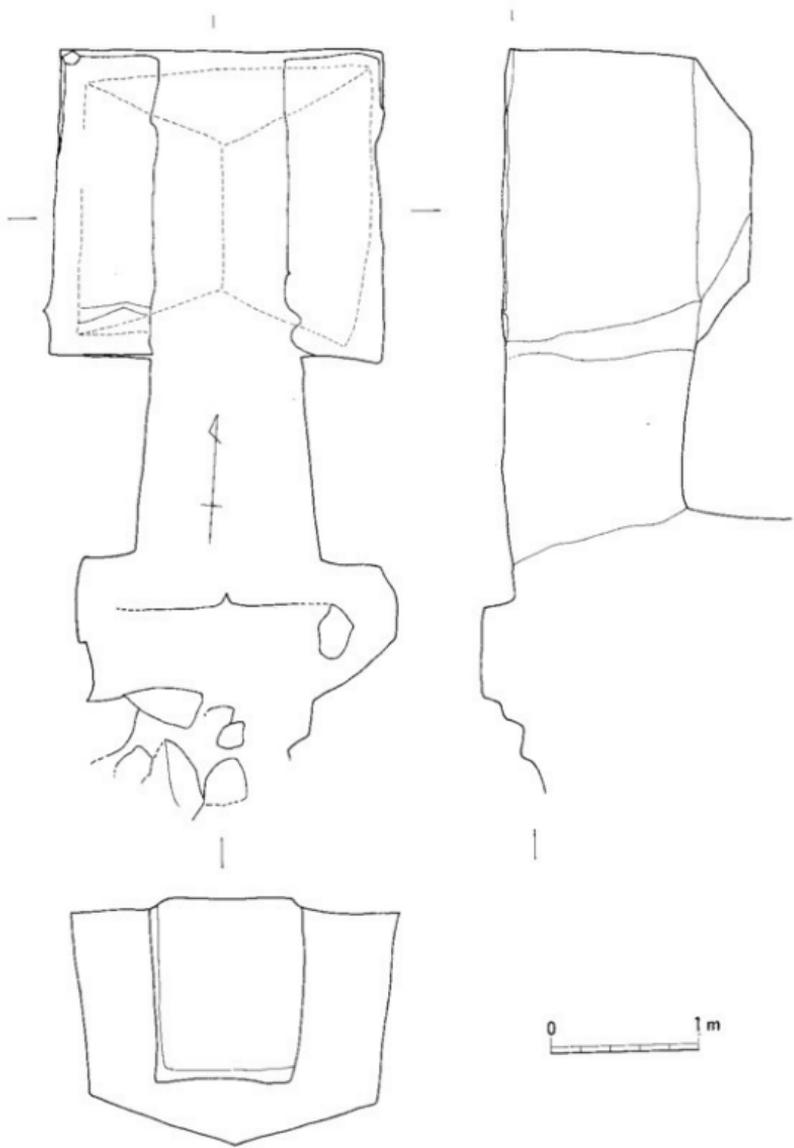


图 60 上塩冶横穴群第 6 支群 3 号横穴实测图

2m, 同幅約 2.1m, 同高約 1.6m, 羨道長約 0.8m, 同幅約 1.2mを測り, 正方形を呈する平面形の玄室を備え, 四壁の傾きは小さく, 四壁と天井部との間には明瞭な界線が引かれている。天井部は四注入妻入形に加工され, 丁室に仕上げられている。玄室の左右には無縁の屍床を配し, 羨門は長方形に加工した凝灰岩の切石 2個で閉塞されている。1～2号穴も, これら 3～4号穴とほぼ同様の作りである。

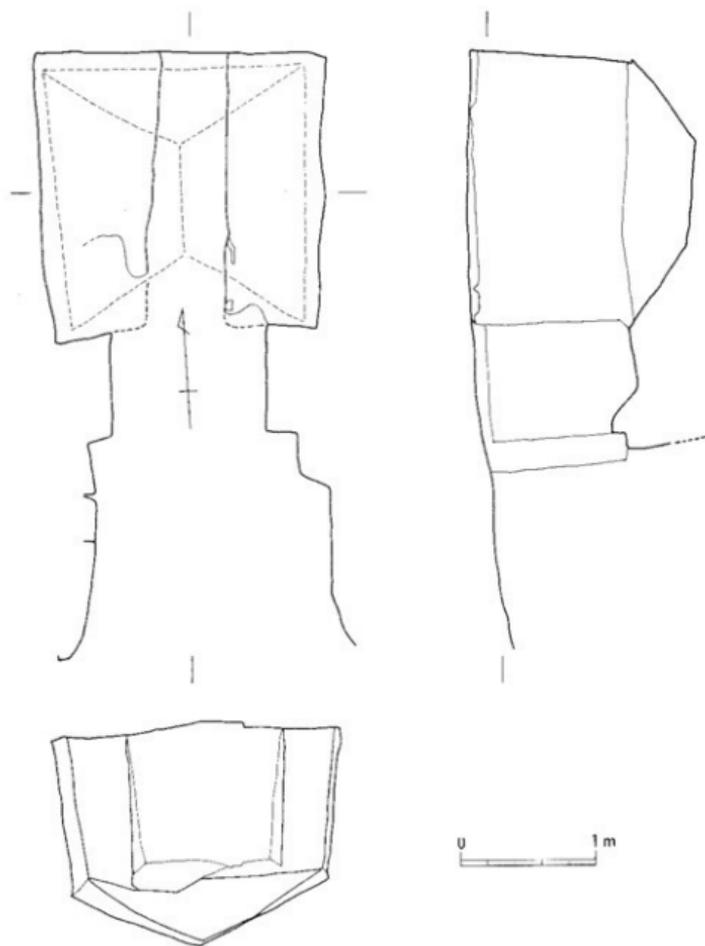


図 61 上塩冶横穴群第 6 支群 4 号横穴実測図

この第6支群からは多数の須恵器類や直刀、また鉄鏃、釘等の遺物が検出されている。即ち、1号横穴からは小形高坏1・長頸壺1・土師器坏1が、3号横穴からは坏1・蓋（ツマミあり）2・長頸壺2が、4号横穴からは長頸壺2・坏身5・蓋（ツマミあり）4・高坏1・蓋（坏蓋ではなく、ツマミのないもの）1等の須恵器類と、鉄鏃・釘・直刀が出土している。遺物については後述するところであるが、特に須恵器類には小形化したものが中核で、Ⅳ期で最も新しい形式に属するものである。

(7) 第7支群

大井谷の東側丘陵斜面に並ぶ7支群のうちで最も奥部に位置している。1穴開口しており、四注式妻入りの天井部を備えているが、流入土が多くて詳細については明らかではない。周辺にはなお多数の横穴墓が埋没しているであろうが、その実態は不明であり、また遺物についても判然とはしない。

(8) 第8支群

岩に掘った横穴群で、5穴確認できる。このうちの3穴は比較的良好な保存状態を保っているが、他の2穴は破損がひどい。3穴は四注式妻入形式に属するもののようであるが、流入土が多いために詳細については明らかではない。遺物についても今日の時点では不明である。

(9) 第9支群

凝灰岩に掘った横穴で、丘陵頂部近くの高所に1穴開口している。周辺の状況から推察すると、かなり多数の横穴墓によって構成されている支群のように思われる。開口している1穴は、四注と天井部との間に明確な分線をもつ整った形の四注式妻入形式の横穴墓である。

(10) 第10支群

凝灰岩に掘った横穴群である。現状では5穴が確認されており、いずれも九天井に近い形式の構造を備えている。1号穴の床面には排水溝が認められる。遺物については明らかではない。

(11) 第11支群

凝灰岩に掘った横穴群であるが、母岩が人為的に削り取られたために殆んど消滅し、わずかに2穴の奥壁を残すのみである。したがって横穴の形式については明らかではないし、遺物についても不明である。また、周辺の様子からみて隣接する斜面にも同一支群の一部が埋没している可能性も強い。現状ではどの程度の規模の支群であるか適確に把握することは難しい。

(12) 第12支群

凝灰岩に掘った横穴群で、2穴確認できる。周辺の様子から察して、他にも多数の横穴墓を含んだ比較的大規模の支群のように思われるが、現状では適確に把握することができない。開口している2穴は、いずれも四注式妻入形式に属する整正形の横穴墓である。遺物については明らかではない。

(13) 第13支群

凝灰岩に掘った横穴群で、現状では4穴確認できるが、それもほとんど水田面下に埋没している。したがって横穴の形式を把握することはできないし、遺物についても不明である。

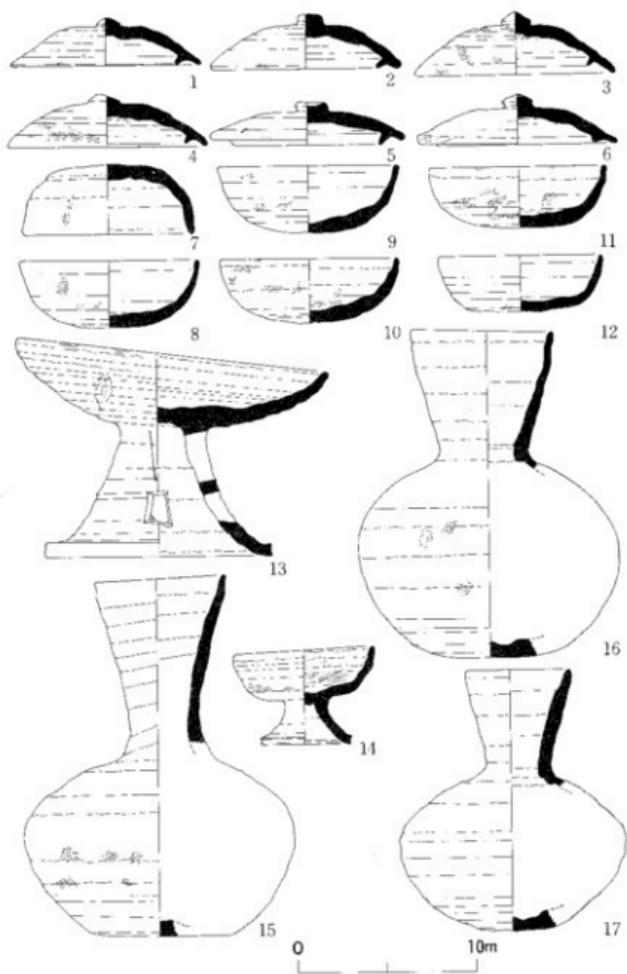


图62 上塩冶横穴群第6支群出土土器実測図

04 第 14 支 群

凝灰岩に掘った横穴群で、1穴開口している。あまり整ったタイプではないが四注式妻入形式の横穴墓で、保存状況は比較的良好である。流入土が多いので、詳細については判然とはせず、遺物についても明らかではない。なお、周辺には多数の横穴が埋没している可能性が強い。

05 第 15 支 群

凝灰岩に掘った横穴群で、丘陵頂部に近い高所に2穴開口している。いずれも整ったタイプの四注式妻入形式の横穴墓であるが、流入土が多いために詳細に把握することはできにくい。開口している2穴間の距離が比較長いため、その間になおいくつかの横穴墓が埋没している可能性が強い。また周辺の様相から察して、かなり大規模な支群ではないかと思われる。遺物は不明である。

06 第 16 支 群

凝灰岩に掘った横穴群で、この支群も15支群と同様に丘陵頂部近くの高所に位置している。現状では開口しているもの1穴が確認されているに過ぎないが、周辺の状況から判断してなお多数の横穴墓が埋没しているものと思われる。したがって、かなり大規模な支群を形しているものと推察される。開口している1穴は、四注式妻入形式に属する整形の横穴墓である。遺物についてはまったくわからない。

07 第 17 支 群

岸氏宅裏支群とも呼ばれているもので、凝灰岩の山肌一帯に3段にわたって11穴が開口している。この支群の分布範囲は広く、横穴間の距離がかなり開いているところも多数認められるので、さらにそれらの間には相当数の横穴墓が埋没しているものと思われる。開口しているものについては、昭和53年の夏に島根県教育委員会によって発掘調査がなされ、出土遺物からこの支群の年代が明らかになった。11穴の形態について見ると、四注式妻入整形のものが7穴で最も多く、やや不整形な四注式妻入形式2穴、四注式平入整形形式と作りかけのために形を成していないもの各1穴で、この支群も四注式妻入整形形式のものを基本としていることが知られる。

第6図に示す1号横穴は、玄室、羨道、前庭部ともに左右の均整のとれた整美な作りであり、四壁の傾きはやや強いものの、天井部との間には明瞭な界線が認められ、天井部の棟線も確実に描かれた四注式妻入整形の横穴墓である。その規模は、玄室の奥行き約1.9m、間幅約2.2m、同高さ約1.4m、羨道長約1.1m、同幅1.1m弱を測り、床面は前に傾斜している。玄室の作りもやや幅広く、正方形に近い平面形ではあるが、隅には丸味があって、隅丸形状を呈しており、第6支群のものと比較するとかなり趣きを異にしている。羨道部には閉塞石が置かれていたが、凝灰岩の切石と栗石とを併用して閉塞していたようである。

第7図に示す6号穴は、玄室、羨道、前庭部ともに左右の均整を意図してはいるものの、玄室はやや粗雑に作られていて、その平面形はかなり不整形である。また四壁と天井部との界線も、左右壁はきち

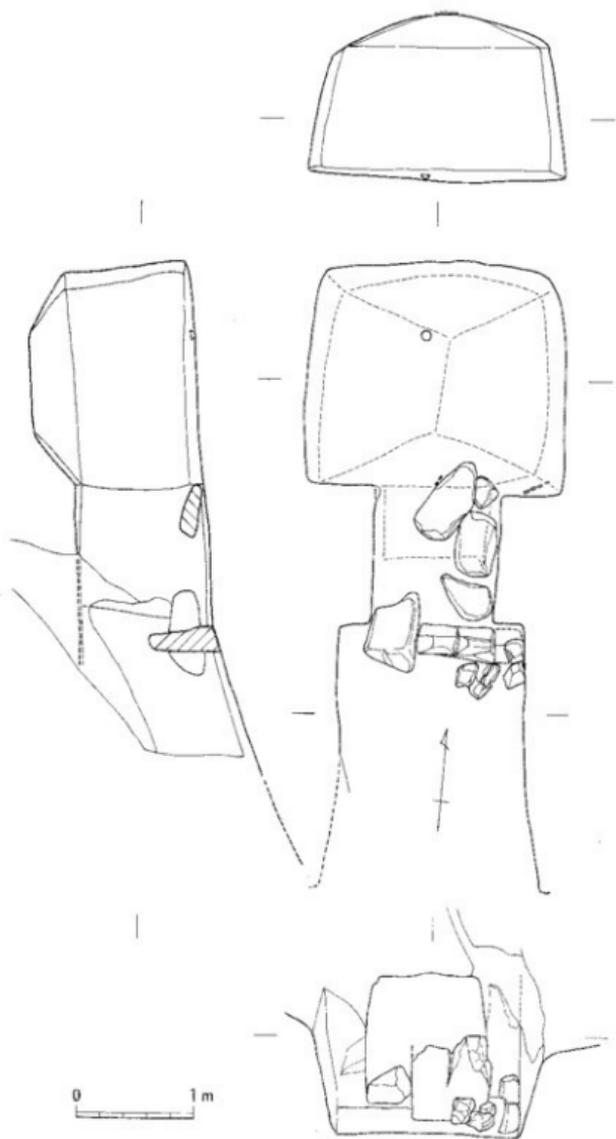


图63 上堰冶横穴群第17支群1号横穴实测图

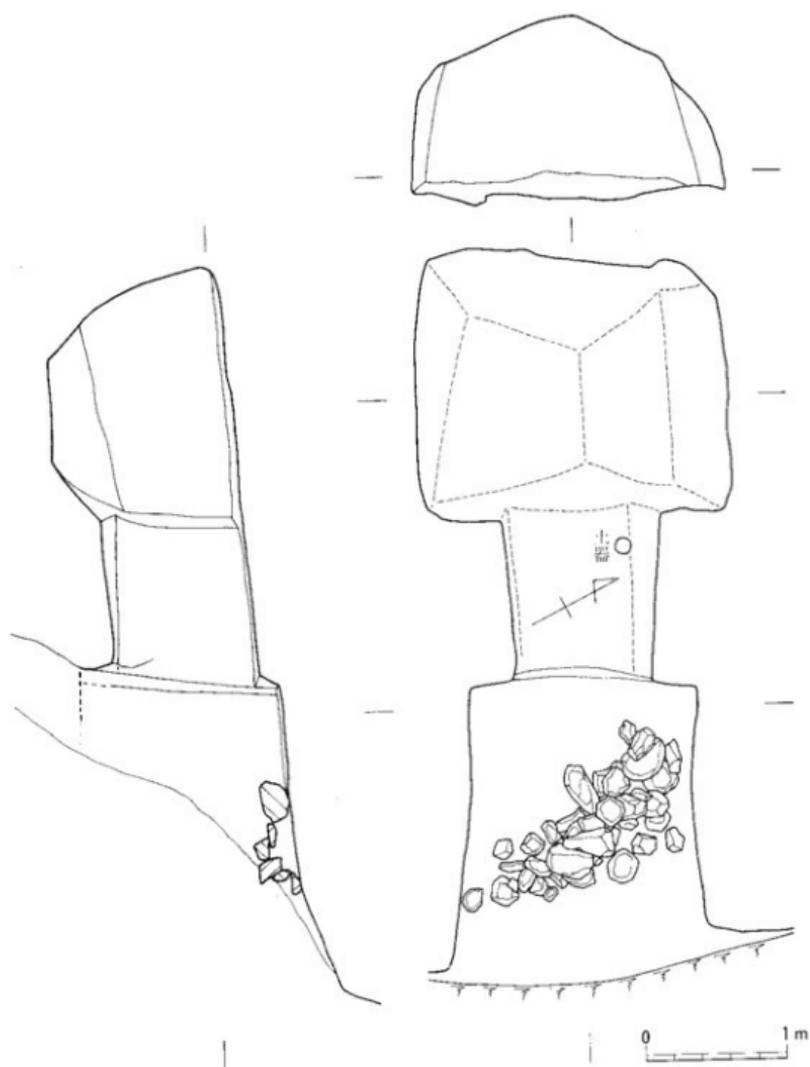


图 64 上塩冶横穴群第 17 支群 5 号横穴案测图

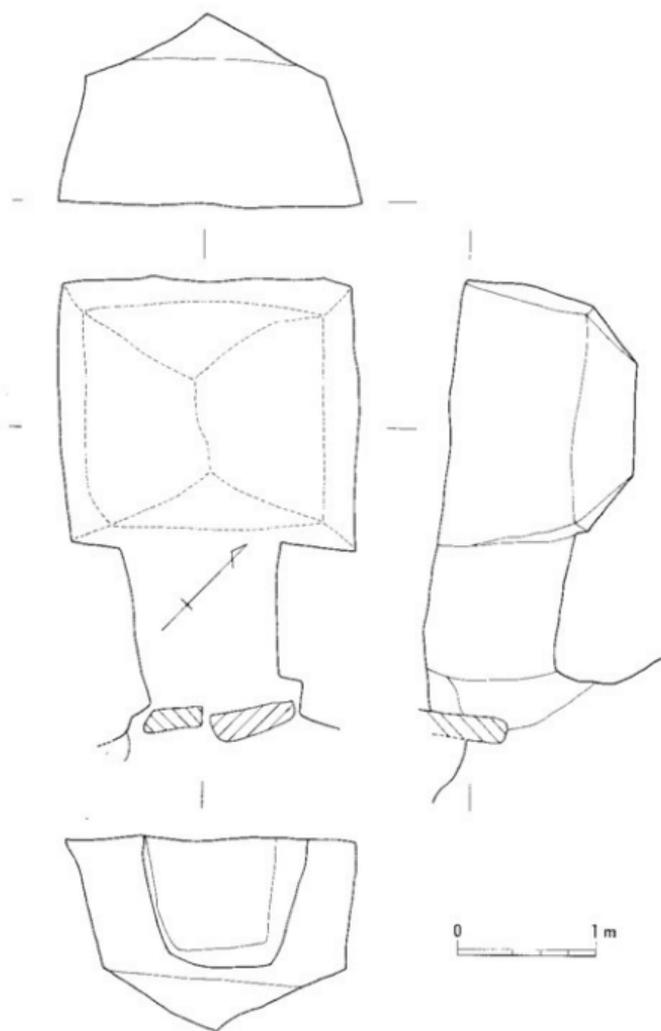


图 65 上塩冶横穴群第 17 支群 6 号横穴実測図

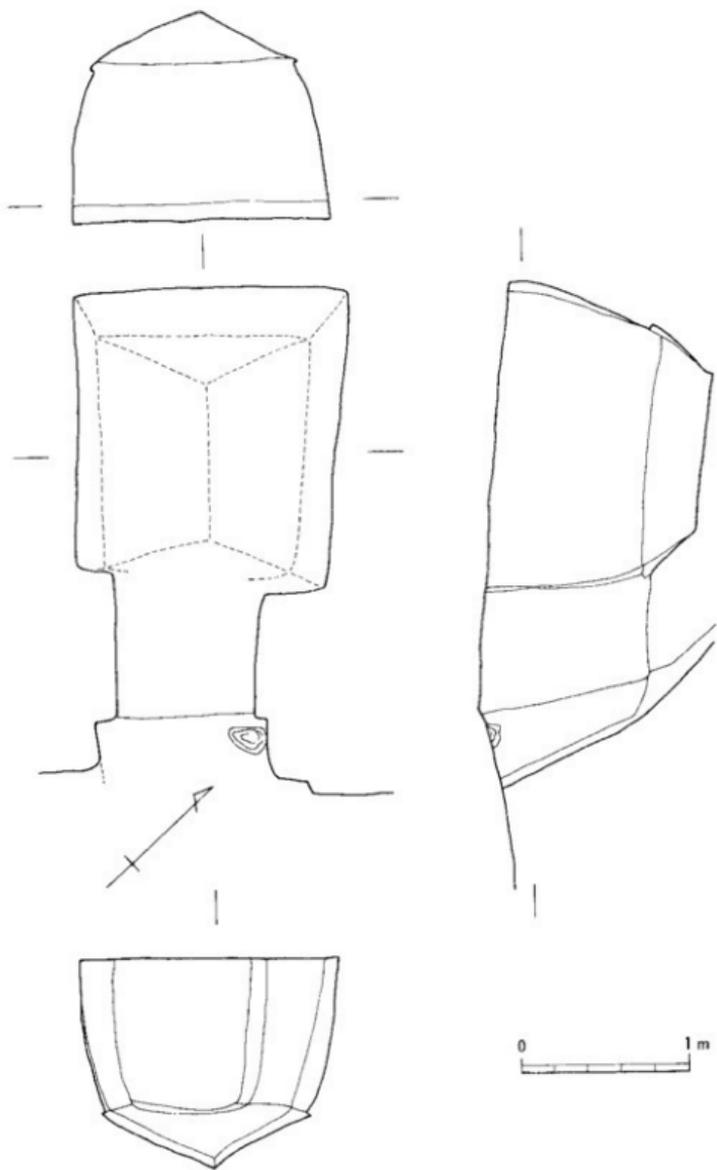


图 66 上塩冶横穴群第 17 支群 10 号横穴实测图

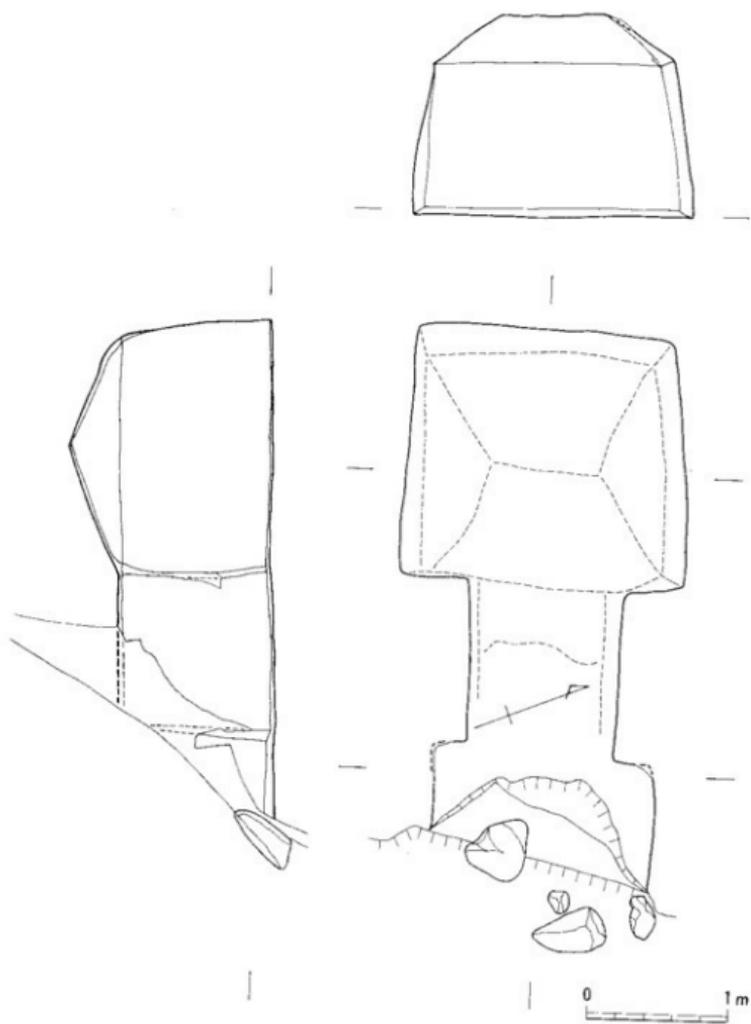


图67 上塩冶横穴群第17支群11号横穴実測図

んと描かれているが、奥壁には界線はなく、壁と天井との区別すらも判然とはしない。ノミ痕も玄室部は荒く、玄室の仕上げ途中で使用せざるを得なくなったのではないかと思われる。規模についてみると、玄室の奥行き約 1.8m、同幅約 2.2m、羨道長約 1.2m、同幅約 1m、玄室高さ約 1.3m を測り、玄室は 1 号穴と同様に幅広いタイプに属する。天井部の棟線は明瞭で、四注式妻入整正形の横穴墓といえよう。前庭部には栗石が散乱していたが、これは閉塞石であったろうと考えられる。しかし、この中には切石は見当たらず、6 号穴は栗石のみによって閉塞していたのかもしれない。

第 8 図に示す 10 号穴は、玄室奥行き約 1.9m、同幅約 2.1m、同高さ約 1.3m、羨道長約 1.1m、同幅約 1m を測り、玄室は幅広形式だが、1 号穴とは異なって隅に丸味がなく、長方形状を呈している。四壁の内傾はやや強いが、天井部との界線は明瞭であり、棟線は縦軸方向に引かれていて、やや小形だが四注式妻入整正形の整美な横穴墓である。

第 9 図に示す 11 号穴は、玄室奥行き約 1.7m、同幅約 1.5m、同高さ約 1.2m、羨道長約 0.8m、同幅約 0.8m を測り、左右の均整はやや失われてはいるが、四壁と天井部との界線や縦軸方向の棟線も明瞭に引かれていて、これもやはりやや小形ながら四注式妻入整正形の整美な横穴墓である。

次に、第 10 図に示す 5 号横穴であるが、この穴だけは例外的に四注式平入整正形に属している。平入形式の横穴墓は、上塩治横穴群の中ではこの 5 号穴以外には 1 穴も確認されていない。その規模についてみると、玄室奥行き 1.8m 余、同幅約 2m、同高さ約 1.4m、羨道長約 1.2m、同幅 1～1.1m を測る。左右の均整のよくとれた整美な横穴墓で、四壁と天井部との界線や主軸に直行する棟線も明瞭に引かれている。床面はやや前に傾斜し、四壁は内傾がかなり強く、玄室の平面形は隅丸形状を呈していて、全体的に丸味の強いやわらかな感じのものである。前庭部には閉塞用に用いられたと思われる栗石が散乱していた。

この 17 支群の横穴墓は各部分の線が曲線的であり、その点、6 支群のそれが直線的であるのと対照的である。両者の遺物を比較すると、年代の差は殆ど認められないので、上記の両者の差異を年代の差に求めることはでき難い。あるいは工人の違いによるものなのかもしれない。

各横穴ともに以前から開口していたのであるから、過去において内部が 2 次的に荒されており、原状を留めたものは 1 穴も確認できなかった。しかし、殆どの横穴墓の内部には少量の須恵器が残されていたので、この支群の横穴時期をある程度把握することができる。遺物については後述するところであるが、この 17 支群出土の須恵器は小形化する時期の初期も新しい時期のものを中核としている。

08 第 18 支群

大井谷の西側斜面に並ぶ支群中最奥部に位置するもので、凝灰岩に掘った横穴墓が 2 穴確認できる。そのうちの 1 穴は、きわめて「牽な作りの複室構造を備えた四注式妻入整正形のものである。この支群は丘陵頂部付近の高位置に並んでおり、周辺にはなお多数の横穴墓が埋没している可能性が高い。

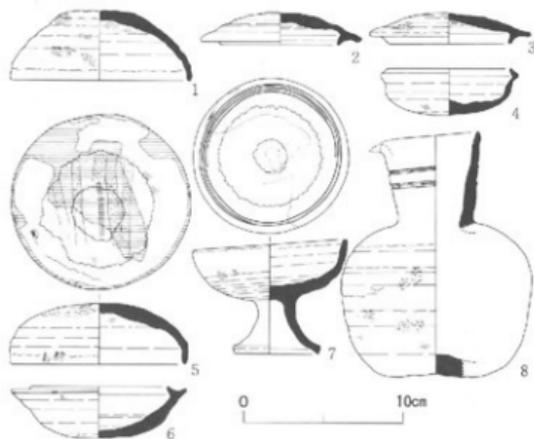


図68 上塩冶横穴群第17支群10・11号穴出土須恵器実測図

19 第 19 支 群

懸ヶ谷支群とも呼ばれている。露出した凝灰岩の岩頭斜面に2穴並んで作られているが、1穴のみ開口していて他の1穴は羨門が閉ざされたままになっており、両者は内部の2次的な穴によって通じている。いずれも作りの丁寧な四注式妻入整形の横穴墓である。また、そのすぐ近くでも2穴確認されていて、この支群では合計4穴が認められる。

20 第 20 支 群

凝灰岩に掘った横穴群で、当初には2穴が確認されたが、昭和50年11月に島根県教育委員会が実施した試掘調査の結果、さらに3穴の存在が判明して5穴以上から成る横穴群であることが明らかとなっている。当初から開口していた2穴は、いずれも四壁と天井部との界線や主軸方向に走る棟線が明瞭に引かれており、また、左右の均整もよくとれていて、四注式妻入整形の整美な横穴墓である。調査によって確認された3穴については、流入土が多いのでその形式を確かめることができないし、またこの支群の遺物についてはいっさい明らかでない。

21 第 21 支 群

三反谷の中段に当たる丘陵の中腹に並ぶ凝灰岩に掘った横穴群である。四注式妻入整形の横穴墓が5基確認されている。周辺の様相から察するとまだ確認されていない埋没したものが相当数あるように思われるから、かなり大規模な支群である可能性は強い。

第12図に示す3号穴は、左右の均整のよくとれた整美なもので、玄室奥行き約2m、同幅約2.1m、同高さ約1.5m、羨道長約0.8m、同幅約1.1mを測り、四壁と天井部との界線や主軸に平行に引かれた棟線も明瞭に残された四注式妻入整形横穴墓である。

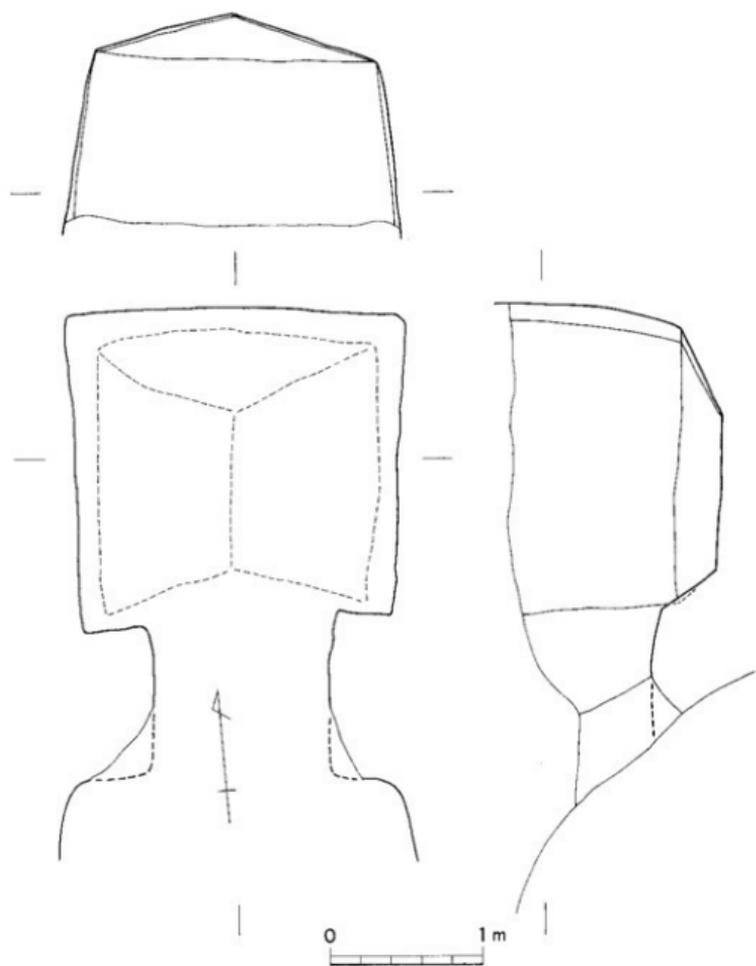


图69 上塩冶横穴群第21支群3号横穴実測图

開口している他の4穴もほぼ同様な作りであり、整美な横穴群を形成している。なお、この支群の遺物についてはいっさい不明である。

22 第 22 支 群

一反谷の東側丘陵中腹に並ぶ凝灰岩に掘った横穴群で、17穴が確認されており、現時点で確認されているものとしては上埴治横穴群中の最大規模の支群である。このうちの1号穴・8号穴・10号穴の3穴は、昭和54年に島根県教育委員会によって発掘調査され、多数の遺物の出土もあって、この支群の年代の概要を把握することができた。

第13図に示す1号穴は、玄室部は途中で築造を中止して、そのまま使用したもののようで、四壁や天井部は荒削りのままのノミ痕を留めていて仕上がってはいない。したがって、本来意図されていた天井部の形態については明らかではないが、この支群の他の横穴墓の形式からみれば、おそらく四注式妻入整正形を意図していただろうと思われる。その規模は、玄室奥行き約2.4m、同幅約2.2m、同高さ約1.2m、羨道長約0.9m、同幅約1m、前庭部長約4mを測り、隅丸方形を意図した玄室の前に、きわめて長い前庭部を設けたものである。床面は前に傾斜し、前庭部と羨門との間には段を設けている。前庭部の左側には閉塞に用いたと思われる栗石が散乱していたし、またその付近には組合せ石棺の石材と思われる凝灰岩の切石も置かれていた。しかし、この棺材がどの横穴墓に属するものかについては明らかではない。

第14図に示す8号穴は、玄室奥行き約2m、同幅約2m、同高さ約1.5m、羨道長1.3m、同幅1～1.2m、前庭部長約1.5mを測り、四壁と天井部との界線や主軸に平行する棟線は明瞭で、左右の均整のよくとれた整美な四注式妻入整正形横穴墓である。床は前に傾斜し、前庭部と羨門との間には段が設けられている。また、閉塞石も残存しており、現状では風化して複数個に割れてはいるものの、本来は凝灰岩の方形切石1枚によって閉塞していたものようである。玄室は隅丸方形の平面形を備え、比較的長い羨道部の前面に短い前庭部を設けたものである。

第15図に示す10号穴は、玄室奥行き約2m、同幅約1.9m、同高さ約1.3m、羨道長約0.9m、同幅約0.9mを測り、四壁と天井部との界線や主軸に平行する棟線が明瞭に描かれていて、1号穴と同様の整美な四注式妻入整正形横穴墓である。この横穴墓には、玄室内の両側に屍床が設けられており、特に左側の屍床には顔形を彫り込んだ遺骨を安置するための彫り込みが施されている。これの類例としては、松江市山代町史跡山代方墳の右室内に安置されている屍床の彫り込みが知られている。

この22支群の横穴墓は1号穴を除いてはいずれも8号穴や10号穴とほぼ同様の様相を備えた四注式妻入整正形に属するものであって、途中で築造を中止した1号穴が含まれているとはいえ、同一形式の横穴で統一された支群とみることができるであろう。

発掘調査によって、この支群からは多数の遺物が出土しているが、特に1号穴からの出土が多く、その中には金銅装大刀の残欠が含まれていて注意をひく。このような貴重品を出土した横穴墓は島根

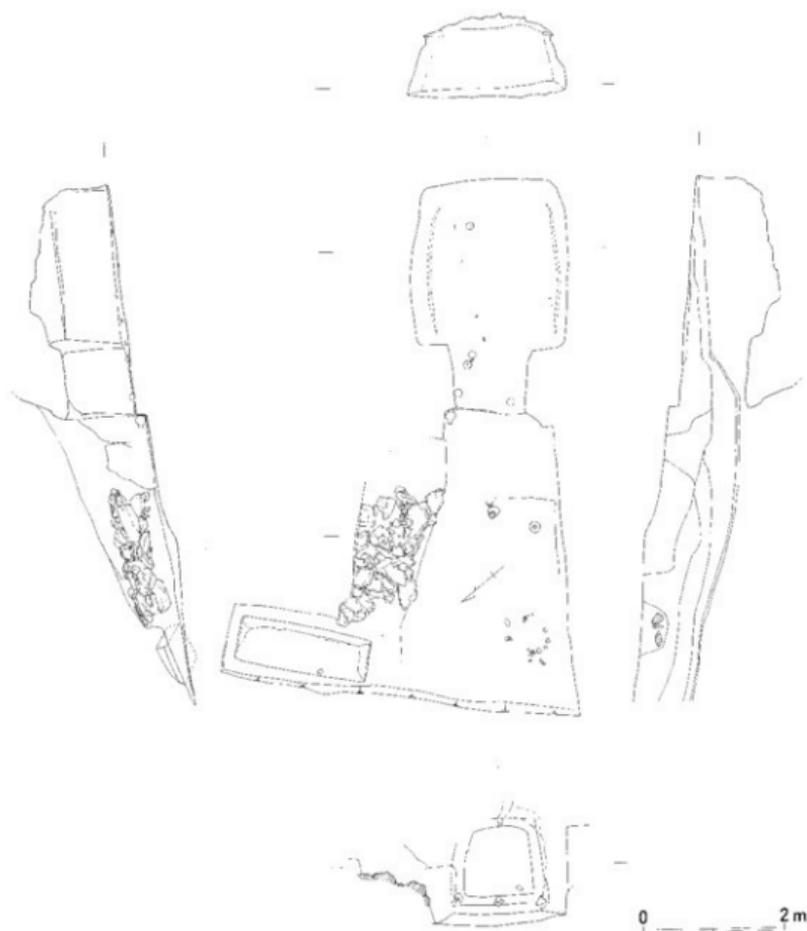


图70 上塩冶横穴群第22支群1号横穴实测图

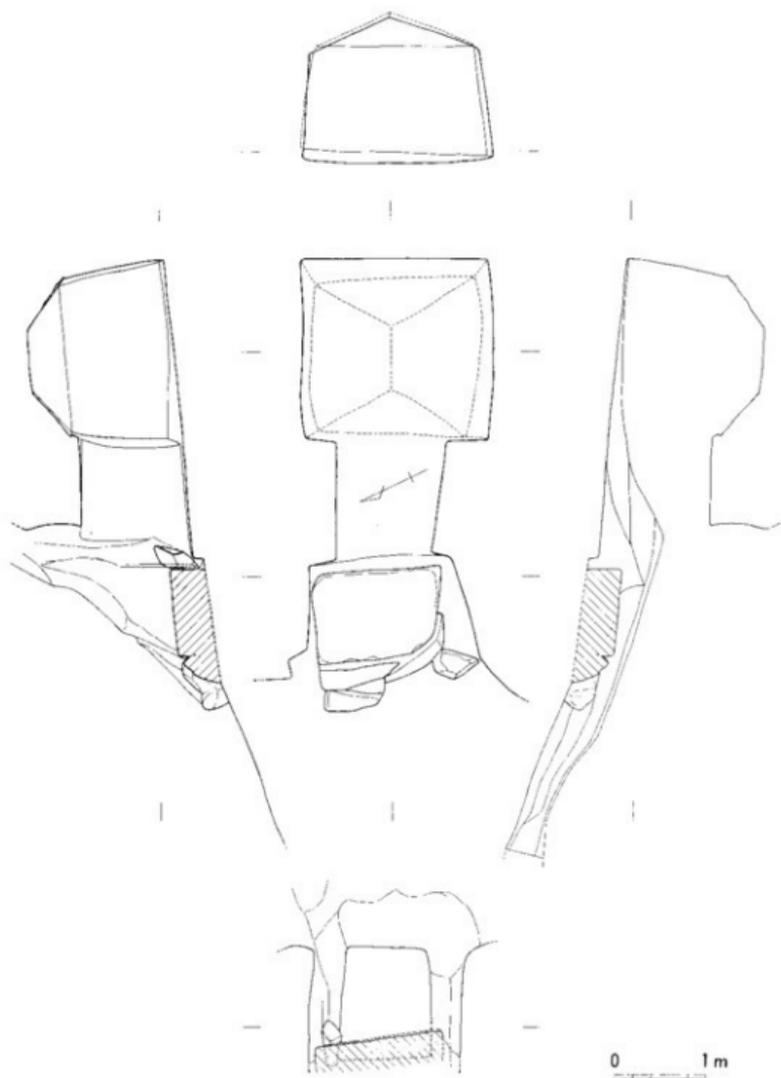


图 71 上塩冶横穴群第 22 支群 8 号横穴实测图

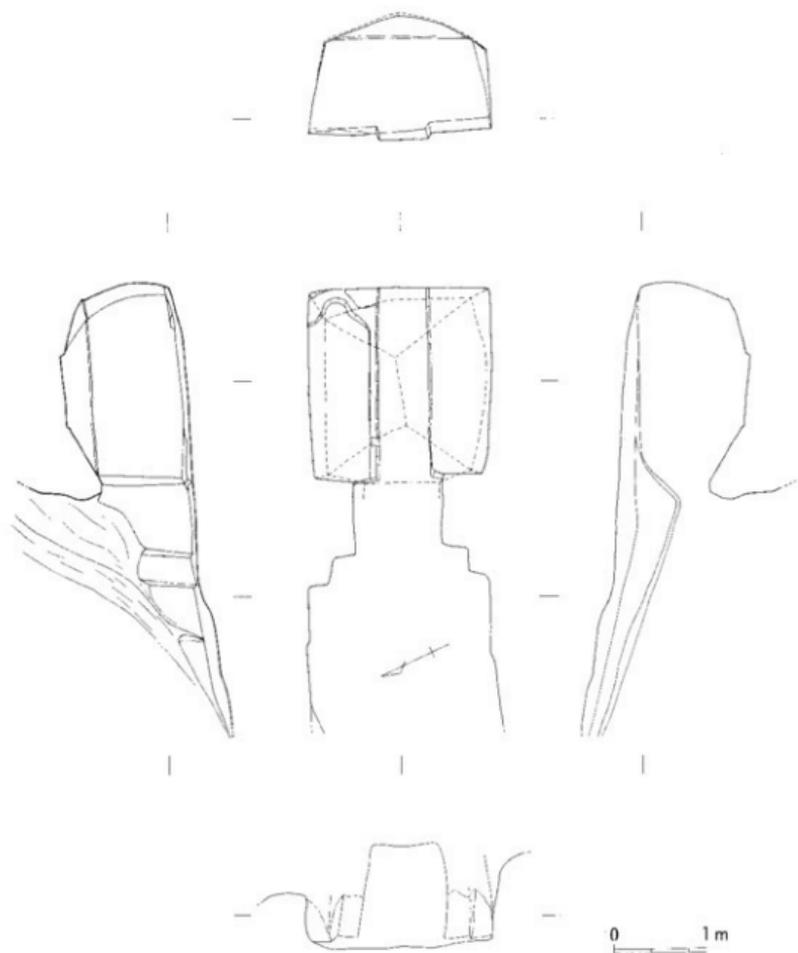


图 72 上堰冶横穴群第 22 支群 10 号横穴实测图

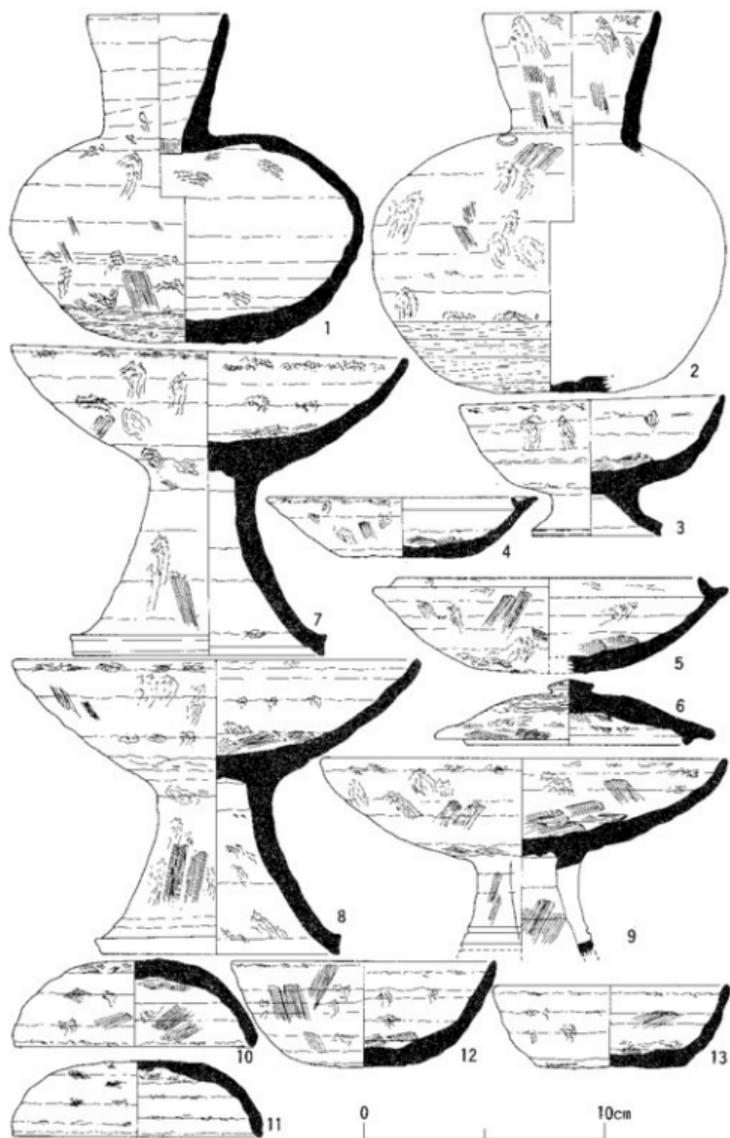


图 73 上堡冶横穴群第 22 支群 1 号横穴出土器实测图

県内でもいくつか知られているが、横穴墓の被葬者の性格を考えるうえで貴重な資料となるものである。しかし、遺物の出土状況はあまり好ましいものではなく、いずれも二次的に擾乱されていて、原位置を保っているものは一物も検出されなかった。また、多数の須恵器類の出土があって、築造年代を求める資料となっているが、詳細は後述することにした。

23 第 23 支群

凝灰岩に掘った横穴墓が1穴開口している。四注式妻入整形形式のものである。周辺には他にも多数埋没しているものと思われる。出土遺物については明らかではない。

24 第 24 支群

凝灰岩に掘った横穴墓が1穴開口している。遺物については不明である。横穴墓の形式は、四注式妻入整形形に属する。

25 第 25 支群

凝灰岩に掘った横穴群で、1穴が確認されている。その形式は四注式妻入整形形に属するが、遺物については不明である。周辺状況からみて、この支群はかなり規模が大きいのと思われる。なお多数の横穴墓が埋没しているものと推測される。

26 第 26 支群

この支群も凝灰岩に掘られたもので、1穴が確認されている。遺物についてはまったくわからないが、形式はやはり四注式妻入整形形に属するものである。

27 第 27 支群

凝灰岩に掘った横穴群で、4穴が確認されており、昭和54年に島根県教育委員会によって発掘調査された。この横穴群は半分城跡内に所在しており、築城の際に天井部を中心に破壊された箇所があらちこちにあって、保存状況はあまりよくない。

1号穴は、正方形の平面をもつ玄室にドーム状に掘られた羨道を付したもので、玄室部では四壁と天井部との界線が床土60cm前後の位置に明瞭に残り、丁寧な仕上げ調整の行われた整美な作りである。しかし、天井部が削平されて失われているために、横穴の形式については明らかではない。羨門は上下2枚の凝灰岩の切石によって閉塞されていた。また前庭部の先端と西側とは2次的に削り取られていた。横穴墓の規模は、玄室奥行き約2m、同幅約2.2m、羨道長約1m、同幅0.7～1.1m、前庭部長約2.5mを測る。

2号穴は、玄室奥行き約2.3m、同幅2.1m、同高約1m、羨道長約1.1m、同幅0.65～0.8m、前庭部長約0.3mの規模を備えた、四壁と天井部との界線の明瞭な九天井形式のものである。天井部にはノミ痕を留め、横穴墓の掘穿技法の跡をよく残していて、築造技法を明らかにする上での貴重な資料である。また、羨門には1号穴のものと類似する閉塞石がみられた。

3号穴は、玄室奥行き約2m、同幅約2.1m、同高約0.9m、羨道長約1.4m、同幅約0.6m、前

底部長約 1.7m を測り、四壁と天井部との界線の不明瞭な丸天井形式の横穴墓である。壁面の仕上げは人念で、凹凸は殆ど認められない。

4号穴は、玄室奥行き約 2m、同幅約 1m、同高約 0.9m、後道長約 1m、同幅約 0.6m を測り、四壁と天井部との界線は明瞭である。穴の形式は丸天井形式に属する。

ところで、この支群は上塩治横穴群の中では他の支群とは異なったいくつかの特質を備えている。その第1は、四注式妻入整正形式の横穴墓をその大部分とする横穴群の中にあって、この支群は丸天井形式を中核としていることである。第2は、この支群を構成する各横穴墓の天井がきわめて低いことである。横穴墓の形式については後述するところであるが、上塩治横穴群の中にこのような異質な支群が含まれている事実は十分に注意されなければならない。

最後に、副葬品についてであるが、この支群から検出された遺物はいずれも2次的攪乱によって移動していて、原位置を確認することは困難であった。出土品の殆どは須恵器で、これらの須恵器は小形のものを中核とし、宝珠状つまみを付した蓋も含まれており、いずれも早期の新しい形式に属するものである。なお、出土遺物については後述するところである。

28 第 28 支群

三反谷の入口付近に存在するもので、1穴確認されている。流出土が多く、殆ど埋没しているために詳細についてはまったくわからない。

29 第 29 支群

凝灰岩に掘られた横穴群で、2穴開口している。いずれも四壁と天井部との界線の明瞭なもので、四注式妻入整正形式に属する。遺物については不明である。

30 第 30 支群

半分集落の中にある独立した丘陵腹に掘られている横穴墓で、1穴確認されている。半分横穴とも呼ばれているが、その形式は明らかではない。なお、周辺には複数の横穴墓が埋没している可能性が強い。

31 第 31 支群

上に掘った横穴群で、2穴が確認されている。形式は四注式妻入整正形に属する。そのうちの1穴には組合せ式の冢形石棺が安置されている。遺物については明らかではない。

32 第 32 支群

上に掘った横穴群で、工業高校支群とも呼ばれている。昭和37年に島根県教育委員会によって発掘調査された。当初には12穴が確認されたが、県立出雲工業高等学校の建設に伴ってその大部分を失い、現存するものは3穴に過ぎない。

1号穴は、玄室奥行き約 2.3m、同幅 2.2m、同高約 1.45m、後道長約 1.2m、同幅約 0.85~1m を測り、四壁と天井部との界線や主軸に平行する棟線は明瞭で、きわめて整齊な四注式妻入整正形の

横穴墓である。玄室には左右に2個の組合せ式家形石棺が安置されている。左側の石棺は保存状況が良好で、奥壁はなく、左右には鏡形の切石を立て、その上に四注式家形に加工された蓋石を乗せている。前側の中央部約1.4mの間には石が用いられておらず、所謂横1式の形態を備えたものである。床は2枚の切石を組合わせて有縁屍床状に作られている。石棺の規模は、外測で基底部の間口約2.2m、同奥行き約0.7m、高さ1mを測る。右側の棺は破損がひどいが、形式規模ともに左棺と類似している。6号穴も石棺を内蔵している。玄室内の右側に1号穴の石棺と同様の作りをした横口式で切石による

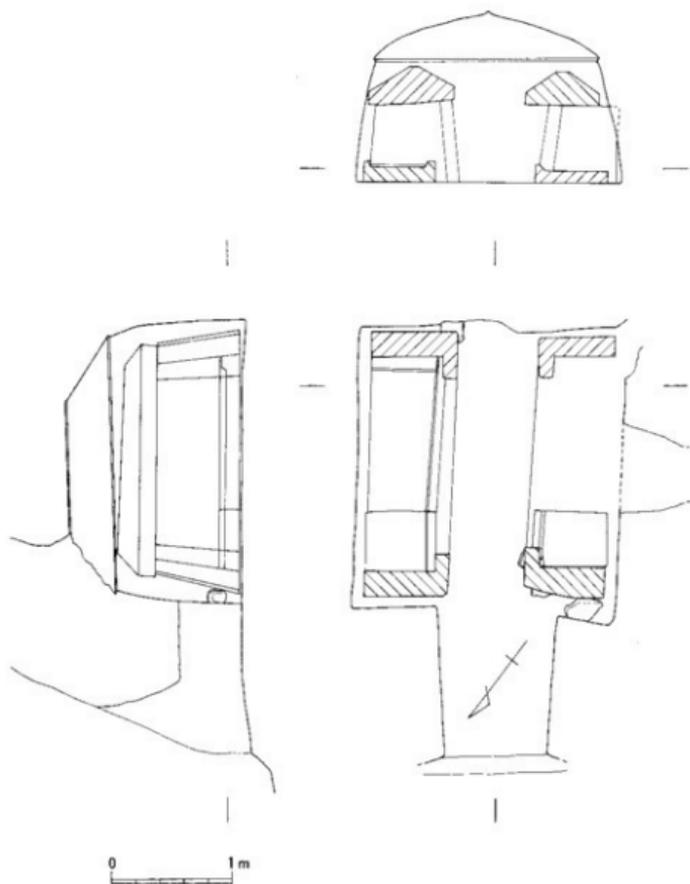


図74 上塩冶横穴群第32支群1号横穴実測図(近藤正原図)

る組合せ式家形石棺が保存状況の良好な状態で安置されていたが、これとは別に玄室内に棺材と思われ
 3個の切石がみられ、おそらく当初は左側にも石棺が安置されていたであろうと考えられる。この
 横穴墓の規模は、玄室奥行き約 2.1m，同幅 2～2.5m，羨道長約 1.4m，同幅約 0.8m を測り、玄

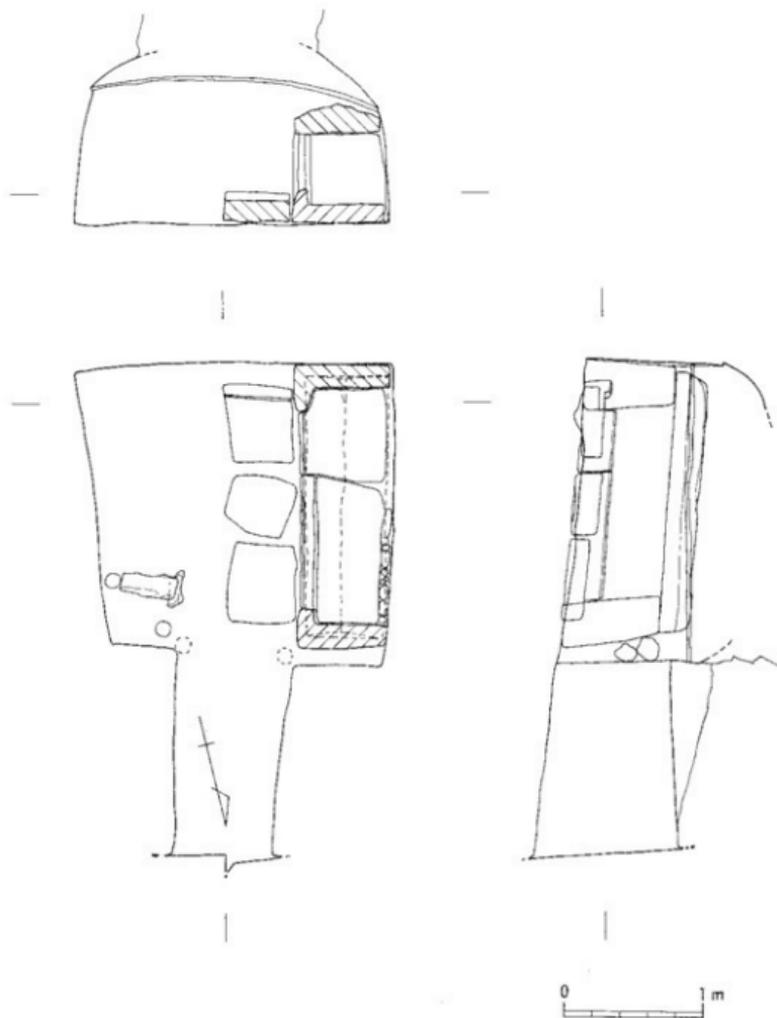


図 75 上塩冶横穴群第 32 支群 6 号横穴実測図 (近藤正原図)

室はやや前側が狭く作られた正方形プランのものである。四壁と天井部との界線の明瞭な整った形式の横穴墓だが、天井が破損しているためにその形態は不明確である。ただ、残存する一部の天井の様相から、おそらく丸天井形式のものであったろうと考えられる。

8分穴の玄室内には、右壁沿いに有縁屍床が置かれていた。奥行き約0.5m、幅約1.9mで、4枚の切石を組合せたものである。この横穴墓は、玄室奥行き約2m、同幅1.9m、同高約1.3mの正方形プランの玄室の前に長さ約0.9m、幅0.7～0.9mのいびつな羨道を付したもので、形式は丸天井式整正形に属する。

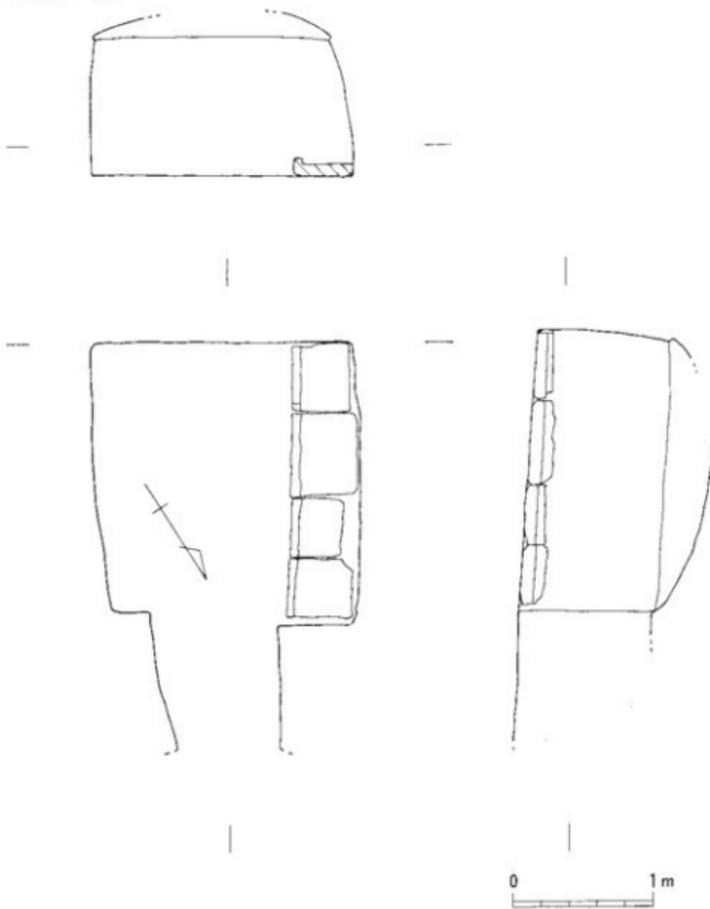


図76 上塩冶横穴群第32支群8号横穴墓実測図 (近藤正原図)

その他の横穴墓についてみると、3号穴、4号穴、9号穴の3穴は四壁と天井部との界の不明瞭な四柱式妻入形であり、5号穴、7号穴、10号穴、12号穴の4穴は丸天井式整形、11号穴は粗雑な丸天井式に属する。2号穴は、破損がひどいために詳細を知ることができない。

なお、3号穴、5号穴、6号穴、10号穴からは、須恵器類・鉄器類・耳環等の副葬品が攪乱された状態で検出された。

3. 遺物の概要

上塩治横穴群出土の遺物について今日知られているものは、表8に示すとおりである。これらの遺物の個々については紙数の都合上割愛せざるを得ないので、後日刊行予定の本横穴群の報告書で詳述することとし、本稿では全般的な傾向について述べることにしたい。

本横穴群から出土した遺物の大部分は須恵器類である。その他の遺物としては、直刀・鉄鍔・刀子等の鉄器類と数個の耳環があげられるのみで、みるべきものは殆どない。この事實は、この横穴群の副葬品の貧弱さを如実に物語っている。ただ、第2支群1号穴出土の金銅袋大刀片は被葬者の所屬を考えるうえで見逃すことのできないものであり、今後の各方面からの検討が要求されるところである。

次に遺物の大部分を占める須恵器類についてみると、その多くは小形須恵器またはそれと類似する技法によって作られたもので、本横穴群が比較的短期間に形成されたものであることを示している。小形須恵器の中の多くを占める杯・蓋環・蓋についてみると、それらの製作技法は基本的には一つのものである。それは、基本的には手ごねと輪積的技法との併用によっている。杯はその底部を、蓋環や蓋はその上部を製基底部として作ったと思われるが、いずれもこの部分は手ごねで形作られている。そうして、この底部の上に数段の粘土層を重ねて口唇部までの間を形成したと考えられる。

ここで第11図5に示した第17支群12号穴出土の蓋環を例として、その製作過程について考えてみよう。この蓋環は、口径10.9cm、器高3.8cmを測り、色調は白色味がやや強く、焼成の比較的弱い粗雑な作りのもので、調整も十分ではなく、それだけに器のあちこちに製作過程を示す痕跡がみられ、技法を考えるうえには好適な資料である。技法の中には器の骨子を形成するための基本的技法と、それによってできあがった骨子を調整して仕上げていく調整技法とがあるが、ここでは先ず基本技法から考えてみよう。

第11図5の上面図をみると、そこには同心円状のジグザグな線が2本描かれている。この線は、実は粘土塊の端部を示したもので、器表面にはこの線がきわめて顕著にみられる。したがって2つの同心円の間の部分は一続きの粘土塊であるが、この部分の内面には指頭匠痕が無数にみられる。指頭匠痕とは、指先で粘土をつまんだ跡のことである。この匠痕は外面にも少しはみられるが、外面はつまんだ後において各種の調整を施したために殆どのが消されてしまっている。また、この部分の厚みは必ずしも一律ではない。これらの様相から考えて、この部分は粘土塊を指先でつまみながら

表9 上塩冶横穴群出土遺物一覽

支群名	横穴墓名	出土遺物
第3支群	不明	須恵器一甕1・提瓶1・高環1
第4支群	不明	須恵器一坏身3・蓋环2・甕1・提瓶1・平瓶(頸部のみ)1・小形坏身1 小形高环1・小形蓋(ツمامイあり)1・小形壺1 耳環3
第6支群	1号横穴	須恵器一小形高环1・長頸壺1, 土師器一坏1
	3号横穴	須恵器一小形坏1・小形蓋(ツمامイあり)2・長頸壺2
	4号横穴	須恵器一蓋1・小形坏身1・小形坏4・小形蓋(ツمامイあり)4・高环1 長頸壺1 直刀類, 刀子類, 鉄鏃類, 鉄釘
第17支群	1号横穴	須恵器一小形坏1, 直刀片
	2号横穴	須恵器一小形蓋坏1・小形蓋(ツمامイなし)1
	5号横穴	須恵器一壺片若干
	6号横穴	須恵器一小形坏身1・小形蓋坏2・壺片若干
	7号横穴	須恵器一小形蓋坏・平瓶1・小片若干 土師器小片若干, 異形銅製品2, 鉄片3, 耳環1
	8号横穴	須恵器一壺片若干
	9号横穴	須恵器一壺片若干
	10号横穴	須恵器一小形坏1・小形蓋坏1・小形蓋(ツمامイなし)2 小形高环1・長頸壺1
	11号横穴	須恵器一小形坏身1・小形蓋坏1
第22支群	1号横穴	須恵器一坏身1・小形坏身2・小形蓋坏2・小形坏3・小形蓋(ツمامイあり)2・高环5・高台付坏1・平瓶2・甕1・壺片1・壺片若干 その他小片若干 金鋼表大可片1, 直刀片若干, 鉄鏃片4, 鉄釘若干, 土師器坏小片
	6号横穴	直刀片若干
	8号横穴	須恵器一小形坏身1・小形蓋坏1, 土師器坏片若干
	9号横穴	須恵器片若干
	10号横穴	直刀片若干
第27支群	1号横穴	須恵器一坏7・蓋5・高环1・平瓶2・壺1, 耳環1
	2号横穴	須恵器一坏2・蓋1・長頸壺1
	3号横穴	須恵器一坏2・蓋1・長頸壺1・壺片2
	4号横穴	須恵器壺片若干
第32支群	3号横穴	
	5号横穴	
	6号横穴	
	10号横穴	

延ばし、不整形な粘土塊を形成することによって作られたものとみることができる。この場合、できるだけ均一な厚みに作りたいであろうからどの部分にも指頭圧が均等にかけられる必要があり、そのために中央部分に穴を残してリング状に作ったものであろうと思われる。手ごねの手法がみられるというのはこの部分のことであり、これが器製作上の基底部になったと考えるのである。このような基底部の上には、さらに3段の同心円状の粘土帯が重ねられている。この部分の様子について細かく観察すると、1本の粘土帯の中では器表線の角度の変換点はみられず、器の外線が大きく変換する位置は粘土帯のツギ目と相当している。この器ではツギ目部分のあちこちに密度度の悪い空間部分がみられ、製作工程の様子を物語っている。輪積的技法がみられるというのはこの部分のことであり、3段の粘土帯の最上部は口唇部となるが、これは口唇の仕上げをも兼ねたものである。この部分の粘土帯の取り付けについて、第6支群4号穴出土の坏の一つに、粘土帯が短か過ぎてまわりきることができず、両端が完全に接合しきれていないものもあって、この部分が輪積的技法によるものであることを端的に示している。上塩治横穴群出土の小形須恵器は全般的に調整が不十分であり、そのために基本技法を知ることでできるものが多いが、いずれも前述した蓋環と同様の技法によって作られているのである。つまり、前述した基本技法が小形須恵器の一般的技法と考えてよいのではあるまいか。なお、中央部に残された穴の部分は、後に粘土塊を埋め込んで器形を完成させたものであろう。

次に、調整技法についてみると、それはハケなどで指などでヘラ削りを基本とし、それぞれに回転技法と静止技法とがみられる。これらの技法による調整は、主に基底部と粘土帯のツギ目部においてみられるが、それはこれらの部分が必然的に荒れた部分になるのであるから当然のことであろう。前述の蓋環の場合についてみると、基底粘土環部と輪積み最下段部との接合部付近において部分的な回転削り痕がみられ、基底部外面にはほぼ同一方向に5回にわたってヘラによる静止削りを施し、部分的にハケなどで仕上げている。また、輪積み部においてはハケによる回転などで痕が内外面ともに認められ、基底部内面と口唇部および輪積み部の各粘土帯のツギ目には指などで痕が多くみられる。また、中央部の穴埋めのために後から埋め込んだ粘土塊は、外面はヘラ削りによって調整され、内面は指頭による調整が行われている。その手法は埋土の中央を残してまわりを指頭によって圧する方法で、外見的には中ぶくらの様を呈し、指頭圧を加えた部分には半月状の爪痕がみられる。上塩治横穴群出土の小形須恵器の内面中央部の調整はいずれもこれとほぼ同様に行われているが、この調整法には地域による違いが認められ、例えば色智郡の小形須恵器の尖部は指頭で押しつぶしているのでぶくろみが見られない。一般的にいって、個々の調整の仕方には工人のくせや歳増くせ等が強く示されるであろうと推測されるが、このことを手掛かりとして窯の供給範囲の検討が可能であるように思われる。

須恵器の製作技法の変遷については近い時期を改めて論ずるつもりであるが、小形須恵器出現以前の基底部の基本技法は巻上げ手法であろうと考えている。また、小形須恵器の出現以後前述の輪積

的手法が変わってこの部分に巻上げ手法が用いられるようになり、この手法が普及した時点で小形須恵器は衰え、奈良時代以降の須恵器の基本型ができあがるものであろうと考えているが、このようにみると小形須恵器製作の期間は比較的短期間であり、しかもそれが須恵器製作の技術上の転換期に位置していることが注意される。

上塩冶横穴群出土の須恵器の大部分はこの短期間の時期に相当するものであり、したがってこの横穴群を構成する横穴墓の多くはこの時期に築造されたとみることができる。ところが、第2図に示す第4支群出土の須恵器の中には、それ以前の基底部巻上げ手法による1段階古い式のものが見られる。したがってこの横穴群は小形須恵器出現の少し前から作られ始めたことになるが、量的には少なく、また古いとはいっても1段階程度であって、横穴群全体の構成時期の幅を大きくみることにはできない。大まかにみれば、それは山本清氏の須恵器編年によるⅣ期の頃に相当するわけである。

4. ま と め

以上、その概要を述べてきたように、この上塩冶横穴群は四注式妻入校正形横穴墓を中核としたもので、多数の支群によって構成され、構成横穴墓の総数は開いたものだけでも100穴を越える程の県下最大の横穴群である。またそれは、小形須恵器の時期を中心とした比較的短期間に形成されたもので、7世紀代と考えられる古墳時代末期のものである。それでは本横穴群は出雲平野の古墳の中でどのような位置を占めるものであり、また四注式妻入校正形横穴墓は出雲地方の横穴墓の中でどのような意味をもつものであろうか。ここではこれらの問題についての若干の私見に触れて本稿のまとめとしたい。

出雲平野東南部の古墳については本報告書に記載をみるとおりであるが、これらの古墳を大まかにみるとその大部分は後期古墳であり、それ以外の時期のものとしては前期の古墳と考えられる大寺古墳と中期以降後期にまで及ぶとみられる刈山古墳群とが例外的に存在するのみである。このようにこの地域の古墳文化は伝統性にきわめて乏しいといわなければならないが、それにもかかわらず、6世紀後半に至ると突如として大念寺古墳や上塩冶茶山古墳の如き大古墳の出現をみるのである。出土遺物からみて、これらの大古墳が築造された頃にはこの地域においては刈山古墳を除けば出雲高校横穴群が存在する程度で、他には殆ど古墳をみないのである。大小様々な家族が別荘し、多数の古墳が築造される中で大古墳が出現するのが一般的な姿であるが、出雲平野においてはこのような一般的概念では理解でき難いまったく異質な古墳の在り方を示しているのである。たしかに、古代における出雲平野が生産性に乏しい地域であったことは弥生の貝塚が数ヶ所も存在している事実からも首肯されるところであるが、それにしても、この貧しい出雲平野にどうして突如大形古墳が出現したのであろうか。このことは当地域の古代史を考える上できわめて重視されなければならないことであり、今後の検討が要求されることである。出雲平野の古墳文化は6世紀後半に何等かの事情によって突如出現した大形古墳の築造を契機として栄え、7世紀に入って本横穴群の如き一大群集墓を出現せし

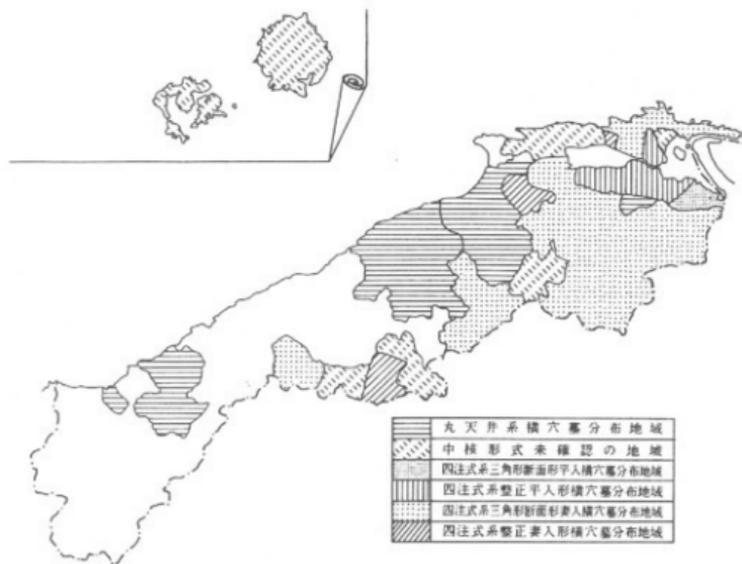


図 77 烏根県内所在横穴墓の形式別分布図

めるところとなったのであり、古墳の示すこのような特殊的姿の社会的背景を解明することが今後の大きな課題であるといえよう。出雲平野南部においては、大形古墳の出現以後多くの切石石室が築造されたが、これらの切石石室の中で特に石棺式石室系として特別視せねばならない地蔵山古墳や光明寺古墳は神戸川北岸の小範囲内に限られた分布を示し、上温冶横穴群とその分布範囲を一にしていることは注意されなければならない。

最後に、四注式妻入整正形横穴墓について触れておこう。山陰地方の横穴墓は出雲地方を中心として濃密な分布を示し、江川以西の石見部と日野川以东の鳥取県においては種にしか存在しない。このような分布をもつ山陰の横穴墓を形式別にみると、それは丸天井系と四注式系とに2大別することができ、前者が山陰海岸沿いに分布するのに対して後者は中国山地から出雲部の日本海岸にかけて南北方向の分布圏を有している。四注式横穴墓はさらに三角形断面形妻入形式・三角形断面形平入形式・妻入整正形式・平入整正形式の4形式に分けられる。これら各形式の横穴墓は、第20図に示すようにそれぞれに比較的明瞭な独自の分布範囲をもっている。

出雲地方に横穴墓が普及するのはほぼ6世紀後半代と考えられているが、当初は中国山地沿いに三角形断面形妻入形式のものが分布し、宍道湖中海岸の主要古墳地帯には丸天井系のものが多く作られ

ていて、平入形式のものは小範囲に限定的にみられる程度であり、妻入整正式のものは未だ築造されてはいなかった。7世紀代に入ると主要古墳地帯においても四注式系の横穴墓が多く作られるようになり、また上塩冶横穴群を中心とした出雲平野東南部や佐陀川流域および石見山間部の出羽盆地等に妻入整正式横穴墓が出現して、この形式の横穴墓の分布地域を形成するに至った。上塩冶横穴群はこのような横穴墓の普及過程の中で出現し、妻入整正式横穴墓の最大の発展地域を作り出したのである。この現象は、先にも触れたように地蔵山古墳や光明寺古墳等の石槨式石室系古墳の普及とも密接な関連があるように思われるが、いずれにしてもこの上塩冶横穴群出現の裏に潜む社会的背景の解明に当たっては、より広範で、より総合的な検討が要求されるところである。

(門 脇 俊 彦)

〔参 考 文 献〕

1. 山本清「西山陰の横穴について」(『島根大学論集』人文科学——8号)
2. 山本清「山陰の須恵器」(『島根大学開学十周年記念論文集』)
3. 池田満雄「上塩冶地区の横穴」(『出雲市文化財調査報告』第1集, 1956)
4. 門脇俊彦「出雲国大井谷横穴群」(考古学研究会『私たちの考古学』第8号)
5. 出雲市教育委員会『半分城跡横穴群発掘調査報告—中国電力高压送電線鉄塔工事にもともなう—』(1979)
6. 門脇俊彦「山陰地方横穴墓序説」(九州古文化研究会『古文化談義』第7集)



上塩冶横穴群第22支群1号横穴の発掘風景(1979年)

表 10 出雲市内における横穴一覧

名 称	所 在	概 要	出 土 品
久 徴 岡 横 穴	出雲市今市町鷹沢	消 滅	土師器, 須恵器
矢 尾 横 穴 群	◇ 矢尾町石白	3 穴	
元 権 尻 山 横 穴 群	◇ 大津町上来原	本書に掲載	
出雲工業高校裏横穴群	◇ 上塩治町半分	一括して上塩治横穴 群で本書に掲載	土師器, 須恵器, 土類, 耳環, 釘, 直刀, 鎌
半 分 横 穴	◇ ◇ ◇		
大 井 谷 横 穴	◇ ◇ 菅沢		
三 反 谷 横 穴	◇ ◇ 半分		
祝 廻 横 穴	◇ 朝山町	本書に掲載	須恵器
井ノ上横穴群	◇ 古志町井上	6 支群	須恵器, 直刀
放 れ 山 横 穴 群	◇ ◇ 放れ山		
妙 蓮 寺 横 穴	◇ 下古志町	1 穴	
地 蔵 堂 横 穴 群	◇ ◇ 地蔵堂	5 穴	須恵器, 直刀
深 田 谷 横 穴 群	◇ 芦渡町深田谷	2 穴	陈刻壁画
福 知 寺 横 穴 群	◇ 知井宮町山崎	1 穴 以上	須恵器, 直刀, 刀子
真 幸 が 丘 横 穴 群	◇ ◇ 真幸が丘	1 穴	
東 谷 横 穴 群	◇ 神門町東谷	9 穴	須恵器, 直刀
マキチン坂横穴群	◇ ◇ ◇	4 穴 以上	
梶谷徳次宅裏横穴群	◇ ◇ ◇	15 穴	
東 谷 北 横 穴	◇ ◇ ◇	1 穴	
三 成 範 夫 宅 裏 横 穴 群	◇ ◇ ◇	5 穴	須恵器
山本陽一郎宅裏横穴群	◇ ◇ ◇	15 穴 以上	
小 浜 横 穴 群	◇ 神西沖町小浜	3 穴 以上	
小 浜 岩 山 横 穴 群	◇ ◇ ◇		
小 浜 寺 山 横 穴 群	◇ ◇ ◇		
湖 東 屋 山 横 穴 群	◇ ◇ 山地	4 穴	
神 待 山 横 穴 群	◇ 東神西町神待	7 穴	須恵器, 刀, 金環
岩 竈 横 穴	◇ ◇		
正 久 寺 横 穴 群	◇ 西神西町九景		須恵器
古 前 背 後 横 穴 群	◇ 東林木町		
傘 尾 背 後 横 穴 群	◇ ◇		
古 前 西 北 崖 上 横 穴	◇ ◇		

刈山古墳群

(1) 位置と構成

刈山古墳群は、出雲市馬木町字刈山の丘陵一帯に所存する。ここは出雲市の市街地から真南約4kmのところに位置し、丘陵眼下にはちょうど北流していた神戸川が、神原川と合流し、やがて刈山の丘陵地と上塩冶の丘陵地の狭間から簸川平野に出て古志方面に向けて西流しているのを見ることができる。この丘陵一帯には現在39基の古墳がかなり広範囲にわたって分布しており、字名も数種に及んでいるが、ここでは一応これらを一括刈山古墳群として取り扱い、地形、分布状況等からA～Fの6つの支群に分けて考えている。

A支群(19, 20, 21, 29号墳)は、群中最も高い標高約107mの山頂に点在する一群である。墳形としては前方後円墳、方墳、円墳と各種のものを含み、主体部は不明確であるが、横穴式石室と認められるものは無いようである。

B支群(1, 2, 3, 4, 5, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 13, 17, 31, 32号墳)は、A支群の北東下方にあたる緩斜面から低台地上に位置する一群で、最も密集して分布している。古墳群中最大の全長31.8mの前方後円墳(横穴式石室か)をはじめ4号墳, 5号墳(横穴

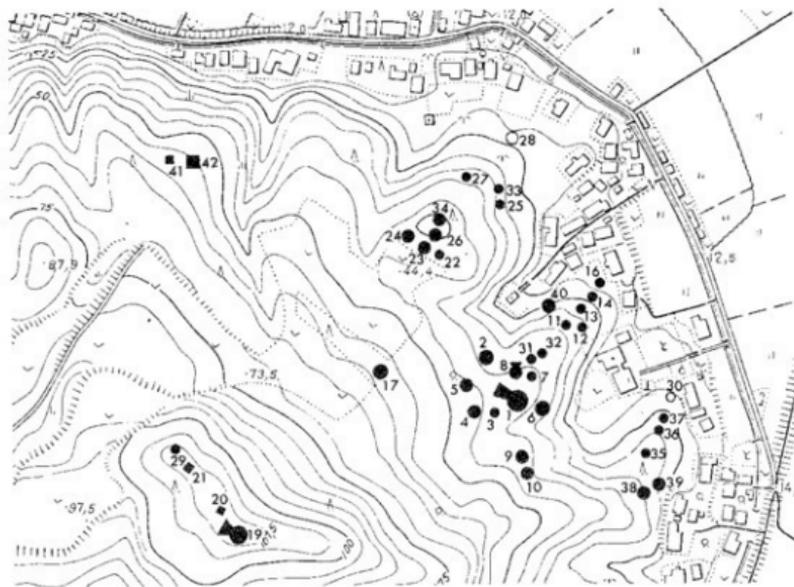


図78 刈山古墳群分布図

表11 刈山古墳群一覽

番号	墳形	全長(西辺)	高さ	内部構造	遺物	所在地	土地所有者
1	前方後円墳	31.8	3.1	石室石材		馬木町字菊山1327の1	勝定寺
2	円墳	14.8	2.9		須恵器	" 字大平1332	高橋清吉
3	"	10.7	2.2			" 字菊山1327の1	勝定寺
4	"	12.8	3.1	横穴式石室	須恵器, 直刀, 鉄鏝	" 字大平1332	高橋清吉
5	"	14.5	3.4	横穴式石室	ガラス小瓦, 直刀, 鉄鏝	" 字大平1332	"
6	"	14.1	2.6	石室石材	須恵器	" 字菊山1327の1	勝定寺
7	"	9.3	1.6			馬木町字 1328	熊野神社
8	前方後円墳	15.0	1.8			" "	"
9	円墳	11.6	1.6			" 字〇山1334	勝定寺
10	"	10.2	2.2	石室石材		" "	"
11	"	8.0	1.5	石室石材	須恵器	馬木町字〇山1327	"
12	"	5.3	1.1			" "	"
13	"	7.5	1.3			" "	"
14	"	6.0	0.8	石室石材		" "	"
15						欠番	
16	円墳	6.6	0.8	石室石材		馬木町字菊山1327	勝定寺
17	"	14.8	2.2			馬木町字大平1330の1	高橋利市
18						欠番	
19	前方後円墳	29.3	3.4			馬木町字大平1358	熊野神社
20	方墳	11.1	1.6			" "	"
21	"	12.6	1.3			" 字大平1359の3	高橋武夫
22	円墳	9.9	0.8			馬木町字小坂1309	鳥屋尾洋吉
23	"	10.8	1.5			" "	"
24	"	10.2	1.3			" "	"
25	"	7.6	3.0			" "	"
26	"	11.5	1.9			" "	"
27	"	9.9	2.9			" "	"
28				横穴式石室	須恵器, 兼手刀	馬木町字小坂1306の1	松田佐治
29	円墳	6.4	1.2			" 字大平1359の3	高橋武夫
30	消滅				須恵器	" 字菊山1334	勝定寺
31	円墳	7.5	0.7			" 字 1328	熊野神社
32	"	4.9				" "	"
33	"	8.0	1.8			馬木町字小坂1309	鳥屋尾洋吉
34	"	8.1	0.8			" "	"
35	"	7.5	1.1			" 字菊山1334棟の1	勝定寺
36	"	4.8	0.9			" "	"
37	"	9.1	1.6			" "	"
38	"	11.0		石室石材		馬木町字菊山1339	大園勝
39	"	11.0			(刀剣)	" "	"
40	"	10.0		石室石材	(須恵器)	馬木町字小坂1328の1	熊野神社
41	方墳	10.8	1.5			" 字大平1295	佐野洋
42	"	14.9	1.4			" "	"

式石室)、8号墳(前方後円墳)など顕著な古墳を多く含んでいる。

C支群(30、35、36、37、38、39号墳)はB支群の南側の小さな谷を隔てた丘陵上に位置する。30号墳は消滅しているため墳形は不明であるが、その他の古墳は全て円墳で、径10mあまり、あるいはそれ以下の小規模な古墳からなる。

D支群(12、14、16、40号墳)はB支群から北東にのびる支丘先端の斜面にかけて分布するものである。いずれも径10m以下、高さ1mあまりの小規模なものである。

E支群(22、23、24、25、26、27、28、33、34号墳)はB、D支群の丘陵から谷を隔てた北西側の丘陵上から斜面にかけて位置するものである。28号墳は小坂古墳(本書掲載)として県指定史跡になっているもので、墳形は不明確であるが、内部構造は切石造りの整美な横穴式石室である。

F支群(41、42号墳)はE支群の東側の支丘を一つ隔てた丘陵緩斜面上に位置する二基の方墳からなり、刈山古墳群のなかでは特異な存在といえる。

これらはほとんど内部構造、遺物等が不明なため、現段階では各々の古墳の築造年代はもとより、古墳相互の関係等まで推定し難いが、以下、比較的内容の明らかな4号墳についてやや詳しく紹介して、刈山古墳群を理解するための一助としたい。

(2) 4号墳の概要

4号墳はB支群中に含まれており、古墳群中最大の規模を誇る1号墳(前方後円墳)の南西約15mの緩斜面上に位置している。付近には1号墳をとり巻くように5号墳(円墳、横穴式石室、トンボ玉、ガラス小玉等出土)、2号墳(円墳、横穴式石室か)、8号墳(前方後円墳)、6号墳(円墳)などかなりの規模をもつ古墳が分布している。4号墳は大正末期に馬木村青年団によって発掘がなされたといわれ、内部構造の横穴式石室が開口している。

墳丘 東側に向かって低くなる丘陵斜面上に築かれている円墳で、墳



図79 刈山4号墳墳丘実測図

裾は西側が最も高く東側が最も低い。山側にあたる西側は斜面を三日月形に大きく削り取って墳形をかたちづくり、その土を中心部へ盛り上げることによって築造されたものとみられる。径は南北方向で1.25m、東西方向で1.28m、高さは東側で3.1m、西側で1.2mを測り、東西の墳裾のレベル差は1.9mである。山側斜面の三日月形の漏削溝は古墳を半周しており、溝の最大上端幅6.1m、下端幅2.8mである。

内部構造 南に開口する単室の両袖型横穴式石室で 玄室西壁側に家形石棺1基を置くものである。玄門部側の天井石が除去されているため玄室内はそこから観察できるが、羨道部は現在埋もれていて不明である。ただし、両袖石の上部付近に小さい凝灰岩がみえることから、切石積の羨道らしいことが窺われる。墳丘での石室構築位置は、墳丘中心点と玄室中心点で測定すれば、玄室中心は測量上の墳丘中心より南東方向へ0.5m程ずれている。玄室の主軸線はN-1°-Wを示し、長さ3.23m、奥壁部高さ1.62m、幅1.32m、玄門部幅1.30m、玄門幅0.58mでやや胴張り気味のプランである。

壁体の構成は 奥壁では一枚の大きい自然石を西壁側がやや奥深くなるように立て、天井石との隙は現在失われているが大念寺古墳にみるごとく割石等を持ち送りで架構していたと考えられる。側壁の構成は奥壁側での高さ1.37m、玄門側での高さ1.04mを結ぶ想定ラインまでは、切石で三段積を範として、やや内傾させて築いている。想定ラインから天井石架構面の高さまでは割石を主に乱積みを用いられている。使用されている切石の加工面は、築山古墳等の切石よ

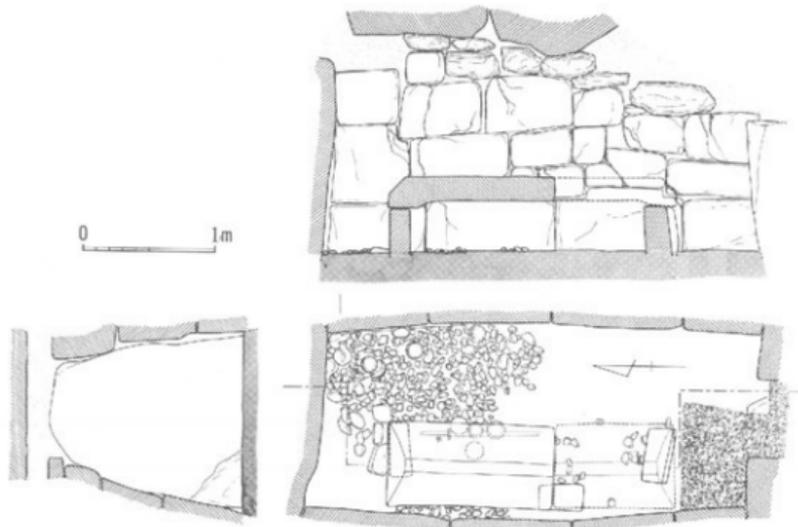


図80 刈山4号墳石室実測図

り面が荒く、全面に印痕が顕著である。天井部は現在二個の大きな自然石が架っているが、墳丘に同規模の石が1個放置されていることから三個で構成されていたと考えられる。袖石は切石で両袖に配置されているが、上部構築物は失われており、構造は不明である。

廻石は滑らかな河原石が一部表われており、西側袖石玄室内面の面に合わせて敷設されているようである。

石室床面には石棺の下と東壁側の奥半部に10cm前後の河原石が敷きつめられている。東壁前半部に石がみられないのは大正年間に発掘された際に除去されたものとみられ、周辺にその堆積がみられたが、北西隅については全く敷きつめた痕跡がない。敷石の分布が本来のものとするれば、敷石は石室の床の意識ではなく、遗体安置の場としての意識で敷かれたもの、あるいは省略したものと推測される。

石棺は身の部分に特徴のある組合式家形石棺である。蓋石は元は2枚の石をつぎたしてつくられていたと考えられるが、1枚は現在失われている^②。現存する蓋石は長さ1.26m、幅0.63m、高さ0.24mであり、内面に長さ1.08m、幅0.34m、深さ0.05mの浅い割り抜きがなされている。現在、蓋石は転倒しており、蓋頂平坦面など精査できないが、屋根形に高くなり蓋頂部(棟)はやや鈍い線で仕上げられている。身にあたる部分は長さ30~41cm、厚さ14~20cm、高さ32~33cmの大ききの切石3個を側石と奥壁にして蓋石2枚をちょうど受けるように配している。したがって側石というより、蓋石をのせる台といった感を与える。身にあたる3個の石は平の方をやや開くようにして床面に埋設されており、奥壁側の石には床面に根がためともいふべきやや大きな石を置いて固定している。設置にあたっては石室構築時から企画されていたらしく、石室の中心線より西側に寄せて、奥壁から石棺北側石までの寸法1.03m、両袖石から石棺南側石までの寸法1.12mとはほぼシンメトリーに配置されている。ともあれ、この石棺は狭隘な石室に適応した簡便で機能的な石棺といえる。

遺物出土状況 石棺内城と考えられるところの床面から切先を玄門に向けた直刀(第4図1)と銀環(第5図11)、その直上で浮遊した状態で須恵器蓋環4点(第5図1, 2, 4, 7)が出土している。また東奥壁隅には提瓶3点高環1点、蓋環2点が集中して置かれ、東壁ぎわでは刀先を奥壁に向けた直刀(第4図2)1とその付近に蓋環3点が散在して発見されている。他に玄室内流入土中から土師器底部片(器形不明)と須恵器甕片を採集している。床面直上のものと浮遊したものがあること、出土地点が異っていることなど、これがある程度原形を留めているものとすれば、こうした出土状況から少なくとも二回以上の埋葬があったと考えられる。

遺物 出土した遺物のうち現在確認できるものは銀環1、直刀2、須恵器蓋環蓋5、身5、高環1、提瓶3、甕片、土師器片である。

銀環(第5図11)は外径3.2×2.9cm、内径1.6×1.4cmのやや楕円形を呈し、銅体に銀箔

をおいたものである。

直刀のうち石棺内から出土したもの（第4図1）は平棟平造の片間で、カマス切先のものである。全長89.7cm、身幅3.7cm、棟の厚さ0.9cm、茎の長さ17.1cmを測る。鐔は、倒卵形の無透のもので外径7.4×6.5cm、内径3.0×2.1cm、縁の厚さ0.5cmで、縁部を厚手につくっている。東壁に沿って出土したもの（第4図2）は平棟平造でフクラ切先で鐔・鑑がついている。両関で棟間は浅く、切りこみは丸い。茎には目釘が貫通したまま残っている。全長86.5cm、身幅3.3cm、棟の厚さ0.7cm、刀身長77.6cm、茎の長さ8.9cmを測る。鐔は倒卵形で六方に透し孔をもち、一部に荒い目の布痕が見られる。内径3.2cm×1.7cmである。鑑は鉄製で、幅3.3cm、厚さ2.4cmの倒卵形輪金である。^③

須恵器については、ここでは紙幅の都合上半代決定の有力な目安になる蓋坯を中心に触れることにしたい。蓋坯には技法の上でヘラ削りを行うものと、ヘラ切りのままのものがある。

ヘラ削りを行うものうち蓋は3個体ある。まず第5図1は口径13.1cm、高さ3.5cmで天井部は低く平い。天井部と体部の界線は鈍いながらも稜がみられる。口縁端部は丸いが、内面に浅い比線を有す。焼成は良好で青灰色を呈す。他の2個（第5図4・5）は大きさ、技法ともにきわめて酷似している。すなわちいずれも口径14cm、高さ4cmあまりのもので天井部は低く平たい。天井部と体部の界線はほとんどないといってよいが口縁端部はわずかに段をつけている。天井部にカキ目状の痕跡がみとめられるのが大きな特徴といえる。焼成は良好で青灰色を呈す。身は3個体ある。うち2個体（第5図2・3）は類似した大きさ、形態をもつ。いずれも口径11.2cm、高さ4.1cmあまりのやや丸味をもつ形態で、蓋受の立ち上りは内傾して短く、端部は丸い。他の1例（第5図6）は口径12.9cm、高さ3.8cmで、底部は平く、蓋受け立ち上りは短いが垂直に近く器肉は厚い。焼成は良好で明灰色を呈す。なお、出土状態、技法、形態等からセット関係にあるものは、2と4、8と9であると考えられる。

ヘラ切りのままのものは蓋・身とも2個体づつあるが、組み合

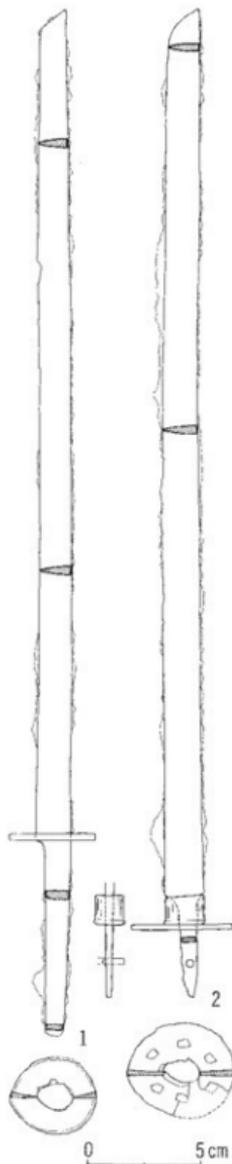


図81 刈山4号墳出土遺物実測図

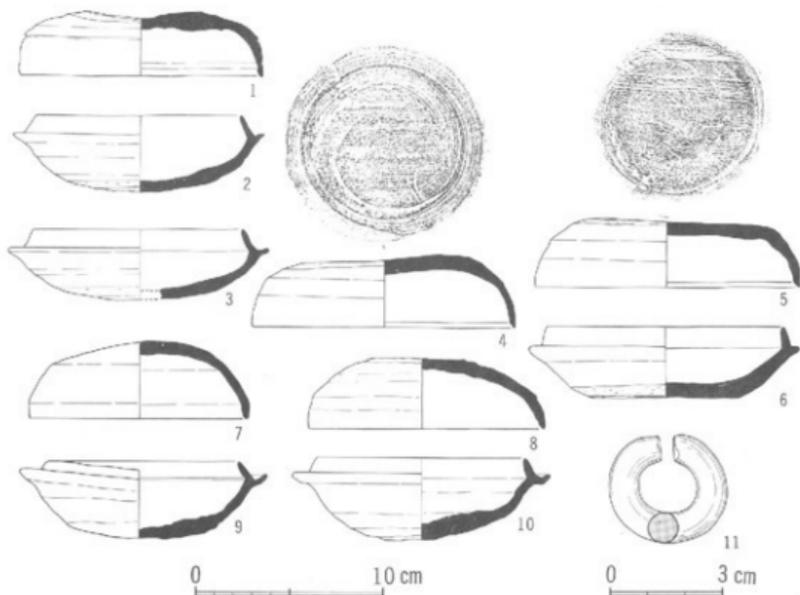


図82 刈山4号墳出土遺物実測図

せは不明である。蓋（第5図7・8）は天井部と体部の界線といったものはみられず、口縁端部は丸い。身（第5図9・10）は、蓋受の立ち上りが短く強く内傾し、受部は深い溝状をなす。ヘラ切りののちわずかにナア調整を行ったものもあるが、蓋・身とも全体に粗雑なつくりである。このように須恵器環は技法、形態の上から大きく2つの特徴をもつ群を指摘することができる。これは山陰の古墳時代須恵器を四期に分けた場合のⅢ期の終りごろからⅣ期にあたるものと思われ、実年代でいえば概ね6世紀末から7世紀初頭にかけてのものとして推定されよう。

なお、第5図4・5・6は、出雲地方ではあまり見かけない形態・技法をもつが、酷似のものが益田市北長迫横穴群から多量に出土しており、今後出雲と石見の須恵器編年を考える上で好資料といえる。

(3)まとめ

刈山古墳群は、前方後円墳3基を含む総数40基以上におよぶ、斐伊川、神戸川下流域では最大の古墳群であるが、築造年代を知る手がかりとなる内部主体、副葬品等の判明している古墳は、4号墳他数基を除いてほとんどないのが現状である。ただし、立地条件、築成方法、分布の在り方等、外からの観察によっておおまかな推定はできるものと思われるので、以下古墳群造営年代について若干の私見を述べて結びにかえたい。

古墳群のなかで最も古く築造されたと考えられるものはA支群あるいはF支群中に求めることができる。すなわちA支群のうち19号墳は全長29.3mの前方後円墳で周溝、外堤を有するかなり立派なものであるが、竈掘坑の観察からすれば内部構造として横穴式石室といったものは考え難く、少なくとも横穴式石室盛行以前のものと推測される。またその他の小円墳、小方墳も前方後円墳とともに標高約107mの丘頂平坦部に散在して分布していること、古墳の高さ等全体的なプロポーシオンから内部構造として横穴式石室は考え難いこと、出雲地方の古墳で後期初頭以後にはあまり方墳がみられないことなど、A支群の古墳群はいずれもおそくとも後期はじめごろまでには造営されていたものと推測できよう。またF支群については、群集せずに2基だけあること、方墳であることなど積極的な根拠はないがやはり横穴式石室盛行以前のものと思われる。

これらA、F支群に古墳が築造されたのちに、B、C、D、E支群がほとんど時を同じくして築造されたものと推定される。すなわち、まず、B支群では4号墳は横穴式石室を内部構造とし、出土した須恵器等から6世紀末ごろに築造され、7世紀はじめにかけて数次にわたって埋葬が行われたものと考えられる。また1、2、5、6、10号墳も横穴式石室を内部構造とするもので、4号墳に近い時期であることが知られるほか、他の6～8、31、32号墳も一定の空間に近接しながら密集して分布しており、限られた墓域内に比較的短期間のうちに相次いで築造された感を与える。

C支群は内容の明らかなものはないが、30号墳からかつて須恵器が出土していること、38号墳の墳頂に横穴式石室の石材と思われるものがみられることなどからほとんど全て後期のものと思われる。

D支群は11、40号墳で須恵片が採集されているのをはじめ11、14、16、40号墳で横穴式石室と思われる石材が散見され、いずれも後期に集中的に築造されたものとみられる。

E支群のうち内容の最も明らかなものは28号（小坂古墳）である。28号墳は別頁で詳しく述べられているように切石造りの横穴式石室を内部構造とし、出土した須恵器から6世紀末ごろに築造されたものと考えられる。なお、28号墳石室内には石櫃が納められ、鍔手刀が出土していることから後世何らかの理由によって再利用されたことが知られる特異な古墳である。E支群のうち他の古墳についてはほとんど内容がわからないが、25、27、33号墳は28号墳と同様な立地条件、構築法のもとに築かれ、22～24、26、34号墳は近接して群集するなど、いずれも後期の様相を示しているものといえる。

以上、立地、分布等からみた大まかな年代観によれば、刈山古墳群はまずAあるいはF支群において築造が開始され、6世紀後半以降はB、C、D、E支群で相次いで造営され、おそくとも7世紀中頃には終焉を向えたと思われる。刈山古墳群周辺の横穴群は、6世紀末から盛行するが、この古墳群では、それ以前から連続と築造されていたことが注意される。B・C・D・E支群で

はそれぞれに一定の範囲内に近接しながら次々と築造されたようで、そこには限られた墓域といったものが設定されていたようにもみられる。その墓域の違いは古墳造営主体者の違いともみられ、なかでもB支群は2基の前方後円墳をはじめ横穴式石室を内部構造とする径15mあまりの群中では比較的大きな円墳がみられるなど他の支群より卓越した威を与える。

一方6世紀後半から7世紀初めにかけての時期に斐伊川、神戸川流域では、大念寺古墳、築山古墳、妙蓮寺山古墳等、出雲地方でも第1級の大形古墳が築造されるほか、塩冶では大井谷横穴群をはじめ多数の横穴群がみられる。そうしたなかで刈山古墳群は中、小規模のマウンドをもつ古墳が多数群集して営まれていることが注意され、今後、周辺の大形古墳や横穴群との比較検討により、斐伊川、神戸川流域の古墳時代後期の社会構成を知る上で重要な意味をもつものと思われる。

文末ながら、本報告のために御援助いただいた地元の永田猛好氏をはじめ数多くのみなさん、山崎茂、山崎誠、山崎明夫氏、本庄考古学研究室に厚く感謝します。(西尾良)

註① 池田満雄「馬木町刈山古墳群」(『出雲市の文化財』第1集, 1956)

青年団の発掘は、4号墳の他に5、19号墳がなされており、4号墳に取りかかった時は夕方、遺物を取り上げる際には松明を使用していたとのことで、石室奥半部までは調査されなかったものと思われる。

② 大正年間の発掘の時には「小さい石棺があり、その中から刀が2振以上出ている。」と当事者の方は語っておられる。ただし、現在その痕跡が全く認められないことからすれば、小さい石棺というのは現在残っている家形石棺の南半蓋石ではなかったかと思われる。なお、池田満雄氏の言われる(前掲書)放れ山古墳のような石床は見あたらないので、蓋石の破片ではなかったかと推測される。

③ 当事者の談によれば、大正年間に出土した大刀は、鏝に鍍金が施されていたという。

④ 山本 浩「山陰の須恵器」(『山陰古墳文化の研究』, 1971)

祝 廻 横 穴

出雲市朝山町字祝廻635番地に所在する祝廻横穴は、『出雲国風土記』記載の宇比多伎山の中腹から北に派生した丘陵麓東斜面に存する。朝山町は、出雲市の市街地から南に5km、姉山（本書に掲載）、唐黒山（本書に掲載）、雲井流山に囲まれた小盆地である。神戸川の支流神原川はこの盆地で西から北へ流れを変えて、1km下流で神戸川と合流する。付近の遺跡としては、1.5km下流に刈山、光明寺の古墳群、南東2kmには宇部手町塚山古墳があり、小さい谷をささんだ隣りの丘陵（西へ約100m）では最近行われた道路工事の際、蓋石を家形につくった石櫃2基が出土している。

本横穴は加藤公一氏宅裏の崖面にあり、その比高2.5mを測る。以前の宅地造成で崖は垂直をなし、現在は羨道部の大部分を削り取られている。昭和39年の水害により天井部三分の二、北側玄門壁と玄室南側袖壁は欠失していた。東北の方向に開口する横穴で、主軸はN-70°-Wを示し、現在全長3.26mを測る。玄室長2.11m、奥での幅1.20mを測る。玄室入口では、その幅を1.00mとやや減じている。そのため平面プランはやや胴張の隅丸長方形を呈している。各壁は内湾するように削られて、やや平に近い丸形の天井に囲りぬかれている。現存部分の天井の最大高は地山面から0.7mを測る。壁面は風化が進んでおり苔などが殖していた。壁面と天井との変換線には目立った加工痕等を見つけることができなかった。玄門部は、長さ0.55m、幅0.6mを測る。玄室と羨道部のレベルは、奥壁を0とすれば玄門部で-1.2cm、羨道部で-1.4cmを測り、玄室部から玄門部に向けて緩やかな傾斜をもって下降している。玄室床面には、10cm前後の河原石が幾重にもギッシリと敷詰められていた。（筆者が、発掘に参加した時には、すでに敷石がかなり除去されており、敷石面のレベルや範囲、また後で述べる閉塞施設など精査す

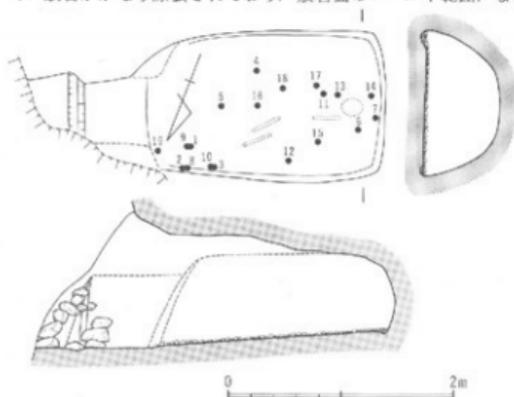


図83 祝廻横穴実測図

ることができなかった。)

敷石下の地山には、奥壁から両側壁に沿って玄門部まで幅6cm、深さ8cmの排水溝が設けられている。これら玄室部のレベル差、敷石、排水溝から、この横穴構築に当って、排水については、充分に配慮していたことが窺われる。また玄門と羨道の境には幅20cm、

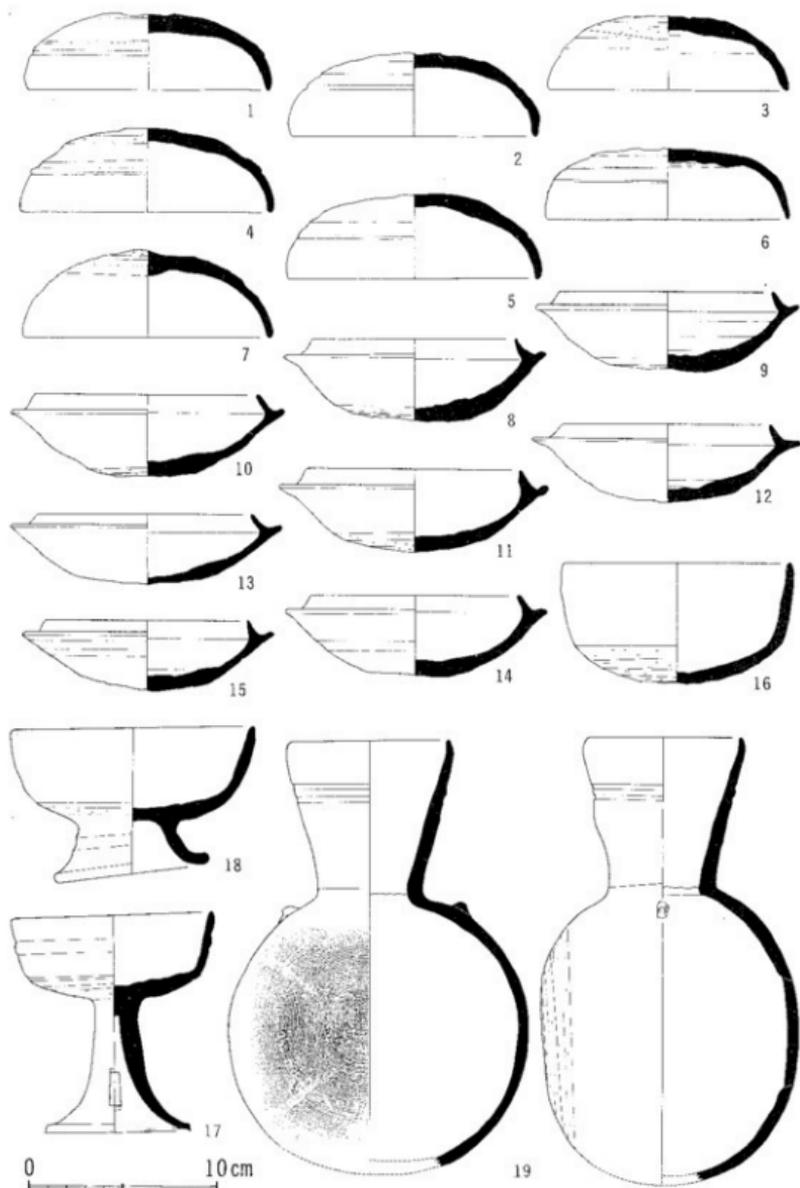


图84 祝邈横穴出土土器实测图

深さ4cmの浅い溝が設けられていた。羨門は、30cm前後の野石と土砂で閉塞施設が設けられていた。閉塞用の野石は床に近いところと、それより上の表土近くに特に密に充填されているように観察された。土砂の屑、陥沈土、表土等の層序など不明である。

遺物の出土状況は、人骨は、奥壁中央に頭部を置いて、脚部を北袖部隅に向けるような伸展状態であった。副葬品は、北袖隅に底部を破壊された大形提瓶が1点(19)と蓋環6点(2, 8, 1, 9, 3, 10)が出土した。人骨の周囲からは、脚部南側の骨よりに高環(18)、埴(16)、外側に蓋杯2点(4, 5)が散在して出土した。胸部付近には、赤色顔料を填めた蓋環(13)と他の蓋環(11, 17)がまとまって出土した。また人骨の頭上から北側にかけは逆L字形に並んで蓋環5点(6, 7, 12, 14, 15)が出土した。(6)(14)は胎土、色調からセットと考えられる。

遺物の観察については別表にして記載した。

出土状況と土器形式から追葬が行われたものと推定される。すなわち出土した人骨に伴う一番確実な資料として、胸部近くの顔料の入った蓋環がおさえられる。この身の特徴は、立ちあがりが高く、受部が水平で底部は浅いことが掲げられる。このタイプの蓋と身を拾うと、人骨南側の一直線上に並ぶ蓋環群である(しかし、7, 11はヘラ削り調整の特徴をもっていて異なる)。この一群に人骨を中心にして北側に対比するかのように、高環2点と埴が器高順に直線上に並ぶことから、これらの遺物は木棺の周囲あるいは遺体にそわせて副葬したものと考えられる。これに対し、脚部外側の蓋2点と袖隅出土の一群は、追葬時に片隅に整理されたものと考えられ、蓋の特徴として天井部と体部の界線に沈線をもつものや、天井部にヘラ削り調整をもつものが多い。これらのことから、ある一定の時期差を考えることも可能と思われる。人骨は一体分ではあったが、出土状況が最終埋葬時のものとすれば、土器にみられる型式差とも関連して、追葬を考えることも可能である。人骨が奥半部に遺存していたことは、図16の埴から奥の須恵器の表面には、水溶性のFe分であろうか、茶褐色のカンナゲのような皮膜が付着していたことと関係はないのだろうか。なお土器に赤色顔料を収納した例は平田市小境古墳がある。器の表面を赤色に塗る例はしばしばあるが、容器に入れた例は少ない。また横穴に礎敷をするものとしては、松江市とねり坂横穴、平田市一宝寺横穴、穴道町女鹿田横穴の例がある。共通点として、主要古墳地域よりはなれていることが掲げられる。本横穴の調査で、『出雲国風土記』記載の大穴持命の伝承地を多くもつ朝山盆地を無遺跡地域から外すことになった。(西尾良一、黒谷達典)

表 12 祝爾横穴出土土器観察表

形	番号	法 量	形 態 の 特 徴	手 法 の 特 徴	備 考
蓋 環 (蓋)	1	口径 13.1 器高 4.1	口縁部は下外方に下り 端部は丸い。 稜は沈線を有し、鈍い。 天井部は、やや高く、 平い。	回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 やや密 色調 暗青灰色
蓋 環 (蓋)	2	口径 13.25 器高 4.5	口縁部は内湾気味に下 外方に下げ端部は丸い。 稜は沈線を有し、鈍い。 天井部は、高く、丸い。	天井部 ^{1/2} 末調整（ヘラ 切り） 回転ナデ調整。	焼成 良好 胎土 粗 色調 暗灰色
蓋 環 (蓋)	3	口径 12.7 器高 4.9	口縁部は、下外方に下り、 端部は丸い。 天井部は高く、平い。	天井部 ^{3/4} 回転ヘラ削り 調整。 他回転ナデ調整。	焼成 良好 胎土 粗 色調 暗灰色
蓋 環 (蓋)	4	口径 13.4 器高 4.6	口縁部は内湾気味に下 外方に下り、端部は丸い。 稜は、沈線で示し丸く 鈍い。 天井部は、高く丸い。	天井部 ^{3/4} 回転ヘラ削り 調整。 天井部内面に不整方向 のナデ他、回転ナデ調 整	焼成 良好 胎土 密 色調 白青灰色 天井部に「×」のヘラ 記号あり
蓋 環 (蓋)	5	口径 13.5 器高 4.6	口縁部は内湾気味に、 下外方に下り、端部は 丸い。天井部との境に 沈線を有す。 天井部は高く、丸い。	天井部 ^{1/2} 末調整（ヘラ 切り） 回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 密 色調 灰白色
蓋 環 (蓋)	6	口径 13.0 器高 3.9	口縁部は、外下方に下り、 端部は丸い。 天井部との境の稜は痕 跡程度。 天井部はやや高く平い	天井部 ^{1/2} 末調整（ヘラ おこし） 他回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 密 色調 茶灰色一部茶褐 色
蓋 環 (蓋)	7	口径 13.25 器高 4.7	口縁部は、下外方に下り、 端部は丸い。 天井部は、高く丸い。	天井部 ^{3/4} 、回転ヘラ削り 調整。他は回転ナデ 調整。	焼成 良好 胎土 密 色調 青灰色
蓋 環 (身)	8	口径 10.8 器高 4.5 受部径 14.0 立ち上り 0.8	たちあがりは内傾し、 端部は狭小で、やや鋭い。 受部は、外上方にのび 端部は丸い。 底部は、やや浅く丸い	底部外面 ^{1/2} 、回転ヘラ 削り調整。 他、回転ナデ調整。	焼成 良好 胎土 粗、4mm大白砂粒 を含む 色調 暗灰色
蓋 環 (身)	9	口径 11.3 器高 4.7 受部径 14.0 立ち上り 0.7	たちあがりは、内傾し 端部は狭小でやや鋭い 受部は、たちあがりと 間に面を成し、短く上 外方のび端部は丸い。 底部は	底部 ^{1/2} 、ヘラ切り 他回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 粗、2mm大の白砂 粒を含む 色調 茶灰色 ヒダスキあり

形	番号	法量	形態の特徴	手法の特徴	備考
蓋 環 (身)	10	口径 11.9 器高 4.5 受部径 14.5 立ち上り 0.8	たちあがりは内傾し、 端部は丸い。受部は外 上方にのび端部は丸い 底部	底部外面 $\frac{1}{2}$ 、ヘラおこ し、 $\frac{1}{2}$ 回転ヘラ削り調 整。	焼成 良好 胎土 密 色調 青灰色
蓋 環 (身)	11	口径 11.5 器高 4.5 受部径 14.3 立ち上り 0.9	たちあがりは内傾し、 端部は丸い。受部は外 上方にのび、端部は丸 い。底部はやや深く丸 い。	底部外面 $\frac{1}{2}$ 、回転ヘラ 削り調整。他、回転ナ デ調整。	焼成 良好 胎土 密、5mm大の白 色調 砂粒を含む 色調 青灰青色
蓋 環 (身)	12	口径 11.0 器高 4.2 受部径 14.2 立ち上り 0.8	たちあがりは内傾し、 端部は丸い。受部は長 く水平にのび、端部は 丸い。底部はやや深く 丸い。	底部外面 $\frac{1}{2}$ 、ヘラおこ し、他、回転ナデ調整	焼成 良好堅緻 胎土 粗、2mm大の白色 色調 砂粒を含む 色調 青灰
蓋 環 (身)	13	口径 11.3 器高 3.7 受部径 14.35 立ち上り 0.5	たちあがりは内傾し、 端部は丸い。受部は水 平にのび、端部は丸い 底部は浅く丸い。	回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 密 色調 暗灰色 赤色顔料を収納
蓋 環 (身)	14	口径 11.0 器高 4.2 受部径 13.9 立ち上り 0.7	たちあがりは内傾し、 端部は丸い。受部は長 く水平にのび、端部は 丸い。底部はやや浅く 丸い。	底部外面 $\frac{1}{2}$ 、ヘラおこ し。他、回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 粗、4mm大の白色 色調 砂粒を含む 色調 暗灰色一部青灰 褐色
蓋 環 (身)	15	口径 10.7 器高 3.8 受部径 13.35 立ち上り 0.55	たちあがりは内傾し、 端部は丸い。受部は外 上方にのび、端部は丸 い。底部は浅く丸い。	回転ナデ調整	焼成 青灰色 胎土 密、極少の白色 色調 砂粒を含む 色調 青灰色
椀	16	口径 12.3 器高 6.5	口縁部は外上方へ立ち 端部は丸い。底部は深 く丸い。		
高 環	17	口径 10.3 器高 11.7 基部径 2.9 底径 7.9	環口縁部は外上方へ立 ち、中位に鋭い凸線を 有し端部は丸い。縁は 沈線を示す。底部はや や深く平い。脚部はわ ずかに外湾気味に下り 脚高半より大きく開く 端部は鋭い。脚部には 長方形の二方スカシが 見られる。	環部、底部外面 $\frac{1}{2}$ 回転 ヘラ削り調整。他は、 回転ナデ調整。	焼成 良好堅緻 胎土 密 色調 暗灰色光沢あり
高 環	18	口径 12.99 器高 8.2 基部径 5.5 底径 8.2	環口縁部は外上方に立 ち、端部は丸い。底部 は深く丸い。脚部は下 外方へのび、端部近く でわずかに水平して丸 い端部に至る。	環部底部外面 $\frac{1}{2}$ 、回転 “内面 他は、回転ナデ調整	焼成 良好、堅緻 胎土 密 色調 青灰色 環の内面底部に環焼 きの痕あり。 (径8.1)
梔 瓶	19	口径 8.5 器高 23.3 体部 最大径 15.9	口頭部は外上方に立ち 上り、沈線二条がめぐ り、口縁部は内傾し端 部は丸い。肩部の把手 は極小である。体部は 全体に丸くおさめる。	体部 カキ目調整 口頭部 回転ナデ調整	焼成 良好 胎土 粗 色調 暗灰色

天神遺跡とその周辺

天神遺跡は出雲市天神町を中心とする地区にある。出雲平野の中央部に位置し、国鉄山陰本線出雲市駅の西約1.5kmばかりの地点を中心に分布している。昭和46年、出雲市海上地区土地区画整理事業による工事中に、遺物が採集され、翌47年1月に出雲市教育委員会が緊急調査を実施した。そこで、東西450m、南北350m以上の広範囲にわたる弥生時代から中世・近世にかけての複合遺跡の存在することが明らかになった。

その後、国立島根医科大学の設立が決まり、職員宿舍予定地について、昭和50年5月から7月にかけて事前調査が行われた。この年度における3つの調査区のうち、第2調査区は天満宮の西約100mの地点で、周囲に水田をひかえた微高地である。昭和47年における天満宮北側の道路敷部分の調査で、奈良時代の須恵器・土師器を伴う建物跡・溝等が検出され、地方官衙跡の可能性が考えられていた場所であった。昭和50年の調査でも掘立柱建物跡が発掘され、ほぼ南北・東西方向にきちんと並んだ柱穴群は、その規模からしても前説を補強するものとされた^①。また、天神遺跡周辺を古代における神門郡家に比定する見解も出されている^②。

昭和53年8月、この遺跡の性格を究明する目的をもって、天満宮南方100mほどの地点で、



図85 '71・'75年調査柱穴位置図（「古代の出雲を考える」1より転載）

かって墨書土器（底部外面に「旱天」と記す土師器皿）が出土した畑の隣接地に、調査区を設定した。発掘の結果、弥生土器・土師器・須恵器・緑釉陶器・中近世土師質土器など、多くの遺物が出土している。遺構としては、昭和47年、50年の調査で認められた柱穴群と同じ規模のものが、南北方向に約2mの間隔を置いて検出された。また、天満宮西方の調査区でみられた黄褐色土層が確認され、遺跡のひろがり が判明した。^③

『出雲国風土記』について文献資料としての研究が進み、神門郡家を現在の出雲市古志町に推定するなど、風土記時代における、出雲平野周辺地域の様相が復原されているが、^④ 遺跡・遺物を通してみると、郡家・駅・新造院などの位置、さらに郷の推定範囲なども再検討を要すると思われる。一例として、山本清は『風土記』に記す宇比多伎山と神門郡家の距離・方向に疑問を投じた朝山皓の説^⑤を受けつつ、神門郡家を天神遺跡に、八野郷の中心を矢野遺跡のあたりに、古志郷新造院を神門寺付近に推定する考えを提示した。^⑥ これまでの発掘調査では結論を出すに至っていないが、天神遺跡の掘立柱建物群が公的建物の性格をもつことは、十分に可能性があると言えよう。『風土記』をみると、古志郷は「郡家に属けり」とあり、狭結駅は「郡家と同じき処なり」と記されているが、古代交通路ともあわせ検討していかねばならない。

橋越郡家は今の平田市多久瀬辺に、出雲郡家は今の巖川郡斐川町出西辺にあったとみられるが、遺跡としては確認されていない。なお、郡家付近の正倉について、『風土記』には特に記述がないが、出雲郡の漆治郷・美談郷にあったという正倉の実態と共に、今後調査研究すべき課題である。意宇郡山代郷の正倉に比定される団原遺跡（現在の松江市大庭町字内屋敷、植松所在）の発掘調査が進められており、その成果も参考になろう。^⑦

天神遺跡出土遺物の中で注目すべきものに、前掲の墨書土器（平安時代と推定）や緑釉陶器などがある。県内における緑釉陶器の出土例は、出雲国府跡・出雲国分寺跡・隠岐郡西郷町尼寺原遺跡などにみられる。こうした出土遺物の検討も、天神遺跡の性格究明の上に必要なことである。

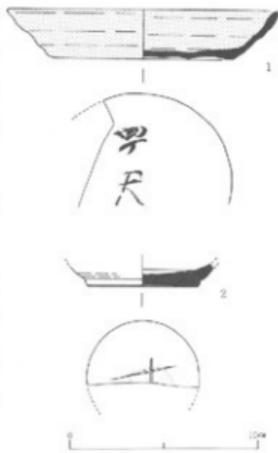


図86 天神遺跡出土遺物実測図
 (1. 墨書土器, 2 緑釉陶器,
 『古代の出雲を考える』1より転載)

神門軍団跡

出雲国には『出雲国風土記』によると、意宇・神門・熊谷という3つの軍団があった。このうち神門軍団は、「郡家の正東7里（3.74km）なり」と記され、今の出雲市大津町と上塩治町の境である長者原から、大津町米原^{くりはら}にかけての低丘陵地帯にあったとみられる。別項で長者原廃寺跡を紹介するが、この遺跡との関係も考えてみなければならない。

神門軍団の管下を、橘継・出雲・神門3郡とすると、兵士1,000人以上の大軍団であったと考えられる。「出雲国計会帳」（『正倉院文書』）に、神門軍団五十長であった出雲積友麻呂・刑部臣水刺が、天平5年・同6年にそれぞれ交替衛士を連れて上京したことがみえる。これは神門軍団のあり方を示す一資料である。

烽 跡

非常の際に烽火や狼煙をあげ、急を告げる施設に烽があった。『風土記』には、馬見烽（出雲郡）、多大志烽（出雲郡）・土椋烽（神門郡）・夫白根茨烽（鳥根郡）・磐垣烽（意宇郡）の5烽があげられている。「正倉院文書」の『出雲国計会帳』をみると、出雲・隠岐両国間の交通が配慮されていたことも知られる。『出雲国風土記』の作られた8世紀前半は、内外の情勢に緊迫したものがあり、政府はいろいろな対策を打ち出していたが、そうした状況下の措置であった。

馬見烽 『風土記』に「出雲郡家の西北三十二里二百四十歩なり」と記されるが、その位置について出雲市浜町の浜山（41m）説と簸川郡大社町の壺背山（385m）説がある。^⑧この馬見烽の配置は、土椋烽や軍団との連絡を考慮したものであろう。

土椋烽 『風土記』に「神門郡家の東南十四里なり」と記され、今の出雲市稗原町の大袋山（359.1m）にあたると思われる。山頂には小平地があり、四面開けて遠く中国山地の山々、鳥根半島の旅伏山（多大志烽）をはじめとする峯々を望むことができる。軍団への連絡についても配慮されたと考えられる。

多大志烽 『風土記』に「出雲郡家の西北十三里四十歩なり」と記され、今の平田市国富町にある旅伏山（420m）にあたると思われる。旅伏山頂には、径約20mの平地があり、中央に烽の坑跡と推定されるものが認められる。また、30mほど隔てた所に、長径5.5m短径1.4mばかりの楕円形平地があって、烽関係の館跡と推定されている。^⑨発掘調査は行われていないので、このような推論を参考としてあげておく。

カンナビ山と神社

『出雲国風土記』によると、出雲国には意宇・秋鹿・橋縫・出雲4郡にカンナビ山がみられる。

『風土記』には神話伝承をもつ山や、社名と山名が一致するものが各地に認められ、4つのカンナビ以外にも、神聖視された山が多数存在したことが知られる。

橋縫郡の神名隨山は、「郡家の東北六里一百六十歩、高さ一百二十丈五尺、周り二十一里一百八十歩あり。東の西に石神あり。高さ一丈、周り一丈。徑の側に小石神百餘許あり。古老の傳へに云へらく、阿遲須根高日子命の後、天御魂川女命、多宮村に米坐して、多伎部比古命を産み給ひき……謂はゆる石神は、即ち是れ多伎部比古命の御魂なり。早に當ひて雨を乞ふ時は、必ず零らしめたまふ。」と記されている。

この山は今の平田市多久町にある大船山(標高327m)に比定され、石神もその山中にある烏帽子岩とみられている。^⑪ また、南麓にある多久神社と、西隣の谷間にある宿努神社は、共に『風土記』に記載されている古社であるが、多久社は大船山を神体とし、宿努社は葦下にある比高10数mの虹が滝を祭場とするものと考えられる。そのほか、大船山における3ヵ所の土師器出土地は、祭祀に関係する場とみられている。^⑫

出雲郡の神名火山は「郡家の東南三里一百五十歩なり。高さ一百七十五丈、周り一十五里六十歩あり。富支能夜社に坐す伎比佐加美高日子命の社、即ち此の山の竈にあり。」と記されており、今の斐川町にある仏経山(標高366m)にあたとみられる。

つきに『出雲国風土記』から、出雲平野周辺地域の神社を抽出してみたい。^⑬

表13 『出雲国風土記』記載の神社一覧(橋縫郡、出雲郡、神門郡)

橋縫郡	久多美社(玖理神社) 多久社(多久神社) 佐加社(佐香神社) 乃利斯社(能呂斯神社)
	御津社(御津神社) 水社(水神社) 宇美社(宇美神社) 許豆社(許豆神社) 同社(許豆神社)
出雲郡	以上九所は並びに神祇宮にあり。
	許豆乃社 又許豆社 又許豆社 多久美社 同多久美社 高守社 又高守社 紫菜島社
	朝前社 宿努社 埴田社 山口社 葦原社 又葦原社 又葦原社 靄之社 阿幸知社
	葦原社 田田社 以上十九所は、並びに神祇宮にあらず。
神門郡	杵築大社(杵築大社) 御魂社(大穴持神社) 御向社(同社大神天后神社) 出雲社(出雲神社)
	御魂社(同社韓國伊大氏神社) 伊努社(伊努神社) 意保美社(意保美神社)
	曾伎乃夜社(曾伎能夜神社) 久牟社(久武神社) 曾伎乃夜社(同社韓國伊大氏神社)
	阿受伎社(阿須伎神社) 美佐伎社(御崎神社) 伊奈佐乃社(因佐神社)
	瀧太彌社(美談神社) 阿我多社(縣神社) 伊波社(印波神社) 阿具(阿吾神社)
都牟自社(都武自神社) 久佐加社(久佐加神社) 彌努婆社(美努麻神社)	
阿受根社(同社韓國伊大氏神社) 宇加社(宇賀神社) 同阿受根社(同社天若日子神社)	

出 雲 郡	布世社 (布勢神社) 神代社 (神代神社) 加茂利 (加茂利神社)	
	米坂社 (同社大穴持海代日古神社) 伊農社 (同社神魂伊豆乃賣神社) 同社 (同社神魂神社)	
	同社 (同社比古佐和氣神社) 鳥屋社 (鳥屋神社) 御井社 (御井神社)	
	金豆伎社 (同社坐伊能知比賣神社) 同社 (同社神魂御子神社)	
	同社 (同社神魂伊能知奴志神社) 同社 (同社神大穴持御子神社)	
	同社 (同社大穴持伊那西波伎神社) 同社 (同社大穴御子玉江神社)	
	阿受根社 (同社須佐彥神社) 同社 (同社神魂意保乃神社) 同社 (同社阿須伎神社)	
	同社 (同社神伊那波伎神社) 同社 (同社神阿麻能比奈等理神社)	
	同社 (同社神伊佐我神社) 同社 (同社阿遲須伎神社) 同社 (同社天香日子神社)	
	米坂社 (同社大穴持海代日女神社) 伊努社 (意布伎神社) 同社 (都賀利神社)	
同社 (伊佐波神社) 彌陀彌社 (同社比賣運神社) 縣社 (同社和加布都努志神社)		
斐羅社 (斐代神社) 韓鈔社 (韓應神社) 加佐加社 (伊佐賀神社) 伊自美社 (伊基神社)		
波羅社 (波知神社) 立虫社 (立虫神社) 以上五十八所は、並びに神祇官にあり。		
御前社 同御前社 支支支社 阿受支社 同阿受支社 同社 同阿受支社 同阿受支社		
同社		
同社 伊努社		
同伊努社 同社 同社 同社 縣社 彌陀彌社 同彌陀彌社 同社 同社 同社 同社		
同社 同社 同社 同社 同社 伊留波社 那牟白社 同社 彌努波社 山邊社 同社		
同社 間野社 布西社 波如社 佐支多社 支比佐社 神代社 同社 百枝權社		
以上六十四所は、並びに神祇官にあらず。		
神 門 郡	美久我社 (彌久賀神社) 阿須理社 (阿須利神社) 比布知社 (比布智神社)	
	又比布知社 (同社坐神魂子角魂神社) 多吉社 (多伎神社) 夜牟夜社 (塩治神社)	
	矢野社 (八野神社) 波加佐社 (佐伯神社) 奈賣佐社 (那賣佐神社) 知乃社 (智伊神社)	
	浅山社 (朝山神社) 久奈為社 (久奈為神社) 佐志牟社 (佐志武神社)	
	多支根社 (多伎雲神社) 阿利社 (阿利神社) 阿如社 (阿羅神社) 國村社 (國村神社)	
	那賣佐社 (同社坐和加須西利比売神社) 阿利社 (同社坐加利比売神社) 大山社 (大山神社)	
	保乃加社 (富能加神社) 多吉社 (同社大穴持神社) 夜牟夜社 (塩治比古神社)	
	同夜牟夜社 (塩治比古森由彌能神社) 比奈社 (比那神社)	
	以上二十五所は、並びに神祇官にあり。	
	塩夜社 同塩夜社 火守社 久奈子社 同久奈子社 加夜社 小田社 波加佐社	
同波加佐社 多支社 多支々社 波須波社 以上十二所は、並びに神祇官にあらず。		

表13のように栴縫郡28社、出雲郡122社、神門郡37社が、『風土記』にのせられているが、出雲郡の神社数が出雲国全体の中でも飛びぬけて多く、杵築大社の存在と共に注目されるところである。神祇官の神名帳に登録された官社は、神祇令によって四季の祭や大歳など、所定の祭祀を行ない、国庁の神名帳に登録された国社も、これに準じて祭りを行なったものであろう。実際には、『風土記』にみえる神社の大部分は、地名をもって社名としており、地名でないものも普通名詞的な名をもつ場合が多い。こうした点から、多くは部落神的で、各共同体の日常生活に関係の深いものであったと思われる。

古代寺院跡

平田市綱淵寺にある銅造観世音菩薩立像の台座に、「壬辰年五月出雲国若倭部臣徳太理為父母作奉菩薩」と刻まれている。壬辰年は持統天皇6年(692)にあたるといわれるが、仏教文化が開化しはじめたことを示すものである。若倭部臣については『出雲国風土記』出雲郡の条に「郡司主帳無位若倭部臣」の署名があり、天平11年(739)の「出雲国大税賑給歴名帳」に若倭部関係の名がみられることなどからは、出雲郡に勢力をもっていた豪族と考えられる。この像が元来どのような状況にあったか定かでないが、若倭部臣ゆかりの場所におかれていたものであろう。『出雲国風土記』には新造院と称するものが10ヵ所記されている。その建立者をみると、各地の豪族、なかでも郡司クラスの人がほとんどである。つぎに栴縫・出雲・神門3郡にあった4例をあげてみよう。

表14 新造院の建立者一覧(栴縫郡、出雲郡、神門郡)

郡	郷	建 物	建 造 者
栴 縫	沼 田	嚴 堂	大領出雲臣大田
出 雲	河 内	＊	旧大領日置部臣布羅(今の領佐底麻呂の祖父)
神 門	朝 山	＊	神門臣等
	古 志	元 嚴 堂	刑部臣等

いっぽう、出雲平野周辺地域で次のような古代寺院跡とみられる遺跡が発見されている。^⑬

西西郷麿寺跡

現在の平田市西郷町にあり、『風土記』の沼州郡新造院にあたると考えられる。平州市の中心街から西北に連なる低丘陵の西端部南斜面にあり、南に水田地帯を望む場所で、小規模な寺院造営には適当な地形と言える。屋号麿屋と称する家の下手から瓦類が多く発見されている。大正初年に溜池を掘った際、礎石とみられる石や瓦片が出土したという。

出土瓦のうち、軒平瓦の瓦当面に×字型を横に並べ、その中央を直線で結んだ陰刻文様をもつものが注意されている。文様母は幅23.2cm、厚さ5cmの長方形のものであるが、左側が破損している。表面が軟質であるために風化して文様は明瞭さを欠くが、中央に反転する唐華文をあらわし、上下両側に2条の突線にはさまれた珠文帯を配したものである。これは九州豊前地方の新羅系軒平瓦第1型

式の下顔面文様と同様であることが指摘されている。^⑬ 鬼瓦は右側下端の小片であるが、鬼面をあらわすものであることがわかる。

神門寺境内廃寺跡

出雲市塩冶町の神門寺（現在浄土宗）境内は、周囲の水田よりわずかに高くなっている。神門寺蔵の古図によると、かつて4町8段の寺地に濠をめぐらしていた様子がわかる。360歩1段で計算すると、2町四方ということになる。^⑭ 精密な測量や発掘調査が行われていない現状では、古代寺域を完全に復原することはできない。この付近で古瓦が出土することは早くから注意されていたが、第2次大戦後にいたって、特殊な軒丸瓦が採集されたりして、古代寺院跡の存在が確かめられてきた。

現在、神門寺裡裏の庭石になっている石は、古代寺院の礎石である。この礎石は、径1.5mで中央に径57cmの造り出しがあり、その周囲に幅7.5cm、深さ4.5cmの溝を設けている。そのほか、本堂の下にも礎石らしいものがみられる。

神門寺には、軒丸瓦・平瓦・丸瓦・熨斗瓦などが保存され、現在も境内から古瓦類が出土する。特に注意されるのは、瓦当面下方に三角状突起をもち、「水切り瓦」ともいわれる軒丸瓦である。神門寺で保管する軒丸瓦第1類は、突起をふくめた瓦当面の直径19.5cm（推定）のもので、5個の蓮子を入れた大形の中房をもち、8弁の複弁蓮花文を配している。弁は短いが、彫法繊細で流麗な感じを与える。外区は2本の太い圓線をめぐらし、幅広の平縁となっている。

井上嗣介が神門寺付近の路傍で採集した軒丸瓦第2類も、瓦当面下方を若干尖り気味に作っている。突起をふくめた瓦当面の直径は推定18cmである。8個の蓮子を入れた中房をめぐって22個から成る珠文帯があり、それに8弁の短い複弁蓮花文を配し、周縁に2本の圓線をめぐらす。

この2つの軒丸瓦は、共に瓦当面下端が尖っている点が注目されたが、これに関し梅原末治は備後寺町廃寺、備中大崎廃寺出土の瓦に同様の特色があることを指摘し、中国地方の地方色であって、初期仏教文化伝播の一方が示唆されるとしている。^⑮

その後、神門寺境内廃寺跡を朝山郷新造院に比定する見解や、^⑯ 古志郷新造院にあてる説^⑰ もあらわれた。いっぽう、松下正司は神門寺軒丸瓦第1類が奈良後期中頃に位置づけられるとして、新比定に疑問を呈することができるかと説いている。^⑱ こうした問題の究明のために、神門寺付近の遺跡調査を進める必要がある。

長者原廃寺跡

出雲市上塩冶町長者原に低い丘陵地帯があるが、その鞍部のような所に位置する。南北50m、東西30mばかりの平地があって、第2次大戦後開墾されて畑地となっている。昭和30年の状況では、礎石の一部が原位置のまま認められた。ほぼ南北方向に4個の石が、それぞれ約1.1m間隔に並んでおり、南端と北端の石の西側に、約1.2mの間隔を置いて各1個の石があった。さらに西方にも礎石に使われた石材が残存しており、5間×3間の建物があつたことが想定される。造り出しをもつ比

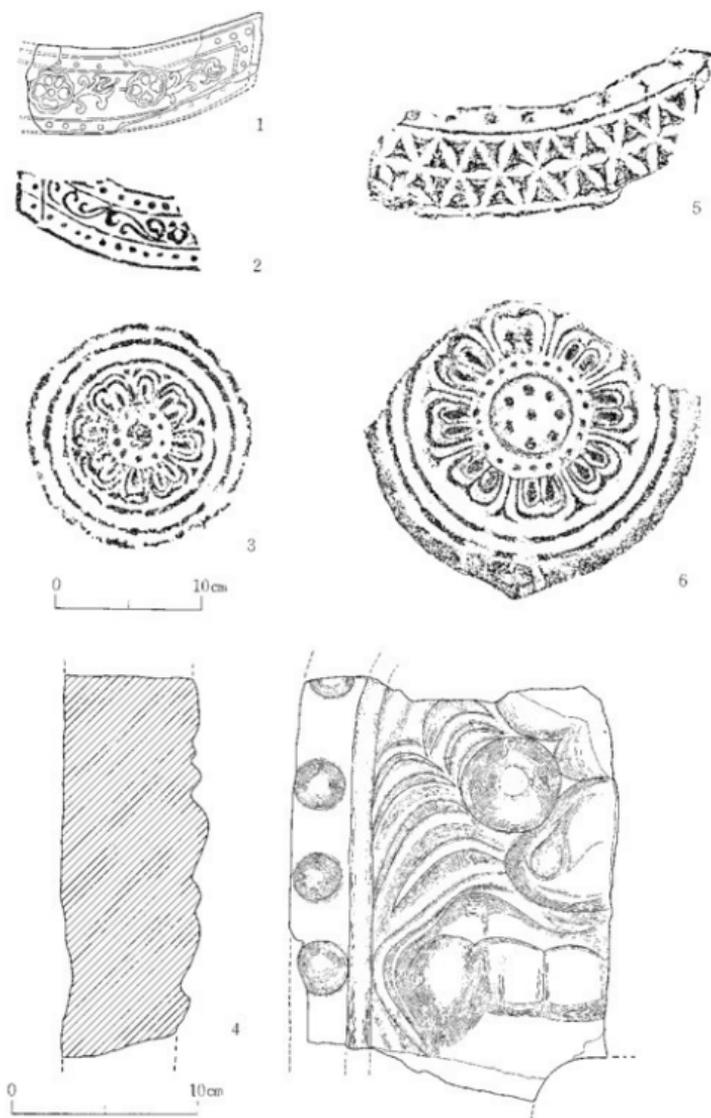


图87 瓦実測図 (1.2.3 長者原廃寺, 4.5 西西郷廃寺, 6 神門寺境内廃寺)

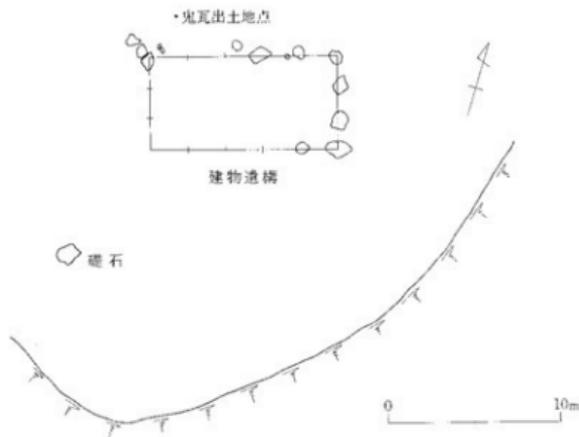


図88 長者原鹿寺遺構実測図

較的大きな礎石が1個認められているが、元は一辺約1.3mの角張った石であったと推定され、割られた状態で横にして立てられていた。削平された面に径2.2cm、高さ3.7cmの造り出しがある。造り出し部分の周辺に深さ3cmほどの小孔が3つ認められるが、これは石を破碎しようとした二次的な加工と思われる。礎石のある場所の周辺から、多数の布日瓦が出土し、軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦もふくまれている。鬼瓦は礎石列の南側から出たということである（簡歴者増田竹男の説明による）。

古瓦類では平瓦（縦3.2cm・横2.2cm・厚さ中央3cm・端2cmの完形品もある）が多く採集されているが、一般に淡褐色でもろい質のものである。軒丸瓦（瓦当面直径1.5cm）は1個の大形蓮子をおく中房の周囲に10個の珠文をめぐらす。そして複弁4葉の蓮花文を十字形に配し、その間に単弁蓮花文をあらわす。外区は圓縁2本をめぐらし、平縁となっている。この文様構成は、神門寺境内鹿寺跡の第2類軒丸瓦と通ずる点が指摘される。軒平瓦は2種あって、第1類は日置君日建建立の意宇郡山代郷新造院にあてられる末美鹿寺跡出土瓦と同系統である。第2類は出雲国分寺創建時の瓦を模したものであるが、文様表現方法は繊細さに欠けている。

鬼瓦は破片であるが2個体あり、彫りの深い鬼面文の大形品である。他に土師器や須恵器片を認めるが、礎石のある平地の東側斜面から多く出土した。土師器は、赤褐色であるが、内側は黒味を帯びて、糸切底の皿や、底に高台をつけたものがあり、後者は出雲国分寺出土品と類似するものである。⁵⁹

初期火葬墓

薄葬思想の発展と火葬の採用は、わが国墓制史上大きな変化といえる。文武天皇4年（700）における僧道昭の火葬は有名であるが、山陰の因幡でも和銅3年（710）に伊福吉部徳足比売が火葬例が知られている。出雲平野周辺では、出雲市馬木町の小板古墳石室内におかれた石櫃が火葬に関連

したものと注目される。

小坂古墳の石櫃

神戸川流域の水田面より20mほど高い丘陵に営まれ、径約1.5m、高さ3mの小円墳である。内部構造は切石造りの横穴式石室で、羨道部を加えた全長5.2m、玄室だけの長さ2.1m、奥壁の幅1.6m、高さ1.57mの大きさをもつ。石室内に縦1.12m、横0.61m、厚さ0.49mで、中央に円形の縁取りをした径28cm、深さ21cmの半球形の穴をうがった凝灰岩製の石櫃がおかれている。石櫃にうがった穴の内面に、緑青の付着が認められることから、伊福吉部徳足比売墓の場合と同様に銅製蔵骨器を納めていたと推定されるが、現存していない^④。

出土した須恵器の型式からすると、まず7世紀前半に横穴式石室を造営し、その後の追葬で石櫃を埋蔵したものとみられる。石室内から、わらび手刀（全長51.5cm、小島造り）が出土しているが、石櫃に伴う可能性の強いものである。わらび手刀の出土例は東日本に多いが、奈良の正倉院にも同様なものがみられ、奈良時代に近い時期の遺物と考えられる。



図89 小坂古墳出土わらび手刀実測図（近藤正、秀坂真樹原図より複製）

朝山古墓

小坂古墳から約1km東方にある。出雲市朝日町の朝山神社付近山腹でも、2個の石製蔵骨器が出土している。その1例は、一辺約40cmの箱形で、身の中央に納骨穴があり、骨片が残存していた。蓋石の内面にも方形のくりこみがあり、印籠蓋となっている。蓋石外面は四注式屋根形に加工し、比較的整った形態を示すものといえる^⑤。この蔵骨器は菅沢古墓の場合と同様に直接容器として使用されたもので、小坂古墳の石櫃や伊福吉部徳足比売墓のような内容器を用いた構造ではない。

菅沢古墓

出雲市上塩治町の菅沢古墓も中世以前の火葬墓とされる。昭和33年5月開墾中に発見されたもので、標高40～50mの丘陵上に位置し、南東の尾根続きには長者原廃寺跡がある。

遺構は赤色粘土質の地山を掘りこみ、石製蔵骨器を埋納したもので、盛り上の有無は不明である。蔵骨器は凝灰岩で作られ、身は径70cm、厚さ30cmのほぼ半球状で、中央に径25cm、深さ13cmの半球形の穴をうがち、火葬骨を納めていた。蓋石は縦85cm、横70cm、厚さ27cmのもので、中央に径45cm、深さ5cmの円形くりこみがある^⑥。

西谷出土須恵蔵骨器

近年、山陰地方でも須恵器質の蔵骨器が輸出されてきているが、出雲市大津町西谷出土のものは、その一

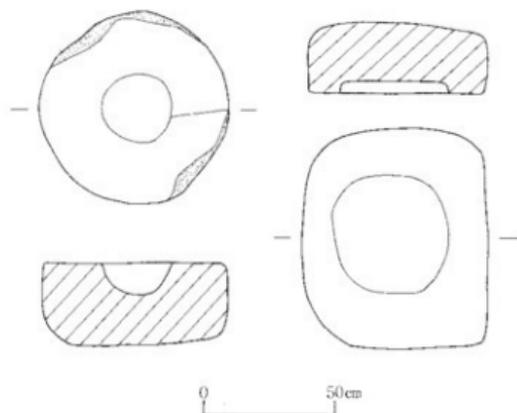


図90 菅沢古墓出土蔵骨器実測図

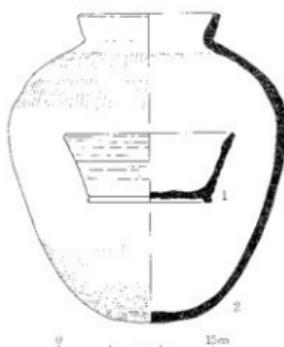


図91 西谷古墓出土須恵質蔵骨器実測図

例である。昭和37年10月、西谷丘陵で粘土採取中に発見されたが、出土地方は長者原庵寺跡や菅沢古墓の分布する丘陵と、小さい谷をはさんだ近い位置にある。

蔵骨器はやや外反する低い口縁をもつ壺形土器、(口径1.4cm、胴の直径28.4cm、高さ3.1cm)である。胎土焼成良好で、灰白色を呈する。この中に火葬骨が納められていた。蓋は低い高台をもつ須恵質環形土器(口径16.5cm、高さ7cm)で、灰白色を呈するものを用いている。土器の特色から奈良後期に属するものと考えられる。³⁾

(池田満雄)

註① 出雲市『出雲市天神遺跡』

② 山本清「出雲国風土記」(『風土記』所収)

③ 出雲考古学研究会『天神遺跡の諸問題』

④ 加藤義成「出雲国風土記参究」等

⑤ 朝山皓「出雲国風土記に於ける郡家中心里程考」(『歴史地理』66の4)、「出雲国風土記における地理上の諸問題」(『出雲国風土記の研究』所収)

⑥ ②に同じ

⑦ 島根県教育委員会『関原遺跡発掘調査概報』I

- ⑧ 出雲市教育委員会『出雲市の文化財』第1集
- ⑨ 『島根県史』第5巻
- ⑩ 加藤義成『出雲国風土記参究』
- ⑪ 大國晴雄・西尾克己「橋籠部の神名樋とその祭祀」(『山陰史談』15号)
- ⑫ 加藤義成『校注出雲国風土記』による
- ⑬ 山本清「遺跡の示す古代出雲の様相」(『出雲国風土記の研究』所収)
- ⑭ 北九州市立歴史博物館『図録新羅の古瓦埴』
- ⑮ 山本清氏の教示による
- ⑯ 梅原未治「古瓦についての一二の覚書」(『史迹と美術』22輯の8)
- ⑰ 近藤正「出雲国風土記所載の新造院とその造立者」(『日本歴史考古学論叢』2所収)
- ⑱ ②に同じ
- ⑲ 松下正司「備後北部の古瓦 いわゆる水切瓦の様相」(『考古学雑誌』55巻1号)
- ⑳ 出雲市教育委員会『出雲市の文化財』第1集
- ㉑ ㉒に同じ
- ㉒ 三宅博士「古墳の終焉」(『さんいん古代史の周辺』下巻所収)
- ㉓ 島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅲ集
- ㉔ ㉓に同じ

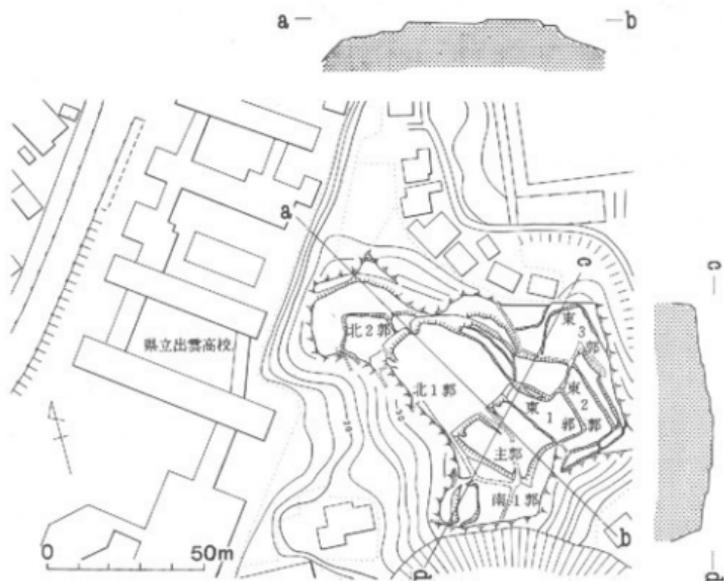


図93 平家丸城測量図

へいけがまる
平家丸城

出雲市今市町字鷹沢たかのざわに所在する。現在の県立出雲高校を含む一帯の丘陵地にある。この城の営まれた山丘は、斐伊川と神戸川にはさまれた低丘陵地のうち最も平野に突出する部分の西端にあたる。現在は山陰本線によって分断されているが 大念寺古墳とは線路一つをへだてている。標高は30m程度である。

この城跡について享保2年(1717)黒沢長尚撰によってなった『雲陽誌』には「古城山世俗平家丸といふ 古来城主しれず 相伝朱雀帝承平年中の城なりといふ」と載る。すなわち、江戸時代には平家丸と呼んでいる古城跡であって、城主はわからないが、朱雀天皇の承平年間(931~938年)のころの城と伝えられているというのである。承平年間には平将門の乱などが起っているがそこまで古く遡りうるものであろうか。

また、『雲陽古城跡』には「今市村 平家丸 但城主不知」と載る。

城の名称が平家丸ということからすると、平氏が統治していた頃につくられた城で、平氏とゆかりのある城であるということができるとと思われる。そこで、『源平盛衰記』の「一の谷城構事」

の中に「……平家何候の人々出雲国には塩冶大夫」と載り、塩冶大夫という名前に注意がひかれる。塩冶大夫は文字どおり、大夫職にあった塩冶に住した人ということになる。従って、この塩冶大夫は、平家丸に居城したものと想像することができる。築城の時期についても、このあたりでは最も古い時期に築かれた城の1つとも推測されている。

この城跡は県立出雲高校校庭のため南部は削りとられ、東部は畑になっているが、郭の跡が残っている。すなわち、郭跡はいくらか原形を損っていると思われるが、主な郭に一応名称をつけたものが図である。

最高所の位置にある郭を主郭とすると、主郭から北の方向、東の方向、南の方向の3方向に郭がつくられている。主郭は2.6×1.7.9 m、北1郭は3.4.5×2.7 m、北2郭は1.4.3×1.3.7 m、東1郭は2.9~1.3×1.2 m、東2郭は6.5×2.2 m、東3郭は1.4.9×1.6 m、南1郭は1.9.6×1.4.3 mある。それぞれの郭へは通路で結ばれる。また、北1郭や東2郭の東側には帯状の郭が数段とりついている。

なお、出雲市立図書館蔵の写真の中に、昭和10年代以前の平家丸跡のようすを写した写真があったので図版27に載せさせていただいた。

(勝部昭、磯村利和)

向山城

出雲市上塩冶町字向山に所在する。平家丸跡のある県立出雲高校の南隣の支丘陵西端に位置する。国鉄出雲市駅からは東南の方向600 mのところである。東は一の谷公園となっている。標高40 m、比高30 m程度の低い場所に築かれている。西は平地が広がり、南と北は支丘陵の間にできた谷となっている。現在は、出雲市の下沢団地、向山団地などの住宅がおし寄せ、これらの平地は家並みで埋って昔日の面影を失っている。

文献のうえからこの城跡は『雲陽誌』にいう「古城山 塩冶判官高貞の居城なり」にあたと考えられ、『雲陽古城跡』にいう「上塩冶村大館 但間断（城主不知のこ）」であると考えられる。

字名のうえからも、このあたりは明治9年に作成された第46区神門郡上塩冶村「村作道長権取調帳」には次のように大館や判官といった地名がでる。「字上沢ノ内間府川ヨリ

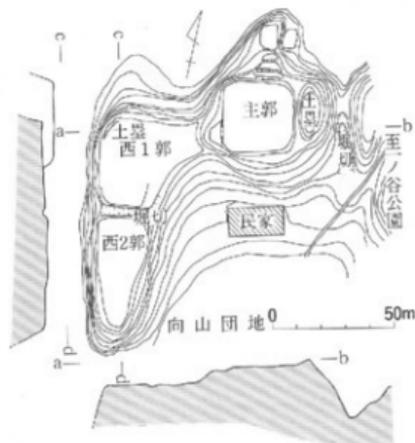


図94 向山城略測図

大迫本谷マテ」「字上沢ノ内式斗代中谷ヨリ大廻井手マテ」「字下沢ノ内大廻本谷池ヨリ式千五百拾番1田マテ」「字上沢ノ内利官井手ヨリ間府川迄」などである。

塩治氏は近江源氏の出自である佐々木氏が出雲国守護職に任ぜられ、その五代にあたる佐々木頼泰の時に塩治に下向したときからその居住地名を名乗って塩治氏というようになったものである。以後、貞清、高貞と塩治氏3代が最も栄華をはこる時期である。

この城跡は、支丘陵突端部を加工して作られている。南側が大手口になると思われる郭配置であり、南の麓に館跡を推定できる地形である。現在、南麓には人家があり、往時のようすうかがい知ることができない地形となつてしまっている。

丘陵尾根は西端で勾の手状に曲っており郭はそのまま地形にしたがって削平加工されている。郭は規模の大きいものが3カ所ある。勾の手に曲がる部分が低く、両側が一段と高くなっている。便宜上、主郭と西1郭、西2郭と呼ぶこととする。

主郭は一辺30mほどのほぼ方形の郭である。ひとときわ高かったと思われる丘陵の東側の一部分をそのまま残し、西側部分を削平し郭をつくっている。残った丘陵部分は幅10m高さ1.5mであって土塁の役割を果たしている。この郭の東側は丘陵のくびれ部となつて、一の谷公園につづく丘陵に連なる。このくびれ部を利用して、堀切がつくられている。長さ15m幅6mである。

主郭の西側、南寄りに小さな郭が1つとりついている。また、北側は小支丘陵上に小さな段が階段状に5カ所認められる。

西1郭は主郭や西2郭よりも一段低く作られている。丘陵の形状に沿ってカギの手状の郭となっている。広さは、南北36m、東西40mで3つの主な郭のうちで最も広い面積を有する。この郭には土壇状の高まりの部分があるので建物があったとも推定される。また、北の隅には長さ10mの溝あるいは土壇状の遺構が認められる。

西2郭は丘陵の南端にいくほど狭くなっているが、幅20m、長さ40mを測る。

西1郭と西2郭との間には幅2～3mの堀切とも考えられる遺構がある。そして、西1郭と西2郭との比高差は2m程である。

この城郭への上り道は南麓の方向から西1郭と西2郭の境目あたりである。

西2郭から南は丘陵の斜面となり、その下は今人家や畑となっているが、その地形から想像するとさらに郭があったものと考えられることができる。

この城跡については、主な郭が3カ所あって、その配置が単純であり、しかも平地との比高差が低いもので、館を防禦する初期的な城と推測される。

おおいび
大井谷城

出雲市上塩冶町菅沢の大井谷に隣接する東側丘陵上に築かれた城跡である。字名をとって大井谷城と仮称している。この城の営まれた丘陵は、唐墨山城跡の築かれた丘陵から派生した標高60mの支丘陵上である。ちょうど城跡の営まれた場所は丘陵の一段と高くなったところであり、尾根の基部ともいえる場所でその平面形は、馬蹄形状となっている。東西側は急峻で、南北側はやや緩やかである。

この城跡については、文献のうえからは詳かでないが、地元の人たちは「要害山」と呼んでおり、城跡の名残りを今に伝えている。

城郭は馬蹄形状となった平面形の丘陵尾根に沿って配置されている。

主郭は、最も高い位置にあり、標高61mある。東西に細長い長方形で、東西40m南北10mある。郭は平坦で、草木が生い茂っているので詳しくはわからないが土塁はないようである。傾斜面は急峻である。この郭から南側に斜面を10mほど下った位置に大井谷横穴群の一支群であるエーゲ横穴群があり、4穴が開口する。これからかなり下ったところに丘陵を南北に分断した堀切が認められる。

西1郭は主郭に連らなって作られ主郭との比高差は2mある。その規模は東西8m、南北30

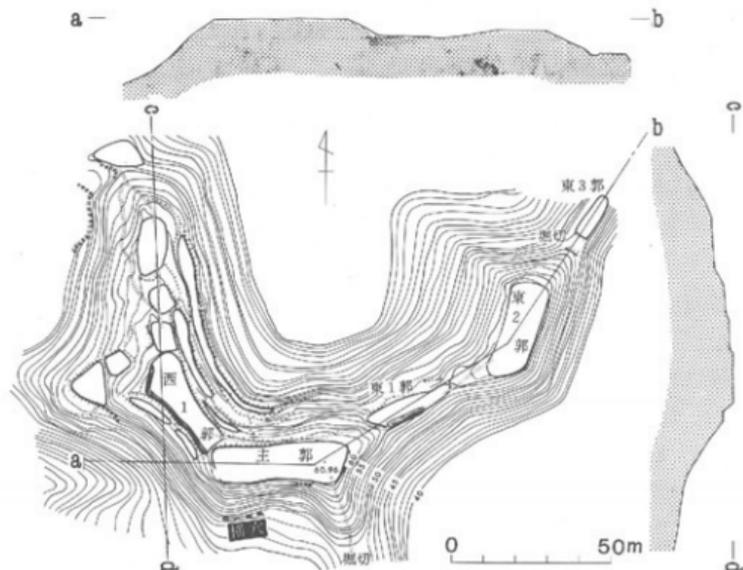


図95 大井谷城測量図

で、南北に細長い長方形状をする。この郭には、現在、中国電力の送電鉄塔が建っている。鉄塔建設に際して、昭和53年秋、この郭の西側部分240㎡の調査がされている。その結果、平坦部に東西4.2m 南北2.1mの堀立柱建物跡1棟、櫓跡2カ所、石積列等が検出されている。

西2郭は西1郭に続く下の段につくられた7×20mの郭である。その他、腰郭や帯状の郭等がいくつか認められる。

また、東1郭は主郭の東側に隣接した場所にあり、比高差5mを測り、東西7m南北20mである。この郭の東縁辺には西1郭にみられるのと同様の長さ15mの石列がある。

東2郭は東西10m、南北30mで、主郭につく規模の大きい郭である。主郭との比高差は4m、東1郭との比高差は2mを測る。

東3郭は東2郭の東方にあり、幅6m深さ1.5mの堀切で囲われて東西5m、南北15mの郭となっている。

この城跡の尾根続きの北端は塩冶神社であり、大遷城跡とは谷をへだてて対峙する。

はんぶ 半分城

出雲市上塩冶町字半分に所在し、字名をとって半分城跡と称している。島根県立出雲工業高校の裏山に位置し、標高は56mであり、一部の郭には送電鉄塔が建っている。谷を隔てた東側には大井谷城跡があり、南は神戸川が出境から平野に出るあたりである。西と北は平地が広がる。半分城跡とは神戸川を隔てた西側丘陵に、古志の栗柄、浄土寺山城が築かれており、塩冶の丘陵地に築かれている半分、大井谷、向山、平家丸の諸城をあわせ考えると半分城はまさに出雲西部の要衝地に築かれた城である。

この城跡に関しては『雲陽誌』の次の記述があたると考えられる。「古城山 麓に岩窟大小二十ばかりあり。上朝山塩冶境なり。城主しれす。」

城郭は10以上の郭から構成される。主郭は出雲工業高裏山の送電鉄塔の建つ場所の東にある一段高い部分であり、この主郭を中心とする一帯の郭が主な郭部分とみられる。

主郭を中心としてみた場合、北に北1郭、北2郭、南に南1郭、南2郭、東に東1郭、東2郭、東3郭、西に西1郭、西2郭、西3郭、西4郭を認めることができる。主郭からは放射状に派生する小支丘に沿って、尾根を加工配置されている。多数ある郭のうちの中心的な郭は主郭と西1郭である。

主郭は、やや丸味のある方形の平面形を呈するもので、土塁が北縁部から東縁部をめくり、南縁部の中央部で切れている。北縁部の土塁は一段低い西1郭に続いている。土塁の現状は幅4m北側で高さ50cm、東側では高さ70～80mである。主郭と西1郭との比高は4m、主郭と東1郭、南1郭との比高は8mで、斜面は急である。

西1郭は昭和53年に送電鉄塔建設に伴って発掘調査が実施されている。この郭の規模は主郭

側と接する辺で南北20mを測り、西の方には三角形に20m突出している。発掘調査によって検出された遺構は土塁と東西2段の平坦地である。土塁は主郭から続いて北縁部にあり、基底幅7m、高さ2.5mある。平坦地には柵跡と推定されるピットや、1辺1~1.5m、深さ1~0.8mなどの土坑が6個検出されている。土坑内からは鉄製品、土師質土器等が検出されている。

西1郭から3~5m低い位置に南1郭、東1郭、北1郭とそれをつなぐ狭い平坦地がある。北1郭は12×20mの南北に長い郭である。この郭の北には幅4m、深さ1.5mの堀切がある。そして、7×2.5mの北2郭が配される。それ以下は緩傾斜となって道が続く。北2郭の南側と北側は急な斜面である。

東1郭は主郭の南側にある郭で15×12mある。この郭と主郭南斜面との間に幅2m、高さ1.5mで東西10mにのびる土塁状の高まりがある。西2郭と南西方向にある大山権現を祀る下方の南2郭はこれまで述べた郭よりも5m以上低い位置に配されている。西2郭は15×9m、

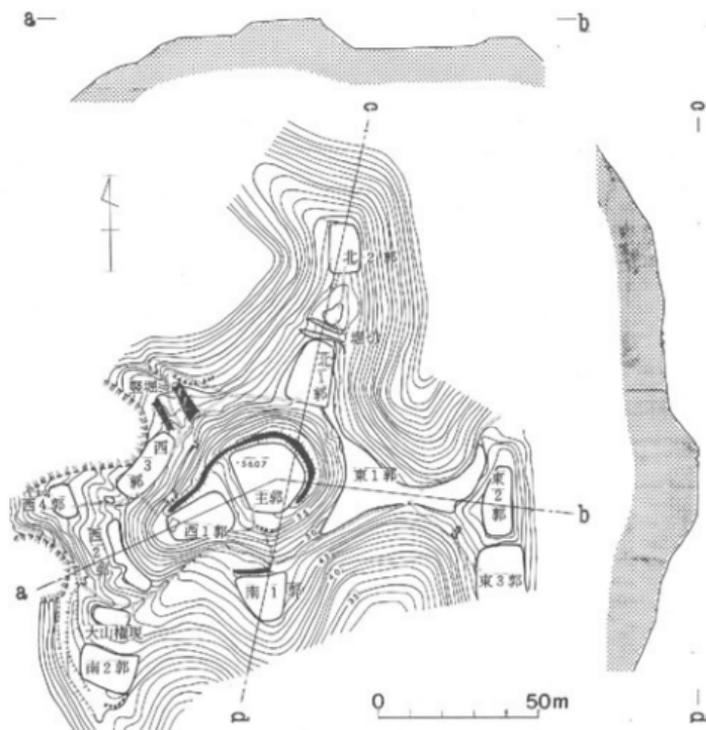


図96 半分城実測図

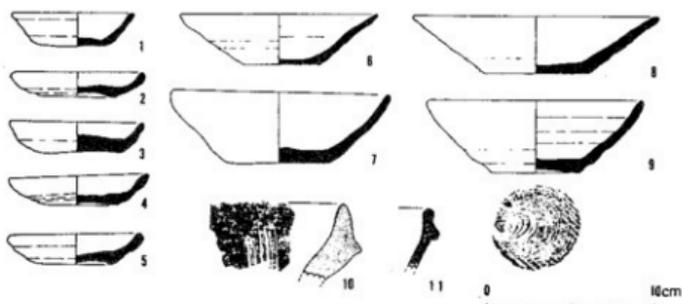


図97 半分城西1郭出土の土師質土器、陶器実測図（『大井谷城跡、半分城跡発掘調査報告書』より転載）

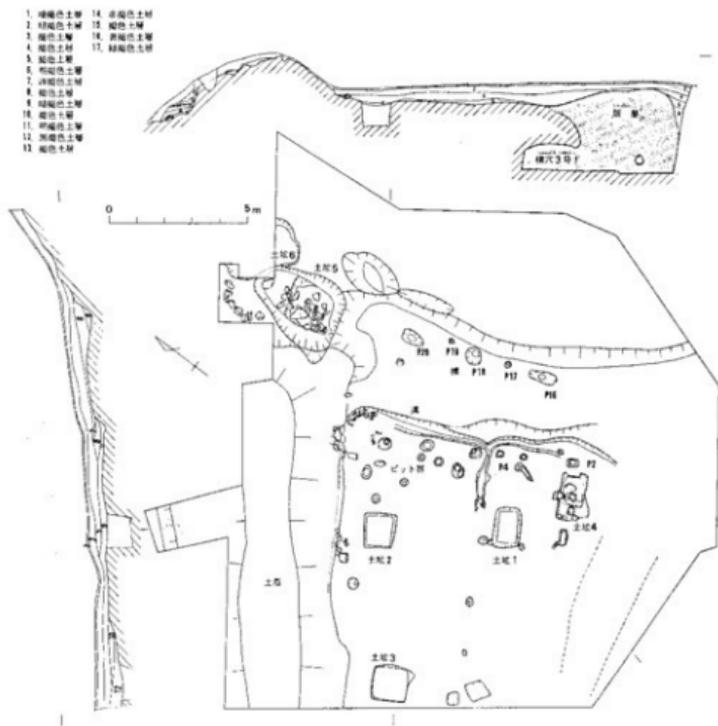


図98 半分城西1郭遺構実測図（『大井谷城跡、半分城跡発掘調査報告書』より転載）

南2郭は18×18mの郭である。23×8mある西3郭の北側には堅堀がある。

図96半分城跡主郭部測量図に示した他にも、県立出雲工業高校の造成工事施工前の写真を見ると明らかに郭跡があったことをうかがうことのできる平坦地がいくつも認められる。また、西南方の独立小丘上や大山権現から南へ続く丘陵上にも郭が認められる。さらに、北2郭から北に延びる丘陵尾根上にも踏査の結果いくつもの郭が配置されていることがわかっている。

この城跡については、文献のうえでの所伝は明確ではないが、西1郭の発掘調査で検出された出土遺物から室町時代後半ごろかと推測され、戦国時代の山城には間違いないと見られる。そして、戦国時代という時期と、この山城の北西麓にある塩治氏館跡と伝える場所との位置関係、文献に出る塩治城の比定場所などを考えるうえで、半分城跡は貴重な存在と考えられる。

唐からずら壘城

出雲市朝山町塩治町と宇那手町境に所在する城跡である。朝山町の盆地状集落の北側入口ともいうべき神原川と神戸川の合流地点の東方向1.2kmのところであり、出雲市街の弘がる平地から仰ぎみると、ひときわ高くそびえ一見して城跡であることがわかる。従って、朝山から上塩治にかけての丘陵地では最も高い頂をもつ山に営まれた山城である。

この山城に登るには東側の宇那手町の上宇那手上の集落から登るのが近いが、朝山町の大坊と接する東の谷からも北の大井谷側からも登ることができるが、この方面からは急峻である。山頂からの眺望は極めてよく、南麓の朝山盆地をはじめ、東の斐伊川下流部、北の出空市街、西の神戸川、神西方面などが手にとるようにみえる。また、上宇那手上の集落からこの山城にのぼっていく途中から南をのぞむと古代に設置された土塚とくもどか烽火（出雲市岸原町標高359.4mの大袋山に比定されている）や要害山（戸倉城）が真近かに見える。

この城跡に関しては『雲陽誌』に「古城唐黒山といふ」とある。また『雲陽古城跡』にも「同村（上朝山村のこと）カラスミ 但同断（城主不知のこと）とある。現在に残る文献のうえからは城跡の由来、居城者名などは詳細にすることができない。

この城跡は、周囲が深い谷となっている標高の高い位置につくられた山城である。そして、郭は狭い丘陵尾根上の自然地形を利用して削平加工されている。

主郭は三角点のある部分の山丘上ではなく、大山権現を祀る場所である。丘陵尾根は主郭のつくられたところを中心と考えると大ざっぱに北西方向、西の方向、東の方向に細長く伸びている。

主郭は標高236.5mのところであり、大山権現を祀る場所を除いて、周囲を削平している。東西35m、南北40mほどの三角形の郭である。この東端部分には土壘が築かれ幅1m長さ9m高さ0.6mある。東下方へは主郭の中ほどから、北側斜面に道がついている。

東1郭は3～4m下がった位置に東西10m南北12mの広さがある。東2郭は幅5～10



图99 唐 城 测 量 图

m長さ40mほどある。東2郭の南側と北側にも東2郭より一段下った郭がある。南側には東3郭と東4郭の2つの郭がある。幅8～6m長さ50mの東3郭から、一段下って6×8mの東4郭がある。この東側下方にも郭が認められる。北にも北1郭、北2郭などがある。

以上の他、三角点のある東側丘頂部にも郭がいくつか認められる。

あねやま 姉山城

出雲市朝山町字姉山にある。袋状となった朝山の集落の平地からいえば西側の独立状にそびえる山丘上にある。ちょうど神戸川と神原川が合流する地点の南側に位置し、この2つの川にはさまれている。国立島根医科大学の方からみると古志の丘陵地と塩冶の丘陵地の間に独立丘的に見えるのが姉山城のあった山丘である。西側の神戸川、東側の神原川が天然の濠であり、南の朝山八幡宮を祭る宇比多伎山のほうが退路という城を構えるのに格好の地形である。また、神戸川を上ると須佐の高矢合城に至り、そこからは備後國に通ずる。神原川を上ると神原の戸倉城に至り、そこからは三刀屋城へ通ずるという具合に交通上も要衝地である。まさに、四神相応の地である。

この城について『雲陽誌』の馬木・勝定寺の条には「庭前に仮山あり、古樹長大なり、東に大河流れて姉山の古城清々たり」と記されている。また『雲陽古城跡』には「上朝山村、姉山、同断（不知城主）」とあって、姉山城の存在を知ることができる。また、『知今関』によると「朝山村姉山ノ城主殿ノ介大伴惟之嫡子朝山七郎四郎ト有承知文治ノ頃ノ人ナリ」とある。『簸川郡史』に「朝山郷 朝山家は此の地に住む事五百数十年なりしが、応永8年秋鹿郡の池平城に移り、久しき本住地を離る。其の居城初め土椋山にして、今は要害と名づくものなりき。然れども此の城は防備に不便の山なり、依りて後には神戸川に臨む姉山を城とす。ここは懸崖屹立し防備甚だ宜し」とある。

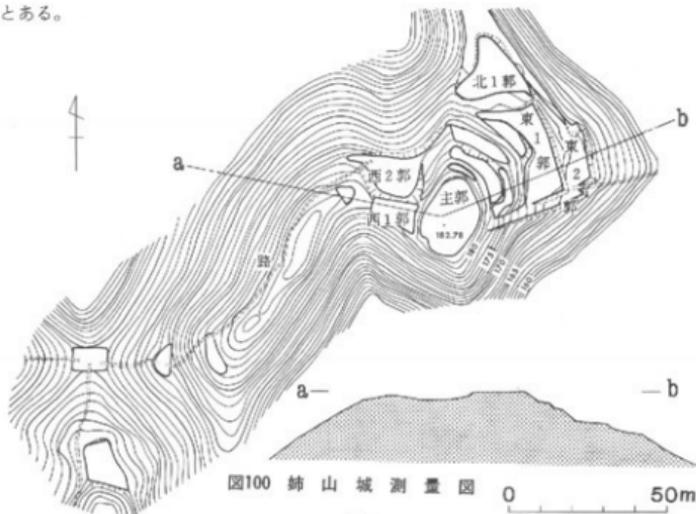


図100 姉山城測量図 0 50m

郭は、姉山と呼んでいる丘陵の北側部分につくられている。この北側半分には丘陵の高まりが2ヶ所あり、その両方にいくつかの郭がつくられている。主郭はこのうちで北側寄りの高まりにある。

主郭は標高1827.8m、比高170mで、長径25m、短径12mの長円形状である。そして、この東側に多くの郭が配されている。主郭から東は、1.5m下に幅2m長さ10m、さらに1m下に幅4m長さ22mの2段の帯状の郭がある。その下段は幅2～3mでカギの手状の平面形をもつ郭が南に、5×12mの郭が北に配されている。東1郭は幅6～12m、長さ29mの郭で、東2郭は幅9m長さ20mの郭である。東1郭と東2郭では2mの高低差がある。これらの郭の南側には幅2mの道がとりつき、東1郭、東2郭などの郭の土壇とは明瞭な区別があり、かつまた柵があったとも考えることのできる箇所がある。東2郭から下方へは急な道があり、20～30m下ったところに小さな郭が1、2認められる。

北1郭は三角形の24×18mの郭である。東2郭から北2郭へは2m幅の道で連絡する。北2郭は幅8m、長さ20m以上あってその端は岩が露出する。そのあたりにはかつて姉山権現が祀られていたという。姉山権現は今山麓に移されている。

西1郭と西2郭は主郭と自然丘を残す西側の高まりの間に一段と低くあたかも隠れたようにつくられている。西1郭は14×5～10m、西2郭は20×12m程である。

以上の郭は大まかにいえば自然丘の張り出しに応じて幾重にもつくられている。

主郭のつくられた西南側は、自然丘が続くが、その斜面となるところに4×13m、5×10mの小郭が2カ所ある。さらに下って、鞍部になるところに11×7mの長方形の郭がある。鞍部から北は竹の谷と称する急峻な斜面となる。この反対の南は石垣を使って土留めをしたと考えられる郭が1、2認められる。

鞍部から20～30m上った南西側丘陵上には10×22m、9×23mなどの長方形の郭がある。その配置は連郭式である。これら郭のつくられた南側は急な西谷とゆるやかな大下へ通ずる道がある。

西谷を下りると朝山の集落があり、これはかつての姉山城の根小屋であろうと考えられる。

朝山八幡宮のある東西方向に尾根の連なる丘陵部は、踏査不十分であるが、唐曇山城の方向から見ると北側斜面に平坦地がいくつか認められるので、郭の配置されている可能性がある。

浄土寺山城

出雲市下古志町浄土寺山にある城跡である。下古志町の日蓮宗久遠山妙蓮寺の裏山にある。

この丘陵続きの東の突端には歴史跡放れ山古墳があり、西には歴史跡妙蓮寺山古墳の前方後円墳がある。

この城について『簸川郡史』には次のようにみえる。

「佐々木泰清の子義信は古志の地頭となる。……義信は九郎左衛門といひ初め浄土寺山を城とせしも、後代に至りて、要害に富む栗栖山或は天が平山に襲れり、館は浄土寺山より数町北の平野に置き、いま土居と名づく」

義信は佐々木泰清の第10子であり、古志氏は12代続いたともいわれる。

城郭は、東西方向につらなる低い丘陵の東端部分ともいえるところに位置する。標高40mほどで水田との比高は30mほどである。

郭は放射状に支丘陵の派生する部分のそれぞれの尾根上に削平してつくられている。

主郭は妙蓮寺の車裡のうらあたりの山丘上と考えられる。頂部は22×8mの長方形の郭とそれより0.5m低い東側に位置する18×7mの自然丘に近い郭によってなる。この東方向には10m下った位置に18×15mの郭、さらに1.3mほど下って幅4mの带状の郭が北東側にとりつく。ここから4m下ったところに30m×13.5mの郭がある。それから下方は急な崖となる。

主郭の南東側には10m下って10×12～15mの郭が2カ所ある。西側には主郭から7～8m下った位置に18×8mの郭があり、それから西は落差10m、幅10～12mの堀切となる。これの西は、丘陵の尾根が続くが、自然丘に混じって郭もつくられており、34×5mの带状の郭や、11×7.5mの郭、堀切などがある。

北側には、西側と東側の二方向に支丘がはりだし、その尾根に郭がつくられている。10m下った位置に14×27mの郭がありその西側は、12×12mの郭、東側は11.5×18mの郭などがある。この郭には幅2m、長さ10mの土塁が認められる。

浜村台次郎「古志村史」に「東方と前面即ち大手とし、西方は山の一部を切り落して堀め手とし、南北両面は切岸を施している。そして、北の山麓には堀があるべきように思う」とあり、踏査結果と大筋では合致している。なお、同書には「古志氏の館跡は、一光寺旧址の東北方に当り、今は田となっており、土居という地名が残る」という。

栗栖城

出雲市古志町下新宮にある。北の山麓から見ると伊邪那美命を祭る久奈子神社の東側と裏山に



図101 浄土寺山城、栗栖城の位置図

あたるところである。NHK出雲塩冶テレビ中継放送所のある場所をふくむ一帯である。標高は浄土寺山城よりも高い100mである。神戸川西岸の要衝である。

栗栖城は古志氏が義綱のとき浄土寺山城から移した城といわれる。

『三刀屋文書』に京極派と山名派が出雲国内で争ったときに三刀屋城主が古志城に攻撃したことがみえる。

城郭は北に突出する丘陵端部北斜面を加工してつくられており、最高所につくられた郭を主郭と考えると次のようである。

主郭は東半分ほどが東西15m、南北8.5m、西半分が東西20m、南北11mほどで、途中はもとの丘陵の関係でくびれたようになっており、南北幅は5mである。東側と西側の高低差は西側が東側よりも50cm程度低い。この主郭の西側は自然丘陵を切削加工し、掘切としている。上端幅は22.5m、下端幅は4m、深さ7～8mの葉研堀状である。主郭の東側は2m下って東

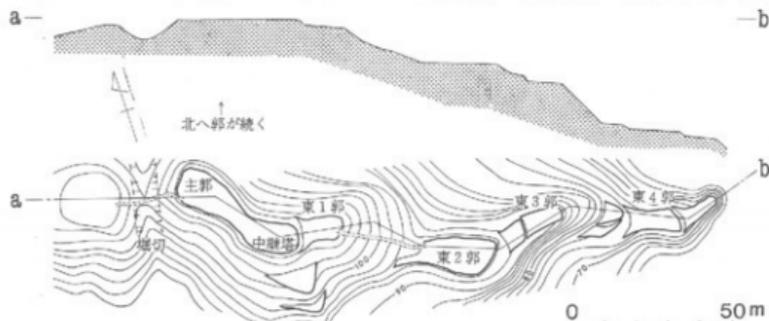


図102 栗栖城主郭付近実測図

西12.5m、南北8.5mの東1郭がある。これよりも東は斜距離30m（比高差15m程度）下るとテレビアンテナが4本建つ東西23m、南北5mの長方形の東2郭がある。比高差2m下って東西7.5m、南北3.5mの長方形の東3郭、下って比高差0.8mで東西13m、南北5mの細長い東4郭があり、その先端は0.5mほどで自然丘を残している。

東2郭の南部分では1.05×3m広くっており、それより南の下方には2段の帯状の郭がある。

主郭の北にも広いいくつかの郭がたつらなる。

主郭の西に堀切があることは先にのべたが、それから西方は次第に丘陵の標高が高くなっていくが、尾根上は原形を失っており、郭としての削平加工をしたかどうかの判別はできにくい。

この城跡は浄土寺山城よりも堅固で、郭規模も大きく、浄土寺山城に比べてより発展した城郭構造をもっていたとみられる。

この城からは佐田町の須佐、備後国への道が通じていたといわれ、今も道が残る。

神西城

出雲市西神西町に所在する。別名高倉城とも、
竜王山竹生城とも波加佐山城ともいわれる。

出雲市の南丘陵地では最も西部に近いところに位置し、出雲市の西側の町湖陵町に接する。『出雲国風土記』にのる「神門郡番狭郷」にあたる地域である。地形的には西の常楽寺川と東の九景川に挟まれた丘陵地である。北は神戸水海（現在はその一部が神西湖として残る）や神戸川によって囲われている。従って、神西は、石見国に通じる出雲国内西部の軍事上の要衝地という条件を備えた場所で境目城である。神西城が出雲十旗の一つに数えられる故以であらう。

神西氏は貞応2年（1223）神西地頭になった小野高道が相模国鎌倉から下向し、神

西に居住したのを始まりとし、12代続いたという。神西氏の最後、元通は天正6年（1578）7月2日播磨国上月城にて自害し果てている。神西氏は、波賀佐村、久村、清松村、智伊宮村等の神門郡西部や大原郡大東の一部を主な領地としていた。尼子晴久の頃作られた「分限帳」によると美作国内にも天文頃4500石余を領していたという。

神西を舞台にした合戦には、文明2年（1470）石見の豪族たちが味方した山名氏の攻撃があり、清定の軍勢36人が戦死した合戦が知られている。

毛利元就が尼子氏にとって代わって出雲国を治めるようになると「知今図」によれば、神西城は5,800石で、御家人と番人は鞍智・衛門介であった。

神西城の城郭は南は奈佐佐神社、北は十楽寺、東は東神西町林組、西は西神西町坂本に囲まれた標高101mから60mばかりの、谷をはさんで弧状的に連なる丘陵の尾根に沿ってつくられている。

この城跡は竹生城といわれるように文字どおり、竹が生い茂っており、郭配置や規模形状等を把握することは容易ではなかったが、尾根上を踏査した結果、確認した郭の状況はおよそ次のようである。

尾根上につくられた広い平坦地となる部分は3カ所あり、いずれも稜線の基部でひときわ高い部分である。『神西村史』にいう本丸、二丸、三丸がそれらにあたると考えられる。仮りにこの

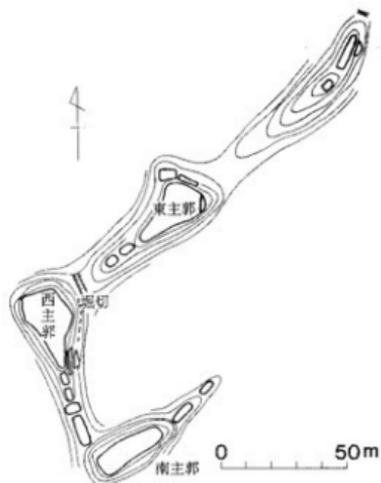


図103 神西城略測図

3カ所を南主郭、西主郭、東主郭と称する。

最高所は、奈宍佐神社の裏山で、国土地理院の三角点のあるところである。そして、ここが南主郭である。広さは約30m×24mある。ここからの見通しはよく、西方の湖陵町の家並み、神西湖、大社町、出雲市街が手にとるように見える。この南主郭から東南側に10mほど下った位置に小さな郭がある。そこからは丘陵下方に向けて幅2mほどの狭長な郭がある。さらに、1.5m下って10m×6mの郭がある。

南主郭の北側は8mほど自然丘を下ると12×8mの北一郭がある。その北側は3m下って、14×15mの北二郭などがある。次いで丘陵基部の36×45mの広い西主郭がある。『神西村史』のいう二の丸である。この東の方向にも郭は続く。10m×15mの郭、30×10~15mの東主郭、6×3.5mの郭である。東主郭の北側斜面には東主郭から2m下った位置に15×13.5mの郭さらに8m下って5×2.5mの帯状の郭等がある。東主郭の東方尾根には高さ0.5mの土塁のある3×7mの郭、尾根道、30×11mの郭、幅2m、深さ2mの堀切などがつくられている。

高城

出雲市知井宮町字保知石にある。国鉄山陰本線知井宮駅の西南方向3kmのところにある標高100m程の山丘上に位置する。この城跡の東側は保知石川が流れ、200~300mの細長い谷が形成されている。

この城主は吉志義信の第3子貞信で、保知石に住居したところから保知石氏と称した。その領地は、保知石、笠柄、間谷池であったといわれる。『簸川郡史』によれば、「邸宅は今の知井宮駅南隣にて「城の本」と呼ぶ。城主日常の住所なればかかる名をつけしか。城はここより半里西南の高城山にて山を東へ下る坂口は政所といひ役所ありし跡なり」とある。

城跡は山丘上につくられている。主郭は頂上部を削平加工してつくった東西25m、南北13mの郭である。この西側は0.7m程低くなった東西11.5m、南北12.5mの郭がある。主郭の東端は岩盤が露出し、幅が狭くなっており、斜面は急である。この急斜面を4~5m下った部分から東へは尾根に幅1~2mの幅の道が通じている。そして、相当下っ



図104 高城位置図

た陵線基部に東西14m、南北7mの郭が認められる。それ以下は保知石の谷に道が通ずる。高城は以上のように単純な郭構成であり、古志の城と神西城との間に位置するところから比布智神社のある小山などとともに警戒、監視を目的とする番城としての性格を有するとみられる。(勝部昭)

とびねす
鳶ヶ巣城

鳶ヶ巣城は出雲平野の北方にそびえる北山山脈中央部、標高285mの鳶ヶ巣山に築かれている。この山頂からは出雲平野はむろん、城跡が多くのある南方の上塩冶方面の山々や遠く日本海、宍道湖をも眺望することができる。また、山麓には中世において、西流する斐伊川や一大勢力を有する出雲大社、鯛瀬寺への参道が通っていたのである。



図105 鳶ヶ巣城主郭付近測量図

『雲陽軍実記』によれば、この城は永禄4年(1561)毛利元就によって尼子氏攻略の拠点として築かれたといわれる。それは、この地が交通・軍事上の要衝であり、特に、水軍をもつ毛利氏にとっては、神門水海、宍道湖、日本海を結ぶ要であったからである。

尼子滅亡後のこの城は毛利氏の配下、大野、宍道の両将によって守られていたが、16世紀末の毛利氏支配の終焉後に、城としての機能を失い、廃城となったと推定される。

遺構としては、山頂の東西30m×南北15mの主郭を中心に四方へ延びる尾根に、合計10カ所の郭が存在する。

東一郭は東西10m×南北15m、土塁高0.3m、東二郭は東西45m×南北30m、土塁高2.20m、主郭との比高は東一郭6m、東二郭が16mである。

南一郭は東西15m×南北40m、土塁高0.2m、南二郭は東西20m×南北45m、土塁高0.6m、主郭との比高は南一郭が10m、南二郭が12mである。

西一郭は東西20m×南北20m、土塁高0.6m、主郭との比高は6mである。

北に延びる尾根には東西23m×南北15m、土塁高1.5mの北一郭があり、さらに北高に東西16m×南北57m、土塁高1~2mの北二郭が存在する。主郭と北一郭との比高は20mで、北一郭と二郭の段差は1.5mである。さらに西方に派生する尾根にも、小規模な郭が5カ所存在する。

また、南麓の標高50mの地点には、東西200m×南北20~50mの平坦地が認められ、また、西側山麓には宍道氏の菩提寺とされる臨済宗靈雲寺があり、これら一帯の平坦地は館跡と推定される。

なお、萬ヶ巣山周辺には「殿屋敷」「門前谷」「馬乗馬場」「二ノ倉」など城跡に因んだ地名や古墓が多く見うけられる。古墓のなかには「大野塚」と呼ばれる宝篋印塔一基が含まれ、天正10年(1582)に当城内で城主宍道政隆によって謀殺された大野高成(松江市大野町所在の本宮山城城主)の墓と伝えられている。

(磯村利和、西尾克己)

戸倉城

出雲半野と飯石郡南部とを結ぶ最短路上にあり、出雲市^{ひらね}神原町戸倉の要害山に築かれている。この標高300mの山頂からは神戸川流域をはじめ、遠く飯石郡の山々をも見渡すことができる。

本城は元龜、天正年間(1570~92)の尼子再挙戦に利用された山城であり、『毛利家文書』や『萩藩閩閩録』には、「十倉」として記されている。城主は定かでないが、近郷の神社に残る棟札等より古志氏一族ではないかといわれている。

山頂の小さな平坦地を除いては遺構らしきものは存在しない。全山が岩山であり、水の使も悪く、戦時における短期間の砦として使用されたものと思われる。

なお、本城の北方に隣接して『出雲国風土記』に載る五峰の一つ「土棕峰」に比定される大袋

山がある。また、山麓には「殿守」「馬場崎」「勝負廻」「大門」など城に因む地名も少なからず見出せる。

上之郷城

奥出雲と出雲平野との中途にあたる、斐伊川左岸の出雲市上鳥町のあたかも独立したような丘陵上に位置する。標高117mの山頂からは斐伊川が形成した小規模な谷底平野をはじめ、赤川と斐伊川とが合流する斐川町阿宮に所在する城平山城や、加茂町大竹の光明寺を望むことができる。

上之郷城の歴史は定かではないが、『明徳記』にみえる上郷入道が初期の城主とみられ(本書「後塩治氏について」を参照)、また『雲陽誌』等に城主として上之郷兵庫之助が散見されることから、本城は室町時代に使用されたと思われる。さらに『雲陽軍実記』には元亀元年(1570)に毛利氏の将吉川元春が2000余騎で「舟津上の江」(現在の出雲市船津町)に陣取ったとあり、上之郷城を西方より攻略するための布陣であったと考えられる。

遺構としては、馬蹄形の尾根上に郭10と堀切3、土塁2および井戸1が残る。中心となる郭は東側の尾根にある主郭と東一〜三郭であり、主郭は東西30m×南北17m、東一郭は東西30m×東北10m、東二郭は東西13m×南北10m、東三郭は東西30m×南北13mを測る。主郭と東一郭との比高は5mであるが、東一郭と二郭、三郭はほぼ水平である。

主郭から西側に延びる尾根は上之郷神社の位置する先端まで緩やかであり、その間に、階段状に土塁をもつ大小4郭と大きい堀切が2カ所存在する。また東二郭から北側に派生する低い尾根上にも2カ所の郭が認められる。井戸は東一郭の下方15mの山腹にあり、大きさは径1m、深さ5mの円形上のもので、地表近くの2m間は人頭大の野石を積んでいる。

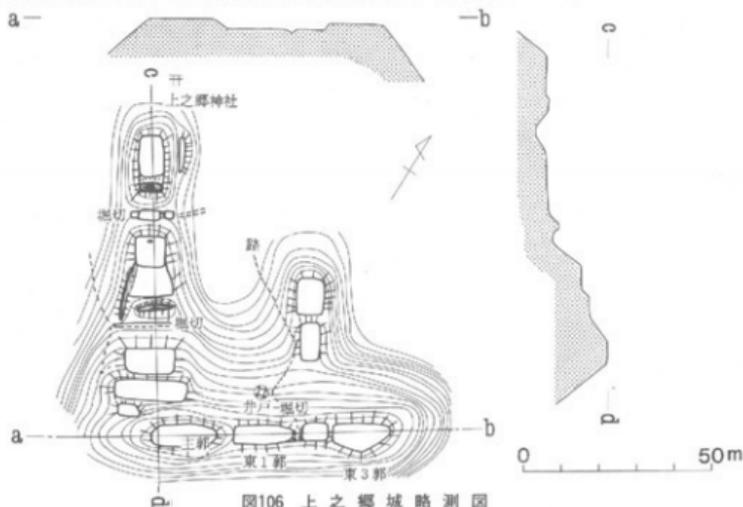


図106 上之郷城略測図

館跡は北麓の民家が並ぶ水田より4～5m高処にあったと推定されるが、それを示す痕跡は認められない。

なお、当城跡は斐伊川を挟んで対峙する城平山城とともに、斐伊川の水運を制圧し、斐伊川上、下流方向からの攻撃を防禦する役目を担っていたと考えられる。

館 跡

臨時的な山城に対して平常時の館があるはずであり、山城が築かれない平野部においては、領主たちの居館が要害も兼ねて築かれていたのであろう。

出雲平野において地名、伝承および文献より館跡と推定できるものを挙げると表15のようになるが、調査例がなく、規模、構造、時期等はほとんど不明である。

これらのうち詳細不明の館跡もあるが、知見の限りでは田自然堤防、古砂丘、畷高地上に立地し、水運を利用することが可能な湖、河川の近辺に造られていることが多く、軍事的、経済的、な両面を満足していることが注目される。

表15 出雲平野の館一覽

名 称	所 在	領 主 名	文 献
塩冶判官屋敷	出雲市上塩冶町	塩 冶 高 貞	『雲陽誌』
三 木 館	" 小山町	三 木 氏	『三木家文書』
劍 城	" 高岡町	鷹 羽 三 河 守	『知今園』
古 城	" 高松町	松 ケ 枝 内 蔵 介	"
古 城	簸川郡斐川町三分市	天野少輔五郎元珍	"
鹿 蔵 山 城	" 大社町竹築南		『竹築古事記』

萩杵古墓

萩杵古墓は出雲平野の中央部を貫流する斐伊川左岸の出雲市萩杵町89番地、俗称「馬すて場」に所在する。

この古墓は1965年4月に、この地区一帯で実施された國場整理事業中発見されたもので、現在の水田面下1.5mに置かれていた器高86cm、口径49cmの常滑焼系の大甕を埋葬主体とする。この甕の中には粘土があり、底の部分には約20mほどの間隙が存在し、その中に青磁碗2、青磁皿1及び骨片が認められたという。

2個の青磁碗とも内面は素文であるが、外面は25葉の紫弁蓮花文を表わし、蓮花文の中線は、鐙につくる。口径は13.5cmと13.8cm、器高は6.4cmと6.8cmで共に高台を有し、高台下端を除いて全面に翠青色の青磁釉がかかる。青磁皿は外面は素文であるが内面には長さ2.3cm前後の

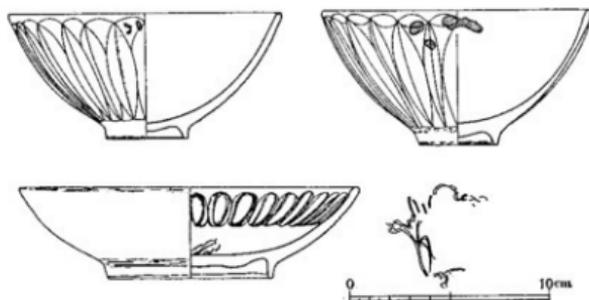


図107 荻村古墓出土青磁茶碗図（『考古学雑誌』54-3より転載）

花卉を43葉ほど配し、底面中央には印刻でもって草花文を表わしている。口径は17.2cm、高さ4.6cmで高台を有し、全体に淡い白緑色の青磁釉がかかる。

これらの青磁碗、皿は中国南宋の龍泉窯で焼かれたもので、わが国出土青磁でも代表的優品である。かかる中国製青磁を副葬していた人物はこの地域一帯を領していた出雲最大の豪族佐々木（塩治）氏ではないかといわれている。いずれにせよ、被葬者の経済力の大きさを端的に示す品である。

出土品は国保有文化財となり、昭和54年度に重要文化財の指定を受け、現在東京国立博物館に保管されている。

〈参考文献〉 近藤 正「出雲荻村発見の骨磁器」（『考古学雑誌』54-3、1969）

でんえん なほんがんだかきだ

伝塩治判官高貞五輪塔

この五輪塔は神戸川左岸、出雲市塩治町に所在する神門寺境内の一隅にあり、出雲国守護塩治判官高貞の首塚と伝えられている。

総高1m50cmのこの塔は凝灰岩製であり、風化が進み、欠損した部分も多い。地輪は49×52cm、高さ49cmの長方体で、上面の縁に3～5cm幅で面取りが施されている。水輪は最大径51cm、高さ36cmの球状を呈し、胴が大きく張るタイプである。上面部には凹みが認められるが、火輪が乗っているため詳細は不明である。火輪は軒の最大長54cm、高さ37cmの笠状を呈している。椽縁はほぼ直線と長く、軒の切口はやく4～6cm内側に入り込んでいる。上面部の平坦面には空風輪を支えるための19cm四方で、深さ7cmの孔が穿たれている。空風輪は高さやく37cm、最大径26cmの宝珠形を呈し、高さ12～18cm空風を区分する幅6cmの間帯が入る。底部には径13cm、長さ6cmの突起があり、火輪の頂部の孔へ差し込み、空風輪を支えている。

さて、この五輪塔には銘文や梵字は認められないが、水輪や火輪の形態よりおよそ室町時代に属するものと考えられる。

なお、この塔の周囲には他に石塔はなく、また、神門寺がこの地域では古い寺院である等より、高貞の供養塔と推定されている。

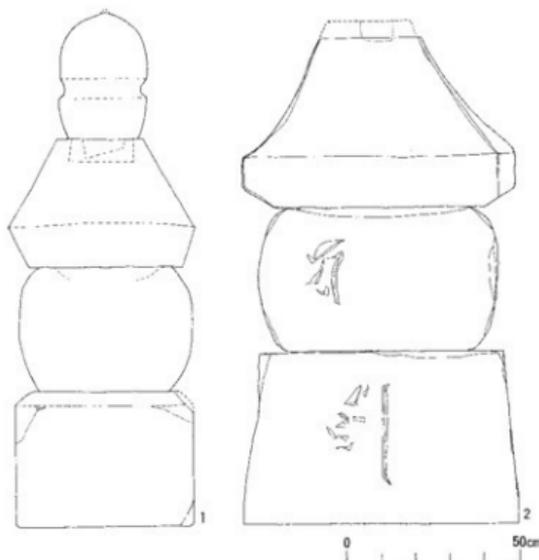


図108 五輪塔実測図 (1. 伝塩治判官高貞五輪塔, 2. 伝吉祥姫五輪塔)

伝吉祥姫五輪塔

この五輪塔は神原川と神戸川が合流する出雲市朝山町の真言宗金剛峯寺（通称大坊）東方数百mの「深山寺」と呼ばれる場所に位置する。現在は一塔のみ建つが、周囲には宝篋印塔、五輪塔の残欠が認められる。

この塔は総高1m43cm以上を測る大形品である。しかし、空風輪が欠いている上、凝灰岩製のため風化が進み欠損した部分も多い。地輪は辺71×80cmで、高さは48cmの長方体を呈する。水輪は球状で、最大径73cm、高さ42cmを測り、胴部があまり張らないタイプである。上部の平坦面には凹みが存在するが、火輪のため詳細を知ることはできない。火輪は笠状を呈し、軒の最大長75cm、高さ55cm（推定、現在高51cm）を測る。被輪は内側に幾分かそり、軒の切り口は15cmの幅を有しており、棟の平坦面には空風輪を支える一辺10cm大の孔が穿たれている。

さて、本塔には銘文は存在しないが、各輪に葉研彫りによる四方五大の梵字が残る。図108(2)に掲載した図面中の梵字は発心門の ア 、 バ である。

さて、この古墓は同寺の縁起によると光仁天皇の時、この地から宮中へ出仕した「吉祥姫」（史実かどうかは不明）の古墓と伝えているが、型式等より背後にある唐薬城跡か大坊に関係するものと考えられる。

（西尾 克巳）

第4章 出雲平野周辺地域の考古学的研究の歴史

池田 満雄

江戸時代以前

出雲国風土記について

『出雲国風土記』は天平5年(733)の勅造とされ、奈良時代における出雲国の様相が書かれている。出雲平野周辺についても、郡・郷の状況や、軍団・烽・正倉・寺院・神社・山・野と草木禽獣、川・池・海と浜・島・産物などの記述がある。これら風土記の記載事項については、江戸時代以来、さまざまな考証が行われている。天和3年(1683)成稿の岸崎時照『出雲風土記抄』には、神門郡朝山郷新造院を神門寺にあてるなど、注目すべき見解が見られる。しかし、それらは考古学上の資料に基づくものではなかった。

雲陽誌

享保2年(1717)、『雲陽誌』という地誌が編まれている。序文によれば、松江藩の備前黒沢長尚の撰になるという。各村別に社寺・名所・川・土手・橋・古城・経塚・古塚などがのせられているが、杵築の大社や神門寺のように、かなりスペースをさいて説明し、宝器品目を列記したものもある。

『雲陽誌』には、下古志の宝塚をはじめ、「岩窟」についての記述もみられる。「高さ八尺、横七尺四方」(宝塚の場合)のように寸法も記されており、今ものころ横穴式石室、古墳と照合できるものもある。上古志の神門塚については、「高さ八尺、周二十八間、塚頭に覆りあり神木と号してまつ。是神門の臣等を葬所なり」と書いている。

命主神社付近出土の青銅器

寛文5年(1665)には、大社町の命主神社付近で銅戈と硬玉製勾玉が出土している。杵築大社の朝宮佐草自清の「命主神社神器出現之記」によれば、寛文5年の大社造営の折、命主神社の背後にあった大石の下から発見されたことがわかる。その後、出雲大社の社宝として伝えられ、現在国の重要文化財に指定されている。命主神社付近からは、寛文5～6年のころ4回にわたり銅利器が発見されたと記録のころが、現存するのは上記銅戈と硬玉製勾玉1個だけである。

大念寺古墳の石室開口

出雲平野周辺の横穴式石室古墳は、古く開口していて開口の事情や出土品の知られるものが乏しいが、わずかに記録のころのものもある。出雲市今市町の大念寺古墳は、文政9年(1826)2月、大念寺の本堂再建にあたって、南側の山を崩した際、石室の存在が知られるにいたった。大念寺には文政9年8月製の本版「岩家図并寸法」、「宝物日録」がのこされている。また、開口より8年後の天保4年(1833)12月に、「雲州神門郡今市大念寺廻山而所獲之神器之図」が作られている。これは発掘

品を実物大に写生して原色を著け、一々説明を付したものである（『島根県史』第4巻参照）。内部構造は一部破損し前室にあった石棺は現存しない、出土品の現存するものもわずかであるが、上記の資料によって、発見当時の状況をうかがい知ることができる。

明治以降

上塩冶築山古墳の石室開口

出雲市上塩冶町にある築山古墳が開口したのは明治20年(1887)3月のことで、発掘にあたった森山白十郎の手記「古墳発見之序次」に、その間の事情が伝えられている。学術的な発掘ではないが、内部構造や副葬品の状況なども紹介され、貴重な資料となっている。

記録によると、奥室の棺外に土器・鈴・槍・鏃・銀環、小石棺内に玉類・長刀1・短刀2・冠・土器1などがあり、この小棺の屋根に馬具類がのせられ、大棺の中には円頭大月1・直刀1・土器1があったという（『島根県史』第4巻参照）。

ガウランドの古墳調査

明治10年(1877)、アメリカ人エドワード＝エス＝モースが大森貝塚の発掘調査を行なったが、この時点から日本考古学の新しいあゆみが始まったとされる。モースと共にイギリス人ウィリアム＝ガウランドの業績も注目される。彼は明治5年(1872)に大阪造幣局の技師として来日、明治21年(1888)に帰国するまで、本務のかたわら日本各地の古墳調査を行なったが、帰国後、つぎのような論文を発表している(渡辺貞幸「ガウランド氏と山陰の古墳」八雲立つ風土記の丘録No.37, 39参照)。

- ① The Dolmens and Burial Mounds in Japan, *Archaeologia*, vol. 55, 1897.
- ② The Dolmens of Japan and Their Builders. *Transactions and Proceedings of the Japan Society, London*, vol. 4, 1900.
- ③ The Burial Mounds and Dolmens of the Early Emperors of Japan. *The Journal of the Royal Anthropological Institute of Great Britain and Ireland*, vol. 37, 1907.

ガウランドは明治20年9月末から10月にかけて島根県を訪れている。県庁で上塩冶築山古墳の出土品を調査してから、9月30日に今市へ来て、大念寺古墳・上塩冶築山古墳をはじめ、周辺の遺跡・遺物を調査している。前掲書①には、大念寺古墳・築山古墳のほか、塚山古墳・地藏山古墳・半分古墳についても記述し、付近の横穴墓出土という土師器の図ものをせている。石室・石棺について綿密な計測値を記し、するどい考察を行なっていることは注目に値する。

日本石器時代地名表の刊行

明治30年(1897)7月、東京帝国大学人類学教室によって、『日本石器時代人民遺物発見地名表』が編纂発行された。その後、同書は明治31年、同34年に増訂刊行、大正6年(1917)12月にいって、第4版が発行されている。そして、昭和3年(1928)には、第5版が『日本石器

時代遺物発見地名表」と改題して刊行されることになる。第4版には出雲国関係21ヶ所があげられているが、出雲平野周辺では次のものがみられる。

表16 石器発見地名表（『日本石器時代人民遺物発見地名表』より）

所 在 地	遺 物	備 考
粟川郡杵築町出雲大社内	磨石斧、冠石	柴田常恵
同町、出雲大社付近ノ山	石鏃	雲根志
莊原町・学頭	磨石斧	野津左馬之助
知井宮村	石鏃、石臼	同
塩冶村・上塩冶大井谷	磨石斧	柴田常恵
同村・上塩冶宮山	磨石斧	同

柴田常恵(第4版の責任者で、当時東京帝国大学理学科助手)報告のものは、『人類学雑誌』292号にのせられている。

出雲に於ける特殊古墳

大正7年(1918)9月、梅原未治は『考古学雑誌』9巻1号に「丹波国南桑田郡篠村の古墳一特に方形墳に就いて」を発表し、その中で石倉陣榮の調査報告に基づき、布智の一保塚(宝塚古墳)、大塚の大塚古墳について紹介している。続いて梅原は『考古学雑誌』に「出雲に於ける特殊古墳(上)」(9巻3号)、「同(中ノ上)」(9巻5号)を発表したが、大正8年1月刊の後者に大念寺古墳・塚山古墳・上塩冶築山古墳・地藏山古墳の調査成果をのせている。横穴式石室・家形石棺等について実測図をあげて論述し、出雲地方の古墳研究に大きく貢献するものであった。

島根県史の発刊

『島根県史』全9巻は大正10年(1921)から昭和5年(1930)までの間に刊行されたが、野津左馬之助は明治44年(1911)から昭和5年3月まで島根県史編纂委員として活動している。大正13年(1924)3月刊の第4巻(古墳)は、野津の編によるものであって、県内の古墳調査の成果を集成したものととして、研究史上特記すべきものである。出雲平野周辺の古墳についても地名表がのせられ、顕著な古墳では上塩冶築山古墳・地藏山古墳・塚山古墳・一保塚(宝塚古墳)・大念寺古墳・福知寺横穴・半分横穴について、くわしく記述している。

軍原古墳の発掘

大正15年(1926)8月には、莊原(粟川町)の軍原古墳で長持形石棺が掘り出されている。人骨と共に刀・玉類・櫛・只輪・鉄鏃・朱塊などの副葬品が出土し、当時大いに話題を提供した。遺物は帝室博物館(現在の東京国立博物館)に収蔵されている。

軍原古墳は神庭岩船山古墳(前方後円墳)と共に、出雲平野における古墳時代の発展を示す中間古墳として注目されることになる。

多聞院貝塚の発見

現在は出雲市知井宮町に属する多聞院の庭で、貝塚の存在が知られたのは、大正13年(1924)8月のことであった。布智の高見憲造から多聞院の庭に貝殻の多い所があると聞いた後藤藏四郎が、現地調査をして貝塚であることを確認したものである。後藤は『島根県史蹟名勝天然記念物調査報告』第3輯(昭和3年刊)に、「知井宮村多聞院の貝塚」という概報をのせており、その中で弥生土器の存在も指摘している。

『島根県史蹟名勝天然記念物調査報告』は、大正12年(1923)～昭和14年(1939)の間に10冊刊行されているが、後藤藏四郎は「知井宮村多聞院の貝塚」のほか、「宝塚古墳」(第2輯)、「水奈の遺址」(第9輯)、「米原岩樋」(第7輯・第10輯)などの調査報告をのせている。

第2次大戦後

原山遺跡の調査

大社町の原山遺跡は、第2次大戦中の昭和18年(1943)に大谷從二によって発見されたが戦後の昭和23年(1948)4月になって、明治大学考古学研究室の杉原莊介が調査を行ない、『考古学集刊』第1冊(昭和23年9月刊)に「出雲原山遺跡調査概報」を発表した。そこで出土土器の主体をなすのは、弥生前期の立屋敷式土器であることを指摘している。その後も大谷從二ら大社考古学会によって原山遺跡の調査が行われ、箱形石棺や配石墓などの遺構も認められた。また、縄文土器後期・弥生土器・土師器・石鏡・石斧・鉄剣形石剣・骨製管玉などの遺物も検出されている。

なお、昭和54年(1979)に『島根県立博物館調査報告』第2冊として、村上勇・川原和人が「出雲・原山遺跡の再検討—前期弥生土器を中心にして」を発表し、山陰における前期弥生土器の最古式のものとして「出雲原山式土器」を設定、それは直接北九州から進出したと論じている。

出雲考古学研究会の活動

昭和23年6月には出雲考古学研究会が発足し、事務局は島根青年師範学校内におかれた。機関誌『出雲考古学会報』は、第1号(昭和23年7月刊)から第9号(昭和25年7月刊)まで発行されているが、この時期に出雲市を中心とする研究者の共同活動がさかんであったことが注目される。機関誌には後藤蔵「大平群集古墳調査報告」(第5号)、池田満雄「岩野原古墳調査報告」(第7号)など、出雲平野周辺にメスを入れたものが多い。

出雲平野北東部にある平田市上島古墳は、昭和24年5月開墾中に発見されたものであるが、竪穴式石室と家形石棺を並べて埋めた構造や、鈴鏡・鈴剣・馬具類などの副葬品が知られ、出雲地方の古墳文化研究に貴重な資料を提供することになった。池田満雄は『古代学研究』第10号(昭和29年刊)に、「出雲上島古墳調査報告」を発表している。

昭和27年(1952)春、山本清らによって出雲市東林木町大寺古墳(前方後円墳、竪穴式石室)の調査が行われたが、上島古墳と共に出雲平野を中心とする地域社会の動きを示すものとして注意さ